
境界線上の写本保持者

てんぞー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

境界線上の写本保持者

【Nコード】

N5831R

【作者名】

てんぞー

【あらすじ】

—— 末世が来る。それは世界が直面すべき問題であり、王を目指す少年のゴールであり、そして始まりでもある。創生計画。大罪武装。聖譜。花園。神州。公主隠し。通り歌。二境紋。旧派。改派。この世界は喪失へと向かっている。ありとあらゆる国が敵対し、極東を支配するこの世界で、やがて極東が全世界と対等な立場に立ち、そして末世を超えるためにも、転生者は武蔵でその力を持って戦う。—— 以上。

第一話 忠犬といっしょっ！（前書き）

十Z〇「アニメ化を聞いた結果がこれだよで御座る」

追記 11/11/06

一応神様テンプレモノ風に見えるけど実際は違うよ。正そういう風に見えるだけ。

紛らわしいので一応注意をば。今はこうですけど、
近いうちに加筆修正をしてこの流れのままわかりやすく変更させる
ので、
そのときまで少々お待ちを。

追記 11/11/06 23:07

そのまま修正しちゃった

第一話 忠犬といっしょっ！

「——つとまあ、現実とは認識するからこそ現実だと俺は思っちやったりするのよね」

「そうなのか？」

「うん、まあ、世界そのものがシュレディンガーの猫の状態だと俺は言いたいよ。」

「だって観測するまでは」世界はこうだった」そして観測したからこそ、

世界はこうなってしまった……そう言うよね？」

「まあ、箱を開けて生きた猫が出てきたらそう思っじやろうな」

「でもさ——俺とお前が同じモノを見てるとは限らないだろう？」

「ほう？」

「だってさ、観測したイコール結果ってどう見てもおかしいじゃないか。だってさ、誰が”猫が死んだ”って決めるんだよ。」

「箱を閉めてあげれば生きた猫が出てくるかもしれないじゃん。いや、死んだ事を否定すればせめて自分の観測している中では生きているじゃんかよ。」

「だからさ、なあーんで見て、観測するだけで結果に結びつける、そう思っのよね、一般市民の俺は」

「それはかなり異端の考えじゃぞ？それにそんな厨二めいた考え方をするのはアホぐらいだ」

「いや、アホで結構。アホじゃないと世界が面白くないじゃないか」
「まあ、そうかもはしれぬが、それでもお主はアホじゃ。限りなくアホじゃ。」

何せ主題を持つてこようとするのに今だ主題に入らないで、会話は絶対に核心へと入らないように小話を挟んで誘導しておる」

「OH」

そこで俺こと、——はおどけた表情と仕草を取る。うーむ、こ
ういうのは主題に関係する事を述べた後、それをうやむやにするよ
うな流れを作るのが大事なんだが、

こいつぁ……無理っぽいなあ。

「ああ、無理じゃ。Look at the realityじゃ」

「何故に英語」

「お主に合わせてるんじゃないよ」

ま、だろうな。俺が理想とする話のテンポを心得ている辺り、こ
ちの事なんざお見通し……さて、現実を受け入れますか。

「で、俺は思うんだよ。観測し、認識し、理解し、そして”認めて
”、そこで初めて世界はその事実を受け入れるんだ、と」

「そう、じゃな。確かにそうじゃろうな。それに関しては全面的に
賛成じゃ。たしかに認めないと、その者にとってそれは現実にはな

りえんじやろうな」

「ああ、でしょ？ だからさ、——俺がこの状況を認めたくないのも分かるよね？」

「もちろんじゃ」

金髪少女。

いや、金髪少女様だ。そう、俺の前には金髪少女様が君臨している。珍しい。希少価値だ。

だがそんなことはどうでもいい。いや、別に金髪少女が嫌いだと言っただけではない。YESロリータNOタッチは守る。貧乳は好きだし巨乳も好きだ。

ただ、現在の俺の状況を洗おう。

「俺は真っ白な部屋で真っ白な椅子に座り金髪少女に監禁されている」

ああ、監禁。何か響きが素敵だ。とても犯罪っぽい響きが素敵だ。いや、駄目だろ。

「ちょっと待て、普通は状況が逆ではないかのう？」

「だからいいんだよ。逆だよ逆！ これエロゲに出来るよ！」

「なるほど……上に打診しておこう」

よく分かんがそろそろ現実逃避はやめよう。

「1・俺は死んでいる。

2・俺は俺宇宙を生み出してその宇宙の神になった。

3・エロゲが世界を救った。さあ、どれだ！個人的には3を超ブッシュするよ！」

「おもいつきり錯乱しとるのう」

だあまらっしやい！

話しまくって精神を落ち着けてたんだよ俺は！元より言い訳は得意でも会話事態はそんなに得意じゃないんだよ俺は。

むしろ部屋でニコニコしてる大人のお友達だよ！中学校ではそれなりに社会的だったけど、

高校からはオタクロードまっしぐらだったしな！ピザで醜くなかっただけマシだマシ。

「ま、好きなだけ錯乱するがいいじゃろ。ワシはこう見えても人間を愛しゅう思ってたの？」

お前のようなどうしようもないチェリーでも話し相手になってやるぞ？」

「お前は今全国のチェリボーイとチェリー連盟を敵に回した」

「なんじゃその無駄な連盟は」

まあ、自分でも無駄とは思っ。と言っより見つけた俺でさえビビった。探せば存在するんだねえ、無駄な事って。

「で、——俺は死んだな？」

それはもう惨たらしく。
なによりも醜く。

誰よりも完結的に。

過去にないほど綺麗に、俺は死んだ。

死ぬ痛みとは相当なものだ。もう二度と味わいたいとは思わない。

「ああ、死んだよ、お前は。ミスでもワザとでもなく、”運よく”
死んだんじゃよ、お前は」

「運よく？」

それはおかしい。何がおかしいって？存在自体がおかしい。

「なら、何故俺は死んだんだ」

「普通に殺されたんじゃよ」

「殺された？」

「ああ。——親にな」

自分の記憶を辿れば何時もラブラブな親父とお袋、毎朝起こしてくる幼馴染なんて存在しないでゲップがうるさいおっさんが隣の家にて、

通学路ではパンを加えた少女の代わりに自転車に乗ったお巡りさんに轢かれて、

学校では女性とのフラグなんて存在せずあるのは居残りフラグ。

「ああ、素晴らしい人生だったね？うん。酷すぎる意味で素晴らしい人生だね。まったく持って夢がないや。」

「何故に疑問系じゃ」

「だって……死んだ理由なんて全くないじゃないか」

「えっ」

金髪幼女様がどこからともなく書類を取り出し、それに目を通す。何かをチェックしているようだ。

「あ、すまん。また書類不備だった。」

「二度あることは三度あるって言葉があるぞ金髪幼女様？」

とことん俺の人生はしまらないね。

●

「うん、まあ？死んじやええ人生ってそんなもんだよね？しかしアレだね、金髪幼女様。この体験を本にしたら売れそうにないかね」

「信じる奴が皆無じやろうからな」

「むしろここまでフランクな神の存在は妄想で十分だね。いや、世間一般で言う二次創作のテンプレ的神様か。悪くはないね。」

だが残念。俺の厨二時代は既に過ぎ去ってしまった。今ここにいる

のは僅かな厨二を残した高校生だった男だ」

「残してたらそれは駄目じゃろ。だったらワシの存在を空想で済ますか？」

「いんや、これが冗談ではない事は分かっている。やっぱり認めなくちゃいけないんだよなあ……現状を。」

「だけど人間って突発的な自体の前では結構思考を停止させるよね。」

「まあ、その場合は一番落ち着くことに話を向けるらしいけど。」

「ああ、つまり俺の場合はこうやってコンサルタントに話し続けることで考えることをやめているんだ。うん。黙るか」

「場所はかわらず金髪少女様の部屋。まさしく何も無い。時間が存在するかすら怪しい。」

「手に握っているのは紅茶のカップ。これがかなり美味しい。俺はコーヒー党だったんだがね……。」

「で、何が欲しいんじゃ？」

「おいおいそれじゃまるで俺が欲しがりな子供じゃないか。なら金髪少女様で」

「却下しかもちゃんとリクエストしておるではないか」

「話の一番大事な部分をキンクリしてるからね。俺は全く理解できないのだが」

「金髪少女様が顔をめんどくさそうに顔を歪める。その表情は説明しなくてはならないのかと、表情で訴えてくるものだった。正直かなり鬱陶しい。」

「何、テンプレじゃよテンプレ」

「天ぷらなら食いたい」

「何その欲望怖い」

話が全く進まない。別にふざけるつもりはないのだが、会話が噛み合いすぎるのも問題だ。

一つの話で噛み合いすぎて中々前へ進めない。いや、これはわかりやすくこちらにあわせているだけだったのは解る。

結局はやはりこっちから話を進めないには全体が進まないのだ。

「だからじゃよ、死んじやったものは仕方がないから、適当な世界で生き返らせて、適当に頑張れってことじゃよ。」

もうワシの管轄で何人が飛ばしてるし部下も飛ばしたし。こんど大穴狙って上司飛ばしてみるわ」

やべえよこの金髪幼女様。色んな意味でやべえよ。見た目以上に頭の中が凄かったよ。

「だからチユーズ・ヨア・世界」

思わずガクリ、と椅子の上で滑る。何故最後だけ日本語だったし。何故最後まで英語にできなかったし。

その気になればフランス語でもスペイン語でも何でも話して楽しませてくれそうだが、ここに長居する予定はない。

何よりこの空間が自身にどんな影響を与えるかさえわからないのだ。相手がこちらに優しいいうちにできることはやっておこう。

そこで世界と言われ特に深く考えずにいるとその言葉が口からこぼれる。

「やっぱり境界線だな」

「むう？」

言ってから頭の中で理由付けが完了する。一度は行ってみたい世界だった。

「——境界線上のホライゾン」

「完結してない作品ではないか」

むしろ俺からすれば完結してないからこそ価値があると思える。あとアニメ化おめでとう。サンライズの方々が愛読者だったとは。サンライズは化け物か。あの厚さの本をアニメにしようとするところにまさに漢を見た。

「まあ、だってさ。無能だぜ？」

無能が王を目指し、皆の夢を叶えられる国を作る物語。しかし極東に実権はなく国も形ばかりだった。

だがそれでも、少年は王になる事を誓い、彼の仲間はそれを全力で助ける。王道とも言える物語。

「かつこいいじゃねえか。かつこよすぎるだろうが」

何も出来ないのに、不可能しか存在しないのに、それでもやりた
い事があるから皆の力を借りる。

自分では不可能だから頭を下げて、何も出来ないけど皆を引っ張っていく。満足に走ることが出来なくても、

それでも前に立つことぐらいしか出来ないから皆の前に立ち続ける。

「俺だつてあんな生活したかつたよ」

不可能を不可能と割り切つて、それでも他人の可能性を借りて前へと進む。

…… かつこいいよなあ。

だが、それは純粋な憧れだ。前作のシリーズから続くファンとしての洗脳かもしれない。それでもカッコイイと感じてしまった。

ただ、それだけの話だ。未だになぜこの世界が一番最初に浮かんできたかは謎ではあるが。

「まあ、かなり”ド”マイナーな世界じゃが、ないわけではない。で、何か能力を望むか？」

「ここもテンプレ何だな」

「正直しゃべるのがそろそろ面倒になつてきたのが本音」

しゃべるのが面倒になつたのだったら必要以上に喋らせるのは得策じゃないのだろうと思ひ口を閉ざす。

さて、と。自分の記憶の中からこの世界で生きていく上で無理なく使いこなせそうなものはあるか。

色んなアイデアが駆け巡つて行く。あんな能力があればいいな、こんな能力があれば死なずに済むと。

だが、どの能力を持つてしても何故かしつくり来ない。何故かそれが自分には逢わないと確信している自分がいる。
それでも何か、何かをと、必死に脳の中の知識を巡る。

そして何故かそれを思い浮かべた瞬間欠けたピースがはまる様な感覚を得る。

「うん、まあ。——ナコト写本が欲しいなあ、何て。デモベの、ね。」

「……はあ？」

金髪幼女様が俺を見つめる。まるで変人を見るかのような目だ。実際自分でもこの選択はどうかと思う。

「あ、いや、別に体を最強にとかが欲しいんじゃないぞ？ ああん？
何だその顔は！ べ、別に欲しくなんてないんだからね！

うわ、俺キモ、今のはキモイ。ちよっと自重するか。あ、話を戻すね？」

「最初から最後まで話から跳んでたのはおぬしじゃろうが……」

「うん、まあ無視するよ？ ぶっちゃけ片手で周りを更地に変えろとか、そういうのはいらんのよ。ぶっちゃけた話し、ナコト写本に入っている武装を、
ちよつとばかり排気で使用したらちよつとどいい具合に死なないかなあゝなんて？」

自分で自分を納得させるように言葉を放っている気がする。だけど何故か自分にはこれ異常な選択のような気がする。

何故だろう、それがまるで誘導されている感じ気持ちが悪いのどこか楽しみにして自分がいる。

「何故に疑問系？ …… しかしまあ、珍しい注文もあったもんじゃ。体の強さは普通に成長する人間で、気も魔力も存在しない世界で燃料を瞑想で溜めたり、外部でプールしないと術とかは行使できない世界。しかも国の実権はないに等しい。欲しいのはナコト写本。まあ、使っても壊れない魂と精神耐性はぐらいいいじゃろう」

…… あ、完全に精神耐性を忘れてた。なかつたら握った時点で発狂してたわ。テヘ。

「ダメじゃこいつ……」

そう言いつつも金髪幼女様の手はを動く。空中に正しく認識することの出来ない模様を描きながら指を動かし、指を動きが止まったと思うと虚空から古そうな分厚い本が現れる。おそらくそれがナコト写本なのだろう。

「だって強すぎる力は極東を攻める言い分を作るぜ？」

「そこまで考えておらんだろう」

ぶつちやけ目立ちすぎるのが嫌なのだと、俺の存在が他人を食わないための処置です。

まあ、ナコト写本があればよほどのことでもない限りは死なないだろう。

「ほれ、ナコト写本じゃ」

金髪幼女が俺にナコト写本をぞんざいに投げ渡す。

「マスターテリオンに忠犬の如くお主にも忠誠を尽くすようにしてある。それならば裏切る事もないじゃろう。

一応女の子なんじゃから、ちゃんと大事に扱ってやるんじゃぞ?」

イエス、ママ! 気をつけます!

ビシ、つと敬礼をしポーズを取る。まあ、なんだ。金髪幼女には逆らえないよな。健全な一般男子としては。

不健全な一般男子の事は分からない。何せ自分は臆病者だ。ニート予備軍だった。

さて、契約は……。

「もう既に終わっておる」

そっすか。若干残念です。なら、試してみますか。

「——来い、エセルドレーダ」

瞬間、本が光り始める。本から小さな光の玉が出てきたと思えば、それが空中で静止し、徐々に大きくなる。

そのすがたはやがて子供ぐらいの大きさになると、体の輪郭を形作って行く。

そして光が割れるように剥がれて行き、

「ナコト写本初回起動完了。エセルドレーダ、マスターの召喚に従

い参上しました。

いつまでも、そしてどこまでも永久にお傍に……」

白いドレス、黒い髪に紫の瞳。ナコト写本の精霊、エセルドレーダだ。

「……エセルドレーダは自分がどのような存在で、どういう状況が理解している？」

これは必須事項だ。これから、そしてそれからの生活で、俺とエセルドレーダは永遠に一緒だ。

決して切っても切れない関係だ。それはたとえ悠久の果て死滅しても……ん、なんだったか。

「——はい、そして不服ありません。いいえ、マスターと居られる事こそ我が幸せ……」

そう言つて俺に寄り添う。恥ずかしさのあまり視線を逸らすが、金髪幼女様がニヤニヤしているのを目撃する。

もしこれが自分の記憶どおりの存在であるとするならばそれを想像したこの小さい神の力は圧倒的だ。

最初に馬鹿のように話しかけていた自分が若干恥ずかしい。

「言つたじやろう？ 忠犬じゃと」

エセルドレーダが金髪幼女様を睨み返すが、勝てるわけもないので反撃の類は一切しない。

エセルドレーダは主の命がない限り、絶対に動かない。それは、彼女の在り方。

「ふむ、さてそろそろじゃな」

白い空間の中に突如として自分の横に黒い穴が開く。覗き込むと底が見えず、軽い恐怖を感じる。

「そこに落ちれば望んだ世界じゃ。まあ、死んだんじゃから、所謂転生ってやつじゃ。ナコト写本とは魂で結ばれとる。

どんなに離れようと呼び出そうとすればどこへでも付いて来るであろう。そして扱えるのもお主だけじゃ」

彼女なんてできた事もなかった俺にはいささかハードルが高いが、エセルドレーダを抱き寄せその体を押さえる。

いくら魂で繋がっているとはいっても、まだそれが出来るかどうか本当には試しては知らないのだ。

土壇場で試す勇氣もない。だから、

「俺に捕まってくれよエセルドレーダ」

「イエス、マイマスター。どこまでも……何時までもお傍に……」

まさに忠犬。一瞬リリウムを思い出したがアレとはベクトルが違う。俺も精一杯エセルドレーダには甘えるでしょう。可能であれば。

エセルドレーダを抱え、後ろ向きに穴の中へと落ちていく。

「ボンボヤージュ」

「今度はフランス語かよ」

その言葉を最後に俺の意識は深い闇の中へと溶けていった。腕の中

に少女の温かみだけを残して。

●

——痛い。

一番最初に感じたのは痛みだった。だが痛みとは祝福でもある。

何せ、痛みがなければ生きていることを人間は実感できないからだ。

だから俺は生きている。

次に脳が受け入れたのは臭いだ。消毒液の臭い、そして血の臭い。酷く鼻の奥まで貫く嫌な臭い。

瞼が重い。瞼を開く前にまずは指だ。

指の先を動かす。……指は動く。

なら手首は……動く。

足の指……可能。腕……可能。

重い瞼を開ける。

「んっ……」

目が空けた先にあったのは天井。白い天井だ。白と言う色が光を

反射してきて目に優しくない。

今すぐあの天井は目に優しい緑にすべきだ。自分の部屋の壁は緑色だったはずだ。

上半身だけを起き上がらせ、視線を上げる。なんだか若干違和感を感じるが、それは今は放置しておこう。今更違和感なんてありすぎる。

そこで室内を見渡すと口にタバコを銜えた医者がいる。椅子に座り、なにやらカルテを見てたようだが、俺の視線に気がついたのか即座に立ち上がり銜えていたタバコを落としそうになりながらも、素早く俺の前まで移動し凝視。

「ん？ ……ん？！ 起きたのか？！ ちょ、ちよつとまってるよ坊主！！あ？ 別にネタふってるわけじゃねえからな？ な？ 動くんじゃねえぞ？！

おい、誰かいねえのか！ ガキが起きたぞ！ おい！！医者！俺か！！」

そのまま扉の外へと走って行った。物凄く騒がしい医者だった。…医者なのか？ ……あれで？

「……………ま……………で？」

声が上手くでない。

「あ……………あ……………え」

まるで今まで長い間喋ってなかったかのように喉から上手く音が出せない。音を一つずつ、少しずつ確認していく。

「あ……い……う……え……お……」

少しずつだが、言葉が出てくるようになる。部屋を見渡し、様子を見る。

部屋は個室のようで、他にベッドがなく、そして面会社用の椅子が一つある。さっきのタバコを吸っていた医者が座っていた奴だ。自分が寝ているベッドの横を見るそこには一冊の本が置かれていた。

「え、セル……ド、レー……ダ」

——お傍に。

頭の中にそう言葉が響く。

——マスターの容態が芳しくないようなので、直接脳に語りかけてます。思えばそれで通じます。

そう聞き、これが所謂テレパシーとか言われるだと理解する。……
となると会話は言葉を思い浮かべる……。

こう、か？

——はい。さすがマスターです。

意外と言葉をイメージすると言うのはハードだった。予想外に頭を使うもんだな、と少し感心する。
が、今はそれよりも考えるべきことがある。

エセルドレーダ、ここどこ分かるか？

――病院の特別個室のようです。地域などは把握できていません。

いや、それだ分ければ上等だ。少なくとも実験施設にいるわけはないって事だ。これであのタバコを銜えた男が確実に医者だって事が判明した。

驚愕すぎる真実であつた。

鬱だ。超鬱だ。あんなのが医者とかありえないだろう。さすが川上ワールド。最初からジャブじゃなくてコンビネーションだぜ……！
つとまあ、冗談はここまでにしておいて、それより把握すべき事があるだろうよ、俺。

エセルドレーダ、俺の体、調子がおかしいんだがどうなってるんだ？

まあ、感覚的には大体は分かるんだがね。一応、こういうのは聞いておかないと……。

――身体が4歳児の大きさまでに落ち、全身に硬直が見れます。

硬直？

――長い間体を動かしてない様子です。体が動くのは定期的に体を動かしてもらったからだと判断します。

”動かしてもらった”。つまりは俺が入院中に誰かが俺の体を動かしてくれたって事だ。体や間接が起きた時に動かせるように、と。たしかそういうサービスは値段が結構張るらしいけど……両親かね？

……親、か。

——マスター、誰かが病室に帰ってきます。

エセルドレーダに言われ、病室の外から声が聞こえてくる。

「おい、マジ言ってるのか？嘘だったら切断しちゃうぞ？我マジで切断しちゃうぞ？」

「うつせえよダっちゃん！ てめえは黙ってる。

俺だって信じられないんだよ。万に一つの可能性だったのが、何の奇跡か成功しやがった！ 奇跡だよ奇跡！ いいねえ、奇跡。解剖できねえかなあ」

……激しく不安になってきたわ。俺の命大丈夫かなあ。

エセルドレーダ、今の俺は何にも出来ない子供らしいから、何かがあれば……。

——イエス、マイマスター。この命に代えても。

勇ましい事だが内心では命に代えてもなどと言う台詞は聞きたくない。命さえあればなんとかなる、そういう考え方のほうが俺には強い。

何より命をかけても駄目な時はだめだ。だったら命をとっておいてそれを有効活用……っと考えからそれすぎたな。

バン、と扉が開く。

「我が先だあ！ どけこのヤクザ！」

「あ、言いやがったなこの脳筋！鹿角にあとでチクってやる！」

「あ、まで。ごめんなさい、鹿角だけは駄目、鹿角だけは許して！我殺されちゃう！前回わりと本気で包丁投げられたし！」

二人の男性が争うように病室に入ってくる。片方は着流しを着た初老の男で、髪も髭も白く、短く切りそろえられているが服の間から見えるからだが鍛えられている肉体だと分かる。

そしてもう片方の男、医者の方はこの世界独特の服、インナーズーツと言うウェットスーツみたいな体に密着する服を着、その上から白衣を着ている。顔は刺青で覆われていて、そしてそれを隠すようにサングラスをかけている。

ちなみに女性もこのインナーズーツをまず着るのが常識で、その上からアタツチメント見たいに服を着るのだ。ボディのラインとか見えて女性はエロイです。

そこで医者っぽいヤクザが目の前に止まり、俺の視線に顔を合わす。

「おい坊主、俺の事をしっかり認識できてるよな？」

「は……い……」

「ああー無理に喉使う必要はねえからな？普通に”はい”で頭を縦に、”いいえ”で横に振ってくれりゃいい。

辛いかもしれねえけど少しだけだがガマンしろ……で、ここがどこだか分かるか？」

理解を示すように頭を縦に振る。

「なるほど、病院だって事は理解してるか。……ならよ、何でここに
いるかは分かるか？」

いいえ。

「……やっぱ記憶とまではいかねえか」

「むしろこうやって起きている事が奇跡だろう」

「……そうだな。じゃ、坊主。最後で一番重要な質問だ」

そこでその医者は俺の目を見た。

「——お前、自分が誰だか分かるか？」

いいえ。

●

質問が終わって直ぐに着流しのおっさんが近づき、超ハイテンションな状態で体を掴もうとしたためにヤクザに殴られた。

だがそんな事よりも、俺を驚愕した事実は一つあった。

一つ、この以上にテンションの高いおっさんが、本多・忠勝であ

る事。原作からして、

かなりの変人だとは思ってはいたけれど、予想以上に早く出会ってしまった。しかも予想以上の川上ワールドの変人。

そして二に、原作が思い出せない。正確に言えば未来の知識が分からない、だ。今日の前にいる忠勝を見れば、彼がどんなキャラだったかとかはわかるが、

その背景に、何があつたとかは全く分からない。たぶん、その内に知識に関しては完全になくなるだろう。

……これはたぶん金髪幼女様に知識を消されてつたなあ。

だがまあ、極東の戦いは何時もそうだった気がする。足りない物を常に搾り取って、そこからなんとかどうにかする。そんな感じた。

まあ、それで今の俺には一つ大きな問題がある。

「記憶がねえのかよ。やっぱりこりゃあ海馬辺りを激しくやったか？ いや、むしろやってねえところの方が多いか？興味深いなあ……やっぱ解剖しちゃダメ？」

「ダメに決まってるだろうがこのヤクザ。しかし……覚えてないとはやっかいだな」

「解剖してえ……」

……エセルドレーダ、俺開幕即死のクソゲーの主人公なのかなあ……。実はスペランカーが俺の名前なんじゃないのかな。

——見たところ言動だけで内心では本気で思ってますのでご安

心下さい。

そういうところまで分かるのか、と驚愕する。そして同時にこのスタンスが俺を安心させたり他所向けの一種のペルソナだとするのならば、

このヤクザ風の医者は何れもないな、と思う。

「うん、だったら決定だな！」

本多忠勝が笑顔で俺を見る。その笑顔には一切の曇りもなく、そして自分の中で何かが決定したって事だ。

それにたいしヤクザが口から煙を吐きながら、ジト目で忠勝を見つめる。

「いや、どうせダッチャンの事だからよ、また馬鹿な事だとは思っただけどき。一応言っておくけど……鹿角に言っても大丈夫な事なのか？」

忠勝の動きが止まる。完全にまでフリーズする。そして表情を溶かし、ゆっくりと口を開く。

「大丈夫じゃね？ 我って家長だし」

「普段から包丁を投げつけられるクセにか？」

「……」

「お、おい！ ちょっと黙るなよ！ 本気で怖いだろうが！ なあ、お前普段どんな扱いうけてるんだよ！」

「陽菜よう……男には実権が回ってこないんだぜ？」

「その一言で大体お前んちのヒエラルキーが見えたわ。頑張れ」

忠勝が頭を抱え、陽菜と呼ばれたヤクザがその肩をぽんぽんと叩く。付き合いが長いのか、

この二人の動きの流れは洗練されていて、見ていて面白い。

まるで漫才をしているようで。

「おい見ろよ！ 笑ったぜこいつ！」

「感情……あるみてえだな。目覚めたときから冷静だったから、海馬以外にもどっかやつちまったかと思っただが……、大丈夫……みてえだな？ ああ」

「笑顔記念！ 今夜は焼肉屋でヒッハー決定だぜ！」

「おい馬鹿野郎、患者にんなモン食わせられるか！」

頭を陽菜に叩かれ、忠勝が痛そうにするが、それでも楽しそうに笑う。そしてもちろんそれを見ている俺も楽しい。

そこでやっと本題を思い出したのか、忠勝が俺のほうを見、手を取りながら爆弾発言をする。

「なあ、私の息子になれ。娘の婿養子になつてさ。な？ 完璧じゃね？ な？ な？」

お前と同じ年の娘がウチにはいてさあ……」

……。――

瞬間エセルドレーダから物凄い殺気を感じたの勘違いだと思いたい。

あと、そういう突飛なことを言う前に俺が誰なのかとか、どういう状況なのかなど、色々説明してください。

拝啓金髪幼女様。

人生が前途多難です。

――極東が暫定支配を受ける世界

ただ”生きる”だけであつた

――極東はその力を失い、人は

――その中極東最後の領土、武蔵そして世界を巻き込む
事件が起きる

物語はまだ始まらない。

——だが世界の終わりは近づきつつある

——喪失を認めない少年と少女の物語は

まだ始まらない

●

「——で、これで満足か？」

先ほどとは変って少女の声には青年に見せてた能天気な色は一切なかった。

その声はまるで敵に向けるような声で、やはり白い空間の虚空へと向けて放たれていた。

まるでその方向には不快でならんばかりの存在がいると言わんばかりの表所を向けると、その虚空から返事が返ってくる。

「やだなあ。これは僕と君の問題じゃなくて君と”彼”と九郎ちゃんの問題じゃないか」

染まる。

白い正常な空間であつたはずの場所がある一点を起点に黒く、濁るように染まりだし始める。

まるでシミのように広がるそれに小さい姿の神は不快なような表情を強め、その侵食を止める。

やがて、起点となつた場所から一つの姿が浮かび上がる。

それは妖艶といった言葉が似合う姿の女性だつた——唯一つ、顔が正しく認識できない事を抜けば。

”それ”を見ればそれが”それ”であるだけで存在そのものが冒濫的だということがわかる。

”それ”には一切の言葉を必要とせず、ただただ在るだけで全ての存在を見下すような名状し難い存在。

”それ”見るだけと何かを赦してはいけないという事は理解できる。そういう存在がそこにはいた。

顔があるべき場所にパツクリと歪な口のような形が開く。

「何にせよこれで今回も始まつたね。いや、始めたんだっけ。どっちだつたかな」

「どつちでもよかろう。」我”としては貴様の姿なぞ何時までも見とうない。用事がないのであれば疾くと消えよ」

やはり青年と相対していたときとはすべてが一切違つた。そこに座

つっているだけで空間を揺るがす様な威圧感を放ち、そしてそれに指向性を持たし眼前の存在へと投げつける。だが簡単に魂を砕くような圧力の中でもその存在は歪な笑顔を浮かべたまま、ゆっくりと先ほどまで青年が座っていた椅子へと近づいてゆく。

それに気がついた幼い姿をした神は即座に椅子を消した。解らないのか、と言葉を置き、

「ここに貴様の場所はない」

たつぷり威厳を込めた言葉と共に冒瀆的な存在が赤い炎に燃やされ始める。肉を焼くような匂いはまったくせず、液体のように蒸発することもなく、影のような存在は燃やされた箇所だけが綺麗に欠けていた。

「酷いなあ。クトウグアの炎で僕を燃やすなんて。相変わらずイラつく炎だ」

体の欠損は生物学上致命的ともいえるほどの傷である。だが”それ”はまるでその痛みを、傷跡すらも楽しむように笑う。顔の表情是一片たりとも変わらないだろう。たとえ、その頭が吹き飛ばされようとも。

「ならば去れ。ここは貴様の領域ではない」

「どうせ君の領域でも俺の領域でも一人ぼっちなことには変わらないんだ。少しぐらい私が遊びに来たって構わないじゃないか。こう見えて自分らは長い時と一緒に経験してきた隣人じゃないか」

「ああ、隣人だ。だがそれは相容れぬ隣人だ。水と油が混ざり合わ

ぬように我らも絶対に同じ側に立つことはない。

故に去れ。われは何時でも貴様の相手を準備することは出来ている」

「戦ってどうする？俺と永遠に殺し続けるかい？それも悪くないけど本当に終わりはしないよ。」

君には決定打がない。拙僧にも決定打はない。故に千日手。それは君もウチも良く知っていることでしょ？

君がフォマルハウトの炎そのものを振り回しても、こちらが獣の貌でも時計仕掛けの神で対抗しようが意味はないんだ」

「知っている。だが戦っている間は互いに干渉できない」

「それじゃ膠着するだけだつてずっと前に結論がついたじゃないか。まだあの不毛な争いを続けるのかい。」

だから僕は来たんだよ。僕らの玩具が新たに飛びだったのを確認しに」

その言葉と同時に”それ”がいた空間全てが炎に包まれる。だが炎の包まれたそのときから笑い声が上がる。

それは酷く邪悪な、全ての存在を笑う声。何がおかしいのではなくただおかしいから笑う、そんな声だ。

明らかな嫌悪を表情に見せながら相手を殺せないことに苛立ちを覚えたか舌打ちをする。

「さあ、始めよう！何度目の舞台か知らない、僕らの、俺らの、私達の、自分達の陳腐でくだらなくて、

そしてだけど壮大な代理戦争を！今の所君が圧倒的に劣勢だ！さあどうする！そこに荒唐無稽な神話の保持者はいない！

いるのは滅びに向かう世界へと抗う人と先行きの見えない世界！さあ！さあ！さあ！」

「黙れ、今度こそここまで”至る”と我は信じている！」

「ならば始めよう！さあ始めよう！新たな神話を！我々のどちらかが滅びるまで続く物語！」

「行くぞ無貌の神、今度こそが貴様の最後だ」

「来い始まりの旧神よ、今度こそが貴様の最後だ」

ここに、世界の裏側が閉じる。

第一話 忠犬といっしょっ！（後書き）

みなさあーん！ホライゾンがアニメ化しますよおー！

とりあえず全裸待機しててください。
家に帰るので。

そんな感じにホライゾンですw

ええ、やつちやいましたwやってしまいましたよ！
アニメ化が始まるって聞いて始めちゃいましたよ！

そんなわけで説明どおり武装のもチートですが、
境界線上のホライゾンの世界の仕様上、フルスペックで使うことは
不可能です。

なので燃費は滅茶苦茶悪いけど超エスプレッソ兵装持ちの主人公、
そう考えてくれれば幸いです。

だって神格武装とか持ってたなら聖連に攻められる口実になるんですよ？

あと銃は『解釈』上、極東は所有できません。

極東だけなんてLUNAモード……。
しかも国力が圧倒的に低いですから、
戦争とかずつとし続けることも出来ないんですよ？

とりあえず始まりはダッチちゃん。

そしてオリキャラのお医者さん。

そしてエセルドレーダちゃんかわいい。ヤンデレ要因。

あれ……なんかヤンデレが紛れ込んで……？

……気のせいだね。

とりあえず本多忠勝が登場しましたね。

一人称は『我』と言う一発目からのイロモノw

奥さんを亡くしていて、娘を自動人形の『鹿角』と一緒に育てている人です。

ちなみに鹿角と言うのは本多忠勝が被っていた兜のことですよ？

ここでの鹿角は亡くなった忠勝の妻の遺品である指輪を魂の核とさせ、

そこから出来た自動人形でしたっけ。

すごい毒舌で、忠勝には容赦がないです。

ただし他人が忠勝を馬鹿にするのはだめ。

鹿角さんそれなんてジャイアニズム？

まあ、ホライゾンとは色々難しい単語がいっぱい出てきます。専門用語とかも。

それらを次に投稿したいと思ってます。

とりあえずナナシの主人公が本多の姓をゲットだぜ！これで本多が三人になったぜ！どうしてこうなった。

しかしカワカミンを皆さんに提供できるか不安ですw
用語集は今日明日には上げる予定です。

感想お願いします。カワカミン供給できてるか不安ですw

——配点（これからの事）

第二話 本多家の交渉（前書き）

十ZO「やっとできたで御座るよ！お待たせで御座る！」

第二話 本多家の交渉

「何をやってるんですかね貴方は。本当に愚かですね」

「いやあ、だつて仕方がないと思うぜ？だつて婿養子だぜ婿養子！二代と同じ年つてところがまたポイント高いつて我は思うね！だから鹿角その包丁をこつちへ向けないで！危ない！危ない！！」

「女性にとつての人生で一番大事なことをそう簡単に……。
これはもう救い様のない馬鹿であると判断します」

「反省！我反省しつてまあーす！！だからうお！

掠つた！今我の鼻先を包丁が掠つた！鹿角今回ばかりは本気？！」

「侍女たる者、常に本気で事に当たらせて貰っています」

「つておい、なら毎回我への攻撃も殺す気かよ！」

「Jud——何を当然のこと？」

「やつべ泣けてきたわ」

……本多家へ来た途端にこんな事が始まってしまった。
どうしてこうなったのだろうか。俺は病院で貰った軽い着流しのまま何時まで放置されるのだろうか。

ちよんちよん。

横を見ると自分と同じ年ぐらいの黒髪の少女がいた。長い髪をポ

二―テールで纏め上げていて、
そして服装は普通に言え出来るような着物だ。

「はじめましてせっしやのなまえはほんだふたよでござる」

若干舌足らずながらも少女が――本多・二代が己の名を俺に教える。

真摯な目で見つめ、少年の返事を待つ。少年は自分が抱えている本を、ナコト写本を抱えなおすと、二代に向かい口を開いた。

「始め…まし……て。まだ、名前……は…まだ…ない」

まだ喋るのが辛い様で、敬語で喋ろうとして妥協してしまった。

これが少年と少女の最初の出会いであった。そして言い争いをやめた忠勝と鹿角が、まるで微笑ましいものを見るかのようにその光景を見ていた。

「見……ん……なや」

—— 本多・忠勝

松平四天王の一柱を担っており、
尚且つ東国無双の名を持つ武人である。

神格武装の”蜻蛉切”は大罪武装”悲観の怠惰”のプロトタイプと
され、

刃に映ったモノを切り裂く力を持つ。

そんな忠勝はここ、三河でもかなり有名であり、
そしてかなりの人望を持つ。

そしてその活躍や武勇も有名だ。

そして必然的に活躍した人間はお金を持っている。だからここ、
本多家の屋敷は大きい。
歴史再現上、日本の武家屋敷となっているが、それでもかなり大き
くそして広い。

門を潜り玄関を通らずに庭を通りつた所、
そこには呆れた顔をした自動人形が、本多・忠勝の兜の名を関す自
動人形、
鹿角、そして本多・忠勝の娘本多・二代が待っていた。

忠勝と鹿角の”お話”が終わった後にある部屋へと通され、
座布団の上で座らせられると鹿角に背中に札を取り付けられる。

「失礼します。詰まったり流れの悪い体の中の流体を整頓させる札
です。

これを付けて少しすれば普通に喋れるはずです」

感謝の意を伝えるために口を開こうとするが、

「自動人形として当然の行いです。それでは少々お待ち下さい」

そう言つて鹿角が襖障子を開け、そして部屋から出て行く。

改めて自分の状況を整理する。

まず自分には原作に関する知識が端から消されていて、原作に関する知識は人に関することだけだ。

そして現在手元にある、確実に味方と言えるのはナコト写本……エセルドレーダのみだ。

目覚めた時は病室に居り、何らかの事件に関わっており、

そして数ヶ月もしくは数年間眠っていた可能性あり。入院の間の面倒はどうやら本多・忠勝が見ていたようで、両親に関しては不明。陽菜と呼ばれていたヤクザ医師の話をつなぎ合わせれば、この体の元々の持ち主は植物状態、もしくは精神死の状態に合ったと判断する。

そしてナコト写本を俺が持ち歩いて不審に思わない辺り、ナコト写本は元々この体の持ち主の所有物の可能性あり。

もしくは自分という存在の介入により無理がないように”設定”された。

現在は本多・忠勝により娘、本多・二代の婿養子になる事で自分の息子になれと言われ、

病院から覚醒したばかりの肉体年齢4歳の子供を連れ出す。

本多家は三河でも有数の実力者であり、その警備も私有地の大きさもすごい。つまり安全は確保されているという事だ。

そして本多家へ到着直後に自動人形鹿角によって本多・忠勝は制裁を受け、

二代と挨拶を交わし客室と思わしき部屋と通されそこで治療用の符を張られ、

——現在へと到る。以上。

馬鹿じゃねえの？ばつかじゃねえの？

忠勝はアレか。馬鹿なのか。4歳の病み上がりの子供を病室から連れ出して、

そして同じく4歳の娘の許嫁にするだつて？

ばつかじゃねえの？

——同意ですマスター。

すかさず賛成の意を伝えるエセルドレーダ。

だがその声には若干不機嫌な色が混ざっている。それはまるでマスターを、主を独占していいのは自分だけだ、と言う風に。

情報を整理して些か余裕が出て来たのか、ナコト写本を胸に抱きながら部屋を見回す。

部屋は小さめに出来た客室のようで、

壁には掛け軸や絵が飾っており、床は畳となっておりその上に敷いた手ある座布団に座っている。

部屋の隅のほうには茶の道具が見えるため、

ここでは茶を作ってそして客に出すことも出来るようになっている。

客観的な意見としては、

「あの男……が……保有する部屋の……風に、見えない」

率直な意見を口に出してみる。

符を張ったためか喉の調子が大分良くなっている。

これは完治まではあと少しだろう、とこの世界の技術に感心していれば。

「——そりゃ我は部屋の整理とかしないもん」

気だるそうな声で参上するのは白髪 of 男、本多・忠勝。

いつの間にか開いていた襖障子から身を乗り出し、此方を伺っていた。

——全くその存在に気がつかなかった。

……エセルドレーダ。

——すみませんマスター。気配そのものが消えていたためこの今の状態では察知不可能です。

先手を取られたか？いや、話を今までに聞くに忠勝の行動は、完全なる善意から来ている。もし、これが善意ではないのであれば、それは——

「何をかつこつけてるんですか。さっさと入ってください」

「おお、すまねえ」

鹿角に諭されせかせかと忠勝が部屋に入る、

丁度正面で相對するように座布団の上に胡座をかくように座る。服

装は先ほどとは変わらぬ着流しだ。

だが先ほどとは違い、なにやら覚悟を決めたような雰囲気だ。

……つまりは、油断はできないという事だ。

だがしかしこの身はまだ4歳。つまりは、

4歳にはあるまじき言動や行動を取れば、それだけ怪しまれてしまう。

少しだけならまだ誤魔化せるが、異常な賢さを披露するわけにはいかない。

正直かなりやり辛い状況だが、

それでもやるしかない、って事だ。

「そんなに、待っては、いない」

「喉の調子は大分戻って来たと判断します。

これならば符がなくてももう普通に会話が出来るでしょう」

鹿角に背中 of 符を剥がされる。言われたとおり喉は大分治った様だ。

少し前まではあの世で普通に喋っていたために、少しだけ話したくてウズウズしている。……が、それも我慢だ。

「ありがとう」

「自動人形として当たり前の事です」

自動人形は仕える様に出来ているとは言え、

やはりその技術力も、そしてその”作り”もすごいと思う。

「おう、それじゃあ話し合おうか」

鹿角が下がり、忠勝の横で立ち、そこで忠勝は喋り始める。

「我と話し合おうか。——これからことをよ」

俺と忠勝の会話が始まる。

「んまあ、まず我の名前は本多・忠勝……この名前を知ってるよな？」

「知ってる」

「つてえ事は常識や一般的知識は入ってるって事か。まあ、それなら安心か」

「……相手が長い間眠っていた少年だという事をお忘れなく」

「あーそう言えばそうだったな。なんだか普通に同年代と喋ってる
感じだったわ。」

いけねいけね。ダっちゃん失敗！」

「自分で言っでどうするんですか。否定はしませんけど」

おどける忠勝に対して、少しだけ笑みを浮かべる。やはり、この
人は面白いと、そう思う。

漫才で言えばボケの役割で、鹿角がツツコミなんだろう。
何故か妙に洗練されている辺りかなりやり慣れているのだろう。

「そうそう、笑顔が大事……ってところで、

お前には私の息子になってほしい。今なら二代と言う私の可愛い可
愛い娘が、

将来性の超高い娘が嫁についてくるぞ？お得だぞ？」

「どこバーゲンセールのつもりですか、貴方は」

「いや、気に入らない野郎を二代が将来つれてくる可能性をかんが
みて、

今のうちに二代の婿に相応しい男に仕立て上げようかと。
具体的に言つと我と同じ感じにしようかと」

最悪じゃねえか。忠勝が二人とか激しく嫌な予感しかしないわ。

「控えめに申し上げまして——馬鹿ですか」

「ストレートだなあ……鹿角」

やはり忠勝は笑う。そして俺も、やっぱりこの男は馬鹿だと思つても悪い馬鹿じゃない。いい馬鹿だ。

ははは、と笑いつつ忠勝が言葉をつむぐ。

「あんまし面倒な事を考えるのって嫌いだからよ、我ちよつとぶつちやけちゃうけど、——お前の家って全焼して親族もいねえんだよ」

予測していた事態の中で一番可能性が高く、尚且つ最悪の可能性であつた。

自分の存在を証明できる人間が、無条件で守ってくれる人間がいな

い。

……そう考える自分はやっぱり汚いのかな。

「だからよ、我の所に来る以外に道はねえんだ。

あ、べ、別に外へ出て行ってもいいんだからね！心配なんてしないんだからね！」

「ツンデレ風に言つても重さも意味も変わりません。あと正直言つて激しくキモイです」

「鹿角セメントだなあ……」

だからさ、と言葉をつけて再びこちらを見る。長身の侍女服姿の自動人形は開始からずっと微動だにせず、だがしかし此方を見つめている。

「もう一回言つぜ、ウチの息子になれ」

その目は真剣であり、一切の偽りも、そして冗談も見えず、
つい数秒前まで漫才をしていた男とは見えない力強さを持った目だ。

そして考える。

自分には名がない。

自分にはエセルドレーダがいる。

自分には居場所がない。

自分には過去がない。

自分には守ってくれるものがない。

——今の自分に、未来はない。

だから、俺の取った行動はシンプルに一つだけ、

「——よろしく、親父」

相手を父と認める言葉を放った。

そして忠勝が吼えた。

「聞いたか？聞いたよな鹿角！！今のばっちし記録したよな？！
したよな？！ばっちし言質とったよな？！」

「Jud・自動人形は完璧です。故に忠勝様の無駄な声まで録音で
きてます」

「あつれえ？隙を与えると毎回言葉でフルボッコされるなあ我！」

そう言いつつも嬉しそうに忠勝が笑う。そうか、認めてくれると。
そして忠勝が言葉を放つ。

「だったら親父命令で答えてもらっぜ？——その本とどうして繋がっている」

瞬間、心臓を鷲掴みされたような気がした。

——ナコト写本。

クトゥルフ神話の中では一番古い書物である。
人類が誕生する5000年以上前に書かれた書物であり、その中にはイースの大きいなる種族をはじめ、ツアトウグア、イタクア、カダス、催眠による精神の操作方法、時間逆行薬の製法、アフムⅡザーの地球到来までの詳細、ナコト五角形などが記されている。

それに加えこの”デモンベイン”のナコト写本には、
天狼星の弓、十字架剣、黄金の宝剣、ン・カイの闇、リベル・レギ
ス、
そしてシャイニング・トラペゾヘドロンが入っている。

この際これらの武装を完全に扱いきれるか、
もしくはそれを行使するだけの力があるかは置いておこう。

このナコト写本は死ぬ気で使用すれば国を一つ消し去るのは易々と
行える、確実に兵器と言える代物だ。

否、資格がない者が見ようとすればそれだけで発狂して死ぬ。言
わば人間に対しての”毒”なのである。

そう、見ようとするだけで発狂して死ぬ、それがナコト写本。ク
トゥルフ系の物としてはよくある事なのではるが、

「——神格武装”ナコト写本”。歴史再現の一環として作られた
C武装の一つにして、
現存する最後の武装。と言うのも、作られ、完成したのはナコト写
本のみ。

つつつても子供にはまだ分からない話か？」

返事をせずにナコト写本を握る手をさらに強く握る。ナコト写本
を、エセルドレーダだけは渡せない。

「まあ、理解してるかどうかは置いて話を続けるんだがな。
まあ、C武装つつーのはクトゥルフ武装の事で、あらゆる神話体系
に基く武装が作られた際、

歴史再現を行うために限りなく再現をし、概念を埋め込んだ結果」

そこで忠勝じゃ言った言葉を切り、

「——開発局が一つ消えた」

人が武器を選ぶのではなく、武器が人を選ぶ。それはあまりにも有名な言葉だ。それはある意味では正しく、そうしたまた別の意味では間違っている。

だがナコト写本は確実に主を選ぶモノだ。

「俺には、関係ない」

「いや、もう少し落ち着いて聞けよ？我だってこれを調べるのに、かなり時間がかかったりしたんだ。当時の資料だって殆ど焼失。だから私の苦労を労うと思ってな？

……で、どこだっけ……ああって鹿角？何だ我がついにボケたな、フ、

みたいな顔は？！我はそこまで老けてないぞ？！」

「Jud・Jud・」

「なにその投げやりな言い方！ダっちゃんショック！」

……唐突に始まる漫才に俺はついていけないよエセルドレーダ。

——マスターが理解する必要はありません。

やはりエセルドレーダは素晴らしい。パーフェクトだ。

「つとまあ」

忠勝が元の真剣な顔に戻り、

「開発の消えた理由てのがな?——ナコト写本を開けたからなんだよ」

開けた。呼んだ。狂気の発症。

「生成の段階では問題なし。完成していざテスト、
こちら辺は我よく分らんが、精神防御系の術式を幾重にも張って
会ったんだろう。」

それでも武装は開発局の人間を発狂させた。まるで無意味かの様に」

エセルドレーダ?

——おそらくこの”世界”のナコト写本でしょう。私でもその程度造作ありません。

しかし、同時にこの世界のナコト写本とも成功が合一されています。

故に、この話の惨状を引き起こしたのは私と見て問題ないです。

なるほど、情報、または存在の合一。この世界に来る際にこの世界と情報が照らしあわされ、
もっとも自然な形で合わさった、そんな感じか?

「武装とやらがナコト写本以外存在しないのはナコト写本と言っ
レギュラーを許容するためか？」

「で、まあ。我が言いたいのは、えーとなんだっけ鹿角」

ガク、とその場で滑りそうになる体を無理やり引き止める。

本当に真面目なのか、もしくは最初からふざけているのか全く掴
めない。

……やりにくい、と思う。

「Jud・本当に使えませんか忠勝様は。」

忠勝様のいいたいことを要約しますと、

——普通は発狂するのに何でラインが出来ていて正気でいられる
んだお前？と言いたいそうです」

「で、そこどこどうなのよ。」

だってさ、それさ、——お前の両親を殺した本だぜ」

「え——」

自分をもうちよつと薄情な人間だと思っていた。だがどうやら違
っていたようだ。少しだけ、……少しだけ怖くなり、

そしてそう思ったことが恥ずかしく思い何より激しく死にたくなっ
た。

「忠勝様！」

「何だよ鹿角。まだ早いつてか？どうせ後から知るなら早く知らせ
ておいたほうがいいって、

そんな風に我は思うね。第一記憶がないのも好都合だ。
あんな惨状を覚えておく必要はない。だったら曖昧に感じる今のうちに教えたほうがいい」

……恐怖は……エセルドレーダへの裏切りだ、と。確かにこの世界の両親は俺を生んでくれたかもしれない。だが会った事もない。喋った事もない。体の記憶にもない。

だったら俺の唯一の家族はエセルドレーダであり、目の前の者をそう見るかはこれから先にかかっている。

少なくとも、俺は直ぐに無条件で誰かを認めるほどお人よしじゃない。エセルドレーダは無条件で俺を受け入れ、慕ってくれる。それだけで十分だ。

——忠勝の場合底が見えない。

故に安心しきれない。ただ、親としては認めている。

安心しきれないが認める。

……矛盾だなあ。

「正直……あんまり、感じない。記憶にないから」

これは純粹に真実である。

だが、この言葉を言った瞬間忠勝が悲しそうな顔をした。どうして顔を覚えていないのか、と言う風に。
だから、それで分かった。

……この人は、やっぱりお人よしなんだと思う。

たぶん、と言うか革新的に本多・忠勝は両親と仲がよかったのだろ。そして、だからこそ俺を思い無償で受け入れ、そしてその発端となった本を警戒している。

「そうか……そうか。覚えてねえのなら仕方がねえよな。でも最初の質問にはまだ答えてないよな？」

「……」

それに対しては口を開けることは出来なかった。むしろなにを喋っているのかが分からなかった。

「あー何故ラインが出来ているかは分かるか？」

頭を横へ振る。

「……分からない。ただ物凄く大事で、絶対放してはいけないのは分かる」

「そうか。そうかそうかそうか……」

腕を組んでうーんと忠勝が唸り始めると、急に何かを思いついたような表情を取り、

「ああ、我思いついちゃった」

「？」

「……何をですか」

「——直接本に聞けばいいんだよ」

忠勝はその場から貫き手を作り、それを一気にこつちへ向けて貫いた。

ノータ임からの完全な手刀形に固めた腕での貫き手。忠勝ほどの武人であれば良く使われ、なれた技の一つだ。

それを本多・忠勝と言う男は、自分の息子となる少年に向かって躊躇いもなくはなった。

中れば即死は必須、良くても大怪我を負う必殺の一撃。それに対し、俺は全く反応できなかったと言っている。

そんなのは当たり前だ。ほんの数時間前まではただの一般人だ。戦闘なんてできるわけがない。

だから、必然的にそれを俺は感知できず、避けもできなかった。

——だからこそ、それは俺には届かなかった。

「——旧印 エルダーサイン」

バチバチ、ジュ——

俺を守るように虚空に障壁のようなものが俺を囲んでおり、その内側に俺と、

「エセルドレーダ！」

そしてエセルドレーダがいた。

本多・忠勝の真っ直ぐに放たれた貫き手はエセルドレーダの張った旧印に弾かれ、
電撃を喰らったかのように肉が焦げていた。

「つつええ……んな硬え障壁は久しぶりだなあ……。
だが、こいつについてはどう話してもらおうか？あ？」

「マスターを傷つけるならば排除する」

「今ので大体把握した」

忠勝が手を引き、

ガア——ン

そして忠勝の頭の上から置物が落ち、それが頭を叩く。

「いつてえ！！何すんだよ鹿角？！俺一応頭首だぞ？！
分かってるよな？分かって——いたあ！！！」

二撃目が忠勝の頭に炸裂する。これは間違いない。鹿角は責めているの。忠勝の行動を。

「貴方は馬鹿ですか？いいえ、馬鹿なのですネ。

4歳になったばかりの少年に何をガチで攻撃を仕掛けてるんですか」

「いや、だって我はよ、アレ確実に契約ってか主になってるなあー
って」

「だって何もありません忠勝様。

それでももし完全に外れていたらどうするのですか。そのまま殺す
気だったのですか？！」

それに忠勝が悪びれず答える。

「いや、だってよぉ………だったらそれまでって事だろう？」

「貴方は——」

「マスター、この屑の殺害許可を——」

だが俺には鹿角の言葉もエセルドレーダの言葉も入ってこなかった。
俺に入ってくるのは目の前の男、本多・忠勝、その視線だけだ。

その本質を捉えて放そうとしない鋭い眼光、
それは明らかに疑いの視線だ。そしてそれはエセルドレーダが現れ
てさらに強まった。

もう、有耶無耶にする事はできない、んだろっなあ。だとしたら、
やるべき事は一つ。

「下がつてエセルドレーダ」

「イエス、マイマスター」

まだ殺気……だろうか？エセルドレーダから”怖い”と感じる気配が出てる。たぶんそうだ、これが殺気だ。後学のために覚えておこう。

それを微弱に漏らしながらもエセルドレーダが横に立つ。

だったらさ、

——正々堂々真正面から嘘で論破せざるを得まい……！

俺の一番の難題、それは俺とエセルドレーダが転生の産物である事を黙り、尚且つ最も自然な形で忠勝の完全な信用を得る。

……超UltraHardな状況じゃねえか……！

どうしてこうなったとは嘆かない、もう一度人生が生きられるっただけで御の字だ。

だったら、真正面から俺の生きる道を作ろう——。

●

「——ずっと、暗いところにいた」

「暗い？」

「記憶がないのは本当。ただずっと起きていた」

「……」

「ずっと、ずっと漂つように暗いところにいた。

そこには何もなくて、底がなくて、上がない。ただ暗いだけ」

ここで、俺の作戦は完全にシンプルなものだ。

——必殺同情させる。

うん。必殺でもなんでもないよな。だが正直なことを話して聖連にしよつ引かれて研究材料にされるよりは、

これぐらいしか俺のダメな脳じゃ思いつかない。だから、

全力のサポートを頼んだぞエセルドレーダ！

——イエス、マイマスター！

「そこには気づいたら居た。

そして何も出来ないまま、ずっとそこに居た。

誰にも聞こえず、誰にも触れなくて、——でもある日変わった」

「変わった？」

「そう……いや、Jud・？ともかく……エセルドレーダが現れた」

それに驚くような表情を取る忠勝。鹿角の顔はやはり自動人形特有と言うべきか、

感情が全く表に出てこない……というよりは存在しないため、全くどう思われているかが理解できない。

「それまで俺は自分になにか分からなかった。どこにいるのか分からなかった。

どうすればいいのか分からなかった。空っぽだった」

「……中身がなきゃ狂うモノもない、か」

「エセルドレーダが現れてから世界が変わった。

世界が暗いままだったのはそのままだけど、何も分からない俺を、エセルドレーダは一つ一つ丁寧に教えてくれて、俺を助けてくれたんだ。

言葉とは何か。どうやって話せばいいのか。人とは何か、って」

若干自分の言葉が4歳児を超越してないか不安になってくる。いや、既に最初から超越しているような気がする。

もう既に遅い、のだろう。だったら畳み掛けるのみ……！

「マスターとはこの時契約しました。

素体、精神共に受け入れる最高の者であると判断しました」

「そしてエセルドレーダは世界は暗闇だけじゃないって教えてくれたんだ。

ずっとずっと俺の傍にいてくれて、いつもいつも話してくれたんだ」

「マスターを慕う者として当然の行動です」

「そしてエセルドレーダが放してくれる世界が気になったんだ。人がいて、生きて、生活するその世界が。」

だから俺は見たい、起きたい……そう叫んだんだ……そしたら……」

「Jud・起きたと言う事ですか。その説明ならば疑問を解消できると判断します。

空っぽの器であればどんなに狂おうとしても狂えないと言う理論ですか。

それに血族としてもかなり優秀……いい判断とします。

それにどうやら目覚めるのにも一役かったのですか。どうなのですか忠勝様——」

そして忠勝は号泣していた。

もう俺この人が分からないよエセルドレーダ……。

——しっかりしてくださいマスター。

「グス……おめえ、なんていいやつなんだ……」

「（信じた?!）」

エセルドレーダと俺の心が完全に重なった瞬間であった。

「最初はいいつの仇だとか、危険なもんだから割断でもしようかと思っただが」

そこで俯いて号泣していた忠勝の顔が上がる。本当にこの男は理解できない、ふざけていると思えば真剣になり、そして次の瞬間には再びふざけている。

なのにその眼光は鋭く、そして本気で泣いている。

もう意味が分からん。

これがカワカミンの洗礼か。俺も泣きたいよ。

だけど、この男は本当に信じているのか？ いや、俺だったら完全には信じてない。

話的には通るが、それでも怪しい点はある。鹿角もそれを分かって忠勝に合わせている？

…… だけど俺を認めてくれるんだ。だったら俺も盛大に受け入れよう――

そんな事を思いつつも、忠勝の興奮というあの暴走は続き、若干暴走気味の忠勝が口を開けると、

「よし、パパに任せろ！」

忠勝が立ち上がり拳をグ、っと握り、その存在の大きさをアピールする。横にいる鹿角は、

忠勝を何だか邪魔そうな目で見ている。いや、実際に邪魔なのだろう。

「パパって年じゃない」

「グ、ナイスなカウンターだ……」

そしてよろける。将来自分がこうなる可能性があると思うと段々切なくなってくる。

エセルドレーダだけは変わらないでいて欲しいと思う。

そしてガバ、っと俺に抱きついてくる。今度は殺意か害意がない

のか、普通に抱きしめることが出来たらしい。
あつく、若干汗臭い抱擁に包まれる。

だが不思議と嫌悪感はない。

……誰かに抱かれたのって最後何時だっけ。

そんな事を思い出す。

「よし、そうじゃ……あ、そう言えばまだお前の名前を教えてなかったよな？」

そういえばそうだった。二代と逢ったときも名前がないと言ってしまった。

名前がないというのは大きな問題だ。

「安心しな、お前の名前は親から聞いてあるからよ。
よく聞けよ？これがお前の名前なんだから？」

——大十字九刻」

エセルドレーダ。

——はい。

神の悪意を感じるよ。

——私にもそう感じられますマスター！。

俺の受難は始まったばかりだ。
そう、激しくカワカミンが存在する世界での俺の受難は……。

第二話 本多家の交渉（後書き）

やっと第二話を書き終わりましたよw

これでついに本多家への婿養子生活が始まります。

うん、婿養子なんだ。

俺が思うに、本多家みたいなおおきな歴史再現を担う家は、簡単に養子を入れたり出来ないと思うんだ。

歴史再現とか結婚とか家族の数までそういう数に入れそうなので。

だから婿養子。だって二代って『忠勝』を襲名する気がないらしいので。

さて、カワカミンでよく描写されるのは四つ、説明、カオス、戦闘、そして『交渉』です。

自分が一番読んだのは終わクロと境ホラですが、川上氏の小説では交渉と言うプロセスをかなり重く書いてると思うですよ。

まあ、全竜交渉もそうですけど、各国との対話も交渉ですよ。

そのため、忠勝とこうやって話す場は、ただ簡単に、

『約束だから迎え入れてやんよ！』

見たいのはあるていどやめて、

『約束はしたが、怪しい』みたいな感じにしてみました。

ちなみに忠勝ははまだ九刻の話を全部が全部信じていません。九刻君が全てを話してくれる日を待っています。

とりあえずナコト写本とエセルドレーダは害をなさないと判断したんでしょうね。

まあ、そんな感じを表現できたらうれしいです。
あともっとカワカミンを上手く表現したいです。

さてさて、ナコト写本に記されているものを少し作中で説明しましたが、

実際はかなりもつと中に記されているんですよ？

まあ、あくまでもこっちの判断で少し武装を増やしたりしますが。

ちなみにイタク（イタクア）は最初から入ってます。

ネクロノミコンと書かれている情報がダブってても別に不思議はな
いんですけどね。

まあ、でもかなり燃費は悪くしますけどね！！！！

ここで流体・拝気・そして燃費の悪さの説明

人間が空間上に1時間存在するために必要な流体は、
約3600Atellだそうです。

つまりは3600x24、86400Atellを生きるためには
必要で、

これが常に空間から削られ、存在の維持に使われています。

この術や式に必要な流体を拝気はいきと呼びます。
拝む気で拝気ですよー。

まあ、それで長時間の瞑想をすることで、
この流体を内燃拝気として体の中に、術とか使用するために溜める
事が出来ます。

この内燃拝気を消費して、人は術とかを行使します。
だから必然的に九刻君はこの拝気を削って普段は術を使いますが、
内燃拝気には溜められる限界があります。そのためそれを外部にプ
ールする、

外熱拝気というのですが、それは今は忘れて、

たとえば九刻が溜められる内燃拝気を10万とします。
そしてナコト写本系武装を使用するのに、1発辺り最低でも3万A
teerl使います。

威力を上げたり範囲を広げたり、奥義を発動させれば、
一気に7〜8万とかもって行きます。

ね、燃費最悪でしょ

十字架剣や黄金の宝剣は召喚するのに拝気を使用、
存在の維持には必要とせず、能力使用時に拝気を使用……そんな感
じです。

あと機神飛翔でデモベとか皆魔力チャージしてたじゃないですか？
棒達してボタン押すと魔力を溜める事の出来るアレです。
アレを実装して、ほんの少しだけ九刻君に救いを与えるか、
それとも燃費を最悪にして、某リリカルみたいに、
カートリッジにみたてた賢石をガバガバ使いまくって、
毎日シロジロに向かって土下座生活。

どっちがいいんでしょう？

ちなみに、内燃拌気10万で、
トラペゾ使うなら拌気100万必要です。

トラペゾエ……

今回使用した旧印は、維持している間は拌気減少、
そして拌気を増やせば強度増加、な感じです。

……ん？マクデブルクの半球を思い出させるなそれ……。

今回はかなり妄想が入りましたが、
少しだけ満足ですwもっと文章上手になりたい……。

あと主人公の名前、だいじゅうじくとき大十字九刻

ええ、ロリコン一族から名前が来ましたよ。フランスパンめ。
まあ、主人公の詳細な設定とかはもっと後でお伝えします。
具体的には青年になってから。

性格はすこし臆病、物事を少し考えすぎる傾向がある。
カワカミンに犯されて完全にぶっ壊す予定です。

もっと広まれカワカミン！！！！もっと感染しろ佐山菌！！！！

ようこそ

その一言に救われる心と

未来を憂う自分ができること

配点（未来設計）

第三話 本多家二日目——方針：スパルタ（前書き）

十ZO「今回は軽いバトルと説明で御座る。
ぶっちゃんけ捏造いっぱいで御座る」

第三話 本多家二日目——方針：スパルタ

その広い道場には三つの姿があつた。

侍女服を着る耳の裏から角を生やした自動人形、鹿角。

ポニーテールに胴着姿の少女本多・二代、

そして黒い髪に青い瞳を持った少年、大十字・九刻。

自動人形は二人の少年少女に、一本の模擬刀を手に構え相對する。

姿勢を低くして前に出るのは二代、ポニーテールを靡かせながら地を行く。

「来なさい」

鹿角が動きを諭す。

それはつまり、俺にも動けと言う事なのだろう。

最低限の武装と、そしてできる事は既にエセルドレーダと確認してある。

「本気で来なさい。貴方達程度で潰れる私ではありません」

一人の男子として全力で拳を振るうのは心が震える。

だが、こう見えても前世はごく一般のカワカミン中毒者だ。

できる事には限りがある。

身体能力も子供のものであり、できることはたかが知れている。

俺は主人公やヒーローでもない。

この世界の住人の一人だ。

だから、二代の動きを真似せ、体を前に出す。
その動きに鹿角は体を少しずつだが後ろへ移動を始めながら対処する。

二代の体は既に鹿角の傍へと到達しているのだ。どう見ても4歳児の動きではない。

…… かつこいいなあ。

思わずそう呟きたくなるような背中だった。
だから、男の子としては負けていられない。

生憎とだが前世で得物は握ったことがない。ナイフだって料理の時しか握らない。

ナイフを持ち歩くような厨二な時期は俺にはなかった。

…… ん？この世界の住人厨二まつさかり？

くだらない思考を頭から追い出しつつも、思考の仕方を切り替える。
考える事こそが俺の武器だ。この二十年近くの人生で、
これだけが俺の自信を持つて使える武器だ。

ナコト写本に内蔵された武装は多すぎて、まだその全貌をつかめてはいない。

故に、使う時は勝負を決める時、そして自分の知っている物……！！

前方、前へと駆け出しながらも先に交戦を始めた姿を見る。

二代の身の丈ほどにあった刀を振るい、鹿角が実戦で覚えるように、
一閃、一閃を、導くように模擬刀を振るっている気がする。

見て全てを理解できるほど俺は長く生きてないし、そんな経験もな

い。

故に、前へ出る。

今来ている服装は道場で体を動かすと言われ、

いつの間に用意されていた胴着だ。腰にはハードポイントがついており、

そこにアタッチメントとしてブックホルダーをつけ、そのナコト写本が安置されている。

そして手には小さいナイフの様な模擬刀が握られている。

二代が握っている刀どうよう、刃は潰されておらず切ろうと思えば切れる。

所謂短刀という奴だ。

ナコト写本、短刀、そして頭脳。

これがこの場で一番信用でき、そして最大限利用できる武装だ。

二代のスペックは高いと言うだけで未知数、故に計算には入れられない。

体がようやく鹿角のいる場所まで到達する。

横、二代の姿が大きく弾かれる。同時に二代が握っていた刀が折れる。

俺と向き合う為、そして初めて戦う俺という存在を図る為にも一旦二代を大きく弾き、

そしてその隙に俺と相対すると言う方法であろう。

左手で握る短刀を真っ直ぐ、前へ突き出す。何の変哲もない、ただの突き。

それを突き半ばで下へと落とす。

「——！」

体を右横へ倒しながらも、体は走つた為の慣性により前へ進む。

その結果、体は鹿角の右横へ抜けようと進み、

そして足に手放した短刀が引っかかる。

そして蹴り上げるように短刀を鹿角の喉目掛けて蹴り抜く。

些か驚いたようだが、鹿角が完全に短刀を模擬刀で捕らえ、それを弾く。

ムリに体を動かした為に右横へ抜ける前に体が右へと傾き、倒れ始める。

既に右手ははナコト写本に触れている。

行くぞエセルドレーダ！

——イエス、マイマスター。

ナコト写本が保有する術式の内、待機状態で待機しておいた術式を発動させる。

「ン・カイの闇よ——局地重力結界……！」

途端に鹿角の体に高圧の負荷がかかるのが分かる。

侍女服のひらひらとして部分が全て重力に引かれる様に下へ引っ張られ、

そしてその体が軋んで見える。

さらに待機状態にしてスタンバイしていたものを取り出す。

「——背徳の十字架」

十字架状の剣を取り出し、

「せい！」

それを鹿角の背後投げる。

「——たしかにうけとったでござる」

飛び上がり、半ば折れていた刀を投げ捨て十字架の剣を上段に構える。

状況は簡単明快。

俺が奇を狙うような行動を取り、鹿角の視線を独占する。
そして重力結界で鹿角のいる箇所だけ”上から下”への力をかける。
一番高い威力を与えたいのであれば重力を利用して上から下へと重力を利用すればいい。

そのために、二代は飛ぶだろう。

それに自分が使える高位力の武装を投げ渡し——

重力結界がきれた。

「えっ？」

「おろ？」

「まだまだですね……」

「「ミギヤアアアアア……」」

子供二人の悲鳴がその場には響いた……。

「発想は良かったです。二代様の性格を利用し一番強い攻撃を作れる舞台を用意し、
そしてそれに相応しい得物を用意する……そういう九刻様の作戦だったと判断します」

「うん。まあ、二代は本能に忠実っぽそうだし、
こう、投げたら拾ってくれそうな感じがしたから成功するかなあ、
って思っただけですけど」

「——将来の夫婦仲を信じあうのはいいですが、拝氣の事を忘れ

てたのですか」

「ごめんなさい……」

「いえ、ロクに訓練を受けてない人間としてはかなり上等な部類でした。

ただ、消費される流体の、内燃拝気量が凄まじく、想定外だったのです」

「Jud」

道場の中、鹿角の前で正座をする二人の姿がある。

もちろんこれは鹿角との戦闘の反省会であり、お互いの悪いことを洗う時間なのだが、今回はそれ以前だ。

俺が流体や拝気のことを全く理解してない事がいけなかった。

さっきの試合の結果は簡単、

十字架剣を二代へ投げ渡した所で重力結界が解け、自由になった鹿角が一瞬で俺と二代を撃退した。それだけだ。

だが今、よく考えれば全ての自動人形には重力操作能力がついてた。まだナコト写本を扱いきれない俺程度の魔術であれば、たぶんと言うよりは確実に重力操作で解除できたはずだ。

……それすらも必要なかったと思うと激しく憂鬱だ。

「全ての生物には溜められる内燃拝気の総数が決まっていますが、これは訓練や成長することで伸ばすことが出来ます」

つまり成長や訓練によって水（拝気）を受け止めるコップ（器）が大きくなると言うこと。

「現在の九刻様は失礼ながらもかなり未熟であり、そして「武装」ナコト写本」の性能を全く使えてないと判断します」

……ゴメンなエセルドレーダ。俺がへっぽこで。

——そんなことはありません！マスターは最高の主です！

「そのため、最初から使用流体が多く必要なナコト写本の術を、さらに多く、無駄に浪費していると判断します。

——エセルドレーダ様、データとしてお見せできないでしょうか？」

鹿角が問いかけた先、エセルドレーダは現れない。

「……エセルドレーダ様？」

エセルドレーダは答えない。

もとより、エセルドレーダは主以外の人間に興味を示さない。

つまり、エセルドレーダにとっては、大十字九刻以外の生き物はどうでもいいのだ。

故に鹿角などと言う人形の願いは聞き入れないのだが、

「エセルドレーダ、データを頼む」

「イエス、マイマスター」

何もない空間から揺らぐようにエセルドレーダが現れ、鹿角、俺、そして二代の前に表示枠を生み出す。

こつちの世界へ来てからエセルドレーダに備わった技能の一つで、表示枠や通神帯^{ネット}、神肖筐体^{モニタ}や神啓筐体^{レディオ}、走狗がやるような作業をエセルドレーダはできるようになっていた。もちろん普通の走狗同様小さくなることもできる。

余談だが、既に二代はうつらうつらと、流体の話や拝気の話が面倒で若干舟を漕ぎ始めている。

だがその前に、

「エセルドレーダ」

「はい」

「はい、やイエスじゃなくて、”Jud.”だ」

「イエ——Jud・マイマスター」

「流石俺のエセルドレーダだ」

なんだかエセルドレーダがもじもじしたが、それを横目に表示枠にへと視線を降ろす。

そこには時間経過と共に俺の体から減った拝気量が表示されている。数字が100%で始まっており、しばらく平行線をたどった所で、

「な?!」

大暴落を起こしている。それも物凄い勢いで。

100%だった数字が1秒後には40%へと減っていた。

「これが、どういう意味だか分かりますか九刻様」

「——これって俺の内燃拌気だよね？」

「Jud・良く出来ました。あの重力結界と申したものを使用した瞬間に、

九刻様の内燃拌気が一気に60%減りました。その後も一秒ごとに5%減少しております。

そして十字架を生み出すのにさらに30%ほど使用しました」

その凄まじいほどの燃費の悪さを表示枠にて確認する。

あきれるほどに無駄が多い。

重力結界だって、たったのトータル3秒しか維持できていない。

なんと言う無様。これでは完全に俺がエセルドレーダの足手まといだ。

エセルドレーダが一人で戦ったほうがまだ強い。

「……無様だ」

「いえ、それは違つと断言します」

思わぬ鹿角の言葉により俺は驚く。

……これが無様ではないと？

「決して無様な敗北ではありません。この敗北は九刻様の経験に、これからの戦いを支える血肉の一つとなりました。故に、意味がない事などありません。これから九刻様の成す行動その成功失敗共に全てが意味があるのです」

呆気にとられる。

……まさかそんな考えが出来るとは、
なんと言うか、

「鹿角さん」

「Jud」

「素晴らしいですね」

「Jud・当自動人形は完璧と自負しております」

「……む」

鹿角を秘めたことが、そして鹿角がそれをさも当然に受け止めたことが気に入らないようで、

エセルドレーダの雰囲気が若干むすつとするが、

「エセルドレーダ……俺は未熟だ。

俺を強くする為にも、君に本当に相応しい主にする為にも、俺を支えてくれ」

「——Jud・元よりこの身の全てはマスターに奉げたもの。
何時でも、何処までもマスターと在り、そして誠心誠意全てを持つて奉仕します」

……ありがとう。

口には出さないが、感謝の言葉を胸中で呟く。

……たぶんエセルドレーダには分かってしまうかもしれないが、聞かなかったことにしてくれるだろう。

さて、ここで大きな問題が浮上したな。

「……燃費に圧倒的悪さを、一体どうやって改善すればいいか、か」

「Jud・九刻様の戦闘スタイルがナコト写本をベースに戦うものなのであれば、

必然的に拝気量と燃費の効率をひたすら追求することと判断します。
それ以外にも肉体作りは必要不可欠なものだと判断します」

ナコト写本の相応しき主のためにそれを扱える力量、
そして同時にナコト写本無しでも十分に戦える肉体作り。

早速世界が俺を殺しにかかりました。

と、言える筈もなく。

「——効率化はともかく、拝氣に関しては少々方法があります」
目の前の表示枠鹿角からデータが送信され、
拝氣や流体に関する情報が入ってくる。

「まずは、外熱拝氣でしょう」

外熱拝氣に関する情報に表示枠が変化する。

内燃拝氣が体の内側に流体を溜めることであれば、外熱拝氣はその
逆だ。

つまり体の外側に燃料として溜めておく行為だ。

「内燃拝氣とは違い蓄積量は媒体によって変わりますし、
使用媒体によつては内燃拝氣の様に直ぐに引き出せるわけではなく、
体に摂取したり術式契約を執行する必要などありますが、
内燃拝氣を貫けば一番多く使用されている方法です」

ここでエセルドレーダが声を上げる。

「マスター、私の……ナコト写本自体にも溜められます。
普段の使用してない分はそちらへと溜めるのがいいでしょう」

「話を続けますが……次にメジャーなのは奉納と代演です」

既に眠り始めている二代を放って置き、
表示枠には奉納と代演の説明文が書かれている。

「奉納と代演は極東の神道系としてはかなりメジャーな方法です。
奉納は神が喜ぶような行為や行動を行い、それを拝気へと変換する
ものです。

よくあるのは酒を飲んだりするのですね。微量ながら拝気に変換で
きます」

「……マスターはミード（蜂蜜酒）を飲めば、
それなりに拝気として回復できると思われます」

それに補足するように、エセルドレーダが情報を付け加える。

——元より、蜂蜜酒は魔力への変換効率が高いのです。

なるほど、ありがとうエセルドレーダ。

しかし。蜂蜜酒か。

蜂蜜酒といえば黄金の蜂蜜酒と、そしてそれを飲みまくる教授がい
たな。

しかし講義が始まると島が一つなくなるから自重していただきたい。

「どうして蜂蜜酒ですか？」

「C武装との契約による肉体変化の影響の一つだ。
クトゥルフ系神話に関する物への適正率が高くなるだけだ」

適当にエセルドレーダが嘘をつく。

しかし咄嗟の割にはリアリティがあるからすごい。

「なるほど……それでは代演ですが、これは所謂給料日前に”前借”の状態です」

「うわ、いやらしいほどに分かりやすい図だなあ」

表示枠の情報が変わる。

「Jud・走狗を通して神への代演を立ててもらい、後で果たすべき制約を受ける代わりに、神が流体を都合してくれま
す」

自分と鹿角の視線がエセルドレーダへと向く。

どちらも神への伺いは出来るかと聞いているのだが、

「昨晚の内にハスターとイタクアの存在は確認しました」

「代演も可能であると判断します」

へえ、ハスターさんいたんだ……。

……イタクア、神獣形態使ったらご本人登場とかないよね？

——可能性としては存在します。

あるのか。だれだよクトウルフ系神群を作ったマッドは！

それ明らかについて言うか絶対に最初から狂ってる西とか言う博士だ
ろ！

人型ロボットと一緒に漫才してる西博士だろ！

……まあ、それは置いといて、

「とりあえずミード（蜂蜜酒）とナコト写本を外熱拝気先として使用するのには決定事項だな。

術や武装の効率化はエセルドレーダと二人で特訓するとして、肉体的なトレーニングは――」

「Jud・全力取り組ませてもらいます。

常々フルボッコにできる男子は欲しかったと前から思っておりまして」

「……とりあえず今は聞かなかった事にするわ」

たぶん、それが精神的には一番優しい。

そして忠勝のような扱いを絶対に受けたくない為、

絶対に鹿角とは良好な信頼関係を築いていこう。全力で。

ふと、ここで思い出す。

「鹿角さん」

「なんでしょうか九刻様」

「――拝気ってどう溜めるの？」

鹿角の動きが止まる。

拝気へと変換する方法などは説明していたが、

その一番簡単な部分、流体を拝気として取り込む行動自体を説明し

てなかった。

否、あまりにも常識すぎて説明ふようと判断してしまったのだ。

「すみません、記憶がないことを失念していました」

鹿角が頭を下げる。

それに対して直ぐ手を前に出しいいよいいと制す。

「では説明いたしますが、——世界は流体で溢れています」

表示枠に流体に関するデータが現れる。

表示枠を見る限り、この世界の全てが流体で構成されているように見える。

「流体で有機物も無機物も構成されており、そして私達は息を吸うように流体を吸収しています。

ただ、その流体は本の僅かな量で、術を使うのにはあまりにも少なすぎます」

空間を構成している流体、それを取り入れる方法が存在する。

「——瞑想です」

精神の集中により、周りの流体の流れを自分の体へと向け、そしてそれを受け入れる……つまりは世界と言う水瓶から、流体と言う水をカップへと流し込む行為である。

「ただ、この内燃拌気を溜める為の瞑想ですが、決して直ぐに終わるものではありません。

数十分から数時間、そんな時間を瞑想したりして過ごす必要があります

ます」

「瞑想、ですか……」

「はい。流体の感覚を掴むのはそう難しくありません。なにせ、我々は常に流体とあり、そして流体でもあるのです」

矛盾形容を許す物質。

まるでLow-Gの概念が世界を構成する物質と化した様な感じだな。

だけど、

「瞑想何てしたことがねえ……」

この世界では必須技能っばいけど、その瞑想を俺はしたことなんてない。

まあ、だったら覚えればいいという話だけだ。

常に何かが不足しているのは極東居留地としては当たり前のことだからある者できる事を取り入れて先へ進むしかないのだ。

「では、今実際に試してみしましょう。」

初の実戦で術の使用が出来たのです、そう難しくはないはずです」

とりあえず正座を崩し。座禅を組む。目を閉じ、集中する。

この”集中”と言う感覚を掴むのが意外と難しい。

今では立派なオリ主となってしまうたが、それでも読んでてよく思う。

——何故、そう簡単に感覚がつかめるのかと。

ぶつちやけからだのスペックはノーマルですし、異常なのは精神耐性と魂の強度。それ以外は凡人……のはず。

だから期待はしない。期待は常に裏切られるものと習ったし。

なるべく何も考えず、ただ”何か”を探して集中する。

——そして不意に、温かみのようなものが体に流れ込むのを感じる。

お、おお？

体を満たしていくような感覚を感じたが、それに驚いてしまったため、直ぐにその感覚が去ってしまう。まさか自分が非常識組になるとは。

目を開けると鹿角とエセルドレーダの姿が目に入ってくる。

「Jud・いい感じだと判断します。だがこれは……」

鹿角が表示枠を覗き込んでいる。

魔たらたなデータか何かなんだろうが……。

「マスターだったらこれぐらいできて当然です。

高速のまりよ……流体収集能力はマスターに備わる基本機能です」

「何故それを言わないのですか」

「お前に言う必要はない。マスターにも二人のときに言えばいい」

エセルドレーダと鹿角が睨みあう中、
鹿角の持っているデータが気になるので表示枠を操作し、
そのデータを送ってもらう。

流体を溜め込んだのはほんの2秒。
だがそれだけで0%だった内燃拝気が6%だけ溜まっていた。

「……これって速いの？」

「Jud・異常な速さです。普通はこんなに早く溜まりません。
こんな速くたまるのであれば戦闘中に一旦後ろへ下がり、瞑想を始
めればまた戦えます。
と言つか外熱拝気の存在自体が危ういです」

……そうなんだ。

「ただ、九刻様の術の効率を考えるのならこれでは圧倒的に不足で
す」

それは既に分かっている事だ。

外熱拝気の貯蓄先と奉納用のミード、この確保が大事だ。

そういえば機神飛翔デモンベインではデモンベインを初めとする、
アイオンやリベル・レギオスなどの鬼機神が立ち止まりながら魔
力を溜めるが、
もしかしてそれと似たような技能か？

……だとしたら弱点は棒立ちしてないと溜められない事なんだろう。

まあ、だが、これでやるべきことは分かった。

世界の歴や勉強はそのうち三河の教導院にでも入るだろうから、その時に基礎知識は習おう。

それまでは、出来うる限りの準備はしておこう。

既にどんな未来が繰るかは思い出せないが、

それでもこの物語の週末が完全な幸いで終われるように、それを目指して準備しよう。

そのために全てを頼むぜ、エセルドレーダ。

——Jud・マイマスター。

気づけば鹿角がこつちをみていた。

まるでなにやらしいものを見たかのような視線で、

「——今の凜々しい表情、自動人形の共通記憶に保存させていた
だきました」

「おいイ?! 何やってんの鹿角さん?!」

「いえ、タイトル」我が家のニューフェイスが覚悟決めやがりました”で、

我が本多家では九刻様の情報に植えている侍女一同なので、それに対して私の情報を共有でもしようかと思ひまして」

「何やってくれてんのぉ?! ……やっぱり一番の味方はエセルなのか……」

立ち上がり、エセルドレーダに抱きつく。

エセルドレーダがいくら幼児体系と言えど、

それでも自分の体はそれ以下……まだ4歳の子供なのだ。
姉に甘える弟のような図だ。

頬を若干赤く染めるエセルドレーダが可愛く見える。

「ま、マスターお戯れを……それにエセルとは……」

「え、略すの……ダメ？」

首を傾げあがらそうエセルドレーダに言った瞬間、
エセルドレーダの態度が豹変する。

「マスターであれば問題ないです」

そのエセルの顔が嬉しそうだったのは間違いではないと信じたい。

その直ぐあと、二代はたたき起こされ、本来の反省かは始まった。
あの時体をどう動かすべきだったか、どういう戦術が効果的か、
相手が特定の行動をとった時の対処方法等、
遅れている自分のために座学を含めての反省会。

引き取った翌日になんの断りもなくいきなり訓練を始めるのは些か

非常識だが、

本多家は武家の家。それあ存在理由だと思えば仕方がない。

朝の訓練が終わり、昼食の時間。その男は現れた。

「焼肉食べようぜ！」

本多・忠勝、会って本日始めの言葉であった。何でも肉を多く食べるのが本多流であるらしい。

それを鹿角は否定し、もっとバランスよく食事を取るべきだと主張したが、

忠勝をそれを一蹴、二代と俺を小脇に抱え、いつでも走り出せるようになったところで、

本日の爆弾発言をもらす。

「あ、そういえば忘れてた」

「なんでしょうか忠勝様。本日の忠勝様の暴論は終了したと思っていたのですが」

「ひでえな鹿角！いやな、たいした事じゃねえんだけどよ」

そこで忠勝は舌をテへ、っと出しながら。

「九刻の事、聖連にバレちゃった」

鹿角の姿も俺の姿も完全にフリーズし、そして二代は焼肉を食べる事に目を輝かせる。

俺の存在、聖連にバレる。

どう見てもナコト写本関係です。本当にありがとうございます。
やっぱ解剖されるのかなあ……。

転生二日目。未来は未だに暗い。

第三話 本多家二日目——方針：スパルタ（後書き）

名前：大十字・九刻

現内燃拝気最大量：50000

現外熱拝気用使用保存媒体：無し

流体供給方法：瞑想——每秒、約最大値の3%回復できるが、

そのかわり某立ちする必要あり。機神飛

翔で使うアレ

現在使用武装・術：背徳の十字架、ン・カイの闇

契約神：クトウルフ系神群——デフォルトで契約状態

現在の、この話終了時での九刻君のステータスです。

今現在使用したものとか状況なので、まだ蜂蜜酒とか追加されてません。

皆さんが九刻君への救済措置に同意したので、

デモベのゲーム版で戦闘中にゲージ溜めるアレを実装しました。

しかしめちやくちや遅いです。

蜂蜜酒飲みまくるフラグを立てました。

デモンベインでは黄金の蜂蜜酒を教授が燃料に使ってたのですが、さすがに黄金の蜂蜜酒を飲ませまくったら精神がアッパアーしてしまつので、蜂蜜酒は魔力への変換効率が高い酒、と言う設定にしました。

第一、武蔵のズドン巫女が酒を飲んでそれを代演か奉納として拝氣に変換してましたよね？

神道だとお神酒だったそれを、クトゥルー系で蜂蜜酒にした感じがすw

理解いただければ幸いかなあーと。

エセルドレーダですが、

やはり九刻以外には全く興味がありません。

だから敬語なのは九刻君にだけです。他の連中はタメです。むしろ見下してます。

あと将来二代とは犬猿の中になるっぽい？

まあ、そこら辺は後々のお話です。

さて、ここで一気に九刻君最大の弱点、拝氣に関する問題、燃費の物凄い悪さ、そして改善方法について話し合いましたね。

まあ、今回は説明回ですね、所謂。1話丸々使ってしまったがね……。

後悔はないですけど、早く外道会話はじめたり、ちゃんとしたカワカミンを皆さんに供給したいですw

さて、今回は少々時間が飛びますが、そんなに時間を飛ばす予定はありません。

……どっちなんだよ！

まあ、聖連に見つかるのは時間の問題だったんですよ。

ただ、忠勝がそっち方面苦手で馬鹿正直に政庁に申し込みにいった結果がこれだよ！！

熱田とか榊原達松平四天王に九刻君をあわせたいです。
松平公本人に会わせるかは未定です。

だって、いくら要人の息子だからって、そんな理由で一国の王に逢えるはずがないもん。

ファナ様やセグンドみたいな病院を回る人間を例外としてね。

どうでもいいけどセグンドさんかけえ。

さて、実は九刻君の養子は完全には設定を決定してないんですよね。とりあえず九郎の黒髪で、青い目は適当にホライゾンの世界に合わせました。

あとは後で投入予定のマギウススタイルを九郎と似たようにするか、それともマスターテリオン風にするか、そんな感じですね。

ちなみに武蔵での役職は既に作者の中では決まっていたりする。

うん。今回はこんな感じかな？

次回の投稿は1週間前後ですね。調子によります。

それにしても4月9日、境ホラの情報か……気になるな。

最後に一言、忠勝は萌えキャラ。CVは絶対ジョージ

そこにある日常

慣れだした毎日

そこに現れる意味

配点（今日も私は頑張ってます）

第四話 合わぬ武と追いつけない背中（前書き）

「NO」E（・ー・）E「

第四話 合わぬ武と追いつけない背中

——本多である限り、武に生きよ。

本多とは東国最強を名乗る、本多・忠勝の家名であり、そして同時にそれは一種のネームバリューを生む。

即ち、本多の姓を名乗る戦士は強い、と。

そのため本多家に生まれた者には生半可な鍛錬は許されない。だが校則法により極東居留地である三河と武蔵、その教導院では学生に戦い方を教えることは出来ない事が定められている。

そのため、親や親族による訓練が全てであり、そしてそれはこの本多家でも変わらない。

否、本多家だからこそ、さらに激しいものである。

訓練一日目はまだ優しかった。思えばアレはただの軽い挨拶であった。

地獄は二日目に始まった。

全身の筋肉と言う筋肉を裂かれ、血反吐を吐かすまで訓練をする。まだ成長途中の体を邪魔しないためにも、自動人形の演算により計算された訓練により体を”壊され”、そして全ての生活を戦いのためだけに費やす。

副長、総長クラスの戦士は全ての生活を自らの向上の為だけに使うと言われている。

大十字・九刻の生活はまさにそうであった。

体はバランスよく壊され寝る時間も筋肉がつきやすいように調整され、

食べるものは全て計算をして上で制限をする。

血反吐を吐いても攻撃を振るう事もあれば攻撃に中らず終わる日もある。

そんな生活を始めて1年。九刻の体の基礎が出来上がる。

いわば骨組みだ。この骨組みは既に二代の場合幼い頃から少しずつ組み上げていた為、

九刻ほど苛烈な方法で作り上げる必要はなかった。

だが九刻も虐待に近い1年を向かえ、やっと余裕のある生活を送り始める。

訓練は相変わらず地獄の様に厳しいが、それでも休日を貰え、

そして食事だってカロリーを消費するのであれば好きなものも食べられる。

ほぼ毎日倒れるように眠っていた為、

鹿角を見るエセルドレーダの視線が殺気染みていたが、

その殺気も引いて自分と居るときは幸せそうにするエセルドレーダが見れる。

時は本多家へと来てから1年と3ヶ月。

聖連に大十字の生き残りが判明してから1年と3ヶ月。

俺が入学するまであと1年と数ヶ月。

どこでもある様な一日、そんな一日の話だ。

――まず、本多家の朝は大変である。

本多家の一角、和室の寢所。そこにある布団目掛けて飛んでくる姿がある。

「起きろ九刻！」

檜だ。しかもちゃんと穂先が布団へと向けてあり、殺気は存在しないが刺されば痛いではすまない。

瞬時に布団を引っ張り、体を布団から引きずりだし、流体を込めて叫ぶ、

「旧印!!!」

自分を中心に光のリングが幾重にも現れ囲み、此方へと振るわれた
槍を易々と弾き、

それが空を舞いながら部屋の畳へと刺さる。

そして――

「――助けて鹿角さぁーん！」

「ちょ、おま、卑怯だぞ九刻！男なら我相手に一対一で戦え！」

「あ、脳筋侍との勝負は正直死ぬるんでパスで」

「あ、別に我は脳筋では――」

何かを感じたのか、襲撃者が……本多・忠勝が頭を後ろへ引けば、
次の瞬間には忠勝の頭があった場所を包丁が通過しており横の柱へ
と突き刺さっていた。

根元まで。

それに恐怖を感じる忠勝と九刻。誰がやったのかは簡単に分かる。
こんなセメントなツツコミが出来る存在は本多家ではただ一人、

「Jud――助けの声に応じるのが自動人形の本分だと認識し
てます」

「重力で加速しやがってお前我を殺す気だったよなあ？！」

「いえ、忠勝様なら頭を失おうがまた生えるかと思ひまして、その
実権です」

「失敗したら死んでるよなあ我！」

本多家の朝は大変である。

朝の無駄な時間を過ごし、毎朝無駄に使う旧印の流体を瞑想で回復させ、

食堂で朝食をとる。その後来るのはいつものどおりの訓練風景だ。

ただし、やはり本多家。

「本日もよろしく願いします」

「よろしく頼むで御座る」

二代と共に前にいる人たちに頭を下げる。

これから相手をしてくれる方達への礼儀である。

「よろしく頼むぜルーキー！」

「今日はルーキーの勝利に賭けてるんだからな」

「お前ら！一人も倒せなかったら今日はメシ抜きだぞ！」

5歳になつてからは二代と共にペアで実戦式の訓練を受けている。相手は近くの三河教導院から忠勝が連れてきた学生の相手である。

三河教導院。

武蔵の教導院とは違い、三河の教導院は年齢制限がない。

それもそのはず、極東の象徴であるのはこの三河ではなく、武蔵なのだ。

松平を名乗るべき少女も武蔵にいる。

今は、まだ。

三河教導院には松平・元信を始め、剣神熱田、井伊や榊原、ダメのダッチャんで有名な本多忠勝などの学生が所属している。

そして、その中でも忠勝はかなりの地位についている。

そのため、色々と都合が利くのだ。

たとえば毎日二代と共に挑む実戦稽古。

確かに鹿角であれば十分かもしれないが、自動人形である以上、奉仕するべく相手……自分の主たちには必要以上に加減してしまうのだ。

それが何故忠勝に限っては発動しないかは置いて、
そのため忠勝は常に自分より少し上の実力者を連れて来、
実際に命を落とす可能性もある実戦式の稽古をやらせるのだ。

流石に1年近くもやり続ければ大体は慣れてくる。

何よりも、殺し、殺されるという感覚を覚えてくる。

比喻ではなく、本当に殺すつもりで相手は来るのだ。初めて殺気を受けたときは怖かった。

逃げ出したかったが、男のプライドがそれを許さなかった。そしてエセルの暴走もそれが許さなかった。

……まあ、色々あったわな。

この1年でかなり馴染んできたと思う。
特に極東の芸風にはある程度馴染んだ……と思いたい。

それに、二代とも毎日、殆ど一緒にいるので、

先頭に関しては大分呼吸が合って来たと思いたい。否、本当は合わせられているのだろう。

本多家の直径として生まれた才女と輝くロリペドの家系に生まれた俺では地力が、
そして才能が圧倒的に違う。

故に、凡人には努力するしかない。

横に立つ二代の手には真剣が……刀が握られており、
自分の装備は腰からぶら下げるエセルドレーダ、そして手に握られている十字架の剣。

背徳の十字架だ。

完全に魔力……この世界の流体で出来ている十字架状の剣で、流体を通す事で紫電を纏う事が出来る他、何kmにも伸びることが可能である。

今現在は自分のサイズに合わせて二代と同じ刀のサイズにしてある。前を向けばそこには三河教導院に制服に身を包んだ学生が5人ほどいる。

相手は一般の学生ではあるが、それでも実力は相手が上だ。何より5歳で出来る事など限られている。

それでも相手を倒す事を俺と二代は義務付けられ、そして期待されている。

それを自分も二代も理解し、そして常に満たしてきた。

だから、今回も同じ、それだけだ。

右手で背徳の十字架を掴み、そして左手で腰のハードポイントから吊り下げる、ナコト写本の表面に触れる。その中から常に自分といってくれる半身の存在を感じる。流体もナコト写本自分共々最大まで溜めてある。

問題はない。

来ている胴着を少し揺らし、体の感覚を研ぎ澄まさせる。横にいる将来の妻も同じく様子を確かめる。

壁際にいる鹿角が手を振り上げるのが見える。

何らかの言葉を発しているがそれを聴く必要はない。
何せ、その言葉は前から常に変わらない。

死んでも自己責任、常に最善を尽くせ、礼をもって礼に当たれ。

鹿角がその手を振り下ろすと同時に、

「始め！」

背徳の十字架を前へと投げ、自分の体を後ろへと飛ばした。

後ろからとんでくる背徳の十字架を二代が右手で掴み、

左手に刀と合わせて二刀の剣を握る。

刀等の得物は打ち合えば打ち合うほど欠け、壊れて行く物だ。

そのため、刀等の刃物で戦うときは相手の刃にぶつけない事を心がけるのが常識だ。

だが、背徳の十字架にはその心配がないため、

「これで存分に振るえるで御座るな」

二代に武器を渡すのは自分の中での一つの行動となっている。

約1年間鹿角に鬼の様に鍛えられもしたが、それでも格闘術は圧倒的に弱い。

判断基準が二代や鹿角、上位の学生等をしているのも悪いかもしれないが、

それでも正面から切りあつて勝てるほど自分は強くないと自覚している。

少なくとも、マギウススタイルを使ってやっと勝てるという程度だ。

「行くぞエセル」

——Jud・マイマスター。

エセルドレーダの愛称を呟くと同時に返事が頭の中に響く。
左手をハードポイントから吊るすエセルドレーダに添えると、
右横に表示枠が現れる。

そこには100%と書かれている。

「ABRAHDABRA——死に雷の洗礼を！」

大きく後ろへとバックステップを取る最中に右腕に魔法陣が展開する。

そして此方へと向かう二つの姿目掛けて雷を放つ。

魔法陣から放たれた雷が真っ直ぐと前進し、そして学生を穿つが、多少怯ませる程度で終わらせる。

圧倒的に殺傷力が足りないと思いつつも、ゲージは100%から90%へと減っていた。

だが、これで相手が此方へと届くまで時間が出来た。

視線だけを動かし二代のほうを見れば三人相手に同時に相手をしており、

背徳の十字架を伸縮させながら二人の相手をし、残りの刀で一人と切り合う。

嫉妬したくなるような才能だ。

……負けられないな。

その思いを抱きつつ新たな言葉を口にする。

「イア！イア！」

表示枠に映るゲージの残量が90%から一気に50%まで減る。
その代わりにと、体の回りに氷で出来た短剣が四本浮かぶ。
一本生成する辺りに持っている内燃拝気を10%も使用する、
ハスターの眷属、大気の神イタカの力を借りた氷の短剣。

「イア！イタクー！」

後ろへ着地する瞬間に手を前へ突き出し短剣を前へと飛ばす。
放つのは三本の短剣。流体が込められた氷の短剣は召喚士の意にしたがい、
自在に空を切る。

二本の短剣が宙に舞い、何度も空気の壁を跳ねるように動きながら
二つの姿に迫る。
そしてもう一本が二代目掛けて迫る。

高速で迫る氷の刃を学生が二人、己の得物を前面へと持ち出し、
それを盾にするように前へと進む。
そして空間を跳ねるように進んでいた氷の刃が見事に両学生の得物
に中り、

瞬間、得物と手を凍らす。

「……ッ！」

「しま——」

手を袖の中へと入れ、用意していたものを取り出しながら二代の方を見ると、

同じように獲物と手を凍らされた学生の姿が崩れ落ちてゆく。

故に袖からある者を取り出す。

袖から出された透明な試験管の中には赤い液体が詰まっていた。

それを九刻が素早い動きで前方へと投擲すると、

「爆発 エクスプロージョン ！！」

試験管が爆発し、爆発が二人の学生を飲み込んだ。

燃え盛る炎が学生二人の体を燃やす。たとえ彼らがここから脱出できたとしても、

もう相手をする余裕はないだろう。

表示枠のゲージが30%まで低下する。

……醜態だな、これは。

二代の方を見れば残った二人の学生が体から紫電を撒き散らしながら倒れる姿が見える。

つまりは背徳の十字架の力を使い勝利した。勝利したのだが……、

「——見事なまでに醜態だった」

「Jud・無様だと判断します」

純粹な自分自身の意見と鹿角の意見であつた。

それに対しやってきた二代が困つたような顔をする。彼女には、この試合の何が一体無様だったのか分からないのだろう。

それもそのはずだ。彼女は本多の者で、そしてちゃんと役割をこなした。

何故、無様だと。そう言う者は多いだろう。

だが本多からすればあの戦い方は無様の一言。

遠距離からの支援と能力や道具に頼つた戦い方。

それは近接を好む本多の武とは真つ向から喧嘩を売るもの。
だからこそ、その戦いは勝利であっても無様である。

それを俺は理解していた。誰よりも理解していた。

そして俺は力が欲しい。もっと、もっと強くなりたい。

「もっと、力が欲しいな、エセル」

「マスターはまだ子供なのです。焦る必要はありません。このまま鍛錬すれば、私も使いこなせ無双の力を得ます」

それじゃ……ダメだ。無双程度ではダメだ。

何か、未来で何かが起きる。そのときに備えて俺には力が欲しい。

訓練と昼食を終え、昼下がりの本多家の縁側、エセルドレーダと二人だけで過ごす。

既に日は落ち始めて夕日がかかるのが見える。

たった二人倒すためだけに余りにも力を使いすぎている。

だが自分には才能がない。あつたとしてもわからない。

だから今できる最善がああな戦闘方法。

だがそれより素早く良い結果を二代は生み出す。

「学生のレベルとしては低いんだろうけど、それでも倒せる二代が羨ましいな」

「マスター……」

所詮、転生したと言ってもあるのは知識だ。

効率的な訓練は行っているし環境としては最上の場所だ。
これ以上望む方がおかしいのだ。

だが、それでもまだ物足りない。

「もつとだ、もつと効率的に魔術を運用して、
そしてさらに肉体を苛め抜く。さらに力を付ける。そして……」

「そして——どうすんだよ、ガキ」

瞬時にその場から飛びのき、手の中に唯一仕える得物である背徳の
十字架を生み出す。

その長さは自分に合わせて短刀ほどの長さにする。
エセルドレーダも自分の前に立つように居場所を陣取る。

背後、視線の先には極東三河の学生服を着た、オレンジ髪 of 男がい
た。

その手の中には機殻が施された剣が握られていた。

「安心しろよ。別に襲いに来たわけじゃない。

大体ダッチャんの所に進入できるような賊がいるかよ。言っとくが、
ダッチャんのセンサーって家の外まで届くんだぜ？」

……ダッチャん、つまりは親しい友人でしか言い合わないあだ名だ。
確かこれを前、酒井・忠次が”ダッチャんのダはダメのダだね”と
か言ったら、

鹿角に殺されかけそうになったのを覚えている。

「……誰だ」

声を出すのはエセルドレーダ。誰よりも忠誠と依存が強いために、その全てで守ろうとする存在。だが男は笑い、

「おいおい、あんまりそう焦んなよ……だけどダッちゃんの言っとおりだな」

「……なにがだ」

「お前才能ねえな」

「貴様……!!」

即座にエセルドレーダが魔法を展開し、男を殺そうとするが、

「エセルドレーダ」

「はい」

それを即座に引き止める。怒りはまだあるようだが、やめさせた瞬間にもうこの男は攻撃の対象ではないと判断し、守れるような位置取りだけをする。

「まさに忠犬、噂どおりってやつだなあ」

「エセルは素晴らしいでしょ？で……なんのようですか？」

「おう、すっかり忘れてた。お前が大十字・九刻で問題ないんだな

「？」

男が此方の存在を確認、と言うよりは既に分かりきっているようだ。手から背徳の十字架を消して警戒態勢を解く。

「既に分かっていることを確認する意味は？」

「ねえな。ただの形式上の問題だよ。そっちの方がカッコイイだろ」

一瞬こいつ馬鹿か？とおもてしまうのも仕方がないといったいが、その馬鹿さ加減は別に相手をイラつかせるようなものではなく、

……なんとなくだが、暖かさを感じるようなものだ。

「——聞け、大十字・九刻」

男の気配が一変する。

今までは遊んでいた気配が鳴りを消し、完全に真剣な、先頭車のものへとそれが変貌する。

それにエセルドレーダが反応し僅かに体を動かすが直ぐに行動をやめさせる。

「——てめえには才能はねえ」

それは確定している事だ。どうあっても覆せはしない。

「だけどな、ダっちゃんよりは俺が教えればお前は確実に伸びる。何せ、お前には”素質”ならある。そしてそれは俺じゃないと教えられねえ」

「素質？」

「そう、才能には程遠く、そして凡人としては異質。それは素質だ」
素質。俺には何かに適応し、学ぶ事ができるという。
もし、力を得ることができるのであれば――。

「教えてくれ、お前は誰なんだ、俺に力をくれるのか?!」

「やる気が出たか！いいぜ、覚えておけよ？俺の名前は――」

ここで俺ははじめてこの男の名前を知る。

俺の生涯での一番の師であり、俺の戦闘の全てにおいてその基礎、
そしてその戦術の元となる全てを作り上げた男、

才能と努力、そして地獄のような現実で練り上げられた腕前。

それを、その一部を継承させてくれる男、

「――熱田だ。覚えておけ。今日からお前の師匠だ」

エセルドレーダは終始絶対に熱田からその視線を外さなかった。
それは常に男を計り、そして害意あるものか、
相手を見下し値踏みする目だった。

第四話 合わぬ武と追いつけない背中（後書き）

m (- - -) m

とりあえず開幕土下座。

色々遅れてごめんなさい。

まあ、コラボの方が合ったりと、色々忙しかったので遅れてしまいました；；

そんなわけで、今回は九刻、熱田に出会います。

基本的な、九刻の現在の戦闘スタイルと、そしてその戦闘結果を見せたつもりです。

そして本多家のやり方では肌に合わない、と言うこともです。

なので、魔術と武術、これを何らかの形で融合させる、それを可能にさせる師として、

原作では出番0だった熱田氏にいただきました。

まあ、姿のベースは終わクロの熱田さんですがねw

まだまだ魔術の消費効率は悪いですし、

一般学生の弱いほうと1対1で戦おうとすれば骨が折れて終わります。

九刻マジ貧弱。

そして流体の消費がすさまじいのが分かるように、能力が強い代わりにすごい吸われますね。

将来の成長に期待、って所です。

さて、まだ次回の更新はちゃんとしますよー！

まあ、すぐにはムリですけど；；

さて、才能のない九刻ですが、ある一点にては素質があります。さて、それはなんでしょうねえ？

とりあえず、ウィンフィールドさんの動きかけえーなあー。

血、での才能や素質ってかなり影響力が高いんですね、たぶん。遺伝とかなんとか。

やっぱりロリの家系はロリかあー。

なら九刻君はロリ系奥義を覚えるのか（マテ

使用武装：イタクア——氷と大気の神っぽい人。

デモンベインでイタクアと言えばリボルバーですけど、

アレはイタクアをリボルバーを通して使役しているだけなので、

別に制御できるならば媒体を通さなくていいのです。

今回はエセルドレーダが全ての制御をしました。ポンコツ魔術師。

媒体もないので大掛かりな事は出来ません。

爆発——文字通り爆発。九郎がやっていたように
血液を媒体として、

それを燃料に爆発を起こす魔術。

試験管を投げつけて運用したほうが効果
的だと判断した、

ポンコツ魔術師がこうやってストックし
た試験管を投げて使った。

まあ、冗談はここらにして、

今回はネタですね。普通にネタですね。全く持ってネタですね。
かわいいエセルドレーダとか、デレる二代とか、

異常にセメントな鹿角とか、異常に犠牲になる忠勝とか、

女のしりを撫でようとする酒井忠次とか、犠牲になる榊原とか、
存在自体が忘れられている井伊とか、

そんな力オスな連中で遊びたいです。

次は……9歳ぐらいかな？

10歳は——うん。アレだしね。

何だそれ

思わず呟く

騒がしき我が世界での一日

配点（何時も元気な事）

第五話 Jud.——トビ過ぎですね？（前書き）

十ZO「遅くなつてすまないで御座るな。1万文字以下で御座るし。その代わりにネタ豊富で御座るよ！キンクリがでかいで御座るが、

楽しめてもらえたら幸いで御座る」

第五話 Jud.——トビ過ぎですね？

聖連とはかなり力を持っている組織だ。

全ての国に対して大きな発言権と権力を持っている事を見る限り、その組織としての強さを見る事が簡単にわかる。

そして大十字・九刻とは聖連にとっての大きなイレギュラーだ。

極東に突如現れた大量殺戮兵器を唯一制御できる少年。

三河はP・A・Odaとの同盟のため聖連から脱退するのは歴史が記している。

故に、聖連は将来完全には三河の現状を把握する事はできなくなってしまう。

その中、現れた異常者^{イレギュラー}。

聖連がただただそんな存在を三河においておく事は許さない。

とは言え、大十字・九刻は本田家の身内となっている。

本田家は歴史再現を請け負う家であると同時にその家長が松平四天王の一人、

本田忠勝を襲名している男の息子として婿養子に來ている。

それはつまり松平元信の庇護の下にいるのと同様だ。それを忠勝は理解していないが。

故に、聖連が下せる決定はそう多くはない。

あからさまな排除は反感を生むであろうし、懐柔も難しいだろう。

だったら、飼育殺すしかない。

なので、即効で聖連にばれてしまった九刻に言い渡された事は極少なく、

一つ、三河の教導院に……名古屋城教導院通う事、

二つ、商いを行う事を禁ずる事。

三つ、三河警護隊の職に就く事。

四つ、婚姻を祝福される馬鹿野郎。羨ましくなんかないんだからねっ！

最後に關しては全力で叫んで問い詰めようとした九刻だが、それでも聖連の使者がニヤニヤしながら伝えた事を全力で殴り返さなかった辺り、
まだまだ自分のカワカミン汚染度は低いと思う九刻。

大十字・九刻の生活は続く。

5歳で劍神熱田に弟子入りし、その方向性を決め、

6歳で名古屋城教導院に入学、周りの精神年齢の低さに絶望してクラスをしきつたらなぜか番長扱い。

8歳で忠勝に連れられ元信公の護衛をし、

同じく8歳のときに”人払い”により三河の住人が多く移る。

そしてそのまま本田家からの通学で名古屋城教導院に通う。

大十字・九刻は転生者だ。

それは忘れてはならない事実。だが彼の存在は世界に溶け込み、そして齒車の一部として、
その存在を取り込まれていた。

——時は聖譜歴1646。

幼い少女は事故で亡くなり、少年は喪失から立ち上がり、魔王と後の世に呼ばれる男はその役目を果たすべく名を襲名し消え、各国が裏で己の計画を末世を迎えるために隠し、

そして世界の歯車が大きく回り始めるこの時代。

高等部入学。

ここより、本当の意味での大十字・九刻の物語は動き始める。
大十字・九刻により大十字・九刻だけの、——彼の境界線の物語。

『——やあ皆！先生だよ——！』

衣服の上に白衣、片手には小指を立ててマイクを握る姿がある。
新名古屋城教導院高等部講堂の壇上に堂々と立ちながらもテンションの高そうな姿。

講堂の中には大量の生徒で溢れていた。

基本的なベースは極東式制服に所々ついた青い軽装甲の新名古屋城教導院の制服。

首元や腰元のハードポイントパーツは万国共通の装備だ。

『今年も僕の目の前にはいっぱい生徒がいるね！』

パフォーマンスとも言えるスピーチ。それは数年前、とある事件の後から始まったものだ。

——松平・元信。三河の、極東の支配者だ。

『先生は今年も元気な君たちの姿が見れて嬉しいよ！何せ君たちはここ、三河の学生だからね！』

元信のマイクパフォーマンスが続く中、

正面、講堂の中の大量の生徒にまぎれて眠そうな顔をする青年がいる。

新名古屋城教導院の制服をあからさまに改造しているその青年は、ズボンはそのままだが腰のハードポイントから右側に酒のビンを、そして左側にはブックホルダーから一冊の本を収納している事が見て取れる。

上半身には体にピッタリ引っ付く真っ黒なインナースーツを着用し肩から、

まるで羽織を着るかのように丈の長さが少し長くなった新名古屋城教導院の上着を肩からかけている。

その羽織の中には色々とモノが詰められているのがわかり、首もとのハードポイントとはつながってないようだ。

肩まである灰色の髪を首を回しながら揺らすと、眠そうに赤い目を細めながら欠伸を吐く。

「……ねみい」

「マスター、お膝をお貸しします」

そうやってすぐに答えるのは青年のすぐ横に寄り添うように立つ黒髪の少女。

服装はインナースーツでもなく、黒と紫のドレスだが、それには若干改造が施されておりハードポイントが付いてるのがわかる。

眠そうにしている主を心底心配しているようだが、

「お前ら自由だなあ……」

前を向いたまま、松平の映るスクリーンを見た玉茶髪の青年が答える。

この青年は隣にいる二人とは違い新名古屋城教導院の制服を着込み、髪はすこし跳ねていながらも整えている。

「Jud・全ての事象においてマスターが優先される」

若干そっけないながらも少女が——エセルドレーダが返事をする。彼女の絶対の主である九刻以外には心も口も開こうとしなかった彼女ではあるが、

十数年の月日は変えるには至らなくても対応するには十分である。

”主の言いつけどおり”返事をぐらいはするようになった辺り、讓歩なのだろう。

「だって我、数時間前まで怪異の相手をしてたんだよ……。
最近は週1か2で発生するんだよ。ちなみに二日連続で徹夜だった
りする」

答えるのはナコト写本の契約者にして主、大十字・本田・九刻。

普段は長いとの理由で新たな姓をHと略すが、1ヶ月ほど前に元服
した瞬間、

正式な祝言が行われ、その直後に忠勝がエロゲを持ってきて乱闘突
入。

そんな事件だったが、松平四天王が集まったり、元信公本人が現れ
たりと、

かなり混沌とした結婚式だったが、これで正式に夫婦。

「——はあーい！特殊予備役副長の忠勝くーん！貴方の所の息子
が話を聞いてませえ——ん！」

そんな声に九刻の意識が一気に思考の中から引き戻される。

講堂の最奥、そこには九刻を眺める元信公の姿と義理の父親の姿が
あった。

「とりあえず全力で殴れば良いと思いまあ——す！」

マイクパフォーマンスを九刻と忠勝を巻き込んで進める元信に対し
て、

マイクいらすの大声でそれに返事をする。九刻が眠そうだった顔を
引き締め、

生唾を飲み込み少しだけ緊張感をあらわす。

『うんうん。教育委員会が黙ってないから少し忠勝君は廊下で逆立

ちしてようか?』

「私の扱い酷くないか殿?!」

『早く廊下で逆立ちしてなさい』

「はい」

忠勝がしょんぼりとしながら講堂の出口へと向かい、本校舎へと向かう。

おそらくこれから適当な廊下で逆立ちを始めるのだろう。

侍たるもの、君主に忠誠を近い絶対として守り、従う事。

……でもこれ、普通に学長命令だよな……。

学長の無謀と言うよりはむしろちやくな命令を聞くことに、臣下としての忠誠は含まれるの同化を一瞬考えてエセルドレーダを見る。

引き込まれそうな黒の瞳。魔性の瞳。

エセルドレーダを見てロリコンに堕ちた者もそう多くはないというが、

九刻は――

「マスター?」

エセルドレーダが自らを見つめていた九刻の視線が気になったのか声をかけてくる。

本当にエセルドレーダは忠犬と言う言葉が合う存在なのか、初めての頃は九刻が声をかけない限り絶対に言葉も喋らなかったの

だが、

「心配するな。今日もエセルは可愛いなあ、と思ってな」

「ありがとうございますマスター」

エセルドレードが少しだけ頬を染めて真っ直ぐ見てくる。

頬を染めるのは進化だ。だが真っ直ぐ見てくる辺り、まだ萌えの学習が足りないな、と九刻は思う。

『九刻くん。精霊さんを肩車して廊下で突っ立ってなさい』

「はい」

『さーて、話は戻るけど新名古屋城教導院へようこそ！

色々といけない場所は多くて苦労するかもしれないけど先生は皆の顔が――』

最後まで聞く事無く、九刻が動き出す。

精霊さんとはもちろんエセルドレーダのことであり、

自分の存在が元信公に注目されていた事を忘れてた事に毒づきながら、

「」愁傷様」

手をひらひらと横の青年へとむけながらエセルドレーダを連れ講堂を出る。

講堂の外、校内へと向かう忠勝の姿が見える。

……とりあえず追いかけよう。

そう思つて早朝の罰ゲームに向けて精を出す。

——クラスに入れたのはたつぷり時間が経つてからであつた。

エセルドレーダを肩車しながら逆立ちしている親の横で立つ、
と言う一種の異次元な羞恥プレイがホームルーム開始数分前と共に
終わりを告げられる。

（正確に言えば元信公からもういいよとのメールが来た）

エセルドレーダを肩から下ろしクラスに入る頃には既に大半の生徒
が着席しており、

見知った顔を数人見かける。

教室に入ってまず声をかけるのは、

「立たされちゃった。テヘ」

「何時もそんな調子で御座るからな、九刻は」

伴侶であり、本多の武家の長女、本多・二代。

にこり、と笑みを作る彼女の傍へとより、そのすぐ横の席へと座る。肩車を終えた時点でエセルドレーダは姿を消して待機状態へと移っている。

ここ数年、授業を受けるときのスタンスだ。

基本的にエセルドレーダは授業以外るときは一緒に居るが、授業の時だけは待機してもらっている。

——とは言えサポートが必要なときは、小さくなって走狗としてサポートしてくれるが。

「簡単に変わるような軽い男か、我は？」

「否、そんな軽い男を夫に貰ったつもりはないで御座るよ」

そう言つて笑いかける二代の顔を見つめる九刻。

その周りの空間だけが停止したように見えて——

「チ」

「クソ……」

「……グキグキグキガリガリガリ」

「今こそ苦戯刃斗の出番か……！」

クギバット

周りの生徒を殺気立たせていた。

二人だけの甘い空間はどうも周りの独り身の生徒を苛立たせるには十分なものである。

各自がハードポイント等についている己の得物に手をかけて手入れをはじめ。

そんな連中に対して九刻が視線を二代に向けたまま手を横に出し、周りのクラス連中へと向けて手をシッシツ、と犬を払うようにクラスメイトへと向けた。

それが限界だった。

「イチチャイチャしゃがって……！」

「ブチ殺してやる！」

短刀は飛んで来るのを頭の動きだけで避けると、教室にいるクラスメイトがゾクゾクと得物を手に立ち上がる。制裁、それを免罪符に飛びかかろうとした時、

ガララ、と音を立てて教室の扉が開く。

「——お前ら何やってるんだ？」

褐色の男——クラスの担任が現れた。

出席簿代わりの表示枠を横に浮かべながら入ってくる姿は、三河の教導院の教師用の服に身を包み、教室を見渡すと、

「さつさと座れ、ホームルームはじめるぞ」

その一言でクラスの暴走を沈めた。

教卓の裏、黒板の前に立つ姿がある。

黒い短髪に褐色色の肌、そして軽いタトゥーが服の間から見えるその姿は、

どう見ても”教師”と言う職業からは程遠いものを連想させるが、それでもその物腰は静かで丁寧、知的な雰囲気動きにあらわしている。

片手に教科書を持ち、もう片手にチョークをもって、授業を進める。

「——それでは今日の講義は末世についてだ」

黒板を見ないまま綺麗に”末世”、と文字を大きく書く。
それを見て表示枠を浮かべる生徒と、そして携帯端末を弄る生徒が
現れる。

表示枠とは、決してすべての人間が受けられる恩恵ではない。

表示枠一つ使うのに自動人形によるサポートか、

もしくは宗教関係による契約が必要となっており、

極東では神社との契約により走狗を通して表示枠などの技術を使う
のが主流だ。

そして、走狗とは決して安くはない。

二代と九刻の場合は小型化したエセルドレーダが表示枠を浮かべ、
そしてその中へと教師の放つ言葉を書き込んでゆく。

「さて、末世を語る前にこの世界の歴史についての知識が必要だが、
高等部に入ってまでまた歴史の復習と末世について語るのも疲れる
だろう？」

そう言つて教師が笑みを浮かべる。

厳つい顔や姿とは違い、中々愉快的な性格の教師。生徒の中でも中々
の評判の教師である。

教師の笑みを向かえ、生徒達も苦笑と笑みを浮かべる。

「末世について話す事は変わらないが、——末世とは何か、それ
を話し合おう」

ニヤリ、と褐色教師が笑みを浮かべる。

「末世とは何か。それはたぶん世界中、すべての学者が必死に考え

ている事だろう。

末世とは何か。その存在についてさまざまな仮説や議論が上がっているのは分かっている。

末世とは何か。その存在自体が我々のような平にはわからない事ばかりだ」

だが、と言葉を区切る。

「だが、我々には——想像と言う名の道具がある。

私は常々思い、そして言っているが、

我々に与えられた最大の祝福にして悲劇は想像し創造する力を持ったことだ。

歴史を見ればそれが分かる。

人類とは常に想像することによって更なる進化を向かえ、

そして創造に至る事でそれを現実として現してきた」

落ち着いた口調で教師が語る中、

クラスの中の男子生徒が一人声を上げる。

「先生。——ぶっちゃけそれ耳タコです」

「ぬう?!」

その一言にクラスに笑いが起こる。この教師が言っている事は、

「それ、ニア先生が何時も言っている事じゃないですか。

と言うか毎回聞いているような気がするんですけど」

苦笑しながら生徒の一人がそういう。

それに連れ、生徒の笑い声と雑談の声が増えてゆく。

「そしてこのやり取りも何度目でしょうね」

「ぬ、ぬうう……そうか、そう言えばよく言っているような気がするな……」

——ニア、教師自身がそう認めると同時に、
クラスの男子が一人立ち上がり、手を上げたまま、

「——ニア先生ボケてきてるんじゃない？」

それに対してニアは笑顔のまま指をパッチン、と弾いた。

——清掃員の正田・隆志（幽霊族38歳）は自分の仕事に誇りを
持っている。

真名古屋城教導院と言う巨大な教導院の清掃をしている事に誇りを
感じ、

毎日休む事無く仕事に来ているので仲間から休めといわれているが、
それでも彼はこの仕事に生きがいを感じているため休みはしない。

妻だってそれを苦笑しながらも理解してくれる。

パッチン——ズドドドドン

そんな、隆志清掃員の前、いきなり天井を突き抜けて生徒が一人机や椅子、

他には天井の破片に塗れながらも落ちてきた。

目を回しながら気絶する生徒を見つめながら隆志清掃員は、自分の持つている蝙蝠型のデフォルメ走狗を首のハードポイントから取り出すと、

「うん。ちよつと羽田さんをよろしくね」

「キー！」

すぐさま隆志の前に表示枠が現れ、

「羽田さん……私……少し休みを取ろうと思うんだ」

「正田さん？正田さん？！いったいどうしたのですか？！いきなり休むとか！

ちよ、目が物凄く遠い目に！正田さん！正田さあああん！！！！」

「それでは話を続けようか」

クラスメイトAが突き抜けた場所には木の板が張られていた。

この程度で動揺しては極東ではやっていけないのは周知の事実

だ。

「それでは末世が何かと言う話だが我々にできる事と言えば、憶測を飛ばすことぐらいだ。……それで、誰か仮説を立てられないか？」

既に先ほどの犠牲はなかったかのように振舞いながら教師がクラスを見渡すと、

女生徒が一人おずおずと手を上げる。

それを見つけたニアがかまわずやれと、それを首の動きであらわす。

「じ、Jud……えーと、末世と言うんですから、世紀末な感じに世界が燃えるんじゃないですか……？流体が暴走するとか」

「前半はどうかと思うが、そうか。流体の暴走か」

あう、と声を漏らして女生徒が席に戻る。

隣の子が世紀末はないといいながら肩を叩くがそれは今は関係なく、

「流体の暴走と言う話は実際にはよく聞く話だな」

ニアの授業が続く。

「実際、我々が存在するには常に流体が必要であり、この世界自体流体で満ちている。

息を吸うように流体は消費され、そして流体で私たちは形作られている。

故に。流体の暴走と言う点は確実に避けられない大きな被害……終

末的なものになるだろうな。

いい着眼点だ。ただし、既に考えたものはいるってのが減点だがな。で、他には何かアイデアはないか？」

男子生徒が手を上げる。

「Jud……逆に流体がなくなるとか？」

その言葉に、ニアが感心したような表情を、笑みを作る。

「ほう、何故そう思った？」

その質問に対してしどろもどろながら、言葉を作ってゆく。

「いや……流体って基本的に帝様が京で制御してるじゃないですか？」

帝——その存在は日本……極東の人間にとっては絶対神聖である存在。

京と言う俗世とは隔離された世界で三種の神器を使い世界の地脈を制御し、流体が行き渡るように管理をする者。

歴史を繰り返そうが、帝が極東の人間にとって至上の位置にいるのは変わらず、

その信仰は衰えることはない。

「帝様が何かをするとは思えないですけど、ほら、基本的に流体って消費するばかりで減っていくじゃないですか。昔から流体ってどんな風に増えるかなあ、と考えてたんですけど、

流体が暴走するよりは流体の使いすぎでなくなる方が現実的かなあ、と。

神代にもエネルギー問題ってあったらしいですし」

「いい考えだ。実際、流体の枯渇と言うのは結構大きなテーマでの研究だからな。

実際流体がどこで生まれ、何時枯れるというのは明確に分かっていない。

いや、もう既に分かっているかもしれないが混乱を起こさないためにも公言されてないだけ、

そういう可能性だってある。末世に関してもそうだ。

既にその現象や原因は分かっているかもしれないで、ただたんに情報が封鎖されているだけかもしれないな。まあ、私達が知ることはないだろう。

少なくとも極東の教導院で関わるのは我等の殿ぐらいだろう。

P・A・ODAの創世計画があるしな」

P・A・ODA、既に末世に対する手段として”創世計画”を掲げる国。

その主たる織田・信長は暗殺による襲名解除を恐れて、既にその姿を消してから数年以上が経つ。

ここ、三河の主松平・元信とは同盟状態である。

元信公が創世計画に一枚かんでいるのは確実である。

「いまだ全貌が色々と隠されている世の中だが、

その中を諸君らは生きてゆくことを努々忘れないで欲しい。

武蔵を見る。あそこは18歳までしか生徒になれず、

そのため多くの力をつけれずにほぼ象徴だけの存在と化している。

ここ三河も一部の例外を抜けばそう変わりはない。
何時の時代も先へ引つ張って行くのは若いものであると、諸君らで
あると覚えておけ」

J u d .

生徒が一斉に了解の意を教師へと伝えたと、

「それでは抜き打ち小テストを始める！」

ええええええええ？！

一斉にクラスの声が沸き立つ。

新学期の最初の授業でテスト。まさに悪夢としかいえない惨状に、
やはり文句しか出てこなかった。

「文句は言わせないぞ！現在の歴史再現は既に17世紀へと入って
いる！

17世紀とは世界にとっても激動の時代だ。

これから多くの歴史再現が行われるだろう。そのためには予習だ予
習！」

「テストで予習とかねえーよ！」

「私だって細かい授業は面倒だ！テストでバーンとやったほうが楽
だろう！」

「本音言いやがったぞこの教師！卑怯だぞ卑怯！」

教師の暴論に思わず生徒が一人立ち上がり講義の声を上げるが、

パチン

ニアが指を弾く。

「へぶう！！」

机に勢い良く男子生徒が潰されるように叩き潰される。
伸びたカエルのような姿で机の上で伸びる姿を生徒が見、

「仲間入りしたいやつは他にもいるか？」

そのまま脅迫に移り始めた。

その言葉に教室が無言に支配される。誰も頭を上げず、自分の机を見続ける。

それに満足したニアがテスト用紙を教卓の下から取り出しそれを
回し始める。

「我思うに、極東ってマトモな人材がレアだよなあ……」

小さく九刻が自分自身にそう呟く。

実際、彼が育ってきた環境はマトモじゃない。

焼肉とお風呂好きな親父をはじめ、セメントな自動人形に壊滅的に
音痴な剣神、

何よりも解剖したがる医者に娘を激しく溺愛する政治家。
そして戦闘中に女性の尻を触ろうとする武蔵の学長。

……マトモなのって榊原様や井伊様ぐらい……か。あとは……正純
か？

変態と常人の比率が明らかにおかしい。
自分の人生は何時からこうなってしまった。九刻がそう思うが、
その思考は遮断される。

握られている手によって。

「……九刻」

そう言つて九刻の手を握り顔を見るの隣に座っている二代であり、

「拙者は、いつでも九刻の味方で御座るよ」

それを聞いて九刻が感激したような表情を浮かべ二代の手を握り返す。

「二代……！」

「九刻……！」

二人はお互いの顔を見つめあふ。

お互いの顔が眼にはつきり映るほどにお互いを見詰め合つと、

トントン

二人の肩に軽い衝撃が走る。

それを受けて視線を上へと向けると、

そこには青筋を浮かべた教師の姿があった。

「安心しろ。お前らも十分イロモノだ。そして——今は授業中だ

「!!!」

その後、夫婦で廊下に立たされたのは言うまでもない。

第五話 Jud.——トビ過ぎですね？（後書き）

色々遅くなりましてごめんなさい。

まあ、かなりキンクリされてますが、ここからハイパー言い訳タイムです。

境ホラって良く考えると幼少期にかなりフラグが立てられてるんですよね。

まあ、物語の性質といますか。

それにしても幼少期からはじめると、

「やべえ?!これ原作はいる頃には60話いくんじゃね?!」

的な発見をしてしまったので、急いでキンクリしました（笑）

そんなわけで、九刻がどんな素質を持ってたとか、

どんな風に成長したとかはいつか来るバトルのときまで完全にお預けです。

ステイ！ステイしろよ?!

九刻の自分をさす言葉が『我』になったのは完全に忠勝の影響です。

まあ、あんなイロモノに囲まれててノーマルでいられるはずはありませんのでねw

九刻には素直にイロモノへ進化してもらいましょう！

まあ、ご愁傷様ですねw

冒頭で色々九刻が制限されてるのは分かりましたでしょうか？
防御万全の研究所を滅ぼした武装なので、聖連から見れば超いやな
もんです。

なので、九刻が活躍しきれないように色々制約を負ってもらいます。

まず、九刻が物凄い速度で拝気を回復できるので、
それを外部流体槽に溜めて売って話を感想で貰いましたが、
それを聖連は確実に気に入らないので商いを禁止にすることで停止
させました。

三河警護隊はいわゆるガス抜きの場合らしいですね。
なので、そこへの就職？を約束する事で武を発揮できる、ってな感
じでしょうか。

結婚に関してはカワカミンワールドだったら普通にそうしそうです。

つかパパ・スコラウ、1巻と2巻じゃノリが違っただろ。

お前1巻じゃネタに対して『ふざけてるのか？』

だったのに2巻じゃ慣れてたじゃないですかぁー！

これがカワカミン汚染か……。

それにしても最近『小説家になろう』で、

境界線上のホライゾンのタグを見かける頻度が上がりましたね。

これもやっぱりアニメ化の恩恵かな？

境界線上のホライゾン第1巻で、

「今年に入って拝氣が三十六になりましたし」

と言う浅間・智の発言がありましたので、

これから拝氣の量を説明する場合は0を徹底的に抜きます。

九刻の成長後のステータスはバトルが起きた後に乗せます。

教導院について。

実際、三河の教導院って新名古屋城教導院なんですけど、原作を読んでいると新名古屋城教導院はなんか進入禁止らしいですね。

どこで勉強すんだよ。

そんなわけでこんな風にいけるエリアといけないエリアで区別しました。

原作が近づけばそのうち新名古屋城教導院から抜ける羽目になりますが、

まあ、それまではニア先生と一緒にすね！

イメージ元はラバン・シュリユズベリイ教授ですが、

それにカワカミンを注入してみました。

カワカミンを提供できたのなら幸いですw

それではまたお会いしましょう——以上

学生として生きること
世界と相対できるのは学生のみ
ならば学生がなすべき事とは

やりたいこと
配点

第六話 武蔵とか殿先生とか考え事（前書き）

結構時間が空いてしまって申し訳ないで御座る。

感想も返信しないといけないで御座るなあ。

リハビリな感じで書いたので、分が若干短くなっている許してほしいで御座る。

時間がキンクリしたり、そういうのがする回数が多い作品ではあるが、

境ホラは幼少期にかなり複線がかフラグが張られる作品なので、あまり過去に干渉しすぎて本編に影響を出さないように配慮した結果、

こつなってしまうので御座るよ。

なるべく早く本編に進めるようにがんばってる出御座る。

アニメもつすぐ放送だし、アニメ前には1巻を終わらせたいで御座る。

第六話 武蔵とか殿先生とか考え事

高等部に入学しても世界はそう変わらない。

ただ新しいクラスメイトを迎えて、新しい先生から習い、そして再び警備隊での仕事。

昼間は学校に通って放課後からは警備隊で訓練と怪異退治。ここ数年の、そのサイクルは変わらない。

だから日々を全力ですごす。すごすが……毎日全力ではやってはいけない。

青い空が見える。

空は何処まで青く広がっており、様々な雲が風に流されるように過ぎ去ってゆくのが見える。

雲を良く見ていれば次第に雲の形が知っているものへと変わってゆく気がする。

アレは自分の父親の形に似ているなど、アレはどこかで見た飛行船の形に似ているとか、

アレは使っている湯飲みに似ているなあ、とか思いつつ床に転がり空を見上げながら煎餅を食べる。

「副隊長おおおおおおおー！！！」

「何処ですかあああああー！！！」

「仕事を押し付けないでくださああい！！！」

なんだか知った声が聞こえてくる気もするがそれをひたすら無視する。

ただただ仰向けに倒れながら空を見上げる。今日もやっぱり空は青い。いい天気だ。

ぱり。

味わうように齧っていた煎餅が真つ二つに砕ける。

「あむう」

もうちょっと砕かずに齧っていたかった気も感じるために若干もったいなくも感じるが、

砕けてしまったのなら仕方がない。そのままぱりぱりと音を立てながら砕けた煎餅を食べる。

新名古屋城教導院の中層にあるバルコニーの一角で空を見上げながら煎餅をぱりぱりと食べる。

首だけを動かし三河の外れの方を見ると、そこに巨大な航空都市艦が停泊しているのが見える。

それを確認しながら口の中の煎餅を全て飲み込むと、近くにおいてある煎餅に袋に手を伸ばし——すかる。

「あれ？」

手を袋があつた方向へと伸ばし、それから手を左右へと振る。だがそれでも袋の感触はない。

おかしい。たしか数分前まではしっかりそこにあつたはず。ならば何処へ行ったのだらうと思ひ、可能性をいくつか考える。

二代は警備隊の仕事がある。

榊原「rはツツコミだし紈に使ったし

エセルは可愛いから許すとして、
思いつく可能性は一つ。

「なるほど……怪異か！」

そう思いつき上半身だけ起き上がらせる。そして起き上がった体に対して、頭へ衝撃が来る。

といっても強い衝撃ではなく、頭にコトンと、軽く拳骨をする程度の力である。

「うんうん。先生はサボりは余り感心しないなあ」

後ろを振り返ればそこには教師用に改造されている制服の上から白衣を着た、

三河で一番有名で偉い人が煎餅の袋を持って九刻を見ていた。

即座に立ち上がりピシッと背筋を伸ばし学長へと……松平・元信へと向き直る。

「あ、殿先生。これは違うんです」

「どう違うのかな？先生に言ってみなさい？」

「Jud・これはですね——青春です。そう、残った仕事を他人に任せて逃げ回る。つまりは青春です」

「青春かあ……、うん。青春なら仕方がないね。うん」

謎の理論でどこか納得してしまった様子の元信は、
うんうんと頷くと青春なら仕方がないと言い煎餅の袋を九刻へ見せ

る。

「これ、一枚貰ってもいいよね？」

「あ、どうぞ」

煎餅の入っている紙袋から煎餅を一枚取り出す袋を九刻へと返し煎餅に齧りつく。

ぱりっ、っという音を鳴らすと同時に煎餅が砕け小さくなった煎餅を咀嚼する。

袋を九刻へと返しながら、まだ殆ど残っている煎餅を見つめる。

「これ、美味しいけど結構辛いね？」

煎餅の表面には結構な量で赤い粉のようなものがかかっているのが見える。

「殆どがお店が郊外へ移っちゃいましたけど、

昔から贔屓にしているお店は忘れられなくて暇な時に買いに行ってるんですよ。

好きなんですよ。ここの唐辛子煎餅。最初は親父が悪戯に食わせて火を噴いたもんですけど、

慣れれば慣れたでその辛さが忘れられなくて、今では常連ですよ」

「先生も嫌いじゃないなあ、こういつの」

元信も二口目を口に含むと、九刻の横を通り抜けてバルコニーの手すりまで行きそれに身を預けると、

先ほどまで九刻が見ていた方角、巨大な航空都市艦が停泊している方向へと視線を向ける。

新名古屋城教導院の校舎からは結構離れており、遠目に人が粒のような大きさをしている様にしか見えない。

だがここからでも物資が運び込まれてたり人が頻繁に行ったりきたりする動きが見える。

九刻も手すりによっかかりながらその光景を見つめる。

「……今年も来ましたね武蔵」

航空都市艦、武蔵。毎年巡回ルートを通り交易をしながら三河へと帰ってくる極東唯一の独立領土。

八つの船艦で構成され、それぞれ極東の地名を襲名しており各国の国境線上でしかの航行を許されない、

武装解除された極東の象徴とも言える船。それが今年もまた無事に帰ってきた。

向こうには知り合いが多いわけではないが、数人いる。こうやって傷なく帰ってくる姿はどこか安心する。

が、それも当たり前だ。武蔵に戦闘する機能は付いていない。つけてはいけない。戦えてはいけない。

武蔵は、ただの象徴であるべきなのだ。

「そうだねえ、今年も帰ってきたねえ……」

殿先生にも、やっぱり色々思うことがあるんだろうなあ……。

どこか遠くを見つめる元信公の表情を見ながらそんなことを思う。

”アレ”以来色々と変わってきた三河ではあるし、元信公も変わった。

マイクパフォーマンスや三河の怪異、大罪武装に新名古屋城の立ち入り禁止区間。

……あれ？かなり変わってきてね？

「……九刻君さ、昔から結構賢い子だったよね？」

色々と考えていると思いを元信の言葉に断ち切られる。

昔から賢い、それは仕方がない。賢いではなく知っていただけなのだから。

だから元の常識を知っている分、こつちでの常識などを覚えたり受け入れたりするには若干戸惑いもしたが、

そういう点を抜けば自分は割りと優秀な方だと思う。だから答えは必然的に、

「Jud・成績からすれば割と上手くやってたと思います」

音痴な剣神と地獄のような修行の日々で勉学が遅れなかったのもそれが一番の要因だ。

と言っても所詮高校生レベルの知識しか持っていない。それ以上は勉強をしてないため、

必然的に自分の知能は高校生クラス。賢い子から普通な子、に変わる頃だろう。

「そんな賢い生徒への先生からの問題だよ」

「行き成りですか」

「抜き打ちテストみたいなものだよ。ねえ、九刻君」

視線が九刻と合わせられる。真っ直ぐと見つめる視線には逃がさないと言う意思が感じられ、

そして元から逃げる気もなかった九刻がその視線を真正面から受け取る。

「——人と人形を区別するのって何だと思うのかな？」

人と人形を区別するものは何か。

「それって人と自動人形とかの事ですか？」

「そう考えてもいいよ。ただ、人と人形、それを区別するものは何か、

それについての意見を九刻君に聞いてみたいと先生は思ってるんだ」

「人と人形の区別……」

簡単に言えば……それは作られたかそうでないかの差だろう。

人とは人と人が交じり合い、子宮から生れ落ちた命であることに對して、

自動人形とは一部生体部品が使われる個体があっても大半は工場などで製造されており、

多少の例外はあれど殆ど全てが自動人形としてのルールに縛られている。

だが、それとは違う。それぐらいの答えだったら誰でも用意することとは出来る。

殿先生は、たぶん別の意味での答えを欲している。

だとしたらやはり、そんな単純な答えではなく、自分だけが出せる

ような答えを、
それをたぶん殿先生は求めてるんだと思う。だったら、少し考えてみる。

一応こう見えて30年以上の人生経験だけはつんでいる。多少色々やった感はある。

多くの人間や人間以外の種族にもあつてきた。その出会いを一から思いだして見る。

前世は……まったく普通の学生だった。平和な日本という国を今の極東と比べれば、

科学力では劣ってはいてもどれだけ平和で恵まれていたか、それを今になってはつきりと理解できる。

少なくとも日常的に血反吐を吐きながら怪異と殺しあう必要など一切ない。

そんな、日本と比べると極東は”生きて”いると思える。

漠然とした感覚ではあるが、誰もが生きることには必死で、世界の未来を良い方向へと、

努力して引っ張ってゆく感じがする。ただ流されるのではなく、流れを作ってゆく。

活力や生命力を感じる、そんな気がする。

父親である本多・忠勝は日々だらけている様で実のところ一日も鍛錬を怠ったことはない。

主治医である陽菜はすぐに人を解剖したがるけど仕事はマジメに、サボったことはない。

松平四天王のほかの方々のことはそこまで良く知らないけどたぶん

がんばってる。

鹿角様は自動人形なのに自動人形とは思えないほどに親父を追いつめる時だけ活き活きしてる。

……どこか間違っているような気もするが、大体間違っていないはず。

そう、誰もがこの世界では生きようとしてがんばっているのだ。未来が見えなくなっても、

それでも最良の未来を手繰り寄せようとがんばっているのだ。

だから、

「やつぱり……我儚なやつなんじゃないですか？人間と人形を分けるのは」

そう答えた。

その答えを受けて松平・元信はなるほど、そうかあ、と手を顎に当てて言葉を反復すると、
そういう考え方もあるか、と言った後に再び九刻に問いを投げかけてくる。

「何でそう思ったのかな？」

「いや、だって……誰かに命令される通りだけ動いていたらそれは人形ですよ。

人間でも自動人形関係なく、そいつは”人形”って存在へ成り下が

るんですよ。

どっかで聞いた話ですけど、人間ってのは”状態”を表す言葉でもあるらしいですよ？

人それぞれでその意味も変わってきそうですけど、我からしてみれば人間ってのは我俣で、

傲慢なほどに自分本位な人たち、そんな我俣な人たちほどもっと人間らしい感じがします」

それが、今が思う人間と人形の違い。だと思う。それにしても、

「行き成りこんなことを聞いてどうしたのですか殿先生？」

そつふられた元信は頭を横へいやいやとふり、

「いやいや、先生もこう見えて結構九刻君の事を心配してるんだよ？小さい頃を少しだけだけど知ってるし。お世話もしてあげたしね」

「うっ」

そういわれると何も言い返せない。昔はトップの人間とはまったく付き合いが出来ない、

そんな下っ端ライフを生活すると思っていたが、現実はそう行かなかった。

神格武装にも匹敵する武装を所持している子供をただほうって置くわけにも行かない。

聖連とのやり取りや取り組みにも必然的に松平・元信はその顔を出して、有利になるように交渉した。

その時に元信には世話になってるために立場的にも頭は上がらない。

こんな世界へやってきてだが、こんな風になるとは思わなかった。

視線を再び三河の郊外へと、武蔵の方向へと向ける。

まだ日は高く昇っており、今日一日は武蔵が停泊しているのが分かる。だが明日になれば三河を出、

再び各国の国境線上を交易しながら回る島流しのような生活が一年続く。

極東には殆どの自由がなく、そして象徴たる武蔵には武装さえ禁じられている。

戦うことを教えることさえ禁じられ、学生も18歳までと言う制限まで付いている。

そんな、武蔵の方角をじっと見つめる。

「……君はいかなくて良いのかい？」

「えー。仕事めんどくさいですよー」

「そういう事じゃないよ。彼女、行ってしまうよ？」

武蔵を見つめたまま口を動かさない。いや、動かせない。

「友達なんですよ？」

そう、彼女は友達だ。……だから顔を合わせられない。

「……資格、ないですから」

「……うん。先生はそんなことないと思うけど、

九刻君がそういうのなら仕方がないね。そういうことにしておいて

あげるよ」

ばり、っと音を立てて煎餅を齧ると元信が背を向けてバルコニーから離れてゆく。

「煎餅ありがとう。久しぶりに九刻君と良い話が出来たよ」

「恐縮です」

元信がバルコニーの出口である扉から出ようとするも、一度だけ止まり、九刻の方へと首だけ動かすと、

「今からでも遅くないよ？会える人には会っておかないと後で後悔するかもしれないよ？」

そう言ってバルコニーから出て行った。

その背中を見送ると再び手すりに寄りかかり、食べることを忘れていた煎餅を再び齧る。

いつもなら辛く感じる煎餅もこの時ばかりはどこか味を感じにくかった。たぶん、心の持ちようだろう。

そんな事を考えながら煎餅を食べ続けると、必然的に食べていた煎餅がなくなる。

次のを食べようと袋に手を伸ばし……やめる。

「会えるうちに会わないと後悔する、つかあ……」

最近、四天王や殿先生が何かの準備をしているのは知ってるんだよなあ……。

と言っても何も教えないと言うことは自分にはまったく係わり合い

のないことだ。

詮索するだけ無駄と言うこと。このバルコニーだって禁止区域だが、その禁止区域としては比較的親友しやすい場所、つまりは黙認されてる場所だ。

「……武蔵、か」

武蔵を見る九刻の目には若干複雑な色が宿るのが見える。

期待、同情、哀れみ、やるせなさ、様々な色が瞳に映っている。

「……悪いな、見送り出来なくて。正純」

ただ、彼女が三河を放れるきっかけとなった事件、

それに対して何の解決も証拠も見つけられなかった自分の力不足が恨めしい。

とは言え、自分程度が出来ることなんてせいぜい前に立って守る程度が関の山。

それだけでは十分に不十分。ならば、できることは……。

「はあ。エセル」

「お傍に」

名前を呼ぶと即座に横に紫色の髪に黒いドレス姿のエセルドレーダが現れる。

基本的には常に九刻の傍にいるエセルドレーダではあるが、走狗と同じ機能を有しているために用のない間は姿を消したり、首もとのハードポイントに収納されていたり、邪魔にならないように気を使っていたりする。

「エセル。そろそろ仕事に戻るわ。午後から何かあったよな」

「警備隊での仕事でしたら榊原様に押し付けたのが大半終了しており、

午後からは物資の確認や武蔵の監視があります」

そして、

「鹿角からメールを10件、二代から60件ほど着てます。

どちらもマスターの所在を探そうとしている模様なので会う気がないと返信しておきました」

……たぶん我死んだ。

第六話 武蔵とか殿先生とか考え事（後書き）

そんなわけで毎年ある、武蔵野来訪描写1回目で御座る。
色々キンクリ感が多いですけど、
本編が始まれば普通に信仰してゆくので、本編が始まるまでは色々
と日常風だと思ってください。

うん。嘘じゃないんだ。

あと唐辛子煎餅おいしいですね。
テンション下がった時に食べると辛くてなんだかテンション上がっ
てくる。

執筆中にも食べてました。アチヨー！

まあ、そんなわけで色々とフラグや伏線を張ったりするだけの本編
前の話ですが、

今はまだつまらない……かも？ここギャグ少なかったし。

次回からは時間を進めて本編の武蔵来航前日まで時間を勧めたいと
思ってます。

ここからは原作同様時間の流れがおかしいほどに遅く描写されるの
で、

こっからたぶん面白くしたい……と思ってる。

と言うか今更アニメの放送が近づいてプロットを見て、

「これじゃアニメの放送にまにあわねえ！」と思って焦りだしたと
かいえない。

第七話 朝から始まる一日（前書き）

歓迎しても

歓迎せずとも

やってくるその日の意味は

配点（日常）

第七話 朝から始まる一日

浅い眠りの中、まどろむ。

暖かな日差しが窓から入り込むのを感じるが体が布団のぬくもりを手放したがらず、

隣に存在する温かな存在へと体を寄せようとして……やめる。邪魔にならないように布団から一人だけ這い出すと、

そのまま近くの箆笥を空けて自分の制服を取り出す。それを手に取りながら簡単に指で虚空を操作すると、

目の前に小さい表示枠が現れる。そこには数字が書かれており、

6：12

と出ていた。それを確認すると軽く片手で額を叩き、やつちまった、という表情が見て取れる様子を取るとため息を吐き、

来ている寝巻きを脱ぎにかかる。脱ぎながらもまたため息を吐くと小さな声で呟く。

「はあ、寝坊した……」

素早く着替えにかかった。

●

「遅れてすいません」

駆け足に厨房に入るとそこには既に朝食の準備を始め、ある程度

完了していた自動人形の姿がある。

本多家自動人形統括侍女長、鹿角だ。部屋に入ってきた九刻を見ると作業中だった手を休め、

重力操作で包丁などを動かしながら頭を下げる。

「おはよう御座います九刻様。今日は随分遅く起きたものだと判断します」

「すみません……寝た時間が遅かったもんで」

「Jud・かなり遅くに帰ってきたことを確認していますが」

昨夜の、帰って来た時間を思い出す。昨夜と言う割には既に早朝とも言える時間帯で、

鹿角を含む一部の自動人形を除けば大半が既に寝ている時間である。二代も大体は0時まで待っててくれるが、

それでも昨夜の帰りはそれを大幅に超える時間であったために先に寝てしまった。

決して倦怠期などではない。絶対にだ。

「帰ってきたのが2時で、寝たのが2時半ですから」

つまり大体にして2時間半ほどの睡眠しかとってないのだ。少し寝坊するのも無理はないという話である。

……とは言うものの、実際は寝ずに数日を過ごすくらいの事は出来、それだけの訓練は受けている。

今回の件はただ単に気の緩みが招いた失敗なのであって、甘んじて小言を受け入れる準備は出来ていた。

「まあ、仕方がないと判断いたします」

が、気体はいい意味で裏切られた。

「明日は武蔵の来航だけではなくババ・スコウラ教皇総長まで来とのる予定ですので、

怪異の退治とかと色々忙しいと思いますので今回は見逃すといったしましょう」

いろんな意味で翌日からは忙しく、この1週間は怪異などに関しては特に神経質に対処しており、睡眠時間は昨夜の程ではないがガリガリ削れてもいたりする。その代わりに殆ど終わらせてきたために、今夜あたりは早めに帰って眠れると考えてたりもする。

それに、と鹿角が言葉をつける。

「優秀なアシスタントが今日は参加してくれておりますので」

そこで鹿角が手をさす方向へと頭を向けると、そこには床から数センチ浮かんだ割烹着姿のエセルドレーダがいた。

そう。割烹着姿。いや、むしろここはK A P P O U G I姿。ドレスの上から割烹着と言うニュースタイルを見せるだけではなく、普段から料理の”リ”の字すら見せてない様子だったエセルドレーダが何故か、いつの間にかそれでいて、

優秀と言われるほどの腕前で鹿角の朝ごはんの準備手伝っていた。事実、見ている分には包丁さばきは凄まじい。

いや、そういうことではなく、

「おはよう御座いますマスター」

「おはようエセル。さあ、一緒に表へ出て楽しくお話しようか」

「Jud・マスターと二人だけの時間はいつでも至福の一時だと思っています」

ダメだ。話が通じない。年々極東スタイルに馴染んでいると言うより馴染みすぎて。いろんな意味で勝てる気がしない。

当初の寡黙で自分からまったく動かなかった過去のエセルドレーダを懐かしく思うのと同時に、これもいい変化なのかなあ、と考えつつもその変化に少なからず頭痛を覚え頭を抑える。

「マスター頭痛ですか、それは大変です！」

「ああ、大変だ」

原因はお前だからな。

エセルドレーダが手に持っていた包丁をまな板の上に下ろすと、割烹着を脱ごうと手を動かし始める。

脱いだ割烹着を圧縮空間へとしまうとそのまま床へと腰を下ろし、膝を曲げて座る。

そのまま自分の太ももをぼんぼんと叩くと真っ直ぐ九刻を見つめ、

「さあマスター、膝枕で看護をいたします」

鹿角と九刻からハリセンによる容赦のないツツコミが朝から炸裂し

た。

●

朝食の時間は意外と短い。ガッツリと食べるのが二人はいるが、ガッツリと食べる分食べ終わるのも早く、

大体3分もあれば大量の朝食はなくなっている。今日もその例外ではない。

二代が起き、忠勝と共に朝の軽い鍛錬を終わらすところには全ての朝食が作り終わっており、

時刻ももう8時半をすぎたところで二人は食堂へと入ってくる。数分で朝食を食い荒らすとそのまま二代と九刻は校舎へ、

忠勝と鹿角は家での業務に終われることとなる。

教導院が存在する新・名古屋城への通学路を、二代と二人で歩く。

”人払い”で殆ど全ての者は三河の郊外へとその住まいを移してしまつて、

未だに多くの家や店が目に見えるが、そのほぼ全てが営業を停止しているか廃墟であつて、

中には誰も存在せず取り壊されないで放置しているだけの状態である。

三河の警護隊としての職務の一環としてよく三河市街の中を見回るが、ここ数年でその荒れっぷりは酷かった。

壁などを見れば怪異の影響で異常に腐つてたり、何のものが分からない血の痕がついてたりと、

夜中に歩けば一級ホラー映画でも味わえないほどのホラーを感じられる町となっていた。

警護隊も以前は怪異を防ぐのが主な任務になっていたが、今では怪異を退治する方が圧倒的に多い。

「やるせねえなあ」

三河の変化を自らの目で見てきたものとしては、そうしか呟けない。

二代の方も現場派の人間であるために割りとその光景は見慣れている、

嫌悪感はあると引くほどまでにはない様子である。

「九刻」

「ん？」

「今時間を確認したので御座るが、結構やバイで御座る」

理由は主に二代と忠勝の朝の鍛錬の終了時間。だがそれは決して言わない。

「少し急ぐか」

「うむ」

今までは普通に歩いていたペースを駆ける程度の速さで三河の市街地を駆け抜けてゆく。

正直昔とは違って、人のいなくなったゴーストタウンの様な三河は見えて気分のいいものでもない。

多少入り組んだともいえる町並みを抜けるためにもひとつとびで近くの家の屋根へと飛び移る。

「さっさと進むか」

「うむ。遅刻したらまた体罰を貰うで御座るからな」

二代がそれに頷きながら併走するように屋根の上へと飛ぶ。足場は木で出来た屋根で多少はぼろくなっているが、

それでも重心や足場を踏む強さをなんとか調整して、もろくなった廃屋の上を壊す事無く走る。

家の大きさは基本的に1階建ての家ばかりのみなので、屋根から屋根へと飛び移る動作はそう難しくはなく、

少しばかり勢いがあれば簡単に飛び移れる。そのまま二代と競い合うように屋根の上を真っ直ぐ走ると、

新・名古屋城の近くへと到着する。屋根から飛び降りて比較的整備された道路の上へ下り立つと軽く体を伸ばす。

「んー、何とか時間内についたな」

前方を見やるとまだ門が開いていることを確認する。門の前には三河警護隊の隊員が一人、

自分の順番か門の前で見張りをしている。門の前まで近づいて会釈をすると向こうが此方に気づく。

「隊長に副長じゃないですか。おはようございます。今日も仲良く一緒に登校ですか」

「いいだろう。いいだろう。いいだろう！我達超ラブラブなんだぜ！」

見せ付けるように腰の辺りを抱いて体を寄せて、可能な限り一番

いい笑顔を見張りに向ける。

独り身なのか見張りの頭に青筋が立つのが見えるがそんなことで臆すぐらいなら最初から極東にはいられない。

「うむ。幼き頃より寝食も風呂もずっと一緒に御座ったからな。正直一緒にいないのは想像出来ないで御座るな」

「バカップルもげろ」

「給料カットな」

「えっ」

そういうことは本来警護隊の隊長である二代の管轄なのだが、基本的に現場での仕事を優先するために書類仕事は全部九刻の方へと回ってくるために、エセルドレーダの演算能力を利用しながらちゃっちゃと片付けたりもする。

そして必然的に給料関連の物も九刻が担当している。と言うか書類関連は二代、完全にスルーしている。

「ひ、卑怯な……！」

ポン、と優しく見張りの肩に手を置く。フ、と小さく笑うと、

「がんばれ……負け犬」

その一言だけを投げかけて門を通り過ぎて校内へと入る。

「待つてろよ副長！！ カップル撲滅委員会も、クリスマス討伐

隊も、全部呼ぶからな！！ 絶対絶対呼ぶからな！！」

「そのたびに給料カットな」

そして完全に心を折られ見張りが倒れる。勝ったと小さく呟き拳を握り、家にも等しい校庭を歩き、教導院の中へと足を踏み入れる。

●

新・名古屋城には立ち入り禁止区間が多い。特に上層へと行けば行くほど立ち入り禁止区間は増え、クラスの大半は下層の方にあり、中層から上は特別な許可がない限りか、

もしくはそれなりの権限を持った人物ではないと入ることは許されない。九刻や二代でも。

基本的に立ち入りが許されているのは中層までである。

そんな秘密だらけの教導院となっている新・名古屋城ではあるが、それとは関係なく下層のクラスの場合はそれなりに賑わっている。

”人払い”で多くの人間が三河郊外へとその住みかを移しても、まだ年齢が低い18歳未満の生徒は教導院へ来る。

18歳以上の、卒業した生徒はそのまま警護隊へと移るケースが多い。

元々ガス抜きのための警護隊ではあるし。

そんなこんなで、意外とクラス中の人数は多かったりする。

そんな事をつらつらと考えながら教室の中へと入ると、既にクラスメイトの大半が揃ってたのか、視線がこっちへ来ると遅いぞ、と言っ言葉がそこかしこから投げかけられてくる。

自分の席を見つけるとそこに座り、ふう、と息を漏らして休む。

「おはよう副長」

「クラスで副長いうんじゃない。ふぁーあ」

副長と言っても生徒会関係とかではなく、あくまでも警護隊の副長。

やはり二代には一人では勝てないし、勝つ気もなく隊長の座はあっさりと二代に決定している。

何故親父や他の四天王が割と暇そうにしてるのに警護隊で働かないかは謎である。

しかしやはり眠い。

いくら大丈夫だと言ってもそれはやはり色々と気を張ったりして眠気を殺している状態で、

このように緊張感のカケラもない状況だと眠気が襲ってくる。机に上半身をつ伏しながら、

眠気に耐えるようになんとか目を開けたままにいる。そこに心配したのか二代が声をかけてくる。

「少し眠るで御座るか？先生が来たら起こすで御座るよ」

「んー。大丈夫。明日が明日だけに早めに上がらせてもらっから何とかなる」

目が若干しばしばする。通学中はそれなりの速度で動いてたために眠気には気がつかないが、

それでもこうやってのんびりしていると少しずつだが睡魔が襲ってくる。とは言え今眠れば絶対起きれなくなる。

そして担任の先生は居眠りに関しては絶対許しはしない。眠ったまま外へ放り出されたり吹き飛ばされたりと、

教師は自重するような世界ではない。だからおきてなくてはいけない。なにかないかと思い、眠い頭を回すと、

一つ思い当たり腰に付けている物に手を伸ばす。書がぶら下がっている方とは逆側のハードポイント、

そこに吊るされているビンを取ると、頭を持ち上げてそこから少しだけだが口に含む。

「んー……………ぐえっ……………うえー……………きっつー」

度の強い琥珀色の液体が……………蜂蜜酒が喉を通って行き、強制的に覚醒を促す。

酒はそこまで強いわけではなく、好きなわけでもないが、それでも気つけ代わりに飲むのは仕方がない。

「九刻は相変わらず酒が苦手そうだなあ」

一つ前の席に座っているクラスメイトが後ろを振り返りながら声を投げかける。

その発言に苦笑すると、苦手な物はしょうがないと答えて腰のハードポイントにビンを戻す。

元々蜂蜜酒は自分で楽しんで飲むための物ではなくて仕事用に必要な物で、仕方がなく飲んでいるのだ。

度数が高くないという意味がないとかはつきり言って拷問以外の何物で

もない。

「あーだけとおかげで目が覚めた……このあとに”今だけは”ってつくんだがな」

「そういえばお前って忙しかったんだっけ。寝てないのか？」

「聖連でもK・P・A・Italiaでももう来るな。我の睡眠時間を返せ。教皇総長キライ。帰ってくれパパ・スコウラ。いや、マジで。」

オメー一人来るためにドンだけ我が働いてると思う。マジで謝れ」

かたかた。

「聖連には色々嫌がらせばかりされているで御座るからなあ……ん」

かたかたかた。

「クソ。拝気を溜めて外熱拝気を売るって我の子供の頃の計画が……！」

かたかたかた。

「お前溜めるのだけは早いよなあ。使うのも早いけどな。つか子供頃に何恐ろしいこと企てている」

かたかたかたかたかた。

「いや、お前は分かってない！ 我の魔術がどんだけお金がかかるか！

我の肝臓にどれだけ負担かけてるか！ そして人間ドックにはお世話になってるぞ！」

「お疲れさん」

「はぁ……………ん？」

ほんの数秒前からカタカタし始めた音が気になって、横を振り向くといつの間にか現れたミニサイズモードエセルドレーダが、表示枠を出しながらなにやら操作をしている。その横で二代もその表示枠を覗き込みなにやら感心してる。

猛烈に嫌な予感がし、すぐさまエセルドレーダに声をかける。

「…………エセル。何やってんの」

何時も通りの無表情な顔を一転、褒められるのを待っているような犬の顔を九刻へと向けて、表示枠の中身を見せる。そこには百を超える文句や嫌がらせのメールで詰まっております、

「Jud・教皇総長が気に入らないらしいので匿名で嫌がらせメールを送り、それでサーバーをパンクするつもりで送るところです」

「しょーもない事で前科付けるなよ？絶対やるなよ？絶対やるなよ？！」

「Jud・それは前フリですなマスター」

「前フリでも何でもねーよ！ 昔の綺麗なエセルドレーダに戻つてえー！」

「？私は何時でもエセルドレーダですが。……何かおかしな所でも？」

「助けて二代」

そのまま二代の体に抱きつき、顔を胸にうずめる。

「あ、なんとつらやましけしからんことを……！ 怨敵九刻めえ……！」

「憎しみだけで人が殺せたのなら……！」

「ちくしょう……ちくしょう……！」

「お、収まれ俺の右腕……まだだ……まだ封印を解放する時じゃないんだ……！」

そんなクラスの嫉妬や殺意を他所に既に二人だけの世界が構築されつつあった。

抱きついた九刻を抱き返すと優しく頭を撫でて、

「よしよし。拙者は何時でも九刻と共にいるで御座るよ。

どんな時でも味方でいて、裏切らずに共に人生を歩むで御座るよ」

「二代……！」

「九刻……！」

そこで教室のドアが開く。ドアをくぐって褐色の男が現れる。いつものように繰り広げられている光景にため息をいとど吐くと、指をスナップし音を鳴らす。その指のスナップ音で生徒が教師の到着を認識する。

「お前ら朝から仲がいいな。私もここに来るたびこの光景を見るが、よくよくネタとリアクションだけには困らないクラスだな、ここ。それでは出席を取るぞ」

教師到着。

●

教室内の混沌を武力で制圧すると簡単に出席を取り表示枠を新たに出現させる。

黒板代わりに背後で巨大化させた表示枠はまだ何も移されておらず、真っ白な状態でその役目を果たす時を待っている。ニアが教室を見渡し生徒が全員此方に向いているのを確認すると、そこでやっとな得し授業を始める。

「それでは本日の講義——と、いう前にちょっとした連絡事項だ。ここで三河警護隊で働いている者もそれなりにいるはずだ。明日の準備とかのために、早退を許されているぞ。昼前にはここをでて行って欲しい……だつたな、本多？」

「Jud」

クラスメイトをざっと見渡し、警護隊に参加している面々へと向かって言葉をつなげる。

「昨夜はお疲れさん。皆でがんばったおかげで大体のところの歪みの修正は出来た」

歪み。それは地脈の流れが滞ったりした時に現れる物であり、怪異とかが発生しやすくなる場所でもある。新・名古屋城が地脈炉を備えているために地脈の流れが滞っており、大量の歪みを抱えると同時に怪異の多発を確認できる魔都となってしまうている。

そのため三河警護隊の面々の三河市街へ行ったときの主な仕事は基本的に怪異の退治、

そして熱田神社より譲ってもらった歪み修正用のお札を歪みの強いところに貼り、修正を施すのだ。

とは言え、三河市街のゆがみは非常に多く、全てをつぶそうとすればかなりの時間がかかる上に、潰したところから新たな歪みが生まれるためにたちこつことしか表現の使用のない状況となっている。

その歪みを片っ端から潰そうとした結果が現在の九刻の状況である。

全ての修正は無理でも、あらかたやったので数日は怪異の発生率をほぼ0まで落とせるはずである。

伊達に熱田神社の高級札を使ったわけではない。

ちなみにだが地脈炉は怪異や神隠しを多発させるために本来なら禁止なのだが、

それを用いて大罪武装を作ったがために特別に許可を貰っている状

況である。

「そんなわけで今日は早めに明日の準備を始めて、朝までがんばったやつらは早めに帰って良いって事になった。

…… つとまあ、我からはこのくらい。我ももう寝たい。学校終われ」

「だが終わらない……聞いたか？そんなわけで今日の講義は明日の客人と、その目的に関してだ」

そんなわけでの意味は分からないが、本日授業内容が決まった。

警護隊の面々、昨夜の修正に付き合っていたメンバーは誰も眠そうながら、嬉しそうにしている。

やはり九刻のように眠気を我慢していたのが多かったようだ。生徒の集中が九刻から、

教師のニアへと移り、ニアの背後に聖連のエンブレムが描かれる。

「さて、ご覧の通りこれは皆も知っている聖譜連盟、通称聖連のエンブレムだ。

その役割は単純明快。歴史再現を円滑に進めること。それだけだ。各国の教導院の束ね役でもあり、力のあるない関係なく多くの教導院がこの聖連に参加している」

ニアの背後の表示枠に新たな物が浮かび上がる。聖連のエンブレムのほかに、

それに参加している主な教導院の名前が複数浮かび上がる。

「まあ、この程度まさに”今更”ではあるがな」

聖連に関しての情報やその組織のあり方は本当に”今更”としか

言いようのない情報だ。

聖連はこの世界でたぶん、一番有名な組織だろう。内部情報以外のことは大体公開されているし、その嫌がらせを受けた九刻自身は敵を知る、と言う意味でそれなりに知識を持っている。

「そんなわけで明日、聖連……いや、K・P・A・Italiaの代表でお馴染みの教皇総長、インノケンティウスが三河へと殿に新型の大罪武装開発と譲渡をせつつく為にやってくる」

表示枠にK・P・A・Italiaの代表、総長であるインノケンティウスの姿が現れる。

「さて、我々の知っている^{ババ・スコウラ}教皇総長の名前、”インノケンティウス”は、

17世紀に教皇になってジャンセニスムを弾劾した、”インノケンティウス10世”を襲名した男だ。

ジャンセニスムとはカトリック教会によって異端視された考えなのだが……、

これは直接的には関係ないので無視しよう。

前教皇の方針に従い、ジャンセニスムを弾劾したのはいいのだが、義理の妹のオリンピアによって度々邪魔をされていたのだ。

史実によれば欲深い彼女が中傷やありもしない噂を生み出し、その結果インノケンティウスの顔に泥を塗ったらしいが」

そこでニアが軽く肩をすくめると、

「まあ、誰も自分に不利な歴史再現は最後に残して簡単に終わらせようとするよな？」

その言葉に軽い笑い声が教室に生まれる。

事実、どの国も自身に不利な歴史再現はなるべく簡単に済みますか、
”解釈”によって、

歴史と変わらない結果を生み出そうとしている。それを管理し、見張るのが聖譜連盟の仕事ではあるが、
その代表の一人であるインノケンティウスに口を出したりするのはかなり難しい。

そこで、表示枠に移っていたインノケンティウスの姿が消えて、
新たに巨大な魔族の男が現れる。

緑に近い肌の色に学者帽と歳をとった者の風格を持った人物。

「こいつは現在のK・P・A・Italiaの第二特務、ガリレオだ。

元はパドヴァ教導院で学長をしていたほどの人物なのだが、その頭脳が末世対策に必要と、

元教え子の現教皇総長インノケンティウスが直々に引き抜いて生徒にしたそうだ。

見ての通り結構年齢の通った魔族であるが、武闘派ではなく知能派の男だ。

さて、ガリレオの襲名元でもある”ガリレオ・ガリレイ”は歴史的にもかなり有名な男だ。

天文学の父と称されるほどの人物であり、それほどの人物を就任する重みは、

私達のような一般人には図り知られるところではないだろう。

……それを言ったら極東を動かす位置で裏で創世計画とかやってる殿先生が一番すごそうだなあ。

「地動説」を唱えたことでも有名で、世界の認識に対して真っ向から挑んだ人間でもある。

地動説に関しては異端審問会にかけられるほどの衝撃であってローマ教皇庁検邪聖省から、

以降地動説を唱えないようにと釘を刺されるほどの物だったが……

まあ、教皇総長とガリレオが仲がいいところを見るに、

史実どおりに終身刑を貰ったりされる場合でもそこまでひどい扱いはされないだろう」

表示枠からガリレオの姿が消え、再び表示枠のスクリーンに何も映らなくなる。

授業を真剣に受けている生徒の手の中には表示枠が携帯が握られており、

先ほどまで移っていた情報が写されていた。二代と九刻は職業柄もう既に知っている情報ではあったので、

新しい情報はないことから写す事はなかった。

「さて、それでは本日のメインイベント……ロイズモイ・オフロ大罪武装に関して話す
としよう。

……それでは、そこで暇そうに外を見つめている瀬田にでも少し話してもらおうか」

「げえ?!」

窓際の席に座っていた生徒が、窓から外を見ていたのがばれたらしく取り乱すと同時に諦める。

基本的に極東の教師は強い。立場的にも実力的にもどうあがいても勝てないことが多い。

そのためすぐさま諦めて、

「Jud……」

「もっとシャキッとせんか。まあ、あまり期待してないから気になるな」

「……流石にそれはひどい」

「さてそうだな、簡単に各国に配られた大罪武装の名前でも出してもらおうか」

「Jud・」

瀬田と呼ばれた学生は表示枠を簡単に出現させると、

そこに自分で入力してデータを書き込んでゆく。瀬田の表示枠に入力されたデータが、そのままニアが展開している黒板代わりの表示枠に移る。

「えーと、大罪武装は全部八つ、殆どの聖譜所有国に一つずつ配られています。」

それらは全て人間の罪を名前に冠しており、

M・H・R・R ガストリマルジア が暴食、K・P・A・Italia ポルネイア が淫蕩、

英国が強欲、フィラルジア 三征西班牙が悲嘆と嫌気、リビ アーケイディア

上越露西亞が憤怒、オルジイ 六護式仏蘭西が虚栄と驕り（ハイペリファニア、ケノドクシア

と、P・A・ODA以外の各国に送られました」

満足いったのかニアがうむ、と頭を頷き、瀬田が安心した表情を見せる。

「必要以上に喋ったが、まあよろしい。これに注意して授業中はちゃんと話を聞け。」

……と、これで分かったように大罪武装は人間の罪を現す名前がつけられており、
まるで各国を皮肉付けて送られたこともあってかなりの問題にもな
たが……今では大人しい物だ。

自己修復機能まで付いており、聖譜と違って国外まで持ち出せる凶
悪な兵器だ。

まあ、国外に持ち出せる上に超強力な兵器なんだ。教皇総長がもう
一つ欲しがる理由もわかるだろう？

……さて、この大罪武装を所持する人の事を、八機存在する大罪武
装にちなんで、

”八大魔王”と呼ぶ。この八大魔王だが、別に誰もがなれるわけ
はなく――」

そこで、授業の終わりを告げるベルが鳴る。

ベルが鳴り響いている間はあけていた口を閉ざして、静かにベルが
鳴り終わるのを待つと、

表示枠を新たに表示させる。そこには宿題、と書かれている。

「では、今日の講義はここまでだ。明日は武蔵と教皇総長が来るた
めに授業自体お休みで、

ここ、新・名古屋城も閉鎖されている。間違えても来るんじゃない
ぞ？

宿題は聖連の現在の行動方針に関してだ。2ページ分のレポートを
書けばそれでよし。

それでは私は次の授業の準備をするから静かにしてろよ」

黒板代わりの表示枠を残し、ニアが退室する。

先生がいなくなったところを確認して改めてデータを見直す者、
そのまま眠り始める物、菓子を取り出して食べ始める者と色々とい
るが、

やはり九刻の選択肢は……。

「寝る」

やはり、既に知っていることを復習することほど眠くなる事はない。
そう思いつつ机に突っ伏して短い睡眠時間を取り始める。

第七話 朝から始まる一日（後書き）

はつきり言ってフラグとか複線とか回収手段と話があってるかどうか分からなくなってきたぁー！

＼（＾０＾）／

そんなわけで三河消失前日、前半って感じです。

教皇総長なんて超エライ人が来るんですから、三河みたいな心靈多発区域なんです。

そりゃあ少しは掃除するでしょう、的な感じです。

それにしても今回はギャグ控えめでしたね！

本多のバカップルは日常、

エセルドレーダの暴走も日々進化、生徒達の団結率は異常、

ニア先生は某蛮族と比べると数倍ましな先生。

三河って普通だね。

次回は一日の後半？三河警護隊での活動と家に帰って寝るだけです。それではまた次回でー！

第八話 そして一日が終わる（前書き）

リア充もげる

いや

やっぱり爆発しろ

配点（愛）

第八話　そして一日が終わる

額に衝撃が走る。

「ぐお?!」

走る衝撃のままに体が後ろへと倒れて行き、重力に引かれるように地面へと頭から倒れる。

そのとき地面に頭をぶつけた、頭の芯まで痛みが響く。痛みを訴える頭を抱えながら目を開けると、覗き込む姿が二つあった。二代とエセルドレーダだ。とりあえず立ち上がる前に、
一番恐れていることを聞いてみる。

「……今何時？」

「12時10分過ぎで御座るよ」

「……おうふ」

体を起き上がらせると既に教室の中には他の生徒はいなく、教壇の前にニアが両手に腰を当てて立っている。

呆れたような表情を浮かべながらため息を吐くと、片手で顔を覆う。

「忙しいのは分かるが流石に寝すぎだ。お前は今日はもう早退していいぞ。」

「言うつかお前が早退しなくちゃ話にならん。さっさと行け」

そついうと教室の中に三人を残して教室から出てゆく。エセルド

レーダもやることはないため、

姿を消して省エネモードへと移行する。打たれた額を擦りながら倒れた机とイスを元に戻すと、
二代の方に向いて、

「そんじゃ行きますか」

「うむ。帰ったら膝枕するので今は頑張るで御座るよ」

モチベが劇的にあがったのは秘密だ。

●

三河警護隊の仕事場……隊舎が存在するのは三河の住人が移動したのと同じく三河郊外ではあるが、

それでもすぐに出動できるように三河市街に近い位置にある。

三河警護隊の隊舎は大きさではそう大きくなく、自宅から通勤するメンバーの方が隊舎で寝泊りする者より多い。

そのため、必然的に土地の大半は訓練用の施設にとられ、あまったところを執務室や食堂、

さらにあまったところを少人数が止まれる宿直室となっている。夜勤の者は大変世話になっているそうで、

今度の工事では宿直室の更なる快適度上昇のための改造が期待されている。

そんな三河警護隊の隊舎ではあるが、距離は新・名古屋城からはそう遠くなく、

訳5分程度歩けば付く程度の距離に存在する。新・名古屋城の城門

よりはいささか小さいが、
それでもそれなりに立派な門を潜るとまず目に入るのは隊舎前のグ
ラウンドだ。

ここでは警護隊の隊員が”自主的”に訓練している場所で、
中で器具を使って訓練をしてない限りはランニング等をしていると
ころが良く見かけられる。

「隊長に副長おっす」

「隊長達あざーっす」

「今日は遅かったな隊長達。熱いのもいいがいい加減にしないと刺
されるぞ」

「隊長を拝めたので副長は帰っていいぞ。あとロリっ子は置いてけ」

「——A b r a H a d a b r a」

「そんな冷たいところもスバラシイイイイイ！」

「うーい、馬鹿を回収するぞー」

手際よく隊員が数名、エセルドレーダの発した雷によって黒焦げ
になった隊員の足を引っ張り回収して行く。

グラウンドにいる隊員が九刻達を見かけるたびに元気よく挨拶し、
二人にどれだけ人望があるかを証明する。

多くの者が一度手を止めたりして挨拶する。そんな声を受けながら
グラウンドを横切り、隊舎へと入る。

扉の前までやってくると、そこで動きを止めて振り返る。

「それでは自分は訓練を始めてくるで御座るよ」

「おう。こっちが終わったら迎えにいくから存分に暴れててくれ」

「承知で御座る」

二代が手をパンパンと、周りに響くように立てながらグラウンドの中央へと移動してゆく。

連日どおりなら、動ける者をまとめて集めて、トレーニングや模擬戦を始めるところだろう。

グラウンド中央へと人を集めながら進んでいく様子を数秒眺めていると、声が肩の上からかかる。

「マスター」

「ああ、分かっている」

扉を開けて隊舎の中へと入ってゆく。

彼女とは違って、あんな訓練では我には益にはならない事は承知だが、

あそこの輪に混ざれないと言つのは若干寂しい物でもあるよな……。

誰にも聞こえないようにポツリとそう呟くと、隊舎の中を歩き始める。

隊舎自体は2階建ての建物で1階がジムや食堂を有しており、2階が執務室などの書類関係、

そして3階が宿直室や休憩室といった構成となっている。

隊舎に入っすぐにある階段を上ると左右に分かれる廊下へと出

る。迷わず右へと曲がり、一番近い扉を開けてはいると、そこには大きなデスクを除けば飾り気の少ない部屋があつた。

部屋に入ってデスクの後ろ、窓を開けてからコートかけに制服の上着をかけ、

椅子に座ると何も書かれていない状態の表示枠を無数に生み出す。

「さて、我も我でやることをやっちゃいましょう。エセル」

「Jud・」

名前を言うだけで欲しい物を理解したのか何も写さなかった表示枠に、

様々な文字や数字が現れる。一番近い表示枠には”三河警護隊護衛艦”とかかれており、

翌日何時から運行し、どこまで、距離、現在の整備状況など様々な事が書かれている。

1個だけにとどまらず、数個もの表示枠に現れる文章量に苦い顔をする。口を開く。

「ぶっちゃけ読むのがめんどい。短くまとめて」

表示枠横のスクロールバーを全力で下の方へスクロールしながらざっと表示枠を見ると、

再びエセルドレーダがJud・と答え、魔導書としての演算能力を駆使し一瞬で内容を纏める。

「簡単にいいますと、『完璧なんで何時でもいいすよ副長』……だそうです」

「うし。これでまず一つ、っと」

スクロールし終わった表示枠の一番下に、サインを必要とする項目が出てくるので、

デスクの上から筆をスタンドから取り出し軽くサインするように表示枠を撫でると、

その部分に”大十字・本多・九刻”と文字が書かれていた。

「そんじゃこれは航空課の方に送っておいてくれ」

「Jud・」

短い返事と共に大量に出現していた表示枠が消える。サインが入ったことで許可が出たのだ。

これで明日、武蔵の帰りの護衛……それをする護衛艦に問題はないはず。

新たな表示枠が現れる。それには三河郊外に移った方の市街、その警邏の結果など、

その日その日処理するデータやデータ化された書類が出てくる。さっきのようにエセルドレーダにやらすわけにはいかず、

一つ一つを自分の目で確かめながらも考えは別のところへと移っている。

——武蔵かあ……。

改めて、明日の武蔵の来航について考える。

毎年やってくる武蔵の帰りを途中まで護衛をするのは三河警護隊の役目で自分と二代も何度も見送りしてきた。

だが、今年の武蔵の見送りは意味が若干異なる。そう、若干意味が異なるのだ。

何せ、父親である本多・忠勝が、安芸まで護衛したら後は好きにしろといったのだ。

それはつまり、武蔵へ行くも、三河にとどまって警護隊を続けるのも、極東で好きに生きる、

そういうつもりで言っているのだろう。事実、数日前に切り出されたその言葉は、

未だに重く自分の中に残っている。まだどうすればいいのかも考えがまとまっていない。

二代の方もまだどうするかは決めておらず、二人揃って方針は”一緒にいる”事なために、今はまだ決まってはいいない。だが、決まっていなからと言って放置していい問題でもない。

とりあえず期限は明日、護衛艦が安芸へと到着するまで。一応の引継ぎ候補なども既に通達もしてある。

土壇場で武蔵に移ったって問題はない……はず。

「ふう……」

そこで軽くため息を入れる。

「マスター。お疲れのようでしたらお茶でもお入れしましょうか？」

エセルドレーダの声で意識が呼び戻される。どうやら考え事をしながらもそれなりに作業をしていたようだ。

お茶ぐらい飲んでも問題なかつと、そう思いエセルドレーダへと頼むという。

「それでは数分で戻って参りますので」

エセルドレーダが頭を下げると、静かに部屋から退室する。それを見送ると、また軽く息をこぼし、沈み込むように、座っている椅子に身を預ける。やはり、考えるのは明日の事だ。

どう考えても、いやーな予感しかしないんだよなあ……。

武の鍛錬に関しては口出ししてきた忠勝ではあったが、それ以外に関してはほぼ承認主義と言っても差し支えないのが、本多・忠勝という人間である。

それなのに数日前にいきなり『武蔵を見送ったら好きにしろ』といわれ、

今までどおり三河で好きにやるのではなく、極東という舞台で好きに動け、

そういう意味を込めての発言ということは容易に分かった。

だからこそ、解せない。

今まで、そのように何かの気使いをすることをあの男はしなかった。

ぶっちゃければ親としては失格に近い。すぐに皆一緒に風呂に入ろうとしたり毎食焼肉したがったり、

鹿角がいなければおそらくいろんな意味で危なかったのだろう。基本二トなくせに。

それに……それとは関係なく、嫌な予感がするのだ。

「……」

窓の外を見れば青かった空に夕日の赤みが差し始めている。

「……昔から予感は外れないんだよなあ」

そう、昔からこういう類の嫌な予感を自分はずしたことがないのだ。

姫の事故も、殿先生がP・A・ODAと同盟した時も、……正純が三河を離れた時も、

なんとなくだが、“やっぱり”と、その感覚がしつくり来る。

ある意味予定調和。こうなるとしっていた、としか表現のしようがない。

本当に今更だが、“ここが小説の世界”だった”という事をイヤになりながらも思い出させられる。

コンコン、とノックと共に扉が開く。盆の上に湯飲み乗せたエセルドレーダが入ってくる。

茶飲みを頼んだはずだが、何故かその盆の上には切りそろえられた羊羹も乗っており、

渋く淹れられたお茶とはあいそうな取り合わせだが……、

「エセル？」

「マスターは少々考えすぎなところがあります」

そう言って表示枠どけると、湯飲みと羊羹をデスクの上へと置き、盆を持ったまま横に立つ。催促されるわけでもなく羊羹を一切れ、一緒ににおいてある爪楊枝でさして食べる。

口の中に餡子の甘さが広がり、それを味わいながら食べ……茶を飲む。

「考え事には甘味です。悩むのもいいですが、マスターは本来そこ

まで考える人間ではないので」

「つまりは我は馬鹿だといいたいのか」

「J u——いいえ、そういうわけではありません」

「今肯定しかけたなコイツ……！」

未だに間違った方向で進化を続けるエセルドレーダの存在に戦慄を隠せないも、

この子の存在自体すべては自分のためだということを思い出し、そして……その行動のすべては自分ただけにある、ということも思い出す。

持ち上げていた湯飲みをデスクの上へと下ろし、ゆっくりと手を伸ばしてエセルドレーダの頭を撫でる。

エセルドレーダのさらさらとした髪がての中で気持ちよく流れ、乱れる。

「ま、マスター?!」

「よくよく考えたら、お前に結構迷惑かけてるな。

何時も我の事ばかり考えていてくれありがとうよ?感謝してるぜ」

「そ、そんな言葉恐れ多いですマスター!」

「いいのいいの。感謝は素直に取っておけば」

もう少しこのさわり心地のいい髪を触っていたいと思いつつも手を放し、湯飲みをつかみ再び茶を飲み、そして羊羹を食べる。確かに、少々考えすぎなのかもしれない。

嫌な予感の不安は拭えないのだが、”逃げられないならやつつけてやる”と、

某不幸な吸血鬼が言ったようにやってくるのならはった押せばいいのだ。そう教わったのだ。

そう、それが極東式なのだ。そう。極東に自重はない。……ん？

……そうと決まれば、話は早い。

羊羹をすばやく全部口に入れると、茶でそれを流し込み、顔を両手で叩いて活を叩き込む。

まだ若干眠気が残るがそれは全て終わってから存分に眠ればいい。今やるべくことは、

「じゃんじゃん回せエセル。さつさと終わらせてとつと帰るぜ」

「Jud・ならば一気に終わらせてしましましょう」

何十枚という量の表示枠が一度に現れ、その量が一気に半分ぐらいにまで減る。

それはつまりエセルドレーダが判断した、見る必要のある件だ。糖分を摂取してフル稼働を始める脳を使い、表示枠を見ながらエセルドレーダに声をかける。

「エセル」

「はい」

「あの羊羹、見たことないんだが」

「明日、教皇総長が来たとき出す予定だったはずのものです」

……帰りに新しく発注しても間に合うかな……。
と言つかウチのエセル誰に影響されてこうなったんだ……。助けてえ
……。

●

「んー……っんー」

目の前に広がっていた表示枠を全て片付け終わり、背を椅子に預けながら体を大きく伸ばす。

量はそんなものではないが、マドから差し込む光は既に夕暮れである証拠に、

オレンジ色の光で部屋を照らしていた。そう遠くない時間で、空は暗くなり、

警護隊の隊舎をライトで照らす必要が出てくるだろう。

「お疲れ様ですマスター」

今日のうちに出来ることは全部終わらせたと確信し、

後は翌日残るのは体を動かしたりする分だけ。久しぶりに早く帰れることに若干心躍りつつも、

椅子から立ち上がると上着をとり、袖を通す。

「さて、二代を拾って帰るか」

「Jud・」

そうと決まればエセルドレーダが姿を消す。エセルドレーダの存在自体”この世界”では流体で出来ているため、なるべく消費を抑えるためにも必要のないときは大体姿を消して九刻に”べつとり”くつついてることが多い。

そんな事を露とも知らずに扉を開けて部屋を出ると、丁度上へと階段を上がつてゆく隊員を見かける。

九刻に気づくと片手を挙げて挨拶をしてくる。

「お、副長は今日はもうあがりか？」

「Jud・昨日は忙しかったから今日は早くあがりだよ」

「そつかあ……それじゃ副長お疲れさま」

「おう、お疲れ」

自分よりは100以上は歳をとっている隊員ではあるもの、臆すことも下手に出ることもない。

警護隊はかなり前から出入りしているし、顔もよく覚えられているため、

警護隊のメンバー全体が部下と言うよりは友達のような感覚に近い。階段を下りて外へと向かおうとする途中にも、自主訓練を終えたのか休憩するのか、

何人かの隊員に会うも全員笑みを浮かべてお疲れ、一言声かけてから去ってゆく。

「つと、忘れるところだった」

入り口にまで差し掛かったところで足を向ける方向を変える。右へと体を曲げ、1階の食堂の方へと足を向ける。隊舎自体そう広

くないために、
すぐ食堂の前に前つくと扉を開けて中に入る。そこで真っ直ぐ奥の
カウンターまで行き、
そこで暇そうに頬杖をカウンターの裏でしている男に片手を上げて
挨拶する。

「ん……あ、副長」

「暇そうなところ悪いが、スポーツドリンクよろしく。
頼むからIZUMO製のアホ商品だけは勘弁してくれよ?。」

「あの地雷っぷりがたまらないんじゃないか」

「そんな変態はお前一人で十分だ」

「ええー。今日も”心臓ドキッ！ドロリ修羅場味!”をオススメ
したかったんだけどなあ……」

「お前が飲め。あとそれドキッとするかドロリしてるのかハツキ
リしやがれ。
ついでに言うならIZUMO製の変態商品を何故仕入れるんだ。許
可は出してないはずだが」

「やだなあ——リアクションを見るからいいんでしょう?そのた
めにこっそりいれてるんだよ。自腹で」

「……いい性格してるよなあ……お前」

ため息を漏らしながらとんとんと、カウンターを軽く叩くとカウ
ンターの後ろ、

そこにある冷蔵庫から竹筒を一本取り出し九刻に渡す。懐から財布を取り出し小銭で払うと、
即座に背を向けて食堂から離れてゆく。

「毎度あり〜。今度は買ってけよ。」ヌルリ浮気の予感味”を」

「お前ら全員何時かクビにしてやる」

「期待して待つてるよ」

やはりため息しか漏れず、どこか疲れた表情を浮かべながら食堂を後にする。

●

「お疲れ様」

「うむ。今日もいい汗をかいたで御座る」

グラウンドでは”自主”訓練に参加した隊員が束になるように倒れていた。

疲労困憊死屍累々といった状況でも二代は汗をたらす程度で楽しそうに汗をタオルで拭いていた。

先ほど買ったばかりの竹筒を渡すと、その蓋を取って冷たい液体を飲む始める。

そうやって二代が休息を取っている間に屍の山へと視線を向けて近づく。

それなりの高さになっている屍の山の下でしゃがみこむと、一番下

でつらそうな顔をしているやつに声をかける。

「生きてるか？」

「……………明日発売のR元服エロゲ”ぬるはち！”だけは……！”ぬるはち！”だけは……！」

「うん。それだけ言えるなら大丈夫だろ。あと店舗特典はやっぱりタイガーホールだよな」

立ち上がり尻の辺りを軽く叩いて土ぼこりを払う。なんだか未だに呻いている気もするが、それを完全に放置して背を向ける。竹筒の中身を飲み終えたのか先ほどまで飲んでた竹筒が、二代の腰のハードポイントからぶら下がっていた。二代の横まで小走りで近づく。

「それじゃ、帰ろうか」

「そつで御座るな」

と、二代が数歩先を歩き始める。それに追いつくようにすぐに追いつくが、また足を速められ距離を開けられたしまう。それを繰り返しながら進み、隊舎から離れてしばらく。そこで二人の足が止まる。

「何故逃げるし」

「う、うむ。いや、なんでもない……で御座るよ……？」

数歩近づく。また数歩距離が離される。

「……」

「……」

沈黙。

「とう！」

「っは！」

九刻が全力で体を前へと突き出す。同時に二代の加速術式も起動する。

九刻の体が前へと飛び、二代へと到達しそうなすんで二代が避け、体が宙を舞う。

それを追いかけるように九刻も使用する、必要拝気の少ない身体強化の術を起動させる。

二代の動きが走るたびに強化されるが、それに負けずと九刻も何とか体を加速させ二代へと追いつこうとする。

「何故逃げる！」

「と、特に理由はないで御座る！」

加速術式で追い合う間に三河市街に入る。二代が大きく飛び、屋根の上へと飛び移ると、九刻も屋根の上へと飛び乗る。二代も段々遠慮がなくなってきたのかスピードも乗り始め、

逃げる速度が速くなってゆく。

「我なんか嫌われるような事した?!」

「ち、違っ！　そういう事ではないで御座るよ！」

思わずそんな事を口走るが帰ってくる言葉は否定。

何故行き成り逃げるかに理由は思い当たらず、答えの代わりにエセルドレーダが出現する。

小さい省エネモードのまま九刻の肩の上に現れると軽く笑顔を浮かべ、

「――なるほど。ならばマスターは私が貰って行きますね」

「少し待つで御座る駄犬」

二代が止まった。が、その隙を許すほど九刻も甘くはなかった。

二代が止まった一瞬の隙のうちに二代の前まで到達するとその体を両手で捕まえ、

逃げられないようにがっちりとホールドする。

「あ」

「捕まえた。ってこら、暴れない暴れない」

「は、はなすで御座る！」

捕まえたのはいいが、拘束から抜け出ようと二代が体を捻ったりする。

筋肉自体は二代よりは自分の方がより、腕力もそのために抜け出す

ことはかなわぬことは知っているため、少し暴れたらそれで諦めたのか大人しくなる。そこでため息を出し解放すると、

「何で行き成り逃げるんだよ……嫌われたと思っちまったじゃねえか」

こう見えて立派な常識人だ。行き成り嫁に逃げられるような行動を取られれば、

何かして嫌われたのかと疑いたくなくても疑ってしまう。

その問いに対して二代が若干顔を赤らめながらそっぽを向くと、

「……………つたで御座る」

殆ど聞こえないぐらいの小さな声で何かを呟いた。

エセルドレーダにはその声が聞こえたのか、肩の上で小さくため息を吐くとそのまま姿を消す。

聞こえなかったのもう一度頼むと言うと少しもじもじつつ、顔を軽い赤に染めて上目遣いにほんの少しだけ音量を上げてやつと理由を話した。

「……………あ、汗かいてるから臭いと思われたくなかつたで御座る……………」

結構乙女な嫁に改めて惚れなおした。

普段はシャワー浴びてから合流してるって事を忘れてた……………。

●

「ただいまー」

「只今戻った御座る」

「九刻様、二代様、お帰りなさいませ」

仲良く二人で帰ってき、玄関を開ければ本多家お付の自動人形が挨拶をしてくる。

自動人形自体は結構な数が家の中に配置されており、家の中で送迎する自動人形は、

その日その日で変わったりする。本日迎えをしたのは紺の着物を着た自動人形だった。

一礼して迎えてくれるその姿を見てから玄関に上がると、既に汗の事は気にしなくなったのか、

二代は風呂場へと向かわずに廊下を真っ直ぐに進み突き当たりで曲がり、本多家の食堂へと向かう。

数秒遅れながら九刻も食堂へと向かうと、そこからは厨房の様子が見て取れた。

「お帰りなさいませ九刻様に二代様。今日は帰りが早いので夕餉も早く召し上げれそうぞ」

厨房で侍女服姿で料理するのは、忠勝の妻の味を一番再現できる鹿角であった。

二代の続いて厨房の様子を見ると味噌汁と漬物の準備が終わってる事は何時も通りとして、

普段は見えないような、葉に包まれた肉が見える。見て分かるような高級品で、

それを見ている二代は今にも食べたそうな様子で肉を見ている。

「鹿角様、これはどちらで……？」

我慢できないのか二代が目を輝かせながら鹿角に肉の詳細を聞く嬉しさを隠しているつもりだが、それでも頭の髪飾りが嬉しさでピコピコ動いている辺り、完全に周りにはばれており、微笑ましいと思われる。

「これは忠勝様が本日郊外の方まで足を伸ばされて買ってきた物です。

毎日ぐうたらと本当に役に立たない男ですので風でも引いたかと思いましたが、折角ですので深い感謝を何とか示しながら受け入れることにしました」

毎回鹿角の口から忠勝の名前が出るたびにその扱いが酷くなってゆく気がするが、

それが日常的な忠勝の扱いなので別段気にしない。
というよりも、妻が死ぬ前から毒舌だったそうでもはやマゾか、と諦めている部分がある。

「風呂から出る頃には全部終わっておりますので、素早く汗を流すことをオススメします」

「そついい終わると」もう言うことはないですと」と背中を向けて料理を続けることで示し、

二代と揃って食堂から離れて廊下へと出る。未だに二代の目は夕餉の肉について考えているようで、目の輝きは失われてない。

そこで、再び忠勝の不審な行動を思い——考えるのをやめる。

「……んー」

頭を軽く掻き、どうもすぐに考えようとする癖がついてるなと声に出さず言つと、

きょんとした表情でこちらを見る二代を見る。なんでもないと笑つと、手を引っ張る。

「さて、さつさと風呂へ入ろうか？」

「うむ。今夜は楽しみでござるな」

とりあえずは、明日に向けて風呂に入つてご飯を食べよう。二人で。

第八話　そして一日が終わる（後書き）

も
げ
ろ

まあ、普通にかいてたらいつの間にかバカップルを書いていた、おかげで3日でかけるはずが1週間近くかかってしまった。
反省も後悔もしてるけどやめられなかった。だけど、まあ。

色々とフラグが立ってますよね？

次回からいよいよ原作の日が開始されるわけですが、
未だに九刻君がまともに戦ってないところを見るとかなり不安ですよな。

まあ、一人で戦えば二代には勝てない……ってのが実力のヒントです。ポイントは一人で。

さてさて、原作ともちよつと違う感じが出てますが、それを今回は纏めたいと思います。

原作との差異点

・二代が三河中央に何回か来てる

——原作では三河の中央へ来るのはかなり久しぶりのようですが、九刻君と結構な頻度で怪異退治とかでやってきてます。

・二代が本多・正純との面識が高校時代まである。

——原作では中学の頃から疎遠になり始めたようですが、こっちでは見送りする程度には仲がよかったようです。

・九刻が三河警護隊副長である。

——原作境界線上のホライゾンでは別の肩が副長、
ベルトーニと交渉をまかされてたりなんかしました。

・オリキャラの存在（剣神熱田、教師ニア、医者陽菜）

——この中で一番の影響がでかいのは秘密兵器と解剖ドクターですね。

どんな風に九刻に影響を与えたかはバトルになって始めて分かると思います。

一応武蔵へと移住させるかはどうかはまだ秘密で。

・新・名古屋城、三河中央市街、三河郊外の細かな設定

——まるつきり秘密だと使にくいので一部若干使いやすいように変更しました。

・聖連の九刻への干渉

——九刻君が無双しないようにしっかり見張ってもらってます。

さて、今公開できるのは大体こんな感じでしょうかね？

殆ど三河関係ですが、武蔵へ入れば少しずつ変わってゆくかも？

まあ、とりあえず次回からは原作なので、原作のアノ雰囲気壊さないようにがんばりたいです。

それでは、バトルは今か今かと待ちわびながらシーユーストタ
イム。

アナブラさんの出演が決定しましたいつかはまだ秘密

第九話 アーリー・モーニング・デューティー（前書き）

懐かしさと共にやってくるも

苦しみ混じりのそれとは

一体その思いの行方とは

配点（思い出）

第九話 アーリー・モーニング・デューティー

「4973、4974、4975」

早朝、まだ朝の靄がかかっている時間帯に庭で鍛錬を行っているものがいた。訓練ではなく鍛錬。

ただひたすら出来ることを、同じ事を何度も繰り返し金属を打ち鍛えるような苦行。

何回も、何千回も、何万回も繰り返してきた同じ動きを今日も繰り返す。その鍛錬は繰り返すたびに体へと教え込まれ、

最初は数回、日が過ぎることに増えてゆく鍛錬の量は常に減ることはなかった。

「4986、4987、4988」

先日は忙しさと実働で鍛錬を見送ってしまったが、その分を取り戻すためにも今日はさらに力を入れる。

上半身は何も着ず、下半身は三河の制服に身を包んだ状態で片手と片足だけで体全体を支え腕立て伏せを繰り返す。

背中には重り代わりにエセルドレーダが乗っているがその重さ自体はほぼ無いに等しいため重りとしての機能を果たせてはいない。

そのため、弱めに設定された重力結界が体に軽い加重をかけ、それが負荷となって体を襲う。

だが、その荷重にも負けず、大十字・本多・九刻は自らの鍛錬を黙々とこなす。

「4992、4993、4994」

始めた当初からまったく衰えることの無いペースはまるで無謀な

行為にも見えるがそれは違う。

経験という絶対的な信頼からまだ大丈夫、まだいけると、そう判断しての行動。

故に九刻の動きは淀みなく、揺ぎ無く、常に一定のペースを保ちながら続けられる。

「4998、4999」

そして最後の片腕片足腕立て伏せを行う。

「5000、と」

最後の一回を終わらすと、エセルドレーダが背中からおり、体にかけていた荷重を解除する、

九刻も立ち上がり天に向かって大きく体を伸ばすと、そのまま体を右へと左へと捻りその調子確かめる。

満足がいったところで虚空を指先で軽く叩くとそこに表示枠が現れ、そこにメーターが表示される。

「23/58」

「それなりに減っちゃってるなあ……」

「Jud・今日はいつもより少しきつめに負荷をかけましたから」

ため息を吐きながら庭の端、縁側にまで行くとそこにおいてあるタオルを手に取りそれで体の汗を拭き始める。

何も着てない上半身の体は細いが、決して筋肉が付いていないわけではなく絞り込まれた肉体だと分かり、

無駄な部分を全て削いだことがわかる。一通り汗をふき取るとタオル

ルを置きその横においてある竹筒を手取る。

竹筒の蓋を外すとその中にはなみなみと琥珀色の液体が入っているのが分かる。一瞬だけ躊躇い、そこから一気に頭を後ろへ傾けながら中身を飲み干す。

「んぐ……うえー。朝から酒つてのはどうかと思うんだけどね」

先ほど現れた表示枠の中の数字があがり、完全とは行かないもそれなりに回復を果たす。

そのことに満足して竹筒の蓋を閉じタオルを持ち上げ汗を流してから台所へ行こうと思いい足を向けようとしたところ、エセルドレーダから声が漏れる。

「……数十秒瞑想すればそれで済んだ気もしますが」

「あ」

そのことに気づき気まずい雰囲気広がる。数秒の沈黙の後、口を開く。

「うん。アレだよ。お酒になれるためだよ。うん」

「流石マスター。小さなことにも鍛錬を欠かさないんですね」

うん。そういうことにしておいてくれ。尊敬のまなざしが心に突き刺さるよエセル。

●

時と場所は変わって食堂、そこには三人が椅子に座り食事を取っていた。そこから除ける厨房には数体の自動人形がおり、朝食後の片付けなどの作業に準じていた。そこまでならいつもどおりなのだが今日に限っては少し違っていた。

普段なら大量を一瞬で食べつくし、食卓を戦争の様にする男が”普通”とも言えるペースで朝食をとっていた。

思わず手術が必要かと聴いてしまっぐらいにはうるたえてしまった。もちろんツツコミは帰ってきた。

だがそれでも、忠勝のいつもと少し違う様子は若干戸惑いを自分にも、二代にも生んでいた。そんな朝食の中、忠勝が箸を持ったまま口をあける。

「なあ、九刻お前今日もぐもぐがふがふもがもが」

「話すことがあるのなら食べ終わってから話して下さい。

なるべく控えめに言いますが、——既に反面教師としては最高の人材ですので、

それ以上を求めようともう既に極めの位置にいると思っていますので無駄かと」

「それ、遠まわしに我が最高クラスの駄目人間って言ってるよなあ！」

もちろん、厨房には統括の鹿角もいる。自動人形に気になるとかそういう感覚が存在するかどうかは分からないが、

確実に忠勝の発言を一つ一つ監視しているのは分かっている。

忠勝の放った言葉に一瞬だけ硬直すると周りの自動人形も一瞬だけ硬直し、また動き出す。

「すみません。秒間100GBで忠勝様の事を愚痴りあつておりました。ええ。自動人形としてはたいしたことのない量です」

「我、家長だよ？家長だよ？だよ？」

「Jud・形だけです」

「形だけとか容赦ねえなお前！ 実権は我じゃなくてお前か！」

Jud・Jud・と、子供をあしらうかのように忠勝の事を扱い鹿角が厨房の掃除や片付けに戻り、忠勝がぐったりとテーブルに倒れ付す。二代と一緒に終始その光景を無視しながら食べ続けてきたが、忠勝がやつと顔を持ち上げ再び箸を突き始める。

「九刻、二代。おめえら今朝、どんな仕事が入ってる？」

「二人揃って殿先生の護衛だよ」

殿先生——つまりは松平・元信の船の護衛。

「人払い」三河中央部から人が消え、多くの人間が三河郊外へと移りその中央部が自動人形が管理してから、

「人払い」で離れてしまった人たちとも話し合えるようにと始めたことがきっかけではあったが、

繰り返すうちに段々とそれがパフォーマンスとして内外での認識となつてしまった。

今回は「武蔵を近くで見たい」と言う要望をかなえるために元信公所有の客船に本人を乗せてそこでパフォーマンス、

今年はそういう風になっている手はずだ。それには九刻と二代も護衛役として乗るつても計画の一部だったはず。

「ああ、そう言えば今年は結構派手にやる予定だったな。んー、まあ、K・P・A・Italiaもいるし問題ないか」

なにやら一人で納得したのかうんうんと頷くと真っ直ぐ二人を見つめ、

「よしお前ら、今日それサボれ。代理でもいいからそれサボって我について来い」

厨房から包丁が飛んできた。

●

「うおお！ あ、あぶ、危ねえ！！」

「何をふざけた事をぬかしてるのですかこの駄目人間は。将来のある若者を控えめに言って駄目人間への道に誘い込むのはどうかと思います。」

今すぐ陽菜様をお呼びして脳の手術を始めることを提案させていただきます」

「お前我を罵倒する時だけはすごいイキイキしてるよなあ！ はあ、なにそれって顔をするなよ！

大体お前、アイツを呼んだらそのまま全身解剖された上に終わったらしいの間にか右腕がサイコガンになってるわ！」

「Jud・個性ですね」

「個性つてレベルじゃねえよ！ 流石の我でもアイツにはついていけねーよ！」

むしろアイツから色々教わった九刻に対して我は戦慄をせずにはいられないぜ……！」

「おいコラ待て駄目人間の駄目親父。勝手に人を巻き込んでんじゃねえ」

「ああ？ 駄目人間の駄目息子が何を言いやがってる？ ああん？」

「ああん?!」

「ああん?!」

両者が箸をテーブルの上に置き、もきゅもきゅ食事を続ける二代を横にガンを飛ばしあいながら威圧するように顔を向ける。

一触即発の空気の中、やはりこの空気を破ることは出来たのは厨房の王者だった。

「ぬお！」

「うお！」

同時に頭を横へと動かすと、先ほどまで頭があった場所を研いだばかりの包丁が通り過ぎた。

忠勝と同じ方向、厨房の方へと向くと背後に重力操作で包丁を何本か浮かべた鹿角が、

感情の擬似再現機能で呆れたような表情を作り立っていた。それを見て忠勝と九刻が笑顔を浮かべると、

「ワレタチナカヨシ」

「ケンカナンカシナイヨ」

「Jud・搭載されているセンサーによると心音がバクバク聞こえてきますが男のくだらない意地に付き合うのは女性の務めかと。当方は自動人形ですが、女性型なのでその意地につき合わせていただきます」

勝者：鹿角。

本多家で鹿角に勝てる人材などいない。来た時ならまだしも染まりきったエセルドレーダでも無理なのだ。

騒がしい朝食だと思いつつも、これが何時ものノリだと思い、諦めると同時に納得する。

何だか無駄に引張ってまったく関係のない事だったりオチがくだらなかったりと、

そうやって結局はどんな真剣な話でもおちゃらけた空気になってしまうのがここだ。

忠勝も椅子に座って落ち着いたのか短く揃えられた顎鬚を軽く搔くと、

「今日、久しぶりに四天王で同窓会するんだよ」

四天王で同窓会、それはつまり今朝三河に来るであろう武蔵に乗っている酒井・忠次、

武蔵アリアダスト教導院の学長が約10年ぶりに武蔵を降りて三河の地を踏む、という事だ。

立場上滅多な事では決して武蔵を降りることを許されぬ身である筈が今年に限っては降りてくるのだ。三河に。

その事に少しの”予感”を感じながらも、質問をする。

「——井伊様の事は？」

「それに関しては黙ってる」

「Jud・」

つまりは、それは此方の役目ではない、という事だ。

それに、忠次学長が三河へと降りてこられるということは必然的にそれなりの手が回されているはずだ。

だから、松平・元信もこの件を知っているということ。ならばこれは”黙って俺について来い”と、

そう言っているのに近いことなのだろう。

「——Jud・了解した。代わりの人員を出すように手配しておくよ。これでいいだろ？」

「ああ、分かってくれたならパパは嬉しいぜ！」

「……え、……パパ……？」

「おい、何を疑問に思ってるやがる。我だよ我！ パーパだよ！ ダ
ディでもいいぜえ！」

「駄目人間が親（笑）」

「おい、何を笑ってるやがる」

「……………」

「ワタシタチハ」

「トツテモナカヨシデスヨ？」

今日も今日とて空は青く澄み渡り、太陽が分け隔てる事無く大地を照らしている。

二代は自分の夫と父親が冷や汗をたらしながら肩を組むのを見ながらも箸を使い里芋の煮つ転がしを掴み、それを口に入れると味わいながら咀嚼する。

「うむ。今日も里芋が美味しいでござる」

本多家は今日も割りと平常運転であった。

●

松平四天王と言うからに、そのメンバーは四人いる。

本多・忠勝、榊原・康政、井伊・直正、そして酒井・忠次。人払いで多くの襲名者がその立場を追われど、

それでもこの世人、重鎮中の重鎮はその名を変える事無くその名を襲名したままにいる。

そのうち酒井・忠次を抜いた3人は今でも三河に屋敷を構えており、生活を続けている。

榊原・康政の屋敷は、本多家のそれからそう遠くない。

「や、おはよう御座います。二代君の方は久しぶりですね。近いのにそう会う機会はないですね」

「おはよう御座います榊原様」

「おはようで御座る榊原殿。拙者、殆ど鍛錬と実働で御座るから文系の榊原殿とは……」

「あ、いや、責めてる訳じゃないんですよ。ただ会うの久しぶりだなあーと、おはようダっちゃん」

「お前、我が最後かよ」

「ダっちゃんとは昨夜も会ったしなあ……それ以外にもよく邪魔しに来るし。」

人が仕事している時に” 割断世界ホンダリアン ” の布教やめようね？視聴率稼ぐつもりでアレ逆効果だから」

「いや、だって、アレのグッズ売り上げとか我のお小遣いなんだぜ？ただでさえお金の管理は全部鹿角がやって殆どこっちにこないってのに……！」

「ははは、まあ、立ち話もアレだし歩き出そうか？」

そう言つて榊原と忠勝の先頭に、三河中央部を迂回するように東側山岳に存在する、

武蔵と三河を繋ぐ東側関所を目指して歩き始める。

地図を見る限り結構の距離があるのだが、実際歩いてみればそう遠いものではなく、20分25分ほど歩けばつくような距離である。

それに、一般的な人間族であつて歳をとつたとはいえ、それでも元は最前線で戦つていた二人、
体力は衰えどその様子はまったく動きからは見えず、若い二人のみならず四天王の二人もそれなりのペースを保ちながら東山岳を横に歩いていた。

「それにしても酒井君ですかあ……本当に久しぶりですねえ」

「我らが揃うのは約10年ぶりだからなあ」

「酒井君左遷されちゃつてそれっきりバラバラですからねえ。井伊君も……」

「井伊については我が何を言つても今更どうにもならんだらう」

「公主隠しは色々と判明していませんからね……」

公主隠し。それは近年各国で起きる要人を中心に消える神隠し。普通の神隠しは流体の穴に落ちて、空間に囚われたりして消えた形跡が残るものであるが、

公主隠しにおいては一切の証拠が残らない。そう、流体が流れた形跡も何も、忽然として消えるのだ。

現場に残されるのは唯一つ。犯行を完了したことを証明するように

「——九刻君？ 顔悪いけど大丈夫ですかな？」

「え？ あ、じゅ、Jud・元気いっぱいですよ！ 昨夜も元気いっぱいでしたしね！」

「いや、夫婦の仲が良いかどうかとは別に聞いてないので良好ならいいのですが……顔色が若干悪いですよ？」

そうなのか、と上着の内側から常備している小さな手鏡を取り出しソレで自分お顔を見ると、

少しだけ汗を流れていて若干顔が青く見えなくもない。手鏡をしまい、大丈夫だと返事すると、横、二代は手を握ってくる。

「……未だに引きずっているので御座るな？」

「……………Jud。」

たぶん、アレは、一生自分が背負っていかないといけない十字架、その一つであり、絶対に許されてはいけないことなのだ。昔の光景が軽くフラッシュバックし始める。

血、悲鳴、涙、叫び声、そして――

「お、どうやらそろそろ始まるようだよ」

「殿も毎年よく飽きないなあ」

「いや、飽きちゃったら駄目だからね？大事なことからね？」

そう言つて調子を崩さず榊原の前に表示枠が出ている。そこには武蔵の全容が映されており、同時にその近くを航行する航空客船が見える。三つ葉の葵の家族紋章をつけたその船は松平の所有物を示し、

武蔵の上をその全貌が見やすい位置から眺められるように操艦されている。

武蔵と客船を映す表示枠の横にもう一つ表示枠が現れる。それは三河内外でよく知られた男の顔。

眼鏡に学帽、黒の長髪にマイクを小指立てて持っている姿。その表示枠に映る姿を見て笑みを浮かべる。

「本当はこれ武蔵用のスピーチだけど、歩いてるだけでも暇だし、ちよつと見ちゃいましょうか？」

そう言つて歩きながらも見せる表示枠の中で、初老の男が口を開いた。

『——やあ、久しぶりだね武蔵の諸君。先生の顔を覚えているかい？』

その表示枠を見ながら九刻が男の背後を見て呟く。

「やつべ、代わりの人員派遣してなかった……！」

冷たい視線が九刻を刺す。

●

「毎度毎度、私が、——三河当主、松平・元信だ。先生と呼んでくれて結構だとも」

松平・元信は自分が乗っている客船の中、下部の展望デッキから武蔵を見る。八艦からなる極東の独立領土。

その姿が健在であることを確かめ、安堵する。そして同時に決意が固まる。

武蔵からのリアクションはさほど気にせず、一方的に前日から懷で温めて用意していたスピーチを口にしつつ、
実際はその内では違うことを考える。

今日が、始まりであると。

種は時かれ、そして下準備は整った。

「——として、聖連の指示により、武蔵住人は三河に降りることが出来ない」

武蔵と三河に対する理不尽な扱いは今に始まったことではない。
極東の歴史が敗戦より圧倒的な不利と制約の元の生活を許容されている。

だが、それは続かない。これからは、それではいけないとも自分
思う。それでは乗り越えられない、と。

「が、気にしない。三河からは多くのものを運び込むし、観光の人
々が話をしてくれるだろう。」

だから皆、社の地脈通神やコネクションを使用して三河と交流して
欲しい。そして出来れば先生も知りたい、

君達が今、どんな生活をしているのかと、これからどうしたいのか
と」

本心を思うのであれば、一番の気がかりは——あの子だ。

計画の要、そしてこれから始まり壮大な物語の主人公になるべき人
物。これから皆には迷惑をかけるし、

そして未来ある若者達に大変な苦勞と悲しみを背負わせることにな

るのだらう。

それでも計画は止めることは出来ない。P・A・ODAとの同盟も大罪武装も地脈路も新・名古屋城もすべてはそのため。すべては未来のため、これからのため。

「さあ、スタート。時間は大いにある。有効に全部使っていこう」

この言葉の本当の意味を理解している者はどれだけいるのだろうか。

井伊は既に消えてしまった。酒井、本多、そして榊原はまだ残っているが今回の件で酒井以外も消えるのだらう。

あの二人には子供はいるが——おそらく、いや、確実に関わろうとするのだらう。

「今夜は私の方でも面白いものを用意している。夜に、三河の方を見ているといい。

ちよつとした花火を用意しているからね。では——、本日の授業はまずこれにて——！」

そこで一方的な放送を終了させる。上手く自分の姿をあの子に見せられただらうか。元気にやっているだらうか。

そう思いつつも展望デッキから武蔵を眺めると、その艦の一つに此方を仰ぎ見る姿が見える。

生体式の自動人形、その近くに立っているのは……少し姿が変わっているが政治の本多娘だ。

彼女もがんばったな、と思いつつガラスの向こう側、様々な思いを込めて自動人形へと手を振る。

ただただ、手を振る。今の自分に、あの子にしてやれるのはこの程度だと思ひ手を振る。

それに彼女が答えた。

此方が手を振るのが見えたのかそれに答え同じく手を振り返す。相手はこのやり取りに一体どういう意味があるのか一切理解してないし、理解した時には遅いのだろう。

そう思いつつ、見えなくなってきたところで手を振るのをやめる。これからはまだやることもある。

新・名古屋城へ戻ろう。

そこでは私のすべき事があると思い、背後で護衛しているはずの者へと声をかける。

「さて、私達も三河へと帰ろうか？」

返事がない。誰もいないようだ。

「……九刻くーん？」

振り返り、名前を呼びながら展望デッキを軽く見渡す。椅子ばかりで隠れられる場所はない。

返事がない。隠れているわけではないようだ。

「……うん。さすが本多の人間だね」

何処の家の子供か思い出し、サボりの理由に納得する。

●

「はつくしよん！」

「ぶえつくしょん！」

「マスター風邪ですか?!」

「大丈夫で御座るか九刻？」

「滅多に風邪を引かない九刻君だし心配だね」

「おい。お前らそっちだけじゃなくて我も心配しろよ」

「マスター、今すぐ私の体温で暖めます！」

「少し待つで御座る」

「待てと言いつつすぐに刃物を取り出す辺りが本田君の娘だよねえ……」

エセルドレーダと二代の間で軽い火花が散るが、止めようとすればとばかりを食うのは良く分かっているので少しだけ歩くペースを上げて、

先頭を歩く忠勝と榊原の横に並ぶ。既に中央部と郊外の間を通る一本道の山道を抜け東側関所はすぐそこ、という距離まで近づいていた。

と言っても、まず行けるのは第一の関所でそれ以上の進入は許可がないとこの面子でも無理である。

そのため一向が向かうのは山の麓その湖畔、その橋の向こう側にある三河から見ての最初の関所である。

「もうそろそろ関所ですね。酒井君は変わりましたかねえ」

「まだ拗ねている様だったら一発ぶっ飛ばすのもありかもしれんなあ」

そう言つて忠勝が苦笑しつつ片手を挙げる。その動きに追隨するように榊原も、九刻も、二代も、と手を挙げる。

街道を通る人が誰もが横を通るたびに頭を下げて挨拶をするのだ。もう前線に立つてないとは言え松平の四天王、そして現役の隊長と副隊長の顔は有名である。

挨拶を返すのはもはや条件反射のようなものだ。手を振るように挨拶を返しながらも話は続く。

「そう言えば九刻君は酒井君とは少し前にあつたんですっけ」

「Jud・と言つても数年前ですけどね。検査とか仕事とかで武蔵の方まで行つて、

そこで仕事終わらすついでに親父の過去の所業について謝ってきた」

「お前、無条件で我を見下そうとするところだけは鹿角に似てるよな」

「日々参考にさせてもらつてるよ。何せ親父の相手は疲れますからね」

「おい、何だその仕方がなく付き合つてあげてますって顔は。このガキ誰に似やがつた……！」

「たぶん本多君にですよ？ ……っと、ご苦労様です」

一つ目の関所に到着する。関所を管理しているのは基本的に三河の警護隊で、

それを山の中の番屋で警備するのが三征西班牙の生徒である。基本的に夜になればここを警備するのも三征西班牙になる。

極東は極東で制限の多い国ではあるが、ならば三征西班牙は三征西班牙で大変だな、と口に出さず思う。

「お待ちしました。これ以上先に通すことは出来ませんが……」

「かまいませんよ。ここで待ってますから」

「すみません。飲み物が欲しければ持ってきます」

「いやいや、気にしないでいいからお仕事がんばって下さいね」

「っは！」

榊原が警護隊の隊員をねぎらう姿を見てよく出来た人間で、極東の貴重な常識人だなあ、と思う。

だがそんな人間ほど苦労するって事もまた極東の真理。よく親父みたいな狂人と友人でいて狂わないな、と感心する。

そんな時に、辺りを影が刺す。

重低音を響かせながら空を遮りながら進む船影は一つではない。ほぼ直線状に西へと向かって数艦が飛んでゆく。その内、ひときわ大きい白い船影が見える。

その姿は聖連を知るものであれば誰でも知っている艦だ。

「K・P・A・Italia、ヨルムンガルド級ガレー」 栄光丸

（レーニョ・ニート）ですね、アレは。

周りにあるのは三征西班牙の警護隊ですか……イヤですねえ、圧力」
圧力が好きな人間はただのマゾだろ。

そんな事を口に出さず頭の中で思っていると、忠勝がほら、と遠く関所の向こう側に見える人影を指差す。

まだ距離があつて小さく見える姿ではあるが、それでも目のいい忠勝には見えたのだろう。

小さく懐かしそうに、笑みを浮かべると言う。

「松平四天王最後の一人、教皇総長に喧嘩売って勝って左遷された馬鹿、酒井・忠次だ」

その横に見えた人影を見て九刻は数歩、絶対に見えないと言うことを分かりつつも隠れるように場所を移した。

第九話 アーリー・モーニング・デューティー（後書き）

はい、そんなわけで原作やっと開始しました。

といっても原作1巻を約240ページ飛ばしての開始ですがね。

まあ、武蔵の開始ではないので描写の問題上仕方がないといわれれば仕方がないのですが……。

本多家のアレっぷりはブレないですねえ！。

忠勝と鹿角の夫婦漫才が実は一番ハード。

次は結構無口で自己完結タイプの二代に喋らすのがハード。

最後にエセルドレーダの暴走っぷりが何故か理解できなくて俺の頭がフアイア！。

地味に忠勝と九刻が被ってて判別し辛いかなあー、とか思ってた。

さて、ついに開始しました原作ですが、まだまだ1巻の朝／昼の間ぐらいです。

物語が本格的に動き出すのが夜中だと考えると、まだまだバトルには遠いですね。

何時になったら九刻が戦うのかって地味に悩んだりしますが、

やっと次回、めっちゃくちゃライトだけど戦闘描写入ると思うと若干テンションあがったり。

ホニメ（ホライゾンのアニメ略してホニメ。これは流行る）が10月1日から開始なので、

焦ったりもしてますが、文章には気をつけながらやるーかと思ったり。

あと章と章の間で喜美と全裸が境ホラでの解説とかをやってますが、あのコーナーを話の先頭でやろうかと思ってます。

主な解説は用語、小ネタ、そして戦場やマップですかね。
まあ、色々と盛り上がり始める今回でしたけど力ワカミン補給できれば幸いです。

次回はついに駄目なおっさん2号の……いや、1号？の登場です。
それではまた次回までさようなら！。

第十話 松平四天王（前書き）

どんなに時が経とうとも

どんなに距離が離れようとも

それでも変わらないものとは一体

配点（外道っぽい友情）

第十話 松平四天王

三河の関所は別に一つだけではない。

山の中、武蔵へと続く街道のほかにも一次審査を抜け、そこを降りてきた人間はすぐに三河の郊外には入ることが出来ず、

かがみはら各務原と木々により名づけられた山の麓、そこにある関所は橋を持つていた。

その役目は武蔵用の港の近くにある関所のように検疫などを目的としているわけではなく、三河郊外への進入許可があるかどうかを見る、

言わば二次審査用の関所である。山の麓、そこに存在する川の畔、橋の前に関所の役目を備える門はある。

橋の前に立てられた関所、その門は大きく開け放たれておりそこを通ろうとするものを止めようとはしなかった。

そこからは幅十メートルほどの橋が見えその奥南側、海の方を向けば木々の向こうには軽やかすんだ三河中央部の町並みが見える。

そしてその更に向こう、中央部の中央には新・名古屋城の姿が見えた。

未だ多くの自然が残る三河。そこに複数の人の影が見える。一人は痩せた中年過ぎの男。一人は同じ年ぐらいの体格のいい中年の男。そしてその二人の後ろに控えるのは並ぶように立つ少女と青年だった。そこにやや猫背気味の、やはり中年過ぎぐらいの男がやってくる。

関所を通過すること事態はそう問題がなかったのか、軽い足取りで四つの人影へと近づいてくる。人影の顔が確認できる距離まで来ると、

何時もの若干やる気のない表情のまま言葉を出す。

「おや、松平四天王の内、榊原・康政と、本多・忠勝のお二人がお迎えとはね。——俺もまんざらじゃないってことか。井伊はどうしたよ？榊原、ダっちゃん」

●

酒井・忠次の言葉に榊原の顔が僅かに上がる。既に白くなった髪をかき上げると、

「それがね、酒井君、実は井伊君はが——」

「井伊については他言無用だ。忘れたか榊原」

顔も向けずに榊原へと忠勝がそういうと、榊原が唇を軽く震わせ、迷い、

しかし酒井の方を見て頷くと口を閉ざした。

……隠し事かねえ？いや、三河から離れてたし仕方がないか。今の俺は武蔵の学長だからなあ……。

忠勝も、榊原も考えれば未だに三河の学生である。三河の貢献で聖連の特例により特別予備役、

つまりはまだ学生でいられる権利を与えられている。そして学生であると言うことは他の教導院、世界と向き合えることだ。

新・名古屋城の内部については確実に何かを知っている。実際、大罪武装のテストを行った男、だと言うことは知られている。

忠勝は『忘れたか』と言っていた。つまりこれは、誰かに……おそ

らく元信に言われ、黙っているのだろう。

そんな酒井の思考を割るように忠勝が動く。半歩前だけ体を動かすと体をやや前傾させ、

「——見せる」

瞬間、まだ声をかけていなかった二人の姿が消えた。

その動きに嫌な予感を感じ、嫌な汗が背中を流れるのを感じながらもそれを表情に出さず、顔を浅く上げながら忠勝に向けて言葉を放つ。

「は？　おいおい、お前の言う”見せる”って大抵ろくなことじゃ——」

全ての言葉を言い終わるよりも早く酒井の背後から二つの円弧を描く影が現れた。

一つは消えた少女が現れ、後ろに結んだ少女の後ろ髪が描く軌道。そしてもう一つの円弧は少女の手の中に握られた、抜き身の刃の色を移す銀色の軌道だ。

少女の動きに揺らぎはない。故に、

「——！」

酒井も、己の身を動かした。

前線から離れた時間は長い。武蔵の学長として武蔵へと赴任して以来、それ以来戦闘らしい戦闘はない。

だが、それでも酒井の動きはよどまず、素早いものであった。すぐさま状況を思考し、次の動きへと移す。

背後からの風の動きだけで背中に迫るその姿を予想し、自らの中で確定へと変えてゆく。素早い、軽い動き。

戦種は近接武術師か？！
ストライクオーバーサーメジャーだが、これは――。

何処となく覚えがある、と思う。たしかに、十年前、この少女には一度会ったことがあるはずだ。

本多・忠勝の娘だ。正純が知り合いだと言っていた者の一人だ。流石にこの状況では挨拶なにも意味がないだろう。

名前はなんと言ったか、覚えてはいないが、

……昔から鋭い動きしてたよなあ！ 槍とかいつも持ってた……！

忠勝の言う”見せる”とは大抵ろくではないことばかりだ。そして今回もその予想通り、襲われた。

可能性としてはこの10年での自分の劣化具合を見るか、もしくは自分の子供がどれだけ通じるかを見る、そこらへんがいい訳だろう。いや、忠勝の事だしなんとなくと言われてもどこか納得してしまいそうな気もする。

事情は良く割らないが、背後にいきなり回り込んだ言つのなら結論は二つしかない。確保するか、攻撃するかである。

そして今、肌で感じる動きは少女が身を振って起こす大気の揺れだ。

その揺れは大きく、遅い。ならばそれは攻撃だ、と酒井は思う。確保のために体を動かすのであればここまで揺れはしない。

確保するのであれば最低限の動き、揺れを小さく、初速を素早く済ますためこれは確保ではないと判断する。
攻撃の際に起きる風は、全身を持って振りぬくため、最初は遅く、そして動きは大きくなる。

どう来る、と、自分の心ではなく本能が疑問を浮かべる。

少女の武器は覚えている。少女がまだ忠勝の背後に立っていた時に、見ている。

別に意識してみていたわけではない。松平四天王の一角として戦場に出ていたときの経験、

それが武蔵と言つぬるま湯に浸かっている意識よりも深い位置に染み付いたそれは抜けてない。

あの武器は白砂台座しろやうだいざのブランドだ。木柄を黒のマット仕上げにしたものは、

白砂の名に反する色である一方保守的な作りが売りもの。柄なまっすぐであり、武器の軽さを長さで補っているように見えた。

……ならば。

長い刃は刀を使いやすくする一方で一つの問題点を持つ。

刀は西洋剣とは違い、技術を持つて敵を切り裂く得物である。相手に刃を当て、削ぐ様に得物を引くことで傷をつける。

その技術を持つていなければ刀とはすぐに折れてしまい、実践では役に立たない得物だ。

だがそれは、当てた刃を自分の”内側”へと引つ張ることで切り裂くと言う意味だ。

つまり、刀の刃とは実質、引く事の出来る距離だけだ。削ぐ際に力を込めてより深く切れるが、基本的なルールは変わらない。

そして刃の長い刀を引く時、深く切ろうとすれば柄は体に当たる。

ならばどうする。

……身を倒し、遠くに刃を振るうか！

全身を前に倒し刃を前に遠くに振る。これで距離が近くとも体に当てずに刃を抜ききることが出来る。

背後から感じる風は大きい。全力で踏み込み、こちらの右胸を背後からの横一線で襲う動きだ。

それを酒井は上手い、と思う。上半身を切ろうとすれば筋肉や骨が邪魔になるが腹となれば邪魔になるのは手首ぐらいだ。

その手首にしても弾くかそのまま断てば薄い腹の肉を切り裂くことが出来る。更に胸を尻ぐ攻撃の場合、

そのまま体を回りこませる動きへと連動させれば柄は体に当たる事無く次の動きへと繋げられる。

明らかに道場などで習う”剣道”ではなく、行儀の悪い、敵を殺すための実戦”剣術”だ。

……さて、どうしたもんか。

何も脅威は背後の少女だけではない。脅威は目前からも迫っていた。

それは目視できないが、確実にそこに”いる”と言うことは風の動きからは分かった。

否、それは”見えない”のではない、”知覚できない”と言う表現が正しいのだろう。

この動きには覚えがある。昔松平四天王として戦っていた時代、四人と数名で戦場を駆け抜けていた時代、仲間の一人が使っていたのを知っている。

……主にドッキリとか悪戯にしか使ってなかったけどな！

目の前の風の動きは素早く、最短の動きを最速で取るうとしていく。

体の動きも持っている得物も知覚は出来ずとも、体を動かす時に生じる風の動きまで外せてないため、

そこから思考を連続させる。忠勝の後ろ、少女の横に立っていた青年が得物を持っていたようには見えない。

だが感じる風は小さく素早い。確保すると言う動きは後ろの少女の動きからして可能性を除外できる。

だから考えれる可能性は二つ。こちらを抑えることか、もしくは正面から対応することだ。

風である程度までは分かるといってもその様子が見えないのは厄介だ。強制的に”引つ張り出す”必要があると、思い、

考えるより早く酒井が動いた。

●

背後から感じる一撃に対して、

「と」

軽く一步、バックステップする事で距離をつめた。

「———！」

踏み込んだの斬撃に対して自ら距離をつめると同時に前方、先ほどまで首のあった場所を攻撃が風ぐのを感じる。

刀とは引くことによって相手を削ぐ武器である。だから、自ら相手の懐に入り込むことで距離をなくせば、引く事のできる距離をなくすことが出来る。相手がそこから後ろへと距離をとろうとも先ほどより距離は短いはず。

だから、身を振る。真っ直ぐ後ろではなく、左後ろへと。

行った。

更には、

「さて」

腰の裏、肩からかけている羽織の下に隠れている短刀を半ばまで抜く。抜き方は右の逆手で、肩ごと腕を引き上げる動きだ。

この動きにより短刀を使って右側に立つ少女の牽制にも、攻撃からの防御にも使える。

そして同時に知覚出来ない青年からの防御手段を手にした事にもなる。最善の判断を尽くした、そう判断し左へと飛ばした身を右へと振るう。

そこに、刃を振るう少女がいるはずだ。

……いた。

黒の髪が見える。これから此方の身を当て、この戦闘の主導権を得る。

本来ならば一撃を入れて大人しくさせたところで格の違いを教えるところだが、現在は教導院の学長だ。

ここは乳揉みぐらいで許そう。いや、まて、確かこの少女は元服した時に婿養子と結婚したはずだ。

つまり人妻ジャンル。流石に人妻の乳を揉むのはまずい。いや、まして。相手はまだ若い。そして自分は教導院の学長。左遷されていても学長だ。その気になれば握りつぶせばいい。うん。やっぱり揉むか。それで許そう。

そして、相手の刃が、こちらの短刀に当たろうとした時見た。

「……っ!」

酒井は見た、背後にいた少女がいきなりこちらの右前に移動していたのを。

……これは――。

少女が立つのは右肩前、こちらに対して背中を見せるように、腰は落し気味で存在している。

どういう理屈かは分からないが、確かに少女が移動したのは確かだ。瞬時の移動が出来ると言うのは事実だ。

その理由は分かる。

……こっちの武器に己の刃をぶつけないためか！

刃とは、金属で出来ている。特に刀と言う武器は武器の中でも取り分け切れ味を上げている代わりに脆い。

鍛錬されようと硬いものを打てばしなり、更に力を込めれば折れもする。

忠勝のような近接に特化した達人ならば術式なしでも刃で金属を断つことが出来るが、

それは現役当時の酒井でも容易いものではない。だから、少女は刃をぶつけることを回避したのだろう。

来る。

仰け反った姿勢から刀を右下から振り上げるようにして首を狙うように、刈り取るように振るう。

その一撃一撃全てが急所を狙う行動であり、酒井の握る短刀も少女の背によって封じられている。

……上手い。

常にこちらの動きを読み、致命の一撃を恐れずに接近し戦う。おそらく鍛錬の賜物であろう。

だがただの鍛錬だけではなく、おそらく限りなく実戦に近い、死と隣り合わせの状況もあったのだろう。

それを繰り返し経験し、凝縮し、研磨し、そしてそれを育て上げたのだろう。

その一撃を回避しようと酒井は体を動かし回避しようとする。

「ぬ」

足を動かそうとして足が動かない事に気がつく。片目だけを動かし視線を足の方へ移すと、

そこには袴の裾を地面に縫い付けるように刺さる数本の飛針が見える。

……嫌なハイブリッドだなあ。

過去の嫌な思い出が蘇る。歌う剣神。嬉々と戦場へ飛び込む医者。笑いながら追いかける忠勝。

呆れる榊原と井伊。そしてそれを楽しむ自分と嫌な顔して逃げる敵

勢。ああ、実に懐かしい。そして思い出しなくなかった。

しかし状況はまずい。袴の裾に飛針が刺さり回避は出来ない。少女は攻撃の初動に入っている。

それに青年の動きも追いにくい。実質、詰んでるといつても過言ではない。まずい。しかし正面、かつての同僚二人を見ると、

……あのヤロウども、何を握り拳作って観戦してやがる……！

声をつけるとすれば確実に”いけ——！” しか思いつかない顔だ。激しく殴りたい。

後で張り倒してやろうと思いつつ、酒井は動いた。

今、酒井は短刀を抜けない。回避するために足を動かすことも出来ない。

そのため酒井は一瞬で判断を下した。短刀の柄から手を放すと、手放した手を目の前の少女、

その背と刀の間に差し込み左尻へと手を伸ばす。

「ぺたり」

「——！？」

フリーなった手で左尻をホールドして、

「きゃあああああああああああ——！！」

驚きの混じった悲鳴が空を割った。そして同時に、

「人の女に何しやがんだデメエ——！！」

思惑通り虚空の中から青年の姿が見え始める。両手の指の間に飛針を持ちながらもガンを飛ばすように睨み、その前には表示枠が既に出現していた。それを目撃した榊原が真っ先に橋から逃げ出し忠勝が慌てる。

「おい、こんな所でそんな術を——」

三河前に存在する、武蔵から見ての第二の関所がその日を持って長い活躍に終わりを迎えた。

……大きな水柱数本と共に。

●

「——というわけだ。悪い記憶でしかないわな、昔の事なんざ」

と、木造の屋内に野太い男の声が聞こえた。

場所は三河郊外、二十畳程度の、厨房とカウンターを持つ店、酒や軽食を出す食堂だ。

入り口は木のテーブルや椅子が並ぶが、奥の繁盛は畳敷きになっている。この主はその畳敷き、

そこに胡坐をかいて座る一団の中から発していた。

「いいかあ、そういう昔を忘れて心機一転、左遷でいじけていたお前に対して、ようやく十年ぶりに我らが会おうと言い、

昔なじみの場所まで予約とって用意したというのに——」

畳敷きの空間の中、榊原、酒井、そして忠勝が卓を囲み、その輪を少しはなれたところに、

少しうんざりとした顔の九刻とその横でなだめる二代の姿がいる。その内忠勝が酒を飲み干し中型徳利ジョッキを声と同時に卓へと叩きつける。

「酒井、お前、昔と同じように戦闘中に相手のしりを触るか!？」

「あのな、フツ―は再開した偉い御友人様に自分の子供をつっかけさせないだろ？」

二代と九刻だっけ？ 名前。昔に見たことがあるが、強くなったもんだ。

それをマジにけしかけるなんて十年前と同じでダっちゃん頭おかしいだろ？ R P G やると、戦闘ですぐ即死呪文かけたがるタイプだよね」

「やかましい、貴様はいつもそうやって自分勝手だから武蔵の学長に回されたりするのだぞ!？ つまりだなあ――」

「おいおいダっちゃん、昼から酔って話を三ル―プもさせんなよ。つつか学長いいぞ？」

若い女の子と話がしたいとき、女教師と話がしたいとき、若造全員整列させて朝礼やりつつ心の中では超軍隊指揮ごっこやりたいとき、如何だよ学長職。なあ榊原!」

「何故に私に回しますか君は」

その言葉に酒井と忠勝が顔を合わせて榊原へと向くと同時に声をそろえて言う。

「――お前、ホントに昔っから反応が悪いな!」

と、そこでこのノリに若干引き気味の二代が小さく手を挙げた。

「父上、さっきから三ループ分榊原様が虐げられている気がするの
で御座りますが……」

「ああ、二代、お前、十年前の我らのノリとか覚えておらんか。九
刻はその辺どうだ？」

J u d・と軽く二代が返事し九刻がそうだなあ、と声をあげる。

「十年前と言ったら……8歳だっけかなあ、自分で言うのもあれだ
けど結構記憶力良くてノリは覚えてるけど、

正直ついていけるかと言われたら微妙だなあ……武蔵行つたときも
我結構ビクビクしてたし」

「いや、それ嘘だよね？ 今思い出したけど会話に食いついてくる
すごい子供だったよね。

武蔵へ来た時もノリノリでウチの今の総長殴り飛ばしてたよね？」

「ああ。思わず視界に映つたので。変質者が」

「うんうん。——武蔵へ来れば歓迎されるよ？ その容赦のなさ」

どんな場所だよ武蔵……と俯く九刻の代わりに忠勝が声を上げて笑
いながら話を続ける。

「我も十年ぶりに会って、まさかここまでソッコで当時リフレイ
ン状況になるとは思わなかったが……」

そこで二代は再びJud・と言い座礼をして、

「出来れば改めて御紹介を――」

●

剣や武を学ぶ二代としては、父である本多・忠勝を含む松平四天王と呼ばれた四人は特別な存在である。

現在、三河は人払いや新・名古屋城の稼働によって怪異が多発しておりその影響を受けて億の人間が三河からはなれ、

その数を少なくしている。残った重鎮で襲名しているのは父である忠勝や榊原だけであり、ほかの者は辞任したり、

もしくはその名を自動人形に襲名させられている。本多家もその主要なものを松平家別領の江戸に移し、

今生活をしている小さな屋敷を除けばもうこっちには殆ど残っていない。

役職柄、中央部の方には怪異退治でそれなりの回数足を運んで入るし、

2日ほど前に神社から貰ったと言う歪み矯正用の札を貰い使用しているが、それでもやはり中央部に近くなると心配になる。

と言うよりも何時怪異が発生してもいいように内心警戒しっぱなしなのである。

……それなのに、父上達は豪胆で御座る……。

彼ら松平四天王の名声は時がたっても今尚三河郊外では人気が高い。

最近”出張”とやらで井伊・直政を見ないが、それでも忠勝と榊原は未だ三河郊外の顔役として頑張っている。

そして三河の住人から聞ける話の中、そこで聞こえる酒井・忠次とは、

……実質、松平四天王のリーダーとされている御仁。

昔に、会っていたことがある。話したこともある。だが、それは十年以上も前の事で、覚えてるかどうかと言われれば怪しいし、その上、当時はまったく価値がわからなくてその姿からただの猫背のオヤジだとばかり思っていた。

九刻はどうやら覚えていようだが、自分の夫は幼少の頃より成熟していたし今更その程度では驚かない。

だから、自分の中では酒井・忠次の姿だけが二代の中から抜けている。人々から聞く酒井への政治、武道、評価、人格への賞賛、それがどれほどのものなのだろうか。今、目の前に本人がいるのだが、

「あ、俺、酒井・忠次ね。君のお父さんよりマジ偉いから。俺と君のお父さんは地元組みで、

そっちの榊原と、ここにいない井伊は、小四からの編入組み。三十年前だっけ、武蔵アリアダスト教導院が武蔵に出来たとき、こいつら他所から入ろうとしたんだけど入れなかったの」

「あの時期は、アリアダストが開放的であることを示すために異国人の編入を第一としてましたからな。

私や井伊君は神州のために編入を辞退したまでです」

「うわ言い訳上手いねえ。ともあれ学生時代は殿先生、——元信公が学長兼永世生徒会長だったから俺総長で、君のお父さんが特

攻隊長」

特攻隊長なら激しく納得だと言う声がポツリと九刻の口から漏れるのが聞こえたが、
どうやら特攻隊長と呼ばれた本人はそれが聞こえず酒井の方へ反論を飛ばしていた。

「副長って言えよ馬鹿野郎。今でも三河の特例として聖連許可の特殊予備役副長だぞ」

「無視するけどいいよね。んで、井伊が副会長で、この榊原がまた口先だけの男でなあ」

「口先……」

榊原は麦茶を飲んでいたが、二代の視線を受けると慌てて手を振り、

「べ、別にそんな事はなかったのですぞ！書記で、文系としての能がありましたしな！」

そうだったなあ、とオヤジが二人声をそろえて懐かしそうに思い出す。

「確かに文系能力あったよなあ、榊原。学園祭のとき、罰ゲームでお前が小等部の卒業式集に書いた詩、

”明日の某ら”を朗読したの、あれ結構ウケてたしな、——我だけに」

「だよねえ、今となっではいい思い出だね。小等部のときさ、

教導院の四階から下に重りつきの癪癪玉投げてよく遊んだよね？

パァンって音がして、窓から下見たら下校中の榊原が頭から煙上げ
てうつ伏せに倒れてたりしてね。

いや、今でもよく覚えてるわアレ。氣絶した人間って腕とかダラリ
としてるんだよね」

若干異次元に入っているノリとテンションに戸惑い、はあ、と息
を吐き榊原の方へと顔を向けると、

口の端を歪め、額に青筋を立てる榊原の姿が見えるため、何も言わ
ない。これは大人の会話だ。

まだ自分のような子供は関与すべきことではないと。

しかし、その大人の方から関わって来た。

楽焼の日本酒ピッチャーを掲げた酒井が視界に二代と九刻を捉える
と笑みで問うて来る。

「ダ娘君もダっちゃん2世も、そろそろ体育会系オヤジの洗脳解け
る年頃でしょ？ 反抗期でしょ？

うちの教導院来ない？ 君達みたいなの、かなり欲しいなあ俺。本
多・正純もいるよ？ 覚えてる？」

ダ娘……、と二代は口端を歪めてつぶやく。だが、今の言葉には
見知った名前があった。

酒井へと言葉を返す前に横の九刻の表情を盗み見る。その表情の呆
れた感じは変わらない。表面上は変化なく、

ただ酒井の言葉を受けてるように見えるがそれが表面上だけとい
うのが二代には分かった。

僅かだが、本当に僅かだが、口の端が歪んでいることが分かる。そ
れがダっちゃん2世と呼ばれたことに対してか、

もしくは正純へ対しての罪悪感かどうかはわからないが、何時かそ

れを克服できる日が来る事を祈る。

「正純とは武蔵へと見送って以降、あまり顔を合わせておりませぬが、今はなにやら副会長になっているとか……」

「そうそう、だからうち来ない？ トリプル本多は色々面白いと思うんだよね」

「酒井学長……ゲームのユニット集める感覚で勧誘してません……？」

そんな息子と娘の勧誘に移っている酒井に何かを感じるのか、忠勝が持つている徳利を逆さまに振って中にもう一滴もないことを確認しながら酒井の方へ半目を向けると、

「あまりそれを気にするな。あれ、昔から」自分が他人から好かれている”という勘違いをしてる可哀想なやつでな。

小等部の時に”友達何人出来ましたか”って聞かれれば迷い無く”全員”で答えるタイプだ。

榊原が”無”と書いてるのと超矛盾するんだが、しょうがないから我らが防波堤になってやってるのだ」

話の後半から榊原が手を左右へと振って見せている。

……大変だったので御座ろうな……。

そう思うが、今現在自分が酒井に問われている事実は変わらない。

……武蔵に来い、か。

極東唯一の領土。移動によって極東全域を回る航空艦だ。

酒井が自分らを誘うということはフォローは万全で迎え入れの準備は整っているということだ。
だが、答えはすぐに出せない。

「——少し待ってろ、酒井」

厨房に新たな焼き鳥をダースと徳利の中身を自動人形へと告げながら言う。

「それに今年は三河は交流不許可だ。武蔵だけとではなく他国ともな。去年までなら話が違っただろうが、
今年はそうも行かない。今年は行かせようとしても出来ん」

だからその代わりに、と。

「お前のとこの武蔵、三河からだけは露払いとして警護隊の先行艦がいつも出るであろう？」

——今回の先行艦は二代が管理する。そのサポートに九刻もな。
今は二代が総隊長、九刻が副長で管理してる」

「へえ、極東で防衛的対外闘争が聖連から許されている三河の警護隊のツートップか。

歴史再現に制限されて銃とかまだほとんど持てないけど、接近戦や遭遇戦なら結構いけそうだね」

「安芸まで行って戻る際だが、そこからは好きにやれと言っておい
た」

「好きにとは——」

その問いに忠勝が答える。

「全部自分で決めろって事だ。だから、そのときに誘え。こいつらが武蔵やお前を必要だと思ったら、そっちに加わるだろう」

父が言った。

「これから先、世が動く。——子供ぐらいは、好きに動かしてやりてえもんだ」

いいよなあ、と小さく呟くと酒井は再びピッチャーを持ち上げ自動人形が運んできた焼き鳥を口へと運ぶ。

その間、二代も自分の事を考え始める。本田・忠勝の娘として育てられ、“東国無双”の後継者として期待され、三河でひたすら武を鍛え上げてきた。そして今日、どれだけ届くのかと試す機会が来た。

九刻には前もってサポートだけに徹すように頼み今の自分が何処まで通用するか予め父から相手のクセや動きを聞いてから挑んだ。

その結果は明らかだった。

既に西の大友では“西国無双”の名を襲名した立花・宗茂は各地を転戦し、

様々な敵と戦い戦果を挙げていると聞く。未だ三河から出たことのない自分はどれくらい通じるのか、

それは本当に世界という場で通用するのかどうか、不安になってくる。

そんな時に酒井が声を上げる。

「――結局井伊が来ないようだが、どうしたんだ？」

●

「井伊君は――」

「井伊は、所用で出ていてな」

酒井は見た。忠勝の言葉に二代が顔を上げると、九刻の動きに変化がないのが。

彼女の顔はそうなのかと言いたげな表情をしているのに対して九刻の表情は終始変わらない。

「……極秘か？」

Jud、と、忠勝が言ったとき、そのとき遠く、店の外から足音が響いてきた。

九刻が入ってきた足音の主を見て姿勢をただし、二代が足音の主を見、

「――鹿角様」

「Jud、」

答えが帰つてき、座敷の入り口で足を止めた侍女服姿の自動人形が現れたのを忠勝と酒井が見る。

耳の上から生える黒の角を見た酒井が手から中型徳利を思わず落と

し、

「げえ、鹿角——！」

「Jud——下らない。どなたかと思えば酒井様ですか」

こちらへと顔を向け、半眼の視線を向ける。

「左遷からのこのこと、こんなところにやってきて若い未来ある少女に対してサービスもせずに酒飲みとは、
大した大人だと判断します。二代様、早くお屋敷にお戻りを」

「ちよい待て、二代が未来あるのは確かだけど——なんか忘れてない?！」

「……?どうしたのですか九刻様」

「いやいやいやいや、我に将来がないと申すか」

「率直に申し上げまして、忠勝様に似てきた時点で終わりかと」

「マジかよ……」

「おい、遠まわしに我を虐めるなそこ」

「……ダっちゃん、十年前と同じで相変わらずこの女、ダっちゃんのこと?」

「女房の味も剣筋も再現できるしなあ」

その言葉を言つて忠勝が軽く苦笑する。酒井も十年前の鹿角の様子を知っているので、

この十年、忠勝がどんな生活を送ってきたのかも容易にわかる。そして九刻の扱いからしても、たぶん似たような扱いを受けているのだろう。

子供達は養子と言えど、立派な家族としてできているな、と考える。

そこで、鹿角が一礼して告げる。

「そろそろ二代様と九刻様の船の準備をお願いします」

J u d・J u d・とめんどくさそうに忠勝が立ち上がり、その動きに続いて二代と九刻が一礼してから立ち上がる。船の準備と言つことはこれから武蔵のほうへ、

あの全壊してしまった橋の向こうの関所を通つて船の様子を見に行くのだろう。

「——では、我はここまでだ。この先、しっかりやれよ」

そう言つて出てゆく武者の力を持った四人。榊原と共にその背中を見送りながら横に立つ榊原へと問う。

「榊原……実はダッチャン、食い逃げ？」

酒井の一日は、まだ幕を上げたばかりだった。

第十話 松平四天王（後書き）

そんなわけで武蔵のダメオヤジなのにかっこいい中年が登場した回でしたー。

酒井・忠次は何もしてないようでもなんも出来なかっただけなのかなあ、と。

あとケツ触ったりするのやめろ。武蔵さんに殺されてもしらんぞ……！

さて、原作がついに始まった、と言う感じですね。あれ、前回も言っただけ。

まあ、自動人形に色々させているダメ人間はここ放置しておきましょう。

我らの主人公が今回やっと初バトルでしたよ。

……え、期待してたようなものではない？仕方がないですよ。学長殺ると普通に犯罪です。

忠勝と榊原が殺す気で着けたようなキモしますがそれを気にしてはいけませんええ、気にしてはいけませんとも。

あの世界は外道ばかりなのですから。

そして軽く出てきましたが、某剣し……音痴より教わった第一の技が出てきました。

そしてついでに解剖狂いの先生のお話もちよいと出てきましたねー。まあ、どっちも本来の戦い方ではなくその一部なんですけどね。やっぱり、

臨時生徒総会のあとじゃないと本気のバトルは出来ないですねえ……照り男アッパーやりたい。

「余はこれで十分だ」とか一度でいいから言わせたい。

そして結局、井伊さん一度も出てこなかったですね。井伊エ……。

そんなわけで僕らのガル茂の話がチラッと出たり、正純の名前が出てきたりと、

松平三天王”全員”が揃った激しくカオスな回でした。お前らいいテンションしてるよなあ！

さて、次回から安芸までの護衛艦の整備とか様子見とか武蔵と一緒にっ！

な感じでお送りします予定で御座るけど、やっぱり極東勢元気だなあ……。

それではまた次回。しーゆー。

第十一話 世界の変わり目（前書き）

覚えてらたいーのか、
覚えてない方が安心か、
一体どっちなんでしょうね
配点（虫の知らせ）

第十一話 世界の変わり目

段々とだが、午後の空の色が夕の色へと傾き始めた。

三河の陸港は全部で二つ存在する。一つは武蔵専用の港である。武蔵が三河で改修を受けたりしたその影響上、

それなりの大きさの港であり、西側東側、両側から行くことの出来る設計となっている。

そしてその武蔵の停泊する港とは別に西側には一般用の陸港が存在する。そちらの方にも三河警護隊の先行艦のほかに、

船を所有する商人の船が停泊してたり、今では三征西班牙の護衛艦と”栄光丸”が停泊をしようと接近していた。

その陸港の中、木造艦の甲板の上で全体の動きを表示枠から指示出しながら動き回る姿がある。

既にある程度の準備は完了しているのか木造艦の内部、それぞれの位置に人員がついている。

「機関部、調子はどうだ」

表示枠の中にまだ少しだけ幼さが顔に残る少年が現れる。艦の機関部で作業しているのが頬についた汚れから分かる。

『Jud・Jud・良好ですよー。機嫌が良すぎて今から発進させたいくらいですよ』

「そりゃ重畳重畳」

『……でも心配すぎなんじゃないっすか？ 副長』

「ああ?! テメエ、二代の晴れ舞台に何かあってもいいのかよ! ? 名古屋城のてっぺんから突き落とすぞ?

言っておくけど我そこらへん結構しつかりしてるからな? やるついたら絶対やるからな?」

『副長基本有言実行つすよねー。——総隊長や精霊さんのグッズ作って、

布教しようとしたらグッズ元の本人達にボコられてつるしあげくらったつすよね?』

ああ、アレは死ぬかと思った。流石に中央部の怪異が多発するエリアで縛り上げて放置はやばかった。

一睡もせずに足だけで戦いながらなんとか朝まで向かえて、そこから必死に逃げたっけ……。

いい思い出だ、と思いつつもやっぱりやりすぎなのかも知れないと思う。

だが、

「うん。愛だから仕方がない」

『それが許されるのは自分に言い訳するときだけつすよ』

「うつせえ」

捨て台詞にも似た言葉を言いながら表示枠を消す。

これで艦自体に問題がないことは確認できた。人員も既に各種に配置されている。二代も艦橋にいる、問題はないはずだ。

だが何故か不安が胸から消えない。何か”致命的な何か”を見逃し

ている様な気がする。

昨日はそれを忘れて進もうとも考えたが……武蔵の露払いするその時間が刻一刻と近づいたたびに嫌な予感が増える。

そのため、先ほどから何度も何度も艦の状況を確認している。

「エセル。本当に問題はないんだよね？」

「Jud・既に6度目の質問です。確認される側もはや前回聞かれたことを忘れる事を暗黙の了解としてるそうです」

「適応力高いなあ……」

肩の上で、小さく、省エネモードで補佐してくれる自分の相棒に感謝しながらも思案をやめない。

もはや点検もチェックも完全に終わり、後は自分が艦の中に入るだけで、それだけで終わりだ。

それで艦は動き始め、警護隊の今年一番の役目は終わり、二代はある程度評価されるだろう。

そして、そこに自分もいるのだろう。

……。

無言で腕を組み、考える。艦を何度チェックしてもまったく問題なかった。つまり、予感の不安はこれではなく、

また別の場所に存在しているということだ。ならば、それは、何処なのだろうと思考する。

まず考えられるのは……武蔵だ。だが武蔵とは艦が出るときと帰るときにすれ違う程度だ。

いきなり襲ってくるようなこともするはずないし、武蔵に危険性があるとは思えない。

ならば、教皇総長か？　もしくは三征西班牙か？　いや、あの二つは偶然ここへ来たのだ。ただ武蔵との来航時期と重なったただけだ。

……来航時期が重なる？　何故？

考え直してみる。何故、教皇総長は三河へ来たのか。それは元々新たな大罪武装の要求のためだ。

そして大罪武装の譲渡と言う経緯があったからこそ、三河は地脈炉の使用を許可されている。

そして地脈炉の使用は現在禁じられており、使用できるのは三河ぐらいだ。

……全てで三河が繋がっている。もし、もしこの裏で全て三河が何らかの糸を引いてるとしたら、面倒だし勘違いかもしれない。だけど殿先生の動きもある。だから、これはどうするべきか……。

そう思い視線を夕日を浴び赤く染まる新・名古屋城へと向ける。その姿が何も答えないのは分かっている。授業で何度も進入しているがそれでも上層へはいけたことはない。

行こうとしてみたこともあったが、その度に何らかの妨害があつて決して昇りきれたことはない。

元信公からその後釘も刺されたために断念したが……。

「——行けるか？」

先行艦のブリッジの中から、甲板に立つ男の姿が見える。

この三河にいる人間のならば誰しも知っている。本多・忠勝の養子で4歳の頃引き取られた青年、本多・九刻だ。

本来なら最初に”大十字”という名がつくのではあるが、三河で働いてある時は大抵略され、

一番有名で親しみのある本多の姓で呼ばれている方が圧倒的に多い。警護隊に参加してからすぐに副長へと就任し、

主に書類面や怪異退治で大きな活躍をしている彼ではあるが、

それが現在両腕を組んで何かを真剣に考えている。

脳筋一族で有名な武の本田家ではあるが、その中でも九刻という青年は珍しく頭を使う方だ。

決して馬鹿にしているわけではないが、考えなしで特攻した拳句その場で判断するような連中なので、

心臓には悪いけど何故か丸く収まって心労が耐えない。その分考えて行動してくれる九刻に関しては、

安心して動ける分……やっぱり性格に難があつた。

もう既に父である榊原・康政とは”一生本多の一族には振り回される運命”だ、と、諦めている。

父の現役時代の話聞いたが、自分もそんな感じにヒドイ目に遭うのか。段々と鬱になって行きそうだが、

それを堪えて虚空を指で叩き表示枠を出現させる。表示枠の表面をなぞるように動かし、

その表示先を九刻へと設定する。即座に九刻の思案顔が表示枠に移される。先ほどまでは艦の状況をウザイほどにチェックしていたが、今度は何に対して心配かが気になるところだが、とりあえずは自分の補佐としての仕事を進めようと思う。

「おい、九刻」

表示枠の向こう、映し出された灰色の髪的青年がこちらへと向く。その顔立ちは極東人のそれで、本人曰く”母親に似なくて良かった。騎士殿と同じ悲劇が待ってた。生まれてるかどうかわらんが”など言ってたが、半分狂人の言動だからそれをスルーするとして、こっちへ注意を引けたのか今までの思案顔は消えうせる。

『あ、何だ。康弘かよ……』

「おい、マテコラ。人の顔を見てあからさまにがっかりするってなんだよ」

『いや、だって野郎の顔を見てもつまらんし。なるべく二代がエセルの顔だけみたい』

「お前の嫁とペットへの愛は変わらないなあ……」

『ペット……愛でる……マスターに愛でられる……マスター、そこは……！』

「そのペットはトリップするんじゃない。そろそろ番屋に突き出すぞ」

狂信的忠義と愛を九刻へと注ぐあの精霊……走狗の役割も果たすアレはもはやペットに近いと思い、自分中ではもう”ペット”か”ペットさん”と場合で分けて呼ぶことにしている。そしてその度に恍惚の笑みを浮かべたり、

何かしらトリップして満足するたちが悪い。昔は九刻以外には喋らないクール系ロリで近所には有名だったが、何時からこうなったのだろう……。

そんな事を言っているうちに表示枠に入り込んでいたペットを押しつけて九刻が再び映る。

『丁度いい、我もちよいお前に用があつたんだよ』

「あ？ 用？」

『ああ、我ちよい三河に行つて来るわ』

「……はあ！？」

『そんじゃ、我は先行艦に乗らないけど、俺の代わりに色々頼むぜ。帰つてこなかったらお前が副長だ』

「……っ！！ 九刻、お前何をする気だ！！ おい！」

だがその返事が届く前に表示枠が消える。急いで表示枠を何度も叩く。

「九刻！ おい、九刻！」

何度も表示枠を叩くが九刻の姿は現れない。その代わりに周りの警護隊員がその様子を見て、

榊原の様子に違和感と不安を覚える。また数名はまた副長か、等と同情の視線が刺さってくる。

地味にその同情の視線が痛いから即座に止めさせたい。と言つかや

める。

「……九刻のアホは何時もの病気だ。気にせず何時も通りにしてくれ」

「Jud・!」

一斉に帰ってくる声だが、これだけの説明で澄むことを考えると九刻の人望は本当に大丈夫か、と、疑いたくなってくるか心配になってくると、でもそれを考える暇がなく、

「待たせたで御座るな」

総隊長……本多・二代がブリッジにやってくる。

頼まれたという事はつまり、”言い訳に関することも全て頼んだ”、と言うことなのだろう。

二代がブリッジに入り込み周りを見渡し目当ての人物がいないことを確認する。

その言い訳が自分の責任になってると言うことに若干呆れと諦めている自分に対してもう一度呆れる。

……何をやってるかは知らないけど……帰ってくるよな……？

何時になく真剣だった九刻の表情は、いやな事を思い出させる。

あんなふうにまじめな顔したときは大体厄介なことばかりだ。普段で行けば大きな怪異とかの発生だが、

九刻は言ったのだ。三河へと戻るとではなく”行つて来る”、と。

それはつまり家へ帰ったりするのではなく、滅多にいかな場所への移動を仄めかす言葉だ。

その意図を察してくれるためにその言葉を使ったかどうかはわからないが、とりあえずは準備を進めなくてはならない。

「総隊長」

「榊原、九刻は知らぬで御座るか？」

「あのアホなら腹が痛くなったからたぶんトイレにでも行ったのではないかと」

「そう、で御座るか」

やはり、いつも一緒にいるのか、傍にいないのは不安になるのだろうか？

そう思いつつもブリッジから外を覗く。夕焼け色の空は段々とそのとばりを下ろし始めている。

遠くの空は既に暗くなり始めており、夜の闇が遠くに見える。それがここまで到達するのにもそう時間は要らないだろう。

安芸まで露払いに行くことを考えれば三河よりも暗くなるのは少し遅いかもしれないが、それも僅差だ。

やれやれ、今日終わったら何か奢らせようと考えつつも配置につく。

「それではこれより先行艦を安芸まで発進させ、武蔵の露払いを始めるで御座る」

発進の声を聞きつつ、友人の無事を祈る。

「エセル、今何時だ？」

「午後7時少し過ぎです」

「まだ、時間に余裕はある、……か？」

結局は、勘を信じて降りてしまった。これは後で皆に謝らなければいけない、と思う反面、ここまでしたのなら何らかの成果を上げねばならないな、と思う。これで何もなかったのなら本当にただのマヌケで終わってしまう。いや、それが一番いいのかもしれない。とりあえず、まずやるべき事は……はて。

西側陸港から見て三河郊外まではそれなりの距離がある。二箇所を繋ぐ街道が存在するが、その途中で一旦立ち止まり、腕を組む。横を抜けてゆく車や人が時折視線を向けてくるが、それを意に返さず邪魔にならぬように端へと身を移す。

「さて、どうしたものか」

よくよく考えてみれば真っ直ぐ新・名古屋城へ行ったところで警備に掴まったり自動人形に掴まるのがオチだ。

それにあそこには今、元信公とその配下の襲名した自動人形が揃っている。

何を準備しているかは分からないが、それでも嫌な予感に変わりはない。

だから、今真っ直ぐ新・名古屋城へと行くのは下作だ。音痴から習

った”歩方”はあるし、

それ以外にも忍術めいた技術はそれなりに習得しているが、あそここの警備は異常だ。

前K・P・A・Italiaかどつかの国の特殊部隊が入り込んだ結果オタクになって日本橋で見つかったりと、

意味が分からない防衛機構まで備えているから自分が侵入できるか、と言う問題さえ出てくる。

「ち、ド・マリニーを制御できれば問題ないのだが……」

——あれの制御は他のと比べて難しい部分があります。将来的には可能だと思いますが……。

「いや、使えないのならそれでいいんだ。すまないエセル」

——いえ、我が身はマスターのために。

使えないものの事は気にしても仕方がない……とは言え、やはり使えない事は残念だ。

必要拝気云々を忘れればド・マリニーを使用できれば時間停止しその間に突き止めればいいのだろう。

それだけの事を出来る武装を使用できないことを思い、やはりマスター・オブ・ネクロロリコンにはまだまだ勝てないと思う。

あのペド親父は今もどこかで戦っているのだろうか……。

とりあえずは、暗くなってから動いた方が何かと動きやすいだろう。

とりあえずは八時だ。それを目安に動き出してみよう。

——決定しましたかマスター。

頭の中に響く声でエセルドレーダが聞いてくる。軽く頷いて了承を示す。

「まずは三河郊外へ行くぞ」

あそこからは新・名古屋城の様子が見える上に榊原の別邸があるはずだ。

こっちは生活する事を基準とした中央部近くとは違い仕事用の書斎とかが置いてあるはずだ。

あのあと軽食屋に榊原と酒井を一緒においできて食い逃げしてしまったが、そちらへと来てるかもしれない。

段々と闇が広がってくる三河郊外へと続く街道を歩く。

本格的に空が暗くなってきた影響か、歩いてくる人の数が大分少なくなってきた気がする。

いや、元々今年は積み込みのみで武蔵川から荷物を降ろすことはなかった。そのため交通量が昨年の半分なのだ。

去年であれば今も最終チェックなどで通る人もいるかもしれないが今年はそれがない。

人気のない道に一抹の寂しさを感じながらも歩を進める。

「……少し急ぐか」

歩みを少し速める。両側に木々が乱立する街道は火が遠のけば必然的に木々が作り出す陰により、

他の所よりも一層暗く見えてくる。だが街道の奥、三河郊外近くの第二の関所が街道の出口辺りを照らすおかげで、

視界には困らない。夜になれば街道の中央辺りは完全に闇に包まれるだろうが、その場合は表示枠を発光設定にかけて灯代わりにすれ

ばいい。

下らない事を考えつつもその体は着々と関所へと近づいてゆく。だが関所へと近づいてゆくたびに少しずつ違和感を覚える。

……いない？

この時間帯は関所および山岳の見張り小屋では三征西班牙の生徒が夜番をしているはずだ。

一応彼らのスケジュールを把握するのも仕事の一环で覚えている。だが、今目に見える関所の姿に三征西班牙の生徒の姿は見えない。三河がどんな土地で、今日がどんな日を知っているのかと問えばしつかりと分かっているはずだ。サボリはありえない……つまりは、一時的に離れていることが一番可能性としては濃厚だ。それならばいい。こつちも緊急事態だ。検問とか一々面倒だ。

最初の関所を通るときも色々質問があつて時間を食ってしまった。そのことを考えるとやはり、誰もいないのが好ましい。

そう思い、また数歩関所へ近づき、確認する。

……倒れている！？

関所と距離が近づきやつと関所内部の様子が見えてきたとき、関所の陰に隠れるように人陰を見つける。

その人影には覚えがある。三征西班牙の制服でわかるように三河に駐屯している、課外授業で夜番に来ている生徒だ。

歩みを完全な走りに変え、速度を上げて一気に関所までの距離をつめる。既に視界に入っていた関所までの道は遠くなく、走れば簡単に到着できるほどの距離であった。関所へと到着するとまず最初に見つけた生徒まで行き、首筋に指を当てる。

……脈はある。

仰向けに倒れている姿の臉を開けさせ、瞳を確認する。完全に気絶している。首裏に打撃の痕がある。

生徒の横にしゃがみこんだままその様子を確認し、思考をめぐらす。

「背後からの奇襲で一撃か」

争いの形跡がないことを見るとその線が一番濃厚に見えるが……
軽い違和感を覚える。

生徒は基本的に複数いることでも他の生徒が見つからないことでも争いの形跡がないことでもない。

……背後からの一撃なのに仰向けに寝かせられていること……！！

背後からの気配を感じると同時に背後へと向けて両手足で地面を押し、体を飛ばした。

●

九刻のとつた行動は簡単であつた。酒井・忠次と同じく、背後からの脅威に対して自ら飛び込んだ。

背後へと飛ぶと同時に検分した知識を頭の中で整理し、高速で思考をめぐらす。

背後からの攻撃、首裏の打撃痕、仰向けに寝かされていること、そして――

……この感触は……。

敵と接触した背中、柔らかい感触がしてくる。胸だ。つまりは女性だ。ごめんなさい二代決して浮気ではありません。

そう、これは戦闘中の不慮の事故なんだ。マジでごめんなさい。だからエセルも睨まないで。ステルス解除しないでこっちを見つめないで。

だが、このおかげで相手が完全に何か分かった。相手が思考し、動きを開始する前に右足を後ろへと伸ばし、

そのつま先で相手のエプロンドレスのスカート部分を引っ掛ける。

「！」

「確かにそりゃあ侍女の嗜みだが、戦いにくい服装の中ではピカイチだぞ……！」

背後へと飛んで行く体の動きのベクトルを変えてゆく。真っ直ぐ後ろへと飛んでゆく体を後ろへと倒して行く。

段々と下へと向けて傾いてゆく体に対して襲撃者の体が急に下へと落ちる。その動きで引っ掛けたつま先がはずれるが、それを認識しつつ体をバク転させる動きを続ける。

地面へと背中から到達した姿をバク転の動きで体が下を向く時に襲撃者の姿を確認する。

「水野！」

「Jud。」

水色の髪をした、自動人形だった。バク転の動きが完了すると同時に関所から1歩離れるようにバックステップをとる。

襲撃してきた自動人形——水野も復帰し、重力制御を用い自身の

服装についた埃を落としている。

九刻は知っている、この襲撃者を。日常的に見ているからだ。三河に配備されている自動人形の1体、それも新・名古屋城に配備されている者だ。

それがこんな所にいるということは、

「予感の中か！」

何故も、どうしても、どうやってもと言うのが問題ではない。自動人形とは主の命に従い動く者。

新・名古屋城にいたはずの自動人形が外れにいる三征西班牙の生徒を制圧したということは、

それはつまり駐屯している三征西班牙の人間に知られても見られても困ることをやっているということだ。

そして、そんな事を実行できる、自動人形に命令を下せる人間はこの三河に一人しか存在しない。

「水野……！ 殿先生か！？」

「Jud・九刻様はこういう異変などに関しては人一倍敏感なので帰ってくる可能性もある程度考慮されていました。それ故」

水野の横、地面が震えると同時に土や石、砂利が重力の法則を無視し浮かび上がる。

塊として浮かび上がったそれではあるが、水野の操作により細かく寸断されやがて一つ一つ小さな形を生み出す。

数秒後、そこに完成されたのは水野の周りに浮かぶ圧縮されて作られた大量の土のナイフであった。

「少々怪我をされても致し方ないと判断します。忠勝様もそう思わ

れるでしょう」

「やはり親父も一枚噛んでるか……！」

「参ります」

十数のナイフを周囲に浮かばせながら水野が迫る。その動きを察知した九刻も袖を軽く振るい両手に四本ずつ飛針を取り出し指に挟むと、

一歩目を踏み出すと同時にその存在をずらした。

●

自動人形・水野へと向けて駆けながら九刻は思考した。

自動人形とは神代の時代より人の友として存在し続け、主を設けることで動くことが出来る、

人の形をした機械だ。遠い、遠い昔。今は既に神代と呼ばれて世界の命運をかけて戦ったものがいた時代、

あの時代ではまだ自動人形は概念がなければまともに動けない存在で、バリエーションも少なかったが、

こうやって自由に動き回るのを見ると過去を知っているものとしてはそれなりの感慨がある。

それが戦闘に関係するとはまた別で。

自動人形の一番の特徴とは重力の操作能力だ。

主と定めた人間に対してのみ直接的な干渉を許されているが、他人に対しては出来ない。

だがその代わりに無機物に対しては行使可能であり、目の前の水野のように重力を操作して武器を作ったり、先ほどの動きのように自身に対しての急激な落下による攻撃阻害も可能である。

それに加えて機械であるために”再現”で武術の動きなどのある程度の技能も再現できる。

厄介な相手だと思うと同時に、やりなれた相手だと思う。

三河に所属する自動人形は聖連の支持の元大半が武装解除されており鍛錬などで模擬戦をする相手でも、武装できるのは鍛錬の最中のみでそれ以外は武器に触れていることはない。自分も二代も鍛錬の相手に昔は良く戦ったものだと思う。特に自分は二代以上に対戦相手として世話になっている。戦うたびに完全に破壊しているので申し訳なくも思う。だから、今回も何時もと変わらない。模擬戦という名の”死合”をさせられてきた自分にとって、この一戦も変わらない。

酒井と敵対した時よりも、更に深く自身の存在をずらす。自身の存在を完全に周囲と隔絶させ、知覚出来ないように動かす。水野との距離は約3歩。最初の踏み込み2歩まで距離を縮め、両指に挟まれた飛針で殴りつけるようにナイフをかくぐり、猛攻を加える

攻撃のための踏み込みで残った距離は一步。腕を伸ばしきればそれで届く。この一撃で倒し、急ごう、そう思い、

攻撃は防がれた。

「っ！」

一瞬の動揺から体が元の状態まで引き戻される。その隙を水野が逃すはずもなくオーケストラの奏者の様に手を振るい、自らの周りに浮かぶ無数のナイフを操作する。接近するナイフの雨に対し手に持つっている飛針を弾くように飛ばし一番近いナイフから迎撃しつつ、

横を通り抜けるようにしてすれ違い新たな飛針を袖の中から取り出す。そのまま関所を突き抜けながら反転し、小さく忘れてたと呟く、

「エセル。索敵を始める。近くにもう1体隠れている」

——Jud.

「忘れてた……お前ら確か2体1セットだったな？」

「Jud・九刻様対策でもあります」

「面倒な……」

——関所、門の上に1体隠れてます！

上出来だ！

ネタの中身は簡単、1体が前衛で戦闘をし、もう片方が少し離れた場所で索敵を行い姿や行動を監視、

自動人形の共通意識を使い瞬時に情報を交換しながら相手に対処をする。つまりは今この瞬間、

自分が水野と戦闘を行っていることは他の自動人形に通達されている。時間をかければ増援を呼んでしまいかもしれない。

思考するよりも早く体が動き出す。視界に留めるのあくまでも1体、水野だけである。その方向へと向けて飛針を指の動きのみで投擲す

る。

「視線に、刃を」

「げえ、鹿角様の動きい!？」

水野が体を後ろへと、距離をとるようにバックステップをとりながら指の動きでナイフをこちらへと飛ばしてくる。

だが、九刻の動きは揺るがない。ナイフとぶつけ合うように指で飛針を投擲しつつ、真っ直ぐに突き進む。

ナイフと中った飛針は弾かれ、宙を舞うが、その動きがナイフの動きを一瞬だけ阻害し九刻への到達を防ぐ。

弾かれた飛針が地面へと突き刺さり、九刻の体が関所内部の中間点を越えた辺りで水野の背後から新たな得物が現れる。

巨大な岩塊を固めただけの、強大な砲弾である。

「贈り物です」

九刻の周りは既にナイフで囲まれており、進めるのは正面、水野と自分の間にある関所の内側だけである。

水野自身は関所の一步外、背後からの砲弾を正面へと持って来、それを放ちつつナイフの動きを進める。

「これにて、終了です!」

砲弾が放たれる。それを見、九刻が決断した。

「熱田神社創作術式1号解放」

足、踵の裏に神道の明るい赤い表示枠ではなく、異端の術の、黒と赤のサインフレームが現れる。

「——1号、ティマイオス起動……！」

瞬間、地面が炸裂し砲弾が関所を抜けていった。

●

……いいえ、まだです……！

まだ、倒せてないと判断する。その理由へ明白である。

——同体反応1、後ろです！

自動人形が共有する共通意識の中で索敵係の自動人形がまだ相手の存在が立っている事を伝えてくる。

その上、さっきの術は知っている。九刻が熱田神社へと修行で通っている間に作成した創作術式の一つだ。

神道の”楔”の概念と、異端の術を組み合わせて作った高速移動術式だ。二代のように徐々に加速するタイプではなく、

瞬間的な爆発的なエネルギーを生み出し短い距離を素早く動き回るための術だ。

「指運に、刃を」

振り返りつつ指を動かす。背後に対してしている脅威に対して指の動きで重力を操作し更に得物を増やす。

先ほどまで使っていた得物を廃棄し、新たなものを生み出す方が早いとの判断だ。

そのための初動に入ろうとし、体を動かそうとするが――

「――！？」

「動かねえだろ？」

その発言どおり、体一切動かない。力をこめても体が動くことを拒否する。

すかさず全身にチェックのシステムを通すが、そこからの返事は異常なしの一言のみ。

――影です！

共通意識より告げられた言葉に従い視線だけを影に移すと、そこに影に深々と刺さっている飛針があった。

その姿を見て、ある一つの技能を思い出す。

「影縫い、ですね」

「Jud・本来は忍者の技能だけどな。先生が針で使える技能を教えてくる際に、

忍術医術関係なく針で叩ける技術は全て剣神と一緒に教え込まれたもんだよ。

おかげで覚えてる技能を見てみれば正面きって戦うよりは奇襲や暗殺の方が得意になっちまったよ。まあ、我の本質は違っただがな」

そのあとこれ使って実験台確保してたんだよなあ、先生などと不穏な呟きが聞こえるが、

こちらの武者はあの狂人とは違ってみた相手をその場で解剖し始めるような性癖はないから安心できる。

故に、すぐさま共通意識を通して索敵係の自動人形へと繋げる。すぐに撤退し、増援を呼ぶことを。

……？

だが、返事がない。困惑している様子が分かるのか九刻は笑みを浮かべていた。

「分からないって表情だな？別にわかる必要はない、よな？

さて、喋ってくれそうもないし……ちいと手荒な真似をするぜ——
—エセルドレーダ」

「Jud・マスター」

背後から走狗の機能を併せ持った精霊が近づくのを感じる。

ひたりと、背中に手を当てられるのを感じる。そして理解する、連絡のつくはずの仲間が何故応答がないのかを。

「ハッキング……！」

「マスターの役に立てることを光栄に思え」

そこで、意識が途絶える。

九刻は、駆けていた。

関所にいた自動人形の人格プログラムが壊れないように配慮して情報を抜き出した結果、その中身は正気を疑うような情報がはいっていた。

——三河の消失。

エセルに調査をさせた結果、地脈炉の暴走は既に始まっている……その様子は確認できる、とのことだった。

その結果、若干痛む右足を引っ張りながらも全速力で三河郊外の街中を駆ける。

父、本多・忠勝はこの事に一枚噛んでいるのは分かった——ならば、榊原はどうだ、という判断だ。

あの男はいつも尻拭いばかりだが、それでもこんな馬鹿なことに加担するような男ではなかったはずだ。

「エセル、今何時だ!？」

「Jud・午後8時1分過ぎです」

「ほぼ8時か……」

時刻が八時を超えたのを確認しながら、駆ける速度を更にあげる。駆ける足の裏から、地脈炉の暴走による振動が伝わる。

中央部はまず近づけるとは思えない。青子には自動人形が足止めのために大量に要るだろう。

なぎ払って進めるだろうが、それで止めたとしても自分でどうにかできるとは……思わない。

何より、まだ自分の育ての親に勝てるような気はしない。

住居の多い三河郊外の住宅街の角を曲がり、屋敷を視界に入れる。あと少いで榊原に話を聞けるかもしれない、そう思い冷静さを取り戻そうとし――

屋敷の前にいる存在を見て、怒りを更に燃やす。

屋敷の前にいる三人の姿が見えてくる。本多・忠勝、鹿角、そして酒井・忠次だ。

近づくにつれその会話が聞こえてくる。既に忠勝は去ろうと酒井に背を向けている。

「我が為すことが、末世を救うことの一步目をちゃんと果たしていたならば、そのとき褒めてくれ」

「ダっちゃん！ 子供、どーすんだよ！ 他にもいろいろ、あるだろうよ！？それが――」

「親父！――！」

酒井の言葉を塞ぐ様に咆えるように声を上げる。忠勝と鹿角が去って行く動きを止めてこちらを見る。

ああ、やっぱりかという表情を浮かべ、鹿角も悪戯好きの子供を見るような、呆れた表情を浮かべる。

「おい、何ここまで来てんだよ」

「んな問題じゃねえ、はっ倒してでも話を聞かせてもらっぞ――！」

「本多・九刻！？」

酒井が突如の九刻の登場に驚きを顔に浮かべる。

だが次に声を上げるのは怒りで冷静さを失った九刻でも友を止めようとする酒井でもなく、

「——そんな事をしていいのか、九刻？」

次の瞬間、地脈炉による振動が揺れへと変貌した。

同時に、まるで空が支えを失ったかのように何もかもが一度下へ押し押され、

「……！？」

三河が割れた。

地脈炉の暴走が地殻と空間を走る地脈に干渉し、血管が破裂するような現象が起きる。

九刻と酒井がバランスを崩して手を地面につけた隙に鹿角と忠勝が去って行く。

「親父！」

「……二代を頼んだぜ」

音が砕け、大気が落ち、大地がもげて。

三河の崩壊が始まる。

第十一話 世界の変わり目（後書き）

そんなわけで若干まきで進んでいるようなきもするけど、境界線上の写本保持者、略して境保持？の三河消滅まで進みました。ここら辺はまだ世界のプロローグっぱいんですよねえ。悲しいことに。

本格的に活躍するのは武蔵が戦う決意をしてからですかね。

そんなわけで、三河崩壊序曲です。

たぶん、酒井と合流してしまったので次の朝までキンクリだと思います。

あれえ……どう考えても教皇総長と会っちゃうなあ……まあいいか。

でも、まあ、九刻さんの術一つだけ解放っすねえ。

デモンベイン本体が使っていたティマイオスですね。使い方と原理は一緒、

ただし人間でも使えるように弱体化か劣化版だと思ってくれば大丈夫です。

地上戦での足はこれが九刻さんの基本です。

あと某解剖ドクターが西博士に負けない変態になってきたんだがどーするんだこれ。

もうこの路線でもいいか。カワカミン感染者の変態性は今に始まったことではないし。

さてさて、九刻さんギリギリで三河消滅目撃ですけど、

やっぱり蚊帳の外感是否めないなあ。でも、まあ、早く武蔵と合流させて、

嫁とイチヤイチャさせたり役職につけたりガル茂をガル茂って呼び

たいです。

あと三河終わらせてアナザーブラッドとの対決もさせたい。

さて、尺ももうそろそろないので、ここら辺ということので。次回はたぶん番屋の酒井様と一緒ににおおくりするますよー！。

第十二話 固執と消失（前書き）

study

●三河と武蔵の現状●

トリー「姉ちゃん姉ちゃん！初登場だよ！俺ら初登場だよ！でもわかんね！」

ぶつちゃけ出番がないから現状がよくわかんね！」

喜美「ふふふ、愚弟。ぶつちゃけメタネタはめんどいからスルーね？

まあ、軽く現状を説明するわ」

・武蔵の来訪

・K・P・A・Italiaが大罪武装の作成の催促にやってくる

・三征西班牙の警護隊が護衛のために来ている

・自動人形P-01sはホライゾン・アリアダストであり、最後の
大罪武装

・元信公が地脈炉を暴走させて三河を消滅させた

・現在酒井と九刻による避難活動で、避難した人間が武蔵に来ている

・三河警護隊は”護衛”として武蔵にいる

・生徒会は正純を抜き権限を剥奪されている

喜美「簡単に纏めるとこんな感じかしら。K・P・A・Italia
aと三征西班牙が

一番面倒かしらねえ。何せ武装を所持できない武蔵に対して
平気に武器を構え、

そしてそれを振るう事も出来るのから。三河警護隊をこっち
につければ、

戦力面では不足していても少しはましからしら」

トリー「姉ちゃん姉ちゃん！——ぶつちゃけ俺らピンチ？」

喜美「具体的に言っと超ピンチ」

終わってしまったのか
もしくは始まってしまったのか
なくなった者は物言わぬ
配点（意図に気づけるか）

第十二話 固執と消失

”三河山上東門関所”という表札の書かれた、木造テラスを有した建物が存在する。

既に日は高く昇っており、その木造テラスからは様々な貨車や荷車が見えるが、

そのどれもが動く気配を見せておらずに停止しており、その持ち主はその近くの地面に座り込み、

携帯社務などを取り出し近くのものと同戦ゲームに興じながら時間を潰している。

たまに関所の方から声がかかり動く姿もあるがそれを除けば完全に”平和”とも取れる状況だった。

……それは、おかしいのだろうけど。

木造テラスに二つの人影が存在する。番傘型のパラソルを刺しながらその日陰に隠れるようにぐったりと、

椅子へ深く沈みこむのは武蔵の学長酒井・忠次、そして三河警護隊の副長大十字・本多・九刻。

二人の口には赤い粉がかかった煎餅が銜えられており、それを食べながらテラスから見える三河の中央部を見る。

そこには、何もなかった。

文字通り、何も存在してないのだ。新・名古屋城があつた箇所には大地を穿ったような巨大な穴が開き、

そこには近くの海からの海水が流れ込んでいる。地脈炉の暴走から始まった惨劇は盛大な痕跡と問題を残し、

そしてまるで何事もなかったかのような静けさをもたらしている。

九刻の横で表示枠を浮かべ、その中の報告を確認しながら煎餅を食べている様子がどうやら気になり、

酒井は大体の当たりをつけて首だけを九刻の方向へと向けて話しかける。

「それ、お仲間からの連絡？」

「Jud・我、一人だけ別行動だったんで、こうやって今落ち着いてきたかたら警護隊の皆と連絡取り合ってるけど、

やっぱり文句や心配ばかりかけさせてしまったようで。榊原には後でエロゲでも進呈しておこうかなあ、と」

「そつかあ……今の武蔵の様子はどうだい？何か動きに変化はあったかい？」

「いえ、一時的に榊原が指示とつてくれてますけど、大体こっちへ判断を仰いできてくれるので、

予想外の動きがないのは安心と言っちゃあ安心ですね。警護隊には20代30代の隊員もいますし、

そこらへんはアリアダストとは違って安心かなあ、と。ああ、でも早いところ合流したいですね。うん。合流したいなあ」

「それはつまり俺が早く帰らなかったことへの不満か？」

「いえいえ、我はただ単に酒井様がいるなら素早く二代と合流できるかなあ、とか思惑なかつたですよ？」

一刻も早く仕事を終わらせて昨日の午後以来会っていない二代に抱きついてすりすりした後にイチヤイチヤしたいとか考えてませんよ？」

「色々駄々漏れだよ」

酒井も九刻も苦笑するも、二人の体に力はない。ゲジゲジと、小さく甘噛しながら煎餅を食べ、

全身の疲れを抜こうとしているのが分かる。良く見れば両者の体には符が張られており、

椅子に沈み込む二人の体から何かを抜いてるのが分かる。

依然、視線を新・名古屋城のあった方向へと向けながら九刻が呟く。

「……三河、なくなっちゃいましたね」

「殿先生もダっちゃんも逝っちゃったねえ」

その言葉を呟き、再び東門の関所に沈黙が広がる。

●

新・名古屋城は数名の人間、そして何体もの自動人形の命を喰らい地脈炉の暴走とともに消えた。

本多・忠勝も、鹿角も、松平・元信も、それについてた多くの自動人形が、

たった一晚という短い時間の間に消失した。ただそれだけでもなく、酒井の話を聞けば榊原・康政も公主隠しによってきた。

これで、松平四天王は酒井だけになり、三河も消滅した。

九刻は思つ、これからどうするのだろうか。

榊原と話し合った結果、武蔵とK・P・A・Italiaの直接的な衝突を避けるために間に警護隊という、ワンクッションを置くことで進めているが、今のところそれは上手く行っている用で表立った行動はないようだ。

逆に言えば水面下でどんな思いを持ち、どんな行動を始めているかはわからないということだ。

一番懸念されているのは”姫”であるホライゾン・アリアダストが先導し反乱をおこすことではあるが、

ホライゾン・アリアダストは生体式自動人形であり、全ての感情を大罪武装に奪われている今、

その判断は自動人形のそれと変わりはない。だからそういう事態はありえない。だからこそ、目を向けるべきは武蔵、総長連合と生徒会である。

現在生徒会および総長連合は一部の人間を除いてその権限が剥奪されている状態だ。

いわば内部分裂に近い形がある。もし権限を剥奪された側がただ黙っているような人間でなければ、

これから”歴史に残らない歴史”が始まりえる可能性すらある。そう考えるとこの先どうしてもいろいろと考えてしまふ。たとえば、

……親父はこの事を思つて先行艦を二代に任せただろうなあ。

そして、そこには自分も乗るはずであつたと、思う。今までは違う、もつと経験のある人間が負かされてきた先行艦の管理を、それをいきなり二代へ任せるといったり、連日のしつこいお風呂勧誘や焼肉パーティーの催促、そして孫はまだか、といったたのも全てこの複線だったのか……。

……ん？死亡フラグの塊なんじゃこれ……。

でもまあ、極東の人間にはどこか死亡フラグを異常に作りたがる病気みたいなものがあるので仕方がないと思う。

実際死亡フラグごっこことは結構楽しかった記憶がある。実際仕事の怪異退治前にはやる連中が多くて、

帰ってきてから”俺の方が主人公っぽかった”とか生還してきた馬鹿が言い合っているのは結構記憶に新しい。

最初は何が面白いのかは分からなかったが、自分も参加してみると結構楽しい。

最終的に殴り合いによる解決を求めるのはどうかしているがそれを含めてたぶん死亡フラグごっこなのだろう。

終始三河に住んでいるが極東の文化はまだまだ学ぶべきことが多いなと思う。

がり、と一際大きな音を立てて煎餅を噛み砕き、小さくなった破片を飲み込むと、

肩に張られている神道式の符を取り、そこに書かれている数字を見る。既にそこに書かれている数字は百、

映し出されているメーターは円を描くように満タンを見せている。

それはつまり符が吸収しきれる疲労の量を吸いきったという証拠だ。引き剥がした符を丸めて投げると、周りには聞こえないような声で軽く呟く。

「燃えろ」

軽い炎の爆発を起こしながら符が燃えちり、灰となって風に飛ばされてゆく。

それを見ていた酒井も自らに貼り付けられている符を外しそのメー

ターを確認し丸める。

「これも捨てて「だが断る」返事早いねえ」

「冗談ですよ。一度言ってみたかったです。いや、やった事はあるんですよ。」

ただやった相手が鹿角様でしてねえ……ええ、やっぱり包丁は人へ向けるものではないと思うのですよ」

受け取りながらその丸まった符を投げ、先ほどのと同じく燃やす。

「ああ、昔から包丁を投げるのは変わってなかったんだね？」

「Jud・何故か二代は怒られる回数少なかったんですよえ……代わりに親父による、」本多・九刻保管計画」なんてものすつこい怪しいもんを始めて、

それ以来我、段々と口調とか影響を受けて、包丁で追い掛け回される回数増えましたねえ。具体的に0から結構な回数に」

「それ、洗脳だよね？」

「二代の嫁には恥ずかしくない相手が欲しい、自分の存在は恥ずかしくない（頭が悪い親父）、ならば自分のようにしよう。頭が悪すぎて何もいえないですよね。」

その割には言動とか大雑把なところとか微妙に似てるよね、と言われ黙ることしか出来ない九刻。

何だかんだ言つて、実際の技は大半が剣神熱田とキチガイ医者 of 陽菜先生から習ったものであり、

”武”あり方ははなれどその志や思想は大分影響されていることは

自負している。結局のところ二代が受けている影響以上に、自分はあの人としてはダメな親父に影響されているのだろっ、と思う。

「そつえばさ」

酒井が口をあける。

「君はさ、本多・忠勝の名を襲名するのか？」

●

唐突な酒井の質問。だがそれは昨夜から考えていることでもあった。三河は消え、

大罪武装の本当の目的が元信公より明言され、そして多くの襲名者が消えて、同時に本多・忠勝の襲名も浮いた。

そして順当に行くのならここは男であり息子である自分が本多・忠勝の名を襲名するところなのであるが、

やはり、それはないと思う。

「んー、やっぱり無いと思いますねえ」

「そう？ま、やっぱり君ならそついうよね」

「何か、元々分かった感じですね？」

「君も、二代ちゃんも、何だかそついう襲名とかには興味なさそう

な感じだからね。

三河にいるコネを使って君達を何とか武蔵に乗せられなかったおじさんは考えてただけで、どうなんだろうね」

それは、道なんだろうと自分も思う。

実際、世界はここから急変するのだろう。昨夜の元信公の発言を改めて思い出す。

ホライゾン・アリアダストの存在、彼女が最後の大罪武装であること、数年前からの怪異の理由、

地脈炉の暴走、そしてP・A・ODAの打ち出す”創世計画”と世界規模で発生する公主隠し。

今、世界は確実に末世へと向かっており、”何か”を知っていた元信公はそれに対して抗ったのだ。それだけは分かっている。

そして武蔵もK・P・A・Italiaも三征西班牙も決して世界を混乱させようとしているわけではなく、

それぞれの利益と世界の混乱を収めるために行動をとっているのだろう。

ホライゾン・アリアダスト姫が武蔵で見つかった際にK・P・A・Italiaに”保護”されたが、それも悪意からではなく世界を思っていることだろう。

何より武蔵が大罪武装をたとえそれが単体では意味をなくしても、所持していると言っ意味は大きい。

それから考えてみるとある意味K・P・A・Italiaは間違っている。間違っているのではないのだ。

だが、間違っているとは言え納得できる行動ではない。

「……たぶん、自分は武蔵に乗りますよ。二代はどうしたいかは分かりませんが」

「へえ、それはどうしてか、ちょっと聞いてみてもいいかな？」

「Jud——自分、サムライですから。主をお守りしないといけませんから」

「ああ、なるほど……そういう感じなのかあ——意外と面倒ごとに首突っ込むタイプでしょ？」

「……分かります？」

苦笑しながら酒井の言葉に答える。やっぱり、親父のような正義の味方はムリでも、

せめて手が届きそうなところであれば、その程度なら何とかかなりそうなところなら、自分でも、と。

そういう思考はないわけではない。だからそれなりの無茶を承知で成功したこともあれば、

いけると思って失敗したときもある。だから、全てが全て、必ず上手く行くわけではないことはわかっている。

だけどそれでも見過ごせないことはある。そして今回はそれだ。確実にだが、

「姫様は自害を強要されるのでしょうかねえ」

「たぶん、その線が濃厚だろうね。丁度いいところに三征西班牙の“処刑場”も来てるし、

使い方によっちゃ分解だけして中の大罪武装部分のみ抜き出す……
つてのも出来そうだよね」

そうになると、自分の、新たな、元信公に変わる主は死んでしまう

のдарうつ、三河消滅。

その罪を償うためという名目の元に。だが、それは悪い。かなり悪い。何が悪いと言う、

何より後味が悪い。吐き気がするほどに気持ちが悪い。育ての親ならどうするかは分かる。

おそらくは仲間を集めて取り戻しに行くだろう。自分の親父は武士だ。無茶をする男で、馬鹿をしても絶対に道を間違えはしない。

そんな男だった。そして生みの親は……、

「ロリでペドで人としては最悪の部類だよなあ……それでバカッブルとか救いがない」

だけど、それでも、理不尽に対してはわき目も振らず突き進む男だった。

外道を外道だと言い、邪悪を邪悪だと言い、吐き気を覚えるような悪意に対して真っ先に立ち向かい、

それに対して自身の正義を貫くような男だ。あつた事はない。荒唐無稽な神話の存在としてかしくない男だ。

母親もそうだ。出来たら4歳以前の、体に彼らの記憶が残っていれば嬉しかった。だが望めないものは仕方がない。

どちらの親もここで諦めるほど軟弱な精神はしていない。ならば自分分は――、

「酒井学長」

「なにかな？」

九刻の呼びかけに酒井が九刻のほうへと向くと、九刻がなにやら悪戯を思いついたような顔をしていた。

「酒井学長、戦略ゲームとかでゲーム進めるよりユニット集めて育てる派ですよね？」

「ダっちゃんみたいな突撃馬鹿じゃないからね」

「そこでちょっと思ったんですけど――」

話の意図に気づいたのか、酒井がくつくつと笑いをこぼす。

●

「割断世界ホンダリア」（ヒヤッハア）

DANDANDA！割DAN！お前のモヒカンも割断（イエア）

城も大陸も腹筋も割DAN（ホワア）

ただお願い俺のお小遣いだけは割断しないでー（今月はピーンチ）

木造テラス、二人の男が暇そうに声をそろえながら珍妙な歌を歌っていた。

それは世間一般でアニソンといわれる類で初老に入っている酒井が何故九刻とこんなものを歌っているかと言うと完全に何故ではあるが、

二人はリズムもピッチも完全に合わせて歌っていた。

その木造テラスに新たな姿が現れる。三河製の自動人形ながらその象徴とも言うべき侍女服はデザインが少し違っており、

呆れたような表情を酒井へと向け、同情的な視線をそれから九刻へ

と移す。

テラスの入り口から歩き九刻と酒井の椅子の裏まで来るとそこで立ち止まる。

「——酒井様。若い人間にアニソンを強要させるとは素晴らしい趣味だと判断します。——以上」

声が聞こえ後ろへと振り返ると二人の視界に自動人形の姿が映る。アニソンの合唱をやめた酒井が呆れた視線を向ける”武蔵”に対して言い訳を始める。

「いやね、これは別に俺が始めたことじゃないんだよ？どうしても九刻君が歌いたいたって言うからね？」

九刻が立ち上がり、一礼をする。

「見苦しい言い訳はやめましょうよ酒井学長。初めまして、三河警護隊副隊長をやらしてもらっている大十字・本多・九刻です。言動から察するに貴女が”武蔵”の？」

座る九刻へと、酒井から視線を外し”武蔵”が九刻へと返すように一礼をする。

「Jud・当方は武蔵の統括をさせていただいている者です。”武蔵”と呼んでいただければ幸いです。——以上」

「何だか鹿角様と同じような匂いがするんだけど……気のせいであって欲しいなあ」

「もうそれ、半ば確信してるよね？で、”武蔵”さん、今の所、俺

らの扱いどんな感じ？

おじさんとしてはそろそろ帰ってソッコで布団に潜りたいなあ、とか考えているんだけど」

「現在”品川”が保釈手続きと調書の確認を行っています。九刻様に關しては既に警護隊が武蔵の方におりますので、何時でも合流できる状態ではありますが。――以上」

「一応酒井学長の護衛って名目で一緒にいますので、我も保釈されるまでは一緒にいさせていただきますよ」

「Jud・ありがとうございます。もはやそこまでの価値があるとは思えぬ猫背ではありますが。――以上」

その言葉に酒井が苦笑を漏らす。あいも変わらず”武蔵”は自分に対しては辛らつだなあ、と。

そして手の中で遊ぶように弄っていた煎餅を碎いて飲み込むと一拍呼吸を置いて、

そしてそこから再び口を開く。

「”武蔵”さん、俺、間違いなく軟禁されてるよね」

「Jud・酒井様、昨日”俺飲んだらソッコで戻るから”と言いつつ、夜までズルズル遊んでいるからだと判断出来ます。

だから厳戒態勢が敷かれる前に私の元に戻れず、こんな所でK・P・A・Italiaiaにとっつかまって、聴取まで喰らうのです。――

――以上」

酒井が湯飲みの中身を飲みを終わったのか、それを”武蔵”へと差し出しながら言葉を続ける。

「だってさあ、逃げるのは簡単だったけど、郊外の人たちを避難させなきゃダメじゃない？俺のこと知っている人たちも多かったしさ、山上側に避難させてたら時間食っちゃって」

差し出された湯飲みに”武蔵”茶を注ぐ気配はない。その事に首をかしげ、

「怒ってる？でも俺、昔の仲間に出たりしたけどさ、関与してないし、そこらへん、聴取の際にも術式で嘘言っていないって証明したし。」

つまり、……俺、悪いことしてないよ？」

なにやら九刻の横で酒井による”武蔵”への必死な弁明が開始した。統括系自動人形は何処でも性格キツイのかなあ、と、下らない事を考えていると肩に軽い接触を感じる。

肩の上を見ると走狗姿の、小型エセルドレーダ（犬耳セット）が浮かんでいた。

酒井と”武蔵”のコントを邪魔をせぬような音量で声を調整して話しかけてくる。

「マスター、武蔵の方から報告が来てます」

酒井達のこととは一旦無視し、こっちはこっちで進めようと複数の表示枠があがってくる。

まず一つ目に目を通す。その差出人は警護隊の隊員からではなく、学生からでもなかった。

そこに書かれているのは学生でも警護隊からでもない、既に卒業した人間からの、現在の武蔵を見た様子が書かれていた。

「……武蔵はこんな感じなのか」

ここを読んでやっぱり気になるのは生徒会の動きだろう。副会長……正純を抜いた人員はその権限を取り上げられている。

総長兼生徒会長である葵・トリーまでもがその権限を取り上げられていると言うことは今、

武蔵でどうこうできる人間は副会長で権限を持っている本多・正純のみ、と言うことになるのだろうが、これはやっぱり厳しいだろうな。

そんな事を思いつつ昔の彼女を思い出す。

小等部、そして中等部ではそこそこ親交があった。史実では武の本多・忠勝と政治の本多正信との中は険悪だったようだがここではそんなことはなく、

それでも同じ主に仕える家で極東を有利な方向へと導きたいと言う意思是違ってたし、

子供の頃に合わされて度々一緒に遊ぶこともあった。襲名の事を考えて正純が男性化の手術を検討し始めた時も相談に乗ったものだ。

ん？待てよ？男性化の手術？

そこで考える。二代が忠勝の名前を襲名したらどうなる？いや、女性のまま男性の名を襲名することは出来る。

……できるよな？できるはずだ。いいやできるよね。正純のアレは襲名を有利に進めるための処置であるし。

もし二代がそうになったら俺はアレか。女になるのか。新しいな。いや、新しすぎて色々アレだが。

だが襲名したら忠勝には於久の方って妻がいた筈だ。伴侶であり続けるには、於久の方を襲名する必要がある？

いやいやいや、それはないだろ。あ、でも二代って乙女な所を抜けば結構男臭いところあるよな？

そして俺、地味に家事や料理ばかり腕を挙げて主婦染みてるよな？……ん？あれ？違和感なくね？……うん。考えるのはやめよう。これ以上は発狂しそう。

そんな考えを振り払うためにも表示枠を消して、新たな表示枠を掴み目の前へと持ってくる。

こちらは先ほどの表示枠とは違い、武蔵の中の事ではなく、武蔵の外、輸送艦で作られた仮設住宅街の中、そこに今はいる三河郊外に住んでいた住人の様子が書かれていた。

……そこまでの混乱はない、か。

やはり早い段階で酒井学長と一緒に避難誘導が出来たのが良かったのかもしれない。三河郊外への被害はなかったとはいえ、

もし自分や酒井学長の様に避難を誘導できるような人間がいなければパニックが起きることもありえだし、

地脈炉の暴走の影響から怪異の発現率も跳ね上がっているのもそれの被害にあったかもしれない。

もしかして榊原は最初から全てをわかっていて、そして住民を善意から避難させそうな酒井学長を三河郊外にある書斎まで引っ張った、何てことも考えられるがそこまで深く考えたくはない、と思う。純粹に偶然であつたと。

そして混乱はないが、その代わりに自分達の生活がこれからどうなっていくのかという不安が多いのが現状、か。

「どちらも、警護隊で報告されたのと殆ど変わらないな」

そう呟き表示枠を消す。言葉で気がついたか動作で気がついたの

かどうかは分からないが、

酒井が”武蔵”の言葉から逃れる先として九刻の行動に興味を持った。瞬時に巻き込むなと思うが、
情けない中年猫背親父だし少しは慈悲をくれてやろうと思い、

「あれ、それ警護隊からの報告？」

「ちょっと違いますね。こちらは警護隊からではなく個人的な知り合いからの連絡です」

「個人的な知り合い？」

「Jud・警護隊や生徒会、総長連合の人間が動き回って質問をしているとこの状況、どうしても不安になりますよね？」

そういう場合相手もこちらへ不信感や不安を見せたくないのが当たり障りのないことを答えてしまうので」

「ああ、覆面警察みたいなもんだね？」

「Jud・」

簡単に説明してしまえば酒井の言ったとおり、覆面警察の真似事だ。警護隊の中で比較的影が薄いのか、

もしくは個人的な知り合い……たとえば先生にそれとなくそこらへんの人とお話してもらい、

うわべの様子だけではなく本心を何とか聞き出してもらってその報告をしてもらっているのだ。

一つの事象を一つの角度から見るわけではなく、多角的な見方をすることで様々な情報を得る、それだけのことだ。

やはり気になるのか、酒井が追求してくる。

「それで、どんな感じ？」

「全体的にはそわそわしてる感じですね。不安は伝染するのでそれを表面的には見せないけど、

武蔵も三河の人たちも、少なからず自分達の行方に不安を感じてますね。

何人かは殿先生自体に不信感、あと同盟を組んでたP・A・O・D・Aに対しての不信感ですね」

まあ、それもしようがないよね、と酒井が相槌を打つ。

しょうがない、と一言で片付けるのは簡単だが、だが今回の件はそうとしか表現できないのだ。

実際、生徒を卒業し、一般市民として生活している三河郊外の人間からしてみれば現在の三河の生徒会、

彼らがまだ現役時代から頑張っている人間が突如として兵器をばら撒きそれが世界をすくう鍵だと言って、

その言葉を最後に教導院ごと三河を吹き飛ばしたのだ。これでもまだ元信公に完全な信頼を置ける人間がいれば、

それは何らかの聖人かアホである。そして確実に自分の父親は後者お祭り騒ぎにヒヤッハーしてたほうである。付き合った鹿角様はどうなんだろう。

「まあ、ここは生徒会の手腕に注目ですね。警護隊は結局武蔵にとつては余所者ですから」

結局の所、どうにか警護隊を抱き込むか武蔵を警護する理由が出来ない限り、

三河の警護隊は”三河”の警護隊であり、武蔵の警護隊ではないのだ。だから直接的には干渉できず、今のように別の国と武蔵の間のクッションになる程度の事しかできない。

あとはまあ、最後の表示枠は二代が武蔵から離れ三河の方へと向かい、神格武装”蜻蛉切”の受け渡しに行ったと、それだけだ。二代に限ってドジを踏む可能性は……なくはないが、それでも常に一緒にいて、助け合うことだけが夫婦ではなく、相手を信じて待つことも信頼の形であるとは知っている。故に彼女の事は信じて待つ。

そこでテラスに上がってくるドアが開き、新たな影が入ってくる。侍女服姿の自動人形のそれは、短い髪を一礼とともに揺らし、

「品川”参上いたしました。——酒井様の保釈手続きや調書確認を完了しました。」

”武蔵”様の多種証書なども作業を終えております。——以上」

●

新しく現れた自動人形に対して九刻が立ち上がり、一礼する。

「どうも、三河警護隊副長の犬十字・本多・九刻です」

「Jud・共通記憶を通して知らせていただきましたので挨拶を。右舷一番艦の統括自動人形、”品川”です。以後お見知りおきを。

——以上」

再び一礼を取る”品川”そこで九刻はテーブルの上に置いてあった湯飲みから茶を飲み干し、それを静かにテーブルに下ろすと体を軽く伸ばす。

「さあ帰りましょう！ええ帰りましょう！とつと帰りましょう！」

「元気だねえ、九刻君。そんなに二代ちゃんに逢いたいのかな？」

立ち上がった九刻が顔を酒井へと向ける。

「いえ、何だか全力で今すぐここから出ないとして、嫌な予感がするので」

「嫌な予感？」

「はい。結構自分の勘って外れないんですよ」

今回は昨日で、それは三河消滅と言う結果で示してくれた大変素晴らしい勘である。

便利なのは便利ではあるが内容まで教えてくれたらさらに嬉しい。

ただ、どうも予感は虫の知らせというには鋭すぎて、

もはや”知っている”とも”既知感”とも言える断言クラスのものなのだ。

……無限螺旋でなければいいけど。

自分としては消えてしまった”知識”が思い出せなくて引つかかっているだけだと信じたい。

「つとまあ、前回嫌な予感を感じた時はそれで」

三河中央部、新・名古屋城があつた方向を見る。

「あんな感じになつたので」

「……」 武蔵”と”品川” 業務もあるし、俺もそろそろ布団に入りたいから帰ろうか？」

酒井が立ち上がり、結局最後まで”武蔵”により注がれることになかつた湯飲みをテーブルに置く。

さが酒井が立ち上がると同時に”品川”の立つそばから、声が響いた。

「——もうお帰るか。挨拶をしたかつたものだが」

低く、反響するような声であつた。”品川”がはっとし振り返つた先にいるのは、

「魔神族……！？」

制服に気づくも、九刻が即座に自分の位置を魔神と酒井の間に立たせ、

護衛のし易い位置へと体を動かす。それと同時に脳の中で比較的”被害の少ない”術式を構築し、

それを使用可能の状態で待機させて置く。同時に裾の中に忍ばせてある得物も無造作に立ちながらも何時でも出せる状態にしておく。

「左様。K・P・A・Italia所属。元パドヴァ教導院学長、Helio cent rism（地動説）のガリレオだ」

だが響く声はそれだけではなかった。ガリレオが上げた声に続くように低い低音で声が響く。

「来ているのはこの異端の王だけではないぞ……とは言え、異端の王には相応しいのはそっちなんだろうがなあ」

と、ガリレオの陰から白の長衣の男が現れた。黒の蓬髪を靡かせる男の名を酒井は知っていた。

驚きの表情を浮かべる境と、そして苦そうな顔を浮かべる九刻。酒井が、男の名を口にする。

「……ババ・スコウラ 教皇総長インノケンティウス」

「——久しぶりだな、酒井・忠次。そして”魔を断つ者”（デモンベイン）」

九刻が頭を抱えながら地面に倒れた。

●

「ん？どうした”魔を断つ者”？何を倒れているんだ”魔を断つ者”？病気か？それはいかんぞ”魔を断つ者”。

それともアレか、昨夜から働きっぱなしで疲労がたまってるのか”魔を断つ者”」

叫ぶように九刻が声を上げる。エセルドレーダも崩れ落ちる姿に流石に平常ではいられず出現する。

「やめて！お願いだからその名で呼ぶのは止めて下さい！若い頃の厨二ネームを思い出させないで！」

「何を言ってるん」魔を断つ者”？これは聖連が正式に認定して登録した字名アバンネームじゃないか」

「嫌がらせが徹底的ですよねえ！」

テラスの上、頭を抱えたまま蹲るようにする九刻を見て教皇総長インノケンティウスが満足そうな表情をとる。

そのやり取りがどこか新鮮なのか酒井はおそろい多様な顔をし、
武蔵”と”品川”は無言でその光景を見て、

ガリレオは低い声でくつくつと笑っている。頭を抱えている九刻のをエセルが肩を叩いたり背中を擦ったりして必死にフォローをしている横で、

インノケンティウスが視線を酒井の方へと移す。

「うちのガリレオが三河の状態を見に行きたいと言うのでなあ。実地確認でついてきたのは良かったよ。

まさか、ここで貴様が足止めされているとはなあ。——護衛も下だ、ちよつと軽い同窓会と行こうじゃないか、なあ？」

完全に九刻をスルーしつつキラリと白い歯を見せるインノケンティウスの物言いに、

”武蔵”が酒井の肩を軽く叩きその視線を集める。

「さあ、早く謝るので。貴方のおかげで九刻様が倒れているのでさあ、謝るのです。——以上」

「おいおい流石にJud・とか言えないよねそれは。理由を聞こうよ理由」

酒井のセリフにインノケンティウスが軽く苦笑する。

「まあ総長時代のそいつにK・P・A・Italiaがコケにされたことがあってな。

ちなみにそこで倒れているやつは純粋な嫌がらせだ。お前の存在でどれだけ迷惑したか」

”武蔵”がもう一度謝ることを催促するように酒井の肩を叩くがそれを酒井が退け、

「教皇、お前何年総長やってるんだよ。少しは昔の事を忘れるよ」

「お前が邪魔した旧派の進出を俺は忘れはしないよ」

「俺は五十年前の島原の乱と、早期再現された禁教令で歴史再現されて、極東の旧派の進出は終わってるはずだろ？」

「それは極東の意見だろ？聖譜記述によれば島原の乱は今から約十年前、一六三七年に起きるものだろうが。

——その四十年前に再現したと、しかもそれで禁教令の再現を終わらせたなんて狂気の沙汰だぞ？

なにせその頃はまだ旧派の活動は広まってないのにその頃に再現を終わらせることはつまり旧派の排除も同じだ。

——松平が出す禁教令一六一四年、それが繰り上げの歴史再現で十五年早まった。

失われものを補填しようとしたところで——……お前が介入した」

そこで酒井は視線をインノケンティウスではなく横の”武蔵”へとむけ、

「分かるでしょ”武蔵”さん。アイツ、ギャグ通じないタイプなんだよね」

「良かったですね。二十数年越しのストーカーですよ。——以上」

極東の異次元の会話がどこか面白かったのか、ガリレオが低い声で苦笑しながら肩を震わせる。

「面白いな、元少年。現役だったらいい思い出を作れただろうに」

「ガリレオ、——その思い出を作る機会をやったんだ。感謝しろよ」

ああ、

「このガリレオ、まさか学長位を返上しK・P・A・Italiaの生徒、総長連合に参加するとはな。

だがこの身分は末世の研究には役立つし、元教え子の下につくという貴重な経験も出来た。

まったく、長生きしてみるものだな」

「こちらこそまさか師が配下になるとはな。たまに教皇と言う身分を忘れて頭を下げそうになるよ」

ははは、と男が二人笑うのに対して、酒井が”武蔵”の顔を見ながら肩を叩き、顔を覗き込んだ。

「……あの二人、笑ってるけど、お前さん、面白いと思うか？今の会話」

「Jud：——トリー様だったら乱入してますね。今の。——以上」

「我思うに、極東の異次元会話を参考に引っ張ってきちゃダメなんじゃないかと……」

「権限奪われた武蔵総長の”不可能男”（インポッシブル）がなんだって？」

「どう、とは？」

「——あのときの決着をくれるかどうかってことだよ」

「いいかあ？」

「あのときなあ、俺達が三日三晩を超える戦いをしている間に聖連に乗り込んだお前の仲間、
イギリス 六護式仏蘭西までもが極東を支持し、
エグゼコン・フランス 結果島原の乱や禁教令は歴史再現を行ったと片付けられてしまった」

Tes：と、ガリレオは言い、良い判断だと、戦略だと評価した。その言葉にインノケンティウスは間を空けてから、再び言葉を続ける。

なあ、

「K・P・A・Italiaは極東の戦略に負けた。それは解る。」

だが、K・P・A・Italiaと極東の決着はまだ終わってないよなあ？」

いいか。

「——今度はK・P・A・Italiaが極東を戦略で負かす」

インノケンティウスが顎を引き、上目遣いに酒井を見た。

「——武蔵の総長は歴代無能。だからあのときは三河の総長だった貴様が出てきて、

俺達と勝負をしたわけだ。あれ以降、武蔵以外の極東居留地も聖連により弱体化が進んでいる」

「それが”戦略”かい？二十年越しの」

「ここで大罪武装が手に入るとは予想外だったな。……戦国では主君の自害による代償は必然の事。

……おいおい、そう睨むなよ”魔を断つ者”？これはよくある話だぞ、おい？三河と言う生産の拠点を失った代償は、

武蔵と、主君の命によって払ってもらおう。何せこっちは末世の事を考えつつもP・A・ODAの創世計画とやらについても向き合わなきゃいけないからな？

だから大罪武装を手に入れたら——」

インノケンティウスが”武蔵”を見た。

「武蔵を聖連に謙譲しそれを三河の代理都市にし、そこに大罪武装を置いてP・A・ODAへの最前線へとする」

言うなり”品川”が動いた。

「そのような事が――」

講義するように彼女が一步目を踏み出した瞬間、ガリレオとインノケンティウスの姿が消えた。

●

酒井が目の前で発生した異常に気づくには数秒を要した。だが酒井が復帰する前には既に九刻は動いていた。

ガリレオとインノケンティウスが消える瞬間に、自分の体を即座背中を向けたままに武蔵と酒井の間へと動かし、裾の間から飛針を手に挟みながら武蔵、そして酒井を”品川”ごと横へと押す。意図を理解した酒井が”品川”を腰に抱き、空中で姿勢をとりながらはなれると”品川”横へと投げ、距離をとらせる。そこで、九刻と酒井が背後を見るが、

……いない!?

そこには誰もいなかった。

「どうした二人揃って? いや、術が発動した直後に感知できただけ上出来なのか?」

背後から声がする。再び背後へと視線を動かすと、そこには最初の位置とまったく同じ位置に立つインノケンティウスとガリレオの姿があった。

確実に消えた瞬間にはいなかった、その姿がそこにあった。

「移動は確かにありました。ただ、防衛体制へ移行してなかったの
で見地は出来ませんでした。——以上」

「まあ、良く分からないだろうな、自動人形君。——異端の術式
の一つだよ」

そう言ったガリレオの横、インノケンティウスが軽く肘で突く。

「おい、あまり私の見えるところでやらんでくれんかなあ」

「だから君の背後にいるんだろう、元教え子」

はは、と彼が笑い酒井に視線をとどめる。

「次に私に会うときは、——君が学長位でなくなるときかもしれ
ないな」

「だったらホットするね。左遷に三河消失と、気苦労ばかりだから
ね」

「そういうことを気にする人物だと元教え子からは聞いてないぞ？
私は聞いている。

——あの男は、自分が動くときは既に仲間を動かしている。そし
て自分が動いてないときは、——仲間達が勝手に動いているのだ
と」

「だろうね。俺より仲間の方が優秀でさ」

「ならば今はどうなのだ？元少年。君の教え子達は君が動けないときはどうするのだ？

私は聞いていない。——君が、ただ何もせずにいた人間だとは」

そこでガリレオとインノケンティウスが背を向ける。

「何をせよ、K・P・A・Italiaは失われたものを取り戻す」

「今ある、……命を一つ失わせてでもか？」

Tes・と、言葉が返ってくる。

「——今の流れを否定しないでくれよ？あの時の戦いを無駄にするようなことはしないでいてくれよ？

それは、あの時の戦い自体を否定すること何だからなあ、……おい。あと大十字・本多・九刻」

そこで初めて九刻の名前を呼んだインノケンティウスに対して九刻が得物をしまいつつ何だ、と答える。

「お前、K・P・A・Italiaに来る気は相変わらずなのか」

「J u d .」

そうか。その言葉だけを残し教皇総長と魔神は去っていった。

第十二話 固執と消失（後書き）

若干遅れましたが、

境界線上の写本保持者更新しましたあ！

略して”しゃほじ”！

何かこの略し方がわいくね？こう、尻の丸さと、おっぱいの……ああ？関係ない？

そーですか。そーですか。あ、でも自分おっぱい星人ですから。

ええ、そろそろ現実を直視しましょうか。

もうすぐホニメじゃねえか。

どうすんだこれ……どうみても放送までに1巻分おわらねえYO！
どうすればいいんだYO！ド・マリニー俺が欲しいYO！
でも精神汚染は勘弁な。

そんなわけでお送りしました第十二話は酒井学長とテラスでのんびりでしたね。

途中で生え際を気にしてる教皇がでてきますが、
おおむね原作どおりですねえ。何か一部気になる発現とかあります
が、

九刻さんの謎はまだまだあるので楽しみにー。

それでは今日はこのぐらいで二代可愛いよ。さようならー。

第十三話 胎動の音（前書き）

study ●三河警護隊の状況●

トリー「み、みかわけいごたい！だ、ダメだ！ネタが適當すぎるぜ！Sigh……」

喜美 「その調子だと蛮族にまたお仕置きされるわよスベリ愚弟。

でも、三河警護隊について知りたいのね？そうなのね！？」

トリー「敵ぽかったり余を守ってくれたりと結構意味わかんねーんだけど、

そこらへんどーよ」

喜美 「そんな愚弟に賢姉様が教えてあげるわ！

早い話し、三河警護隊自体も武蔵とのその運命を共にする可能性が高いわ。

でも権限自体は武力に対する防衛以外にはないから何も出来ないのが現状ね。

こういつちゃ悪いけど、現在は中間管理職みたいに聖連と

武蔵の板ばさみね」

トリー「あー、地味に大変そうだなあ」

喜美 「アンタの決心で心労は確実に加速したでしょうね」

始まる

始まらない

これからの何かがの予感が

配点 （決心）

第十三話 胎動の音

——武蔵で鐘の音が響くのを感じる。

それは中央後艦、”奥多摩”に存在する極東の教導院、武蔵アリアダスト教導院の一眼目の終了を教える鐘だ。

その鐘の音は生徒にとっては厄介な授業から解放される意味を持つと同時に、今では時を確かに刻む証拠だ。

鐘が鳴るたびにホライゾン・アリアダストの処刑への時間が近づいてゆく。武蔵の、極東の人間はそれを解ってはいるが、

それでも警護隊に”守られ”そして聖連に監視されている今、取れる選択も行動も殆どない。

現在、武蔵の存在自体が切れ掛かったロープの上で綱渡りをするような状況である。

学生の動きがない武蔵の”奥多摩”の通りに二つの姿が見える。

一つは青年、そしてもう一つが少女。

青年は”奥多摩”通りにある木を両手で掴むとその手に渾身の力を込めて、

砕かんとするほどの力を持って木を抑えていた。実際、その木には亀裂が走り今にも砕けそうな勢いであった。

悪鬼のような形相を顔に浮かべている姿は是非とも近寄りも話したくもない危険人物のそれだった。

「ガールー！しいーげえー！！」

怨敵の名前を叫びながら木を砕こうとするその姿はまごごつことな

き変態だった。

今学生の大半は授業を受けているはずだ。例外に含まれるものは学生寮で大人しくしている。

だから今、この状況を見ているのは少女、……つまりエセルドレーダだけである。

そしてエセルドレーダは基本的に九刻の事意外はどうでも良いので、

二代が全国ネットで恥じを晒されたことはどうでも良いとして、なんとか九刻の心を落ち着けたかった。

そう、放送された。

それは遡る事約半刻、三河の外れ、整地された海岸近くでの出来事。

三征西班牙の第三特務である立花・闇^{たちはな・ぎん}が本多・忠勝より一時的に預かった神格武装”蜻蛉切”の、

その受け渡しでの出来事である。九刻は既に何をするかを榊原を通して聞いていたためやることに対して驚きはなかった。

それは蜻蛉切を受け取る際に、自らの前に出て取りに行くことによってまだ極東に反撃の意思はあると、

現在三河警護隊に見せられる最大限の反抗心であり、極東に希望を与えるチャンスであった。

だがそれは立花・闇の夫、であるガルシア・デ・セヴァリヨと立花・宗茂の2重襲名者によって速度を越えられたことにより阻められ、

そして蜻蛉切は計画されたようにこちらへと渡された。その際二代は蜻蛉切を使い父を越えると言言したが、

それでもその失敗した様子が全国ネットで放送された。

立花・宗茂が立花・闇を恥から救ったように、自分もあの場において二代を救いたかった……！

常に一緒にいることが夫婦の信頼の表れではないと言うことはわかってる。それは解っているのだが、

こういうときに一緒にいられないのは歯がゆく、そして非常にイライラする。そしてそのイライラを物理的に表現するために、手短な木をとりあえず砕いてみる。

『お前……俺ら一応客の様なもんなんだから派手にやるなよ……？』

既に被害を承知してる時点で榊原は自分をわかってくれている。持つべきは友だ。

だからこの前食べた砂糖菓子の件は見逃してくれるはずだ。うん。やっぱり持つべきは友……！

若干落ち着いてきたので木から手を放す。だが既に郷土の限界を超えていた木がそのままバラバラになるように砕け、

土ぼこりを舞い上げながら崩れ落ちる。その様子を無言で見つめた後、何らかの罰金が取れないうちに、

さっさと見つかる前にその場から動き始め最初の目的地である武蔵アリアダスト教導院へと向かう。

武蔵アリアダスト教導院へ行く理由は一つ、“護衛”である。

“護衛”と銘打ってはいるが、その実は監視に近いのだろう。

実際、警護隊は立花・宗茂の動きで敗北したのも同じだ。

だが最後の二代の放った一言、そのおかげで何とか武蔵にまだやる気があることを示した、と言うところだろう。

警護隊の方向性としては極東を、武蔵を聖連に譲渡されないように

する方向で進めようとは思っているが、結局の所、三河警護隊は極東で唯一聖連に防衛的行動での戦闘が認められた集団、だがそれは防衛的行動のみで決して何らかの権限を持つわけではない。

だから、もし自分で何かをしたければそれは自分より上の、権限を持つ人間によって運用されなければ何かが出来ない。現状できるのは反乱の芽を潰すくらいで、出来ることはそう多くない。現在の立ち位置は完全に中立。

そこまで思考を進めて、視線を前へと向ける。

木々に挟まれる様が続いていた道を抜けるとそこには他国の教導院と比べて少し小さ目の教導院が見える。

正面には大きな階段があり、小さな教導院のスペースを最大限利用できるように2階を繋ぐアーチや、

他には渡り廊下が見える。前聞いた話だとアリアダスト教導院は小さくする必要があり、

そして使える土地を最大限利用するために校舎の行き来をしやすいように工夫が施されているとのことらしい。

新・名古屋城はアリアダストと違ってかなり大きくはあったが、入れる場所は少なかったな、と、そんな事を思っているうちに、教導院前の階段の下にまで到達していた。同時に階段の前には手の中に機殻の施された槍を持った警護隊の隊員が見える。

自分の心を落ち着ける意味でももはや中毒と化してしまった唐辛子煎餅を懷にしまってある袋から取り出し、一口砕いてから進む。

前に出てきた九刻の姿が見えたのか階段前で警備をしていた隊員が背筋を伸ばし敬礼のポーズを取る。

「お疲れ様です副隊長！」

「お疲れ様です！」

「おう、お疲れ。崩してよし」

場所が場所なだけに普段はふざけた雰囲気を放ったり若干遊びの入る敬礼でも今回はかりはしっかりとしたものだ。

やはり自分は現在”世界に見られている”と言う意識が強いのだろう。そして滅多な弱みを見せないためにも、

こうやって表面上だけでもしっかりやっておく、という事だ。

「調子はどうだ」

「今の所問題はないです。授業に参加している生徒は全員ちゃんと出席しているようで、

特に怪しい行動の報告はないです。あえて言うのならば」

そこで隊員が武蔵アリアダスト教導院の一角を見る。

「3年梅組、総長連合や生徒会に所属する生徒の集まっているクラスが普段は騒がしいそうですが、
今日に限ってはかなり静か、だと言う話です」

「正直何かそういうときに限って嵐の前の静けさとかなんだと思っ
てしまうんだよね……」

「おい、不吉なことを言うなよ。俺達だって何時解体されてもおかしくないんだから。……あ、副隊長すいません！」

手をひらひら振り、別に大丈夫だと言う意思を見せ付ける。ついで

に煎餅をもう一齧りする。

「気にしねーよ。教皇総長が武蔵をどうするかって話を聞いちゃったら大体解るさ、我達の行方も、な」

自分は確実に酒井のオマケ程度のしか見られていなかっただろう。だが、それでも、教皇総長は自分の前で言った。武蔵を手に入れ、それをP・A・ODAへの最前線で使用することを。姫の自害を強要させることを。

喪失を肯定して嘆きを増やすことを。今の自分には到底何も出来ないことではあるが、もし、……もしも極東が動かなければ、そのとき自分は——どうするのだろうか？

「……まあ、我達が考えてても仕方がないだろう。どうせ受身にしか動けないしな」

結局のところ、そこなのだ。何を考えなそうとしても”当事者ではないのだ”三河警護隊はあくまでも第三者で、

今ここで起きている事象の当事者は武蔵とK・P・A・Italianなのだ。教皇総長の話を聞いている限りは武蔵を手に入れたら、三河警護隊も間違いなく武蔵に組み込まれて最前線へと送られるのだろう。そう考えると色々言いたくもなるが、
ともかく今はリアクションを待つ程度の事しかできない。

煎餅をもう一齧りして辛さを楽しみながら食べる。そんな様子をうらやましそうに見る隊員を見て、
懷から煎餅を二枚取り出し投げ渡す。突如飛んで来た煎餅を何とかキャッチするとそれを食べ始める。

「ほれ」

「ありがとうございます！」

「明日で極東は終わりかあ……」

「お前、殴り殺すぞ」

上の人間から下贈された物は拒否できず、受け入れることしか出来ないのが今の世ではあるが、

基本的にこういうのは大抵劣う意味を持って渡されているために感謝して受け取る。

煎餅の残りを口に入れてそれを咀嚼し、指についた唐辛子の粉を舐め取りながらも言葉を続ける。

「まあ、酒井様の姿を見る限りなんらかしらの動きを取るってのは解るわな」

煎餅を受け取った隊員達の動きがこわばる。それを見て九刻が苦笑する。

「そう警戒すんな。確かに極東は動くだろうし我らも関係ないとは言えなくなってくるだろう。

だがそれでも緊張したり必要以上に力を入れたら動きたくても動けなくなっちまうぞ？

まあ、煎餅食いながら適当に力抜いとけ？たぶん凄いいことになるぜ、今日」

階段の前で止めていた足を再び動かし始める。今まで無言だったエセルドレーダがやはり無言で後ろからついてくる。

昔から変わらないところはやはり変わらないと言っことなのだろう

か。会う回数が多い者になら少しは話すだけまだましなのか。階段を昇りながら考える。

今、極東は変わろうとしている。

あの三河の消失は間違いなく”新しい歴史”だ。歴史再現だと世界は銘打っているが自分からすれば違う。

歴史を再現するにあたって、あまりにも多くの”解釈”が入っている。敗戦を有利に進めて敗北し、勝利したはずが内容的には負けている。その時点で既に歴史との乖離が大きく進んでいる。

なのに、それでも世界を安心できる歴史に沿って進ませてきたそれを、

元信公は完全に破壊したのだろうか。

いや、破壊の途中なのかもしれない。これからの極東の動きが本当の意味での破壊の始まりかもしれない。

レールに沿うように進んできた世界がわずかばかり外れたのだ。

結局のところ、完全に同じでいられる存在などないのだ。

絶対不変は存在せず、あったとしてもそれは碌でもないことなのだろう。

エセルドレーダが昔とは微弱ながら変化し、自分も思考と人格にも変化を見せ、

そしてそれでいても世界は動き、変化し、進んで行く。動き出す流れはせき止めることは出来ない。

「流転、つてやつかねえ」

新たな煎餅を取り出しそれを齧る。とりあえずまずは教導院の内部へと入って、

そしてそこから今の生徒会が、権限をなくした生徒会の人間がどうするかを見せてもらおう。

●

やはり、武蔵アリアダスト教導院は大きくはない。

教導院中央にある橋を渡り歩き回りながらその大きさを確かめて行く。

圧力かどうかはわからないが教導院は小さく、運動をするのであればスペースが足りずに教導院の外でやる必要があるだろう。

だが、基本的に武蔵の学生とは無力であってほしいものであるからして、”こんなものか”と、どこか納得できる感じでもある。

何せ上限年齢が存在するために毎年一定の年齢の学生までしかいられないのだ、

教導院が無駄に大きくともそれは場所の無駄で、必要のない土地なのだ。故に大きくする必要もない。

武蔵の現状がわかりやすい構造、だと思う。

校舎と校舎を繋ぐ橋を涉り終えると3年梅組、権限を失った生徒会のいるクラスへと少しずつだが近づく。

今現在授業中だろうが、ただ泣き寝入りしているだけではないのだろう。

実際、酒井学長が動かないと言うことは既に誰かが動いている、こ

の場合は権限を剥奪された生徒会の事だろう。

扉を開けて校舎の中へと進入する。

校舎の中は外から差し込み日の光によって明るい。だが授業中の事も会ってか全体的に静かで、日地の気配は感じれども雰囲気若干暗く感じる。

「誰も彼もが、極東の行方でも考えてるのかね」

だが、考えるのはここまでにしようと思い、歩き続ける。

教導院内は特にこれといった宗教の色を見せることもない。向かう場所は3年梅組の教室前だが、特にこれといって急ぐ必要もない。もう少し煎餅をかじりながら進むか。そう考えていた矢先であった。

『副長！』

表示枠が出現すると同時に大きな声が聞こえる。

「聞こえるから大きな声で叫ぶな」

『す、すみません……って大変です！』

表示枠越しに聞こえてくる声は焦っていて、若干混乱しているようにも感じられていた。

こんな時だからこそ上に立つものとして冷静で、落ち着いて対応するべきだと考え静かに答える。

「同じことを繰り返すな。何が大変なんだ？」

『臨時生徒総会です！臨時生徒総会で副会長の不信任決議をしようとしてます！』

それはつまり、今の生徒会が出来る唯一の抵抗策。

極東の動きが始まる。

●

武蔵アリアダスト教導院前側棟一階右舷側にある図書室には今、いくつかの人影があった。

その図書室の奥、普段は自習用の机が置かれている場所には今あいたするように椅子が置かれており、

向かい合うように人影が揃っていた。片側に座るのは三河警護隊の副隊長大十字・本多・九刻、

小型化して犬耳を生やした走狗姿のエセルドレーダが肩に、そして梅組を”警護”していた隊員が二人背後に控えている。

それに相対するように存在しているのは武蔵の若き商人で権限を奪われた生徒会役員、

短髪商人風の学生の生徒会会計、シロジロ・ベルトーニと、そしてメガネをかけた生徒会書記のネシンバラ・トゥーサン。

そして二つの集団の立会人を果たすべくその間には、

「えー、何でここにいるかは自分でも戸惑うんですが、三要です…

…」

と、その光景全体をフレームに移せる距離を開けて存在するのが武蔵の放送委員である。

撮影用機材や通神用社務を設置し、その準備が出来たところで全体へOKのサインを出す。

つまり、この光景は録画され、現在進行形で放送されているということだ。

「それでは、現在、武蔵の警備を担当する警護隊副隊長に来ていただいたわけだが――」

「即座に臨時生徒総会の開催案を取り消すべきだ」

シロジロとネシンバラに対して九刻が椅子に寄りかかるようにする。

「言いたいことは解る。だから我はここに来た。いいか？我はそっちのクラスの中での会話、

その内容を報告として受けている」

「感想は？金にならん程度で頼む」

「Jud。感想はこうだ。――お前らの狙いはわかる。だがそれは聖連との衝突を、武蔵の危機を、そして最悪の可能性聖連との全面抗争をうむきっかけとなるぞ。そしてそれは極東の支配に繋がる」

叫びでもなんでもなく、静かに、はっきりとした口調でそれを伝える。

「いいか？三河警護隊総隊長、本多・二代とは東国最強と呼ばれる

本多・忠勝の教えを受け、

実際”武”による戦闘であれば間違いなく最強の彼女が昨夜の負傷から完全に復帰してない相手に敵わなかった。

それに加え相手には多種多様の武装、物資、そして上限年齢が存在しない。

つまり極東と比べると遥かに有利な位置に立っているのだ、相手は。だから警護隊副隊長の立場から言わせて貰おう。

——争えばまず勝てない」

そして告げる。

「武蔵は現在難しい立場にあり。そのことを考えるのであれば、——お前らは蛮勇を捨てるべきだ」

「Jud。ならば簡単だ。商談のルールに基づいて私はこう言う」

シロジロが椅子に浅く腰掛けながら視線を真っ直ぐ九刻に合わせ、こっちもはつきりした声で言う。

「副隊長いいか？私達が聖連に敗れるかどうかの判断材料はまだ我々には備わってない。故に副隊長、貴殿の意見には賛同も参考にも出来ない。そして解った。私達が判断できるのはこの状況をぬけてからだ」

だから

「私達は臨時生徒総会を開催する」

「馬鹿なことを……」

侮蔑するような言葉ではあるが、九刻のそれには”熱”がない。それはただ事実を突きつけるように言葉を羅列するようにも聞こえてくる。

「こちらには対抗できる力がない上に、相手には物量まである。彼我の戦力差を膨大だぞ。一体どうするつもりだ」

「では確認しよう。この商談のテーブルにないものを」

一拍の呼吸をおき、シロジロが言葉を続ける。

「君らが戦場という商談で出した最高の力とは、何だ？」

「それは——」

答える前にシロジロが答える。

「君らの長、それが君らの最高の商品だった。そうだな？」

だが、

「その商品は本当に、最高だったのか？」

「——当然です!!」

九刻が答えるよりも早く背後に控えていた女性の隊員がシロジロ

の言葉に答える。

その顔は若干赤くなっている。おそらく怒りか羞恥か、どちらかなのだろう。

だがこういうテーブルでは熱くなることよりも冷静でいることのほうが大事だ。

片手で背後にいる隊員へと落ち着くように示す。

「我らの総隊長、彼女の決め手となる速度。それはあの状況で確かに最高のものだった。

だがその状況から、負傷の癒えていないガルシ……ガルシア、……立花・宗茂はそれを上回った。

負傷が癒えた時の事を考えるとアレ以上の速度を繰り出すことも可能なのだろう」

いいか、

「近接戦闘では速度が勝利の行方を支配するといっても過言ではない。

あらゆる攻撃を防ぐ防御を持っていようが防御するより早く動けばいい。

一撃で全てを滅ぼす一撃を持ってようがそれが放たれるより早く動いて断てばいい。

速度は近接戦闘での生命線、総隊長の速度が超えられたということは総隊長は今度背中を取られる可能性があるということだ。解るな？」

「Jud」

理解したといわんばかりにシロジロが頷いた。

「では、——総隊長は武器を使っていたのならば？」

「それは——」

女性隊員がその言葉でつまり、頭を下げる。ここでやっと頭が冷えてきたようである。

元々ここは九刻とシロジロがメインの話し合いである。他所の介入は無粋だろう。

「仮定の話ではあるが、敵わなかっただろう」

「何故？」

「総隊長の持ち武器にて最強といえるのはおや……忠勝様が持っていた神格武装・蜻蛉切だろう。

そして昨夜、ガル茂……ガルシアはそれを用いた忠勝様と勝負して静観している。

故に、我は言おう。忠勝様より未熟な存在が勝てる道理はない、だろうと」

危ない、と内心では思う。会話の流れではなく会話の途中でたまに素が出てきそうで困る。

やはり自分と言う人間は交渉などの政治よりの人間ではなく戦場ヒヤッハアーしてる方が楽だと、そんな事を考える。

「その娘のレベルではガルシアには追いつかないと？」

その問いかけに即答は出来ない。自分の妻にの”武”には誇りを持っている。

だが今いる自分は”副隊長”なのだ。故に、

「お前らを説得するためであるのなら言おう——Jud」と

「では君達が加勢したのならはどうだ？」

「——」

シロジロの言葉に息を詰める。それは極東の武士としては恥じるべき行いだ。

「それは卑怯な行いだ。極東の武士としては認められないな」

そうだろうね、と賛同したのは今まで無言だったネシンバラであった。

彼は部屋の中の視線を集めると、しかし動じることもなく走狗と表示枠をだした。

「でもね？鎌倉幕府があつた時代はそうだと思う。今でも戦場における名乗り風習はあるけど、

主体は乱戦だよ。二度の元寇と応仁の乱における正成公のゲリラ戦術がブレイクスルーとなつて、

今では遠距離武器での狙撃もあり、そんな時代だよ？P・A・OD
Aは鉄砲隊をそろえているし、
スウェーデンのグスタフ王もそんな戦術で結果を上げてるよ？」

そして、

「そのグスタフ王は戦場の流れ弾で死んだ。今では王ですら乱戦中の流れ弾で死ぬのが最先端だよ？」

——何で君たちは最先端に乗らないんだい？」

「待て」

ここで九刻が一旦ネシンバラの言葉にストップをかける。この会話の行方はおかしいと。

今は戦力の話をしているのに何故か外国での戦術の話になっている。しかもスウェーデンやP・A・ODAといった関係のない国の。

「今ここでP・A・ODAやスウェーデンという他国の話が出るのは——」

「貴殿は、勘違いをしている」

ジロジロはここで、体を前に身を乗り出した。肘を膝につけるようにして上目遣いに九刻の目を覗き込む。

「私達は^{ツァーク}Tsirsch系譜国との全面戦争はおるか、P・A・ODAや他勢力との全面戦争も視野に入れている。

最悪の場合、世界の全てが敵に回されるということも、だ。なぜならば——昨夜の元信公の言葉を覚えているな？」

「J u d .」

忘れるわけがない、三河の最後を、自分の父の最期を。

「大罪武装を所持したものは末世を左右する力を得る、と」

解るか？とジロジロは問う。

「大罪武装を”集める”のではない、”手に入れる”と元信公は言
ったのだ。

商人の観点からとも言わせてもらえば、それは各国が危機に対応す
るために大罪武装を持ち出し一箇所に集まることではなく、

各国が大罪武装を奪い合い、——…誰かが全てを所持する必要
があるという事だ」

ならば、

「——近いうち、極東は世界規模の戦乱を得ることとなる」

第十三話 胎動の音（後書き）

そんなわけじゃほじ第十三話をお届けしました！。

ホニメも始まったところで色々と諦めて週1更新になるかもですね！。

地味にこの時（生徒総会決心）が全裸の初全裸でしたっけ。
全裸マジ全裸。

さて、毎回の事ですすが若干時間が加速気味ですが、
原作であった副隊長とシロジロの”商談”ってやつですね。
第1巻のファイナーレへと刻一刻と進んで行くこの物語、
ホニメに追いつかれないように頑張りたいです。

さてさて、今回のポイントは九刻が”旦那”としてではなく、”副隊長”として、
なるべく冷静に頑張ってるところでしょうか。とか言いつつ化けの皮剥がれてるぞー。
おーい。ガル茂って言うてるぞ九刻ー。がんばれー。どっちももげろー。

最後に、ホニメのシロジロや点蔵の声がかっこよすぎてフィタ。

それでは今回は”商談”前半戦です。次回は後半戦なので、
それまで乞うご期待、——拍手ー。

第十四話 教えられ、支えられること（前書き）

study ● 臨時生徒総会開催にあたっての、警護隊の介入●

トリー「姉ちゃん姉ちゃん！ぶっちゃけ守銭奴の会話が難しすぎてついていけねー！」

なあなあ、アレって何の話してんの！やっぱエロゲーの販売か！」

喜美「ふふふ、エロゲ弟！簡単に言えば臨時生徒総会を止めにしたのよ」

トリー「あ？中間管理職が何で？」

喜美「そうね、簡単に言うと”中間管理職だから”でしょうね。

今、三河が消滅しちゃったせいで武蔵も残った三河の人たちもピリピリ

してるでしょ？だから警護隊が間に入ってクッションになってるのは

しってるわよね？つまりクッションとなっている警護隊がでること、

聖連から貰うペナルティーや圧力を肩代わりや減らしてるのよ。

他にももちろん武蔵が不利にならないようにと思ったり、臨時生徒総会が失敗した結果極東が完全に聖連に飲まれる

こと、

それを見越して考えているのだろうけどねえ」

トリー「副隊長のやつからは面白そうな匂いがするぜ……！」

喜美「話を聞けよ」

来た
始まる

さあ、動き出そう
配点（教え）

第十四話 教えられ、支えられること

シロジロは副隊長と、その背後にいる二人を見た。その2組の動きは対照的である。

副隊長は全身には力を要れず、あくまでも緩く、それでいて何時でもすぐに動き出せる体勢をとっており、

対照的に後ろの隊員は体を硬く、息を殺すように身を硬くしてこちらを見つめている。

副隊長の判断は簡単だ、こちらの言葉の全てを聞いて、それから判断しようということなのだろう。

……だが、まあ、今の話は、大体の所、誰もが予測はしていたことだろう。

警護隊という戦闘系の組織ならば、こういう話は既に確認しあっていたはずだ。

だから、簡単にはこっちに乗ってこない。そして、だからこそ、シロジロはこの相手が大事な相手だと思う。

もし彼らがこちらへと来るのであれば、それはつまり”全て”を理解してこちらへと来ることだ、と。

利害を理解し、一致するパートナーは、商売をする際にもっとも裏切らないものだ。

ゆえに、シロジロは言葉を続ける。

「聖譜記述に従えば、今後欧州全土を巻き込んだ三十年戦争が展開し、中東ではオスマンが欧州や印度方面への進出を起こし、中東では清勃興し、露西亞は西征を開始する。」

そして極東では、——織田、羽柴、松平と続く極東の統一戦争が生じる」

解るか？とシロジロは言う。

「大罪武装を奪い合うための大義名分は存在する。”聖譜記述に従い、歴史の制限としての戦争を行う”という最大の理由がな。

そして世界各国は自分の歴史再現を極東側の事情で疎外されたくも介入もされたくもない。だから……」

「……ホライゾン姫を自害させ、聖連は極東の権限を奪取する、か」
Jud.とシロジロが答える。同時に、ここからだ、と思う。

「既にP・A・ODAは羽柴を使いM・H・R・Rを支配し始めている。この意味がわかるか？

これはつまり、P・A・ODAとM・H・R・R、羽柴の連合軍が出来つつあることだ。そしてそれは三十年戦争を理由に激突するだろう。

それに対して聖連は権力や戦力を集中する意味でも武蔵を欲しがる。何より、羽柴を壊滅へと追い込むのは松平だ。その決定権を聖連は何よりもほしがらるだろう。

これから、そういった戦乱を利用し大罪武装の奪い合いが起きるだろう」

「故に——姫、ホライゾンを、極東は大罪武装として所有すべきだ、と？」

だがなあ、それは理想論だ。確かにホライゾン姫の自害を阻止すればそれは極東、武蔵に大罪武装を所持させ、その事によってP・A・ODAや末世に対する決め手にはなる。だ

がな、やっぱりそれは理想論だ。

極東がキャスティングボード得られるとしても」

そこで副隊長が何かを振り払うようにして頭を振る。

「大体、どうする気だ？ 聖連との全面戦争の可能性のほかに武蔵の運用、

ホライゾン姫の自害を止める理由、他にも問題は山済みだ。見たところ今見ている問題も冰山の一角だろう。

それだけの問題と弱点が武蔵にはある。それらを全てどうする」

「それら全ての答えを得るためにも、……貴殿らの協力が必要だ」

「何故」

その問いかけに、内心でシロジロは頷いた。これで、やっとこの”商談”は動き出すのだと。

決して三河警護隊の戦力も、その考えもバカにしない。警護隊は今、武蔵に必要な力だ。

そして話し合った警護隊がこちらに力を貸すということは、完全に理解し、こちらで戦う事を決意した時だ。

話は少しずつだが、こちらのペースへと引き込めている。最初は総隊長の劣勢を、そこから話を少しずつずらし、

武蔵の、姫・ホライゾンの話へと移してきた。ここで一気に利害を一致させ、

お互いに必要なパートナーとして認識させることで味方とする。

ならば、これは取引だ。

シロジロは確信する、今の極東は二択の選択を強いられていると。

進んで撃墜するか、

進まず掴まりそこで腐らせられるかを。そして警護隊を問うているのだ。進んで安全である保障が欲しい、と。

だから身を前に乗り出す。ここからが本当の勝負である、と。

「学生と相対できるのは学生のみ、だから暫定議会と王は私達に対して唯一権限の残った副会長を送ってくる。

この副会長は暫定議会側についてはいるが、——おそらく極東の中で、有数の政治系能力を有している」

「……その副会長とは、本多・正純、だな？」

それは副隊長の絞り出すような声だった。それは昔の、個人的なつながりを示す言葉だ。

「……知ってるのか？」

ああ、と副隊長が深く腕を組みながら答える。

「元クラスメイトだ。……国学ではいつもトップだったよなあ、アイツ」

そうだろうなあ、とシロジロが呟く。それを理解したうえで床を、教導院を指差す。

「アイツをどうにかしてこちら側へと引き込む。そして学生の代表として」

「として？」

「聖連と対決する」

この言葉は副隊長へとではなく、放送委員の撮影機材へと意識して話す。

この言葉が機材を通し武蔵全体へと広がれば良いと、そう思いながら。

「今の副会長は、聖連側についた王と暫定議会の手先だ。だが、それは聖連側の弱点も知っているということだ。

だからもし、好く怪鳥と相対し、こちらの側につけられたのであれば――」

●

武蔵館内、放送委員のを通じて人々は様々な場所でシロジロの次の言葉を聞いた。

『聖連の言い分を覆せる人材が、私達の仲間になるということだ』

解るか？

『向こうが絶対に正しいのなら、これからの臨時生徒総会で副会長が勝って終わりだ。

だからもし私達が副会長に勝つならば、――聖連も負かすことも可能であるっ』

●

背後のネシンバラを指し、

「こちらのネシンバラはウザイぐらいの歴史オタクで救いようのない厨二病患者だが、
それでも歴史知識に関しては右に出るものはいないだろう」

「おい」

「そして私はこう見えても武蔵の商工団の幹部を勤めており、出雲との付き合いもある。ここに政治系能力者の副会長が入れば、
大体の問題は検討可能だ。それだけの力を持ってホライゾン姫の奪還と、その後の処理について判断を下し、

そこで私達の望むものが得られればよし、できぬのであれば――
私とこのネシンバラを吊るせば良い。暫定議会と王はそれをもって
”武蔵内の問題”として済ませるだろうから、

……君達は、いずれ来る戦乱と極東の消滅の際、武蔵の住人を少しでも守ってくれればいい」

「つまり、”最終的な判断はこの後の臨時生徒総会を抜けたからに
してくれ”つつてるんだよな？

暫定議会の手先となっている副会長との相対に勝利できるのならば
聖連にも話は通せると、
そついうことだよな？」

「J u d .
」

その言葉に頷く。卑怯で先延ばしにするような言葉だが、

「今暫定議会と王はおそらくもつとも安全でいて、しかし緩やかに店をたたむことを望んでいる。

対し、私達が望むのは店をたたまない可能性を探ることだ。私も商人なので不可能と可能の境界線の線引きぐらい出来ている。

もし暫定議会と王との相対で損得が損へと傾くのであれば乗るつもりはない。そしてその時は、

私に商売を見切る目がなかったと言うことで、吊るされることもやむなしだ」

シロジロがそう言い、その言葉に前方の三人が頷く。だが、それによしとしない存在がいた。

「駄目です!」

声。女性の鋭い響きが、図書館全体に響くように発せられた。

その音源はすぐそば、2グループの中間を座るようにしていた女性だった。シロジロがそちらを見ると、

三要が、顔を赤くして眉尻を立てながら、

「——さっきから、つ、吊るされるなんて、簡単に言うものじゃないです!」

●

あ、やってしまった、と、三要はそう思った。

校則法で学生に相対できるのは学生のみ、それゆえに教師により介入は許されないのだ。

だが、思う。これは抗争の問題ではなく、生徒の考え方の問題であると。だからこれは校則法には引つかからず、問題のない発言であると。いけない、そう思いつつ熱は収まらない。そのままシロジロとネシンバラのほうを見る。

「何かをするために死んでもいいだなんて、……そんなやり方を真喜子先輩は教えましたか？

先輩がいつも朝や放課後に、町をぶっ壊して校舎内駆け回ったり、”ハイ今日のお題は国家転覆”なんてこっちがビビるくらいデカイ声で危険な議論してるのは、死ぬためじゃなく、生き延びるためでしょう!？」

だから、

「な、何かするのは別に、その、かまいません。教員は、君達が争ったら、……何も言えません。

でも、私達は生きていくために必要なことを君達に教えているつもりです。それを、死んでも良いというのなら、

……私達の教えていることと、君達が教わりに来ていたことはなんですか？——生きる方法を、死ぬために悪用しろといった憶えはないですよ!」

叫び、息をついて、腰が上がっていたことに気づいて椅子へとおろそうとして、

「あ

目じりから涙がこぼれた。

泣いてはいけない。それは大人の、教員が学生へと見せていいも

のではない。袖で目尻を拭い、こぼれた涙をふき取りそれを隠す。

「もしも……もしも君達が私や真喜子先輩の教え子なら、空を見上げたときに、世界はどうなっているのかな、と思ったり、歌を聴いたり本を読んで心を動かしたり、お金を数えて買い物したり、バイトでちゃんと挨拶したり、——明日もまたどうせ同じだろうけど、

夜の外を見れば、点いてるどこかの窓の灯をに誰かを思えたりと。そういうことをずっと続けられることを、最低限と、そう考えて欲しいです」

自分が真喜子先輩のように生きて行く知恵を授けるのはむずかしい。出来るとは思えない。

だけど、だからこそ自覚して欲しいことが一つある。

「そのためにも、……死なないこと。絶対に、自分で自分を殺さないこと。——それだけは覚えて欲しい」

そこで言葉が止まる。果たして自分は本当にそういうことを十全に教えられたか、

それを生徒に守らせられるか、そういうことは未だ解らない。だから授業で教えられることは教えてきて、

そして”抗争”というこれからの結果でしかその成果を確認するこ
としかできない。それでは遅いのかもしれない。

そこで、自分の袖が乾いて、目尻に涙がないのを確認し、顔を挙げて正面を見る。

そこには沈黙し、やや俯く姿のシロジロとネシンバラ、そして警護

隊の姿があつた。

「あ」

またやってしまったと、そう思った。再び立ち上がり両手を振って去ろうと、

「あ、いや、やっぱりその、先生が邪魔というか——」

歩き去ろうとした瞬間、

「だとしたら——」

副隊長の背後、線の細い男性隊員がこぼす。

「自ら死を望むことを必要とされる姫ホライゾンは、……なんなんでしょうね」

言葉を失う視線の先、ネシンバラが頷く。

「少なくとも、——武蔵アリアダスト教導院の教えに背いているようだね？」

●

J u d 、とその場にいた全員が頷く。九刻もその教員の言葉で背後にいた隊員の心が固まるの感じた。もとより、自分は元々姫を救い出す方に心としては傾いていた。だ

が人は立場によってはその意見を曲げざるを得ない。

この場合、”三河警護隊副隊長”という立場、その責任が安易な行動を許さない。最低でも三河の住人を納得できる、それだけの行動を示さないといけない。

「彼女は、我が校の生徒ではない。我が校のポリシーに準じる必要はないが――」

その言葉をネシンバラは完結させた。

「じゃあ、きちんと教育の受けてない姫を、聖連は連れ去ってもいいようにしたとも言えるよね。言いがかりだけど」

生徒でもなければそう親しいわけでもない。だが、それでも、”彼女”には救いたくなる何かが存在するのだろう。

実に汚い。言いがかりも言いがかりだ。だけど嫌いではない、嫌いではないと思う。

シロジロが立ち上がり、一步前へと出る

「――姫はあらゆる可能性を知らない。少なくとも我々が知る最低限”すら知らないどうだ警護隊？」

その姫を救うために、……あらゆる可能性を知ろうとは思わないか？」

「卑怯な話だ、まったく」

呆れを含んだ声を出すも、自分の口の端がつりあがっているのを九刻は感じる。今、確実に感じている。

世界が動いてるのを、少しずつだが世界が前進しているのを感じる。

まだ小さい、最初の一步だが、
極東が動き出す最初の一步、その最初の”壁”になれたことに小さくもながら、感謝する。

だから、応じるように立ち上がり一步前へと出る。

「まったく卑怯な話だよなあ、……最後に教員の力を借りるとはな
これで計算してやったのであればかなりの悪人だ。

「無料だぞ？ 商売のセンスがない教導院だろう、ここは」

「Jud。」

頷き、肩を震わせながら苦笑する。

「だが悪くない。まったくもって悪くない。むしろ良い。だから、
確実に見届けさせて貰おう。

我は動けんし、二代も今は動けない。我々を動かしたければ副会長
を説き伏せて見せる。

その場、その決闘をもって我々三河警護隊は武蔵の盾となり、矛と
なる。何が極東にとっての最善か、

それを是非とも見せて欲しい。それにもしそれがかなわなくてもさ

――」

口調を交渉等の硬い口調から、身内や味方へと向ける砕けた口調
へと少しだが、シフトする。

同時に目の前の生徒会会計へと手を伸ばす。

「暫定議会と王に”吊るすのは勘弁してくれ”と、一緒に土下座ぐ

らいはするぜ？何せ、——こんな商才の無い商人を信じてしまった我が悪いんだろっからな」

その言葉にシロジロが頷き握手を返す。ここに契約はなった。武蔵が、権限を剥奪された生徒会が副会長に対して勝利すれば、それはつまり武蔵の主張が聖連に対して通ることを証明し、未来を、可能性を証明できることの証。

それに対して三河警護隊は全力で力を貸すことである。

だがこの決定の余韻も長くは続かず、

「副長！」

交渉が行われていた窓が外側から開く。そこから隊員が焦った表情で身を乗り出してくる。

表示枠が現れないのは肩で様子を見ていたエセルドレーダに頼み邪魔が入らないようにしてもらっているためで、

そのため緊急の情報はこうやって口頭で伝えるようになっていく。

「——武蔵の副会長がこちらの方に向かっていくとのことですが！しかもその、どうやら他二名が合流するとかで、情報が若干錯綜しているようですが、どちらも有力者らしいです」

「有力者？」

それを聞いてまず最初にリアクションを起こしたのはネシンバラだった。

「うわ、あの二人が本多君に合流するんだ」

「あの二人というത്？」

「Jud……うちの教導院でおそらく最高ランクのパワーキャラ」

そういわれて真っ先に想像するのは筋肉がかなり発達している益
荒男だが、

そんなキャラが武蔵の生徒会か総長連合にそういう話しは聞かない
から、たぶん違うのだろうと思う。

だがそうとしている間にも副会長はこちらへと向かってきているの
だろう。肩の上で大人しくしていたエセルドレーダに対して労う意
味も込めて頭を軽くなで、

目の前に表示枠を手の一振りで出現させる。

「エセル、警護隊全員に通じるようによろしく」

この間にも放送委員は対決場所になるであろう次の場所へと向かう
ために撮影機材を運び出していた。

だが、エセルドレーダの反応は無い。

……？

そのことを怪訝に思い、声が聞こえなかったのかと思いもう1回声
を出す。

「エセル、通神を頼む」

何時もならすぐにある返事が無い。どうしたのかと思うと、

「おい、大丈夫かその走狗？——何かトリップしてるぞ」

恍惚の表情を浮かべて固まっていた。今日は比較的にまじめに働いていたから大丈夫かと思っただが、
とんでもないところで痴態を晒しやがったと思いつつ、走狗化している精霊の頭を掴んで窓の外へと投げる。
そのトンで行く姿を確認せず、そのまま手動で表示枠を操作していく。

「全員先ほどの放送には耳を傾けていたな？必要最低限の人員を残して全員——ああ、シロジロ・ベルトーニだったか？」

「シロジロでもベルトーニでも好きなほうでも呼べ」

「おう、ならベルトーニ、どこでやるんだ？」

「急に気安くなったなあ、貴様」

「金がかからないから良いだろう。たぶん芸風に慣れたただけだ」

「それもそうだな、……場所は校舎前の陸橋だ」

「聞いたなてめえら？必要最低限の人員を残して全員集合だ……返事はどうした！」

『Jud・!』

勢いの良い返事が表示枠を通して聞こえてくる。練度もそこそこ良いと思っているので、

陸橋に集まるまでそう時間はかからないだろうとなると後は武蔵が勝利した場合の準備とまけた場合の準備、

あとは王の護衛についている二代だが、最後の二つに関しては十全ではあるが、消失してしまった三河の屋敷に小道具を置いていたために、

今の装備では若干不安がある。シロジロのほうへと向く。

「確か武蔵の商工団の幹部だったな？」

「Jud・オムツから墓石まで何でも割り増しでそろえて無理矢理売りつけるのが得意だ。

走狗は投げっぱなしだがいいのか？」

窓の外に放り出したエセルドレーダは未だに夢の世界へ旅立ったままだった。

「今日は大丈夫かと思ったらダメだったってだけだ。それよりも、買いたいものがある」

その一言でシロジロの目の色が変わった。両手を合わせて手を揉みながら頭を低くする、明らかにさっきまでの交渉人の雰囲気ではなく、完全な商人にへと変貌している。

三河でもそれなりに商人との付き合いがあつたが、まさかここまで露骨に態度を変えてくる人間がいるとは思わなかった。

武蔵の商人スゲエ……！！

内心戦慄しつつも話を進める。回りにはあまり聞かれたくないために少しだけ声の音量を減らし、

「医療にも使える飛針を三千本、用意できないか？」

「少し待て」

とシロジロが片手でせいし、待たせる。即座に表示枠を出現させて確認を開始する。

「どうだハイディ……む、そうか。三千本でいいのだな？」

「ああ、頼む。武蔵のほうに金を預けているから出来たらそつちら金を取ってくれ。まだできるはずだよな？」

「そこらへんは問題ない。あくまでも剥奪されているのは会計としての権限だけで、商工団の幹部としての活動は可能だ」

なるほど、つまりそこらへんが臨時生徒総会での武器にもなるのだろう。教導院の生徒会に所属しているとは言え、

それだけにのみ所属しなければいけないというわけではない。目の前の会計のように別の仕事兼任してもいいのだ。

大体は部活などをしているものだが、この男のように商売に通じるものは会計としては多い。

と、なれば、この男の一番の武器は”経済力”なのだろうか、と思う。

「在庫にあるのを根こそぎそちら所有の倉庫へと移しておいた。値段は――」

「必要な分だけ抜いといてくれ」

「無用心ではないか？」

「これから仲間になるかもしれない相手に一々警戒なんてしてられるか——と、もう一つ忘れていた」

「何だ？」

権限を剥奪された会計がこちらを向く。やはり準備をするのであれば十全にしておきたい。

武蔵には金を預け、貸し倉庫を借りているだけで殆ど何も物を置いていない。三河の屋敷に置いておいた為にこうやって今買い物するはめになっている。

もしものときは鬼械神で暴れるつもりだったが先行きが段々と見えなくなってきた。

少なくとも、臨時生徒総会が終わった後でも遅くは無いはずだ。

と言っても一人で暴れてもどうせ武蔵のせいとかになるので暴れた方が実は状況が悪くなるのではないかと思つてたりもする。

結論、準備はしっかりしておきましょう。

「蜂蜜酒……あと純銀は無いか？出来たら加工できる職人も。臨時生徒総会が終わる前に揃えば良いから」

「純銀？ 何を作りたいのだ？ アクセサリーか？ 末世に向けてフラグ建築とは恐れ入るな。アクセサリーなら当商会でもいろんな種類を扱っているぞ！

首輪からチェーン、拘束具と何でもあるぞ！」

「フラグじゃねえしそれはアクセサリーでも何でもねえーよ！鍵だ

よ！鍵！」

その言葉にシロジロが頭を傾ける。

「鍵？」

「ああ、純銀の鍵だ。私の最終手段の一つか、秘密兵器だよ」

苦笑とともに始まる、武蔵の行方を決める一戦が、もうすぐ。

第十四話 教えられ、支えられること（後書き）

そんなわけで今回は本文が8000文字という超短い結果でしたが、さあて、警護隊をひとまず退けた臨時生徒総会の行方やいかに、つて所ですね。

ぶっちゃけると、警護隊自体はホライゾンを救いにいくことを賛成でしたが、

完全に納得できるわけは無いので、この交渉を通して全体を納得できる言い分、

それを見つけて納得するのが一番の目的だったなあ、と裏設定をここで提示してみたりする。

さて、飛針を用意したり銀の鍵や蜂蜜酒、

九刻本人も先に感じる”戦乱”の空気を感じ取って色々と準備を始めてますね？

ここでちよいと皆さんの意見を聞きたいとか思ってたたり。

襲名で自害する人を無理矢理襲名させることで弱体化とか、現場からの早期退散とかを狙えますよね？

そんなわけで盲目の邪神ハンターを”仮”襲名、

襲名条件は揃ってるけど次期が来るまでは名乗れないとかで、某盲目の邪神ハンターを名乗らせたいとか考えてたり。

でもまあ、それとは別に普通に襲名でもいんじゃないかねとかも考えてたり。

だって神話とか物語（里見八犬伝）が再現される中で、クトゥルフ関係の再現できそうなのウチの子ぐらいだし。

とまあ、やる夫でデモベを見てて教授のかっこよさを再認識した頭で考えてたり。

さてさて、次回からはいよいよ臨時生徒総会。

いよいよ始まる武蔵の”内乱”。これを抜ければ聖連との衝突、と、こっから力ワカミンの大量放出名バトル&交渉の連続です。

感想がふえてきているのを見てニヤニヤしながら今回はこれまで。それではさようなら！

第十五話 臨時生徒総会？（前書き）

そうだ

見るがいい

これこそが万物に通ずる

金の力なり

配点（財力）

第十五話 臨時生徒総会？

臨時生徒総会、権限の剥奪された生徒会に対して相対したのは三人、

生徒会副会長であり暫定議会と武蔵王の手先、本多・正純、総長連合の第六特務直政、

そして第五特務ネイト・ミトツダイラ。権限を剥奪された生徒会に対しこの三名はおのおの違う理由を持ち、相対する。

一つ、自らの行方を思つて。

一つ、自らの役目を思つて。

一つ、武蔵と世界の行方を思つて。

この相対において一番槍を振るつたのは第六特務直政であった。

彼女はその役職上、武蔵の機関部を纏め上げており、

実働とは他に一、機関部の人間として生徒会の生徒達に問うた、

自分達はもとより教導院側であると。聖連に武蔵を取り上げられれば自分達は仕事場を失うと。

だからと言つて無条件で加担すればそれで武蔵が沈んだら自分達は職を失うだけではなく命まで落としてしまう。

故に直政は機関部の代表として前に出た、その証明を見せてみると。

結果、元会計が前に出た。それは金で買える安心と信頼であると。

そうやって最初の対戦カードは組まれた。

機関部の代表第六特務直政と、そして武蔵の商工団幹部シロジロ・

ベルトーニ。

その激突は文字通りの激突を起こした。それは、直政の提示する証明の中に、

これから武蔵が世界と相対するのであれば重武神級の武神と戦う機会があるので、それに対して力を示せとのことであつた。

それに対して、シロジロはハイディの仲介をかいし、あることを行つた。

「警護隊副隊長、以下百五十名。——警護隊としての力を”レンタル”している」

警護隊の面々は全員自らが契約している神を通し、元会計であるシロジロ・ベルトーニに対して、

自らの労働力をレンタルさせる契約をしている。時給発生ではあるが、大量の金銭の通る契約でもあり、

全員が大人しく正座していた。全力で武神と殴り合っているシロジロではあるが、その負担などは分割され、

警護隊全体へと”労働力”として移っているのだ。そのためシロジロは警護隊全員の重量と腕力を集め、直政の重武神”地摺朱雀”を相手に一步も引かず、

近接での戦闘を繰り広げ武神へと対抗できることを証明しながらも直政の問答へと返答して行く。

全ては、金で解決できる問題であると。

同時に、この状況は商売のチャンスである、と。

戒律の問題上T s i r h c教譜、ムラサイ教譜も利子収入のための金融業は禁止されているのだ。共に、”働かざるして収入得るな

かれ”の教えからくるものである。

だが、極東ではその戒律がない。極東で一番メジャーである教譜にはそのような発想はなく、それでいて異端でもないのだ。

故に、Tsirhc教譜国やムラサイ教譜国は極東の居留地に銀行を作することを指示した。しかし、三征西班牙等を初めとする多くの国々は、

極東の暫定支配と歴史再現のために、その多くの費用を極東の金融業に”借款”として借金しているのだ。特に三征西班牙では歴史再現の名目で二度の破産宣告を終えており、

さらに三度目の破産宣告がまじかに迫っている。その他にも三十年戦争の到来により物価や軍備の充実で値段が高騰化する国はどれも借金をする。

極東の銀行から金を”借款”として借りて。

そして、極東が完全支配されるということは、その全てが踏み倒される。

これがどういう意味かというと、極東の銀行には他国の投資家などだけではなく、もちろん居留地に住んでいる人間もいるのであって、そういう人が預けている金もある。

そして借金を踏み倒されれば奪われるのは貸し出した金だけではなく、居留地に預けている一般市民の金でもあるのだ。

シロジロが語るには既に居留地での銀行口座の凍結は行われており、口座からお金を動かすことは不可能になっている……つまり、金を簞奪される前の状態なのである。

だが、現在唯一それが行われていない場所があり、それが武蔵。

現在神社の奉納を通し外熱拝気が武蔵へと送られ、それを受けて武蔵は最大の燃料庫と、そして世界の金融関係が一手に集中する銀

行となっているのだ。

ホライゾン・アリアダストが処刑されればそれも全て無駄に、

武蔵が飛び続ける限り極東は終わらず、その抵抗の意思を示せるのだ。

●

「——つとまあ、テンション上がってヒヤッハーしてる狂人の発言を解りやすく解説するとこんな感じかと」

「おお、悪い悪い。やっと理解できたぜ！」

「気にするな。そつだ、唐辛子煎餅食うか？布教用だが」

「おお、食つぜ食つぜ！」

「いや、その前に違和感なく混ざってるこの方に関してツッコミはありませんの！？」

アリアダスト教導院の前、橋の上にはいくつかの人影がある。そこから左舷前側を見ると、

朱色の姿が暴れまわっているのが見える。何か小さな物体に対して戦闘を行っているのは直政の地摺朱雀で、

その相対者であるシロジロとの戦闘だろう。

そんな陸橋の上でその戦闘の様子を眺めるのは2グループに分かれている。まず正純とナイト・ミトツダイラ、

生徒会で権限の残ったものと臨時生徒総会、ひいては姫ホライゾンの救出に意義を持つものと、

その後ろにハイディとトリーを初めとするホライゾン救出派の生徒が集まっていた。そんな3年梅組の集まりの中、

一人だけ違う制服姿の学生がいた。指摘されたことに気がついた青年がおおつと、と言葉をもらし布教用と書かれた袋から唐辛子煎餅を取り出す。

「三河新・名古屋城教導院3年生及び三河警護隊副隊長、大十字・本多・九刻だ。

副隊長の本多とか、大十字の本多とか、嫁を愛しすぎる本多とかそんな感じに覚えてもらえると助かるわ」

「ツツコミ所が多すぎてどうにもできませんわ……！」

まあ、まあ気にするな、と言葉を発してから布教用と書かれた袋から唐辛子煎餅をもう一枚取り出し、

「食べる？」

「要りませんわよ！」

「残念」

取り出した煎餅を齧り始める。その様子を背後で見ていたネシンバラが一步前に出る。

「単刀直入に言うけど——何やってんの？ さっきの会議は？ 感動は？」

「A・煎餅食って観戦。過去は投げ捨てるもの。感動なんてなかったと、

ぶっちゃけると副隊長としての我は極東の事を考えたり隊員の給料や明日の職を考えたりしなきゃいけないけどよ、

俺個人としては全国ネットで恥じかかせやがったあのイケメンフェイスを秒間100発は殴りたい気分だな？

——ぶっちゃけ暴れる理由欲しくて欲しくてしょーがねーのよ」

「ぶっちゃけたなあ！」

ほぼ全員が声をそろえてツツコミを入れると煎餅をかじりながら笑い声を上げる。

そこで会釈するように片手を上げると。

「まあ、我個人は味方だつてことさ。そして隊員全員が”個人”としては味方だよ」

視線を陸橋の上に向けると、そこには列を成し、不動のまま正座し続ける警護隊員の姿がある。

一人ひとりが身じろぎもせずずっと耐えている様子の中、その列の間を何人かの隊員が歩きながら、

疲労軽減の符を貼って疲労を抜き出している。隊員の一人とトーリの視線が交差する。隊員がニカツ、つと笑みを浮かべると目を閉じて再び不動のまま動かなくなる。

「つとまあ、見ての通り武蔵の方針が完全ではない以上協力できる最大限はここまでだ。これ以上は会議通り」

陸橋の前方、男装の女生徒を見る。彼女は九刻が現れたそのときから一言も言葉を発しておらず、

言葉に迷っているようで切り出せてないような雰囲気がある。その生徒、本多・正純を見ながら、

「あの貧乳政治家を説得しちゃってくれ。ああ、しかし本当に小さいなあ……可哀想に」

「数年越しに出会った友人に一番最初に継げる言葉がそれか貴様あ！……！」

直後顔面に右のストレートが突き刺さった。

●

しまった、とそこで正純は思ってしまった。会議中に一方的に暴力的な手段をとってしまった事は弱みになると、やっではいけないことだと思つと同時に、

……変わってないなあ。

数年来の友人の性格がまったく変化してなかったことに安堵する。正純の知る本多・九刻と言う人間との初の出会いは遠い昔、まだ小等部前の話だ。

その頃はまだ迎えられたばかりの少年と言う年頃で、名前も本多の名はまだ得られていなく大十字・九刻だけであった。だが始めてであった時は、

何処か余所余所しかったよな。

あの頃の記憶は大分昔の話だ。故に大事にとっておこうとしても成長し、政治の話に耳を傾けたり、

将来に向けて勉強をしたりと、そういうことのために脳を割こうとして行くうちに自然と忘れていってしまうものだ。

だがあの頃の九刻の姿は今とは大分違ってたと思う。覚えてる分ではあるが笑顔でいたように見えるがその内、どこか周りとは一線を引いていたように見える。

そう感じなくなったのは何時だったのか、どうしてだったかと言うのは思い出せないが、

今日の前でバ力をやっている警護隊の副隊長は、自分が三河の教導院に在学時の時の雰囲気から変わりはない。

もちろん何かを隠しているのであればそれは解りはしないのだろうが、それでも見た感じ変化はない。

ならば、やはり彼は敵なのだろう。変わってないのだから。

安堵すると同時に自分が良く知る人物が敵に回る悲しみを感じる。小等部、中等部と、特に襲名関係の時は世話になった。

だがやはりあの事件にを機に若干話しづらくはなっていた。そう思えるところの事態も喜ぶべき点があるのだが、

一国と多くの人々の生活、何よりホライゾンの処刑の前で素直に喜ぶ気持ちはいない。

二代は武蔵へと自分が移るときに”どうかここへ来なかった夫を許して欲しい”と言ったが、

先ほどあった彼女はますます綺麗になったなあ、と思うと同時に許すも何も自分が一番嫌に思っているのは――

「――シロジロが決めるわね」

両手を胸の下で組み、その豊満な胸を強調するように支える葵・

喜美が視線の先、

煙や朱色の武神が舞う町のほうへと視線を向けながらそう言葉をこぼす。

いけない、また思考に囚われ周りが見えなくなっていた。気をつけべきだなと自分に言い聞かせ前を見る。

そこには地下一階分まで武蔵に深く沈みこんだ重武神の姿があった。武神の上に乗った直政は負けを認めているようで、

シロジロとの間になされている会話がハイディの出した表示枠を通して聞こえてくる。

『———どうして欲しいんだい？ 機関部に』

『仕事だ。武蔵に金を集め続けるには、武蔵が無事に飛び続けることが必要だ。』

そのためには機関部が必要になる。言い換えれば、機関部がいなければ金が入らず、私共にとって見れば武器そのものを失うことになる。

だから———、お前は私達の仲間だ、直政』

そこでシロジロがこちら側、つまり表示枠を通しハイディのほうへと見る。

『ハイディ、———武神を起こすのに人手がいる。経費で頼む』

これにて、最初の相対は終了した。

わ、と言つ言葉と共に教導院の陸橋の下で人の動きが現れ始める。それは学生などのもので、

ハイデイのときぱきとした指示に従い瓦礫に埋もれた朱色の重武神を救い出すための動きだ。

その動きを眺めるとハイデイは更に表示枠を生み出し、

「ごめん、私忙しいから先にやつちゃってて」

と、まるでそれが先にご飯を食べてくれといわんばかりの気安さを持って告げてシロジロの元へと向かつて行く。

今まで不動のまま正座していた警護隊の隊員も正座を崩し、竹筒から飲み物を飲んだりと、

緊張と労働から解放され各々が休憩を取っている。

これはつまり1戦目は権限を剥奪された生徒会の勝利であり、武蔵の機関部を味方につけたということだ。

シロジロと直政の会話を簡単に纏めるのであれば、それはつまり機関部の一番の仕事場は武蔵であり、

現在世界中の金と流体は武蔵に集まっている。だからここで働くのが一番であり、お前たちが必要だ、といっているのだ。

「まるでお使いのように言ってくれますわね。——ともあれ、交代と言つところでしょ」

正純の横に立つミトツダイラがさて、と金色の瞳を細めながら正純を見る。

「次は私と言つことになりますわね」

「いいのか？ 騎士と言つ立場が現代においてどういう意味を持つ

ているのか、知らない私ではない」

「気にすることはありませんわ。どのような結論になるうとも、私は己が騎士であるとして扱いますもの。

ですから、……あとは向こうの相対次第ですわ」

言って、ミトツダイラは背後、校舎側にいる元生徒会の面々へと視線を向ける。

「武蔵の騎士代表として、”銀狼”（アルジエント・ルウ）ネイト・ミトツダイラが問いますわ」

胸を張ると、両肩に担いでいた長いケースを下へと下ろす。その重量によつて橋が僅かに軋む。

さて、と下ろしたケースに両腕をかける。

「現在、武蔵の総長兼生徒会長の権限は王に預けられており、不在の状態。その武蔵王は派遣の役であり、

褒章などの経済基盤を持ちませんから、私達騎士が従うことは出来ません。こんな状況において、

……教導院側は、何を持って、私達を従えさせることが出来ますの？」

彼女は手を持せていた巨大なケースを二本の指で挟む。

巨大なケースなため、二本の指どころか掌を使っても完全につかめる代物ではないが、

だが、ミトツダイラは、二つのケースを無造作に、

「いいですよ？」

彼女の足元で橋がぎつ、と軽く軋み、その代わりにケースが軽く持ち上がった。

その現象にはまるで力を入れている様子もなく、ただそれが自然の如く二本の指でケースを持ち上げている。

その様子は他に何かを使用しているようには見えず、完全に二本の指の力でのみなしていることがわかる。

「私、母が人狼でして、私自身は獣変調出来ないんですけど、
ルウガルウ ペトトウモデュレスチオン

——でもその分、普段からそれなりの力を出すことが出来ますの。皆さんは知ってますよね？」

その光景を見ていた九刻が若干引いている。顔にはうわぁ、と簡単に見て取れる表情が浮かんでおり、明らかに目の前の光景に驚きを感じている。

「昔、私、随分やんちゃな時期がありましたものね？」

言って、彼女はケースを両肩に乗せて。足を肩幅に開く。さて、と言う前置きをつけて、

校舎側の生徒へと向かって言う。

「騎士を従えようとする相手は、どなたですか？」

●

陸橋の上、ミトツダイラは校舎側の生徒達を見ながら一息を得た。

相対を求めましたが、どうしたものでしょうかね。

自分が相手を欲した以上、誰かが相対をするためにでてくるはずである。まず、その相手を考えてみる。

総長は来ませんわよね。

何よりも総長は戦闘などに関しては完全に無能……いや、全てにおいて無能だからそのはずはない。
シロジロと直政も戦闘を行ったばかりですぐに戦闘に加わることもないだろう。

ならばそこで考えられるのは点蔵やウルキアガと言った戦闘系の人間だろう。何せ彼らはその進路上の事などを考慮して、学校では習うことの出来ない戦闘に関する技術や技を親から学び、他にも妖物などの退治に連れ出され、

実戦を経験させられている。限りなく実戦から遠い武蔵では、怪異や妖物の退治が唯一の実戦経験をを得る方法で、

ミトツダイラ自身も自分の領地である水戸へと戻った際は妖物を退治して実戦経験をつんでいる。

そういった戦える人間が相対を望んできた場合自分の実力を含めて激しい戦いになるのだろう。

だが、

「何をしてるんですの？」

教導院側、座り込み円陣を組んでるメンバーからは誰も出てこない。その中には何故か無関係なはずの警護隊副隊長まで混じってた。基本的にトリー達と同じ人種の匂いがしてたために混じってること自体にそこまで違和感はない。

「あの……」

声をかけるが返事はなく、教導院の陸橋の上の低いスクラム、トーリだけが首の振り向きで返事をする。

「あ、ネイト、ちょっと考えタイム、タイムな！　ターイ——ムっ、切んなぁーい！」

はあ、と頷くミトツダイラを一瞬全員が一瞥し、再び額をあわせる。

「おい、ネイトのやつ意外とノリノリなんだがあれどうするよ」

「と言うか我参加してていいのかこれ」

「構わぬで御座るよ。現役の戦闘経験のあるものの意見は大事で御座るよ」

「そう？　んじゃあとりあえず柑橘系の匂いがするもんアホみたいに用意した上で毒殺しようぜ」

「いきなりすごい外道的発想が出てきましたよ！でもここはやつぱりミトは近接系ですから、遠距離で私が弓矢でズドンと……」

「拙僧が思うにシロジロが帰ってきたら銀弾を調達してだな……」

「二人一組でいいのならナイちゃんとガッちゃん二人で空から遠距離で……」

「そんなことより小生同士九刻殿と九刻殿の走狗についてええ。少々話し合いたいことがええ。」

少しだけ、ほんの少しの間だけでいいですから小生に、小生に……
！」

「黙れ失せる消える燃えろもげる塵になれロリコン。アレは我のだ。
我のものだ」

「そうおっしゃらずに！ 一目！ 一目だけでいいのです！ いえ、
小生嘘をつきました！ 少しだけさわらせてくだ——ぶぎやら！
？」

顔を殴られた御広敷が橋の上を何度もバウンドしながら進み、や
がて勢いよく橋から落ちて行く。

……最後のやり取りを抜けば結構ガチで来てますよこの人たち……！

そんな事を思いながら待っていると、若干の不機嫌さが胸の置くか
らフツフツと湧き上がってくるのは八つ当たりだろうか、それを示
すためにも、

「あの、早くしてくれませんか！？」

その言葉を受けてスクラムを組んでいる生徒たちが顔をあわせ更に
うんうんと唸る。

境界線上での相対、それはまだ開始したに過ぎない。

第十五話 臨時生徒総会？（後書き）

Jud・！遅れた上に短くてゴメンネ！
断頭と同時進行でかくと結構大変だね！

でも二代が可愛いから許してね！（え

そんなわけで、

遅れてごめんなさい。色々やってるうちに結構時間が経っちゃいましたね？

前回のアンケートのご協力ありがとうございました。

結果襲名云々の話はなしで。もっとシンプルに進めようと思います。そんなわけで、ホニメがいい感じにヒヤッハーしてて素晴らしいですねえ。

そして結構原作に食い込んでますが、

正直原作を見ながら執筆って結構ハードですね。そんなわけだ得今回もアンケートです。

・あくまでも原作はガイドライン、十Z〇流に話を構成して！

・原作遵守して欲しいよ！ロリコン滅べ！原作の文章多目がわかりやすいかもね！

のどちらか一方をお選びいただくとラクですー！

今回は半々な感じです。結構原作見ながら書くのって面倒で、本も傷むんだよなあ。

まあ、前者を選べば執筆速度は格段に上がりますね。

そんなわけで可愛い二代のアイコンを見てモチベーション上昇中。

キャラが多くて全員に会話させることは難しいから、がんばってま
すよー。

さて、一向に減らない誤字だけど、

こつ見えて自分でチエックした後に他の人にも読んでもらってチエ
ックしてもらったり。

さてさて、今回はここまでにしとくかな。文字数稼げたし（殴

それでは何時も通り感想などを下さると当方としては執筆の励みに
なります。――以上。

第十六話 臨時生徒総会？（前書き）

迷いを

思いを

それら全てを進める

自分の本心とは何か

配点（騎士道）

第十六話 臨時生徒総会？

「マスター。私をモノ扱いですか」

「Jud——だってお前の全ては我のдар」

「マスター……」

「エセル……」

「私、マスターのためなら何でもいたします。夜伽でも婚姻でも何でもいたします」

「エセル、お前こそ私の最高の誇り、最高の僕……こっちへ来るんだエセル……」

「マスター……あ、鼻から忠誠心が」

「変なモノログやめい！ よし！ お前ら！ ウチのペットの事は気にするなよ？ な？ とりあえず今のノーカンだからな？ たまに餌をやるとすぐこうなりやがる……復帰まで今回はどれぐらい掛かるんだろうな……」

生暖かい視線を何とか振り払いながら話を先に進めるように促す。

「よし、いい事考えた。——点蔵、お前土下座して来い」

「も、目的のない土下座は駄目でございますよ！ 特にミトツダイラ殿はギャグとか通じないタイプで御座るよ！

簡単に土下座っちゃだめえー！」

そういうとウルキアガが一人軽く自分の服の中に手を伸ばし、軽い金属の音を鳴らし視線を集中させる。そこで軽い息を入れると、

「ならばここはやはり拙僧が出るとしようか。この後皆がホライゾンを救いに行くとして、

拙僧は旧派カトリックの異端審問官であるからして、旧派であるK・P・A・Italiaも三征西班牙も手が出せないのだ。

この後何も出来ないことを考えたら拙僧が出ておきたいところではあるが……」

「その心配はたぶんないぜ。少し前に教皇総長と第二特務に会って来たけど、

第二特務のガリレオってのが魔神族で異端の術使ってるから遠慮なく殴れるぞ」

「あ、戦えない方の話ですけど、私も戦えません」

そう言って手を上げたのはアデーレだった。

「自分、従士ですから、自軍の騎士に逆らったりしたら存在意義に逆らって存在している意味がありませんから、今回は参加できません」

仕事も大変だな、とトーリが同情する中、ネシンバラが表示枠を覗き込みながら低く唸る。

その様子から何かが先ほどからその脳裏に引っかかっているということがわかる。

「ネシンバラ、さつきからなんか言いたそうにしてるんだけど、どうしたもんよ」

「あ、うん。やっぱりこう、引つかかるものがあるんだよ」

一瞬だけミトツダイラのほうを見、そして視線をスクラムの中の生徒達へと戻す。

「——騎士が、僕達一般人と優劣を決めて戦おうとする理由はなんだろう?」

「即答するけど俺馬鹿だから解んねえ!」

「うん。そうだね。解ってるよ——はは、可哀想に」

「ひ、否定しねえ! 否定しねえな! しかもその上同情までしやがった! その目は哀れみだな!?」

皆がトーリを押さえつけ、ネシンバラの言ったことを加味し始める。

向こう、ミトツダイラがこちらの発言について来れないのか頭が傾いている。

「フフフ、ミトツダイラ、私達の会議についていけずに恐怖を感じているわね?」

「いえ、内から見ればいつもの光景なんでしょうけど……外から見ると大概ですわね」

彼女の放ったセリフに全員が額をあわせ、うん、と頷くと議論に移

る。

「ミトも外から見ると結構大概なんですが解ってないんですかね」

「自分が思いますに片目義眼で巨乳ジャンルの射撃巫女と言うのも大概なんですが」

「これはメガネでぶかぶか属性の重視のアデーレが言うことではないと拙僧は思うのだが」

「ははは、ウツキー殿。異端審問官で姉好きの半龍のお主がそれを言うで御座るか」

「フフフこの忍者誰に対してそれを言ってるの。何自分に対して忍んでんの」

「そういうアンタもそんな感じに曰ころからフェロモン放出してたら何時か枯れるぞ」

「おい！ オメエラ！ オメエラ！ 俺を混ぜずに楽しそうに話題を回すな！ 何だ何だこの俺を除け者にしたような楽しい空気は！ 全部俺が吸ってやる……！ くんくんくんくんくん！」

皆は馬鹿を真顔で睨み、それに対して馬鹿が何かを言おうとするが黙り、俯き、そして横に倒れる。

その馬鹿の挙動を無視して浅間が軽く手を打ち、

「さ、今のうちに話を進めましょう、ネシンバラ君、ミトのなにが気になるんですっけ？」

「あ、うん、僕、歴史関係とか専門で調べてるから――」

「あ、また始まった？　おいおい、馬鹿な俺にも通じるように解りやすくしてくんね？

ネシンバラ、結果から話さない癖あるし。今回ばかりは解りやすいようにマジ頼むわ」

復帰したトーリの言葉に対して笑顔のネシンバラの額に青筋が浮かんだ。

この光景が、昨日居酒屋で見た榊原と酒井の姿を思い出させ、内心笑いを収めようと九刻が奮闘している間も、横から喜美がトーリの頭を軽く叩き、

「フッフ、愚弟。こういうオタク系は自分の知識をひけらかすことが何よりも好きなんだから、
ちゃんんと聞いてあげないと駄目じゃない。変な事言っただけで怒らせると、粘着されるわよ？」

「姉ちゃん！　姉ちゃん！　鏡見た？」

「なにを言ってるの毎朝毎晩見てるに決まってるじゃない！」

この姉弟は……とネシンバラが小さく呟きながら握り拳を作るのが見えるが、

やっぱり酒井や父、本多・忠勝のノリはこういった極東の教導院の伝統なのかもしれないな、

と見ている分には納得できる。被害者側だけは絶対に嫌だな、と。

「騎士というのは元々有力者……社会的に地位の高い人の事を言うんだよ」

「それが？」

「変だと思わない？　なんで騎士達はここで僕達と相對することを選んだんだろう？」

騎士は僕らよりも身分が上だよ？　相對するまでもなく、民に對しては向こうのが上なのに。
負けたら損しかないんだよ？」

騎士の身分……何かが頭の奥で引つかかる。武蔵の外道達が何か銀狼をひどい生物扱いしているが、それを無視して表示枠を出す。未だトリップしているアホ走狗はこれの際忘れて、

手動で保存データの内容を調べて行く。あれは確か三日、いや、四日前の授業だったか。
そんな事を考えながら保存されたデータを探して行くとその行動が目についたのか。

「お、九刻さんもしかしてこれからエロゲ？　騎士系の何かねえ？
俺、騎士系なら恋騎士なんかオススメなんだけど」

「恋騎士は我もプレイ済みだ。だけど、アレ、絵はいいけど完璧キヤラゲー——ってそうじゃねえ！」

「嫁持ちでエロゲに手を出すとは業が深いな……」

「なに見下してんだよめえ。サプリ！　サプリメントだ！　許せるっ！　神は赦してくれる！　邪神だけだな！
ってそうじゃなくてよ、……あつた、これだこれ」

表示枠をスクラムの中央へと移し、そこに出ているデータを周りの皆へと見せる。

「少し前だったか。ウチの担任ニア先生つつう末世マニアなんだが、いきなり何だか解らないけど騎士の話しだしてな、

現代においての役割とか色々解説し出しちゃって、そんな時のメモ。

まあ、どっからとってきた話か知らんけど——武蔵での騎士の話になるけど、

聖譜記述によれば二百年前に、騎士と王の領地を補償する封建貴族制度は大部分は崩壊してるらしいな。今は財力と権力を補償とする宮廷貴族の時代で」

それを示すメモが映される。そうだね、とネシンバラが言葉を出す。おそらくこの先の話を理解してるから自分が引き継ぐとの暗示だろう。

……粘着されるの嫌だしなあ。

そう思い会釈を送る。

「中世末期、十字軍の疲弊や貨幣経済で貯蓄を始めた人民の増加と台頭。

いろんなことがあつて多くの国は国を纏めるために、国王を中心とする中央集権が広がったよね。

戦争の様式は騎士の力では通じない大規模なものへとかわり、今は国軍の時代へと入った。

実際に各教導院での戦科授業は必須項目だよな」

「フッフ、オタクがいい感じにテンション上げながら脱線してるわね」

「ところがどっこいもう少し続くんだよね」

青筋を立てたネシンバラが歯を見せた笑みと共に言葉を続ける。

「封建貴族だった騎士たちは自らの装備を捨て国の軍に参加することで政治や経済、軍事に参加する新しい身分、

——宮廷貴族としての地位を得ることが出来たんだ。そして宮廷貴族の有力者は爵位なんて物を貰っているんだ。

だけどそれを得ることができないものを今では騎士と呼んでいる」

だけど、

「今現在武蔵では封建制度が生きているんだ。だからそれを通じて騎士達は福祉や政治経済にかかわれ、

そこから領地の運営を行うことが出来るんだ。それに封建制度の貴族と言うことはそれは人民を守る義務があるだけではなく、

ここでは”聖連への協調あり”と言うことで武蔵では珍しく武装を所持することが許されているんだ」

「まあ、いろいろあるけどさ、ナイトのやつは元々俺達より偉くて、本来は俺達を守るのがフツーなんだろう？」

「え、あ、Jud・ミトツダイラさんは騎士ですからそれが当たり前ですね」

そっかそっかと、その言葉を受けてトーリが二度頷く。この男は馬鹿に見えて考えているようで実は馬鹿だ。

だが、馬鹿だからこそ気づくものがあって、それを的確についてくることがあるかもしれない。

すまん。やっぱり良く分からない。我、馬鹿じゃないもん。

だが馬鹿は笑みを变えず、

「じゃあ、今の相対は何か理由があつての事で、その理由さえクリアしまえば、ナイトは俺達の味方で、俺達を守ってくれるんだよね？」

安心した、ナイトが敵になっちまったら、俺ら、ちょっとやりにくいもんな」

誰もがそれに言葉を作ろうとして、

「――」

結局何もいわず、方から力を抜くことで対処する。

実質、これが自分が武蔵総長兼生徒会長と会うのが初めてだ。そして、その判断の場に立ち会うのも初めてかもしれない。

だけど、この男は限りない無能で何も出来ないかもしれないが、…他人を引っ張る何かを持つのもかもしれない。

「アデーレ、高等部に在籍してる騎士は？」

「いえ、……それがまあ、騎士はミトツダイラさん一人で」

そこで一旦指で数えるような動きを取り、アデーレが話を続ける。

「武蔵全土では騎士は三十一人ですが、それは全部年配の方や、小中等部、それ以前の方々ばかりでして。

ミトツダイラさんが卒業してしまえば四年間は在校騎士はいなくな

るんだとか。

——自分達従士は数が多いので六人ぐらい高等部にはいるんですが」

それでも、戦闘要員としては圧倒的な数の少なさなのだろう。武蔵の武装解除、

戦科授業を受けられない影響がここでも見て取れる。だけど、それでも聖連相手に戦争を覚悟しているのだからぶつとんでるとしか見て取れない。

だが緊張感があるようでないような連中は一度つむ、と頷いてから、

「ふむ、レアキャラ……」

「いえ、あのあちらの五人も中々のレアキャラだと思いますけど……」

「あの、本当のレアって言うたら……」

浅間の振り向きと共にみんなが校舎側のほうへと見る。そこではペルソナ、イトケン、そしてネンジがハッサンからコップの中にカレーを注いでもらい、

そのすぐそばでもノローグを楽しんでくねくねしている精霊がいる。

「ふうむ！ 美味ですねハッサン君！ 僕は武蔵の一般市民であることを有意に思うよ！」

「そうでネー、カレーに満ちた地味な生活いいですネー」

『我輩も国籍構わずこういう楽しみは一市民として歓迎するもので

ある……』

「えへへへ、ますたあ、うふふふ、ああん、ますたあー」

「……」

皆は四人から視線を外し、ひそひそと話を始める。

「ペルソナ君、どうやって飲んでるんでしょうか。あと、良く考えたらペルソナ君じゃなくて、ヘルム君なんですけどね、彼」

「ウチの精霊が本当に申し訳ありません本当に申し訳ありませんマジでごめんなさいつかいい加減復帰しろや」

「ナイちゃん思うに、ネンジがカレー飲むとゲロinウイローにしか見えないなあ、アレ」

「マルゴット、名古屋の民に謝りなさい。あと、ネンジはなにを食ってもそうなるわよアレ」

「というかオマエラ、俺より話をズラすなよ。俺の存在意義が薄れるだろ」

そう言つてトーリが床に寝転がる。空を見上げるようにした体を伸ばし、それでも言葉を続ける。

「他の国ではつまり、権力大好きな騎士様になったのが、今の武蔵では昔のまま、

人のための騎士になつてゐるんだよね？——何でだろうな。何かひっかかるな」

これは、と言葉をつむぎ、

「じゃ、誰かにナイトと相対してもらおうか」

「しかし、誰を出すで御座るか？」

「条件は明確だよな？　今の流れで言うところ。あとは立候補先で――ナイトにはちよつと反省して貰わなきゃいけないよな」

●

ミトツダイラは待っていた。誰が来ても自分としては結果は同じであつた。

武蔵に在籍する騎士と話し合つた結果、自分のなすことは決定している。あとはその代表としていかに振舞えるか。第五特務である自分が演じられるかどうかである。

難儀な話ですわね。

そう内心で吐息する。同時に面倒ですわね、と。そのときだった。校舎側にいた皆がスクラムを組んだまま腰を上げた。

さっきから解説入ったりネタが入ったりと、いい空気吸ってるのは解ってたが、やっと相対者が決定したのだろう。

「よしっ」

トーリの声と共にスクラムが我、その中から相手が出てくる。相

手、それはミトツダイラの敵。

常識的に考えてそれは戦闘系の学生の誰かであるはずだが、こちらに対し、ゆっくりと歩んでくる者は、

「……え？」

鈴だった。

●

ミトツダイラの視界の中、鈴がゆっくりとした足取りで歩いてくる。鈴は武蔵の前髪枠として皆に愛されているが、

目が不自由でそれに伴い歩行はそんなに得意ではないのだ。そのため腰と髪には、

周りの音を増幅して拾える対物センサーが設置されており、反響する音や人の声を頼りに歩いているのだ。

今もミトツダイラの姿はなんとか捉えているだろう。

素座右は意外にまっすぐした足取りで近づいてくる。だがやはり、

「……え？」

「あ、あの」

どうしても質問せざるを得なかった。

「ちょ、ちょっと、どういことですか！？私は、相対する相手を望みましたのに——」

と、叫ぼうとした言葉が途中ですばむ。

眼前、数メートルの位置まで近づいてきた鈴が、足を止め、両の耳を手で塞いでいたからだ。

かすかに体がすくむが、それでも彼女は引かず、

「あ、あの、……声、お、大きくて」

どきりとした瞬間、校舎側のみんなが鈴と同じく両の耳を同じように手で覆っているのが見える。

「うるさいで——す」

……あ、あの連中、後で見てなさい……！

特にあの馬鹿には何らかの制裁が必要だ。そんな事を考えているうちに耳から恐る恐る手を放した鈴が、

大声がしていないことを確かめてからこちらの、手が届くぎりぎりの距離まで歩き……止まる。

ほ、と一息ついて立ち止まったことから彼女は今、かなりの勇気を振り絞って相対していることがわかる。

だから両のケースを手にしたまま、

「あの、皆さん。どういふことですか？私、騎士として相対する相手を望みましたのに」

「あ、あの、だ、だから」

返答は予想外のところから来た。

「私、じ、自分で、来、来たんで、す。話聞い、たら、私かな、つて」

「え？あの、鈴？」

内心若干の焦りを得る。まさか、さっきのいい空気を吸ってるように見えたスクラムでも、ちゃんと話し合ってこちらの思惑を看破されているのではないかと。武蔵の騎士たちが話し合い判断したことがある。武蔵の現在の状況に合わせた、最善の判断のつもりだ。

ただ、相対する戦闘力のない少女は、

「勝負、しま、……しょう」

「——総長、貴方解ってますわね？ 私がどういっつもりでここに来たのか」

「いんや、解ってねえよ。俺、ナイト本人じゃねえし、ナイトから話聞いてねえし、……それなのに解ったとは言えね。

出来ることなら、一体どういうことか、ちとナイトのほうから説明してくんねえかな」

「言えるわけ……。ありませんわ」

「じゃあやっぱりそうなんだな？」

……解ってますわね。

領けば校庭、否定すればそれ即ち自分嘘をつくことになる。なら、

そんな問答をしているよりも、

この状況で己の役目を果たすべきだと思い――

「武蔵騎士団、そして領主代表、ナイト・ミトツダイラが、領民に
宣言いたします」

その言葉と共に両手から超重量のケースを離す。

●

その動きを九刻は見た。二つのケースが床を打つよりも早くミトツダイラが目を伏せて方膝をついたのを。そして彼女はそのまま、

「我々、武蔵騎士団は――」

その姿勢は眼前の鈴に膝をついて礼をする姿勢だ。その一礼を意味するところも、よくない。

実にこの展開はよくない。横、ネシンバラとトリーの表情からあせっているのが見て取れる。

既にトリーは頭をかしげており、自分に聞こえるほどの音量で呟いていた。

「良くねえな」

聞こえるより早くネシンバラが叫んでいた。

「向井君！ ミトツダイラ君を止めて！――武蔵の騎士は、市民と戦い、――負けるつもりなんだ！」

●

ミトツダイラは内心、ネシンバラの叫びに対して頷いていた。ええ、確かにそうだと。

騎士が市民に負けるということは、どういうことかと。それは、騎士階級どころか貴族階級の崩壊だ。

それだけに止まらず、市民権力の台頭の始まりでもある。各国では段々とだが王族の時代が終わり、

民の革命で中央集権が終わりを告げたり、様々な出来事で市民の力が増す。

故に、武蔵の騎士は自ら市民に降伏することで市民の革命を状況的に成立させる。

——そうすることで、騎士は名だけの存在となり市民の一部となる。

結果から見ればそれは武蔵を守る武力のひとつが消えることとなるが、それでいいと、武蔵の騎士は判断した。

これから必要なのは守る存在としての騎士ではない。なぜなら、騎士が存在しているのは、それは武蔵の住民に反抗できる明確な武力のイメージを与えてしまうからだ。

それは、聖連へ逆らう意志を高めてしまう。聖連との全面衝突へと陥った際、

武蔵に存在する全ての騎士と従士たちを集めても聖連の戦力にどうあっても勝つことは出来ない。

ならば、聖連から民を守るためには何ができるか？

それが、騎士の敗北。

もちろん、シロジロが指摘したような金融の凍結の恐れがあった。それも騎士達の会議において議論され、

騎士の敗北によりそれは解決が出来るかと判断された。何せ、革命関係の歴史再現は各国では中央集権制を続けるためにキープされがちではあるが、

騎士の敗北により無理矢理革命的状况を再現させ、騎士を市民に紛らせる。

そして聖連の目的は武蔵の技術力、存在する人間の帰化であるが、革命を経験した人間を受け入れるために、

他の国は革命の歴史再現を行使せざるを得なくそれは武蔵の民を他の国の民より優位に置く。

これが、武蔵の騎士として領民達に出来る最後の事。そのつもりだ。迷いはない。

私達は――。

「武蔵の人々たちに対し、完全なる――」

……降伏を認め、帰順を行います。

そう言えば終わりだ。しかし、相手が鈴だとは思わなかった。勝負を煽ったから実力のある相手が出てきて、

そこそこ勝負して、”負ける”ことが出来ればよかったと思った。しかしそんな甘い思いを、皆が赦すわけはなかったということだ。だけど、

「降伏を――」

言えば終わりだ。

「みと——」

め、と言おうとした瞬間ミトツダイラの耳にトーリの声が聞こえてきた。

「おーいベルさん、ナイト止めてくんね？ テキトーでいいから」

「え？ ど、どう、や、やるの？」

「ああ、——乳を揉むのさ」

……そんな事をされたら本気でこっちが負けたことにしますわよ！！

思わずその発言に内心ツツコミを入れてしまったが発言してしまえば今までの発言が無駄になってしまう。

それを理解して理性でぐつと押さえ込み、しかし音を聞く。

音は二つ。

まず一つは先ほど手放したケースが床に倒れた鈍い音。

そして続くのは、鈴がこちらに一步を慌てて踏み、しかし超重量のケースが倒れた音が響き、

彼女が身を守るようにすくめた音だ。慌てた一步はそのすくんだ結果として乱れ、そして自分の目の前でつんのめった。

「……！？」

正面、鈴がこちらへと手を伸ばして倒れこんでくる。悲鳴に似た小さな吐息が聞こえる。

……今、なすべきことは――。

降伏を認めますと、止まってしまった言葉を直すために改めて言うとして、しかし聞こえてくるのは――

「み、ミト、ツダイ……、ラさんっ」

……何を言ってるんですの。

転び、倒れようとしていて、悲鳴をも出しかけていたというのに。

何を言おうとしているの。

戦う力がないのに自分から前に出てきて、それなのに倒れ付すことすら厭わぬと言うように、

「あ、あの――」

駄目だ、とミトツダイラは思う。既に鈴の体は重力に引かれており彼女自身の力で戻るのは無理だろう。

そして自分が言葉を言い切る前に鈴は確実にこの硬い陸橋の上へと倒れてしまう。

たぶん、硬い陸橋の上に倒れようと彼女は諦めないだろう。それは痛く、辛く、戦闘者でもない彼女では涙が出るかもしれない。それでも、前髪に隠れた目には確かな意志が宿っていて――

聞こえる一言は震え、しかし思いは通じる。

「助けて……！」

どのような意図かは解らない。

しかし、ミトツダイラは口を開いた。そこに迷いはなく――

「――安心なさい」

●

スクラムを解除した集団の中から、九刻にはその姿が見えた。安心しなさい。そう言ったミトツダイラが身を起こし、前に半歩踏み込みながら倒れこんでくる鈴の姿を受け止めるのを。

ショックを打ち消すように支えた後、後ろへと体を軽く倒す動きは鈴の持った慣性を打ち消し、優しく保護するためのものだろう。やってしまったと、そう感じているのではあるうが、

……表情に後悔も迷いはない、つてのは重畳だよな。

武蔵騎士団が何を議論し、どういう結論へと至ったかはネシンバラの話で大体は理解できた。

そして、ミトツダイラの行動はそれを全て理解し、そして同時に考え付いた最善を蹴っ飛ばしたということなのだろう。

「有り難う……」

「何を言っているのです。当然の事を」

「懇願せずとも、騎士の魂は必ず民を救いますわ。なぜならば、その歩むべき義務を騎士道と言つのですから」

……こりや武蔵の騎士からハブられそうだな。

誰にも聞こえぬように小さく呟く。それはつまり他の騎士を全てに敵に回したような行動だ。

後悔してないのであればそれでいいのだが、後々連携や協力体制を考えてた身としてはちよつと面倒だとも思う。

「武蔵の騎士ナイト・”銀狼”・ミトツダイラ、——武蔵アリアダスト教導院総長連合第五特務として、総長貴下に加わりしたいと思います」

「だったら、俺、総長の権限戻してもらわないとな」

「——お咎め無しですの？」

ここで終われば完全な美談ではあったのだろうが、そう終わらないのが極東、武蔵。

「だって借りが昨日あったじゃん」

「借り？」

「うん。——ナイトの方から胸もませてくれたの」

「さすが総長……！」

瞬間、周囲学生や教導院周辺の見物に来てた民が叫んでいた。

「バっ、ちょ、あの誤解ですわよ！間違い！」

——武蔵アリアダスト教導院臨時生徒総会、その第二戦は総長側の敗北で終わった。

第十六話 臨時生徒総会？（後書き）

そんなわけで臨時生徒総会、その2でした。

これでvsナイトが終了して、前哨戦が終了って所ですね。ホニメもいい感じにヒヤッハーしてて、

蜻蛉切が予想以上にかっこよかったり、

ガル茂がかっこいい杉田ゆるさねえ……！な感じですけど、

概ね十ZOは平和です。たぶん。テヘ

そんなわけでぶっちゃけvsミト、vsマサは自分の中では出来レースだと考えてます。

まあ。同じ総長連合なんだし、セージユン以外とは付き合い長いし、本心から敵対している可能性はほぼ0かと。

で、まあ、臨時生徒総会のラスボスが次回ですネー。カレーですネー！。

十ZO流アレンジとか言いつつも実は臨時生徒総会は捕捉とか説明が多くて、

原文を使用してカットできる分はアレンジ、

その方法が一番伝わりやすいので完全にカオスになるまではまだですかね。

つかオマエラテンションのアップダウン激しすぎ。だがそこがいい。

さてさて、トリップしてる走狗は放置して次回はまた1週間後の予定で。

地味に断頭の剣鬼のキャラ整理でゾンビ化してますが自分ノヴゴロドに行きたくないです。

助けてカワカミン！

つてなわけで、断頭の剣鬼もしやほじもどーぞよろしくおねがいます。

それでは何時も通り感想などを下さると当方としては執筆の励みになります。——以上。

第十七話 臨時生徒総会？（前書き）

どーすんのよ

いや本当に

これ一体どーすんのよ

配点（不可能男）

第十七話 臨時生徒総会？

最後の相対が迫る武蔵アリアダスト教導院前の陸橋。

そこでは正純と相対するに当たつての僅かな準備期間が設けられていた。陸橋の下には暫定議会の議員が乗った馬車が止まり、周りにはその成り行きを見つめる武蔵の住人達、生徒会にも総長連合にも干渉できない一般生徒や役員達のほか、

放送機材を設置しこの光景を武蔵中に放送している放送委員会の姿がある。陸橋の上は完全に二つのグループに分かれている。

一つはホライゾン救出派である3年梅組の生徒達と、そして暫定議会側の人間である正純。

現在僅かな準備期間の中を各員が表示枠を広げ各地の状況を収集していた。

総長兼生徒会長がアデーレに何かを頼んでいるうちに自分の中で今までの状況を纏める。

肩の上には復活した走狗もあり、表示枠内でのデータの整理は任せるとして今の総長はどこまで来ているかを考える。

まず第一戦。武蔵の商工団幹部であるシロジロと相対したのは武蔵の機関部の代表の直政。

直政の主張は武蔵が聖連に取られれば自分達は職を失うが、戦争を挑んで落ちても自分達は職を失う。

自分たちに対して武蔵が飛び続けられる保障を見せてくれ、と言うのが相対においての直政の言葉だった。

それに対してシロジロはそのすべてが金で解決できると発現した。

武蔵は現在極東一の燃料保存庫になっており、

そして全ての金融は武蔵に集まっているために武蔵が飛んでいるだけで金は集まると。シロジロは”金の力”で警護隊の労働力を購入すると、

直政の操る重武神である”地摺朱雀”を下し直政の協力を得た。

それが第一の相対。

二戦目は武蔵の騎士の代表としてのナイト・ミトツダイラとの相対だった。彼女は相対する人間を呼びかける上で、その本当の目的は一般市民に負けることで騎士が市民へと紛れ、強制的に革命を受けたのと同じ状況にすることだった。

それによって武蔵が奪われそこにいた人間が帰化しようとも革命を体験した市民を受け入れた国は無視できるはずなく各国の中央集権制は揺らぐ。

つまりは武蔵の住民の地位を少し先の時代、中央集権制の時代の住民よりも上に立てることが出来る。

だがこれを看破した鈴は自分から前に出て相対を望んだ。結果、ナイトは迷いなく騎士道を貫くことに殉じる事として、

倒れかけた鈴を支え、武蔵の騎士は武蔵の市民を守ると宣言した。

それが第二の相対。

一勝一敗。それが現状ではあるが実際はナイトも直政も味方へ戻すことが出来たので事実上二勝である。

だが、それもこの最後の相対で勝利しなければまったくの意味を成さない。

視線を陸橋の反対側へと向ける。

そこには男子生徒の服装に身を包んだ一人の学生がいた。傍から

見れば完全に線の細い女顔の男子生徒にしか見えないが、その実は違う。その正体はかつて襲名争いで男性化手術を受けるために胸を削り、そしてそのすべてが完了する前に襲名権を奪われた一人の女生徒。

母親を怪異で亡くし、結果父と共に武蔵へと移り住みそこで副会長となつた少女、本多・正純。

そんな彼女は今何を思つて相對するつもりなのだろう。

自分は知っている。本多・正純と言う名の少女は自分の価値を見出すために大変な努力を重ねていた事を。

彼女が襲名するために迷わず男性化手術へと踏み込んだことも、武蔵で副会長選挙で本氣だったことも。

その全てを知っている。……彼女の父、本多・正信から話は聞いている。

だからこそ、あの時言われた一言が今でも心を抉り続けるのだ。

視線を正純から外し手元の表示枠へと視線を落とす。その中にはホライゾン姫の救出に参考になるようなことが書かれており、この短時間で自分の補佐をしてくれる精霊が集め、まとめてくれたものだという事が解る。

正直自分は知性派からは縁遠い人間だと思つてゐる。三河で二代と一緒に中間管理職でもやって静かに、それでも平和に。

そういう感じに暮らして末世を超えられれば良かったと言う願ひはなくもない。と言うよりも理想の生活だった。

そこに駄目人間筆頭の親父がいて、それを叱る鹿角がいて、そして自分と二代もその光景を笑いながら見ていて。

そんな穏やか日々を過ごせばよかったと思う。

だが元信公はそれを赦さなかった。

変化のない生活を否定したのだろう。たぶんだろうが、ホライゾン姫の存在が明日の極東を作ることを願ったのだろう。

そして彼女自身が、人を先へと引っ張ることをも。だから松平公は三河を消した。歴史にない事件を起こした。

大罪武装を生み出した。世界に争いを呼び込むようなことを言った。ホライゾン姫に搭載された大罪武装がどのような権能を持っているかは知らないが、

それは自分が把握しているほかの大罪武装同様、生易しいものではないだろう。だからこそ赦されないとわれ拘束もされている。

……殿先生からすれば、安寧と変化しないことを望む我は、そのまま死ぬ側の人間だったんだろうなあ。

あの男と同じ側にいることは些かムカつく。あんなフィーバーしてる親父を世界に見せ付けられた若干恥ずかしくも感じるが、基本的に極東の人間は狂人だから仕方がない。我が家の恥の事は忘れよう。それよりも、今は現状だ。

目の前に集められた情報の中には正純に対抗できるとして集められたものだ。主にエセルドレーダが政治関係で役立ちそうなものを引っ張り、

それを閲覧しやすいように整理してある。だが正直言って自分がこれを知ったとして役立ちそうなことはない。

自分に出れることは音痴剣神に習った武を見せることと解剖狂いに習ったことを実践し、魔術を行使する程度の事だ。

しかも聖連の目があるために派手なことをすることも出来ない。それにそれは三河から離れるまでの話だが正純の実力は知っている。元会計から聞くには武蔵有数の政治系能力者と言う評価も受けている。それも、聖連に勝てる見込みがあるほどのだ。

それに対して自分はどれだけ有効なのだろうか。と言つか役に立たないだろ我。

ふと、本当に自分の存在は必要なのかと疑問を持ち始める。

自分の存在は完全な異物だ。外的要因だ。世界に対する癌だ。使
い方によっては世界を破綻することは出来る、と思っている。

それだけの力を有していると思う。世界にかんする知識を消された
のはそれが原因だと思っている。

そして自分も、それでよかったと思っている。余計な先入観は自分
の考えを曇らす。だけど、この世界は元々自分なしで進んでいたの
だ。

自分と言う存在の介入によって変わってしまった人の運命があるは
ずだ。そこで肩の上に小さく存在するエセルドレーダを右手で、
その存在を包み込むようにして首元に寄せる。

「ま、マスター？い、いけません、人が……あ、でも私は何時でも
！」

すぐにふざけようとするエセルドレーダだが、即座に気配の違い
に気づいてそのポーズをやめる。

人一倍自分に対して敏感なのか。もしくは自分と言う存在について
把握されているのかどうかはわからないが、
心配そうな気配が手を通して伝わってくる。

「マスタ、如何なされましたか」

その声の色には懐かしい響きがあった。それは今では滅多に聞か
なくなつた最初の氷のような声。

一切の感情らしい感情を表現せず、ただ淡々と自分に付き従っていたエセルドレーダの感じた。
今になっては懐かしいで済ませられるが、当時の苦労はそんなものではなかった。

今日の目まぐるしい変化を感じてか、懐かしい記憶が蘇りつつも自分の不安を口にする。

「……我は、居て、いいんだよな」

「——何を仰るのですか」

それが当然のように言い返す。冷静に、こちらにだけ聞こえる声で、
だけど、力強く。

「我が一生は全てマスターの物でありマスターの生無くしては私も存在しません。マスターが今更何を不安に思うかは解りませんが、マスターの存在に一切関係ないと断言させていただきます。マスターはマスターです。イレギュラーな役者であるうとそれがどんな命であろうとも、

全てには等しく生き、そして存在し続ける権利が存在します。特にマスターは至高です。至高です。そして至高です。

大事だから三回ほどいいましたがもう一度言います。至高です。もしマスターを否定するような存在が居れば単騎でも鬼械神を駆り、今すぐ昇華させていただきます。と言うかマスターを不安がらせたのは誰ですか。今すぐ滅ぼしましょう」

前半いい話であったような気もしたがやっぱり後半に行くにつれて台無しだった。

だが、最初の、ほんの少しの言葉だけで十分だった。肯定してもら

えただけでよかった。たぶん一次の気の迷いだろう。
なにせ臨時生徒総会が始まって、殆ど役に立ってないから、だから
の迷いだろう。

……と言つか基本シリアスって長続きしないよなあ。

あのエセルドレーダでさえ長い間維持するのは無理っぽい。もう駄
目かもしれないかもこの世界。

そこで、武蔵アリアダスト教導院前の陸橋に新たな動きが生じる。

●

陸橋の上、そこには三つの影があった。

まずは権限を奪われた生徒会長葵・トリー。左舷側に立つように
して目の前に居る本多・正純に相對する。

その正純は右舷側に立ち、そしてその二人の背後に居るのは先ほど
まで居なかった教員、

オリオトライ・真喜子だ。

「んじゃ、酒井学長がニートしてるけどとりあえず臨時生徒総会最
後の相對を始めましょうか。

一応最後だし形式として立ち会っておいてなんだけど……三十分一
本勝負とかでいい？」

「先生！そのボケまったく可愛くねえよ！」

即座に暴力的なりアクションへと移ろうとするオリオトライからト
ーリが半歩逃げ出すのを見て、正純が軽い溜息をこぼす。

「討論ですので先生にはすいませんが立会人をお願いします。勝ち
負けは判断が難しいので」

「まあ、ぶっちゃけこういう事先生も良く分からないけど討論のル
ールに契約結ぶことぐらいはできるから、
そこらへんで赦してね」

「Jud・十分です相手の不利か自分の有利を示せば勝ちとします。
—— 葵、お互いの立場はわかつているな？ちゃんと人語話せるか
？」

「あ、あ、あたたたたあ！あたりめえだよ！お、お、俺をナメるな
よ！？」

見てて激しく不安になる光景だった。
今すぐあの総長を引っ張ってきて、ちゃんとした人材に変えるべき
ではないのか。と言うかどうかどう見ても絶望。
ラスボスの前にレベル1で挑むような気分になるのは何故だろう。

しかしトーリは頭を掻きつつ正純の顔を見た。そこにはさっきま
での振るえや怯えはなく、
それが演技だったことを証明するように常に顔に張り付く笑みを浮
かべていた。

「俺、頭悪いから、助言いいよな！？」

「ああ、専門的な答えを担当から得た方が先生たちも納得しやすいだろう」

正純がこちら、左舷側の校庭を見てくる。そこには自分を含め、正純を抜いた3年梅組が揃っており、その逆側、正純の背後には暫定議会の人間が居るのが見えた。今頃正純の父親は心配でしょうがないだろうな、と彼の本当の性格を知っている九刻は思う。公と私で性格が違いすぎる人間だと。

「私も余裕ならば助言を得る。いいな？」

「余裕余裕！」

「二人とも討論の準備はいい？どっちが専攻？後攻？」

その言葉に勢い良くトーリが反応する。

「じゃ、俺、専攻——！」

「……今から誰かに交代できねえのか、アレ？……本当に姫救えるのかなあ……」

●

「え……？」

「え？じゃねえよ！だって、面倒なこと早めに済ませたいじゃん！」

言った瞬間その発言に我慢できなかったシロジロが、

「馬鹿が！……後の方が楽なんだぞこういうことは！商人は値段を釣り上げるときに自分から先に値を示さないだろう！？同じことだ！」

「んー、シロ君ちょっと公然でバラし過ぎだと思う」

会場が騒然とする。そうなくても致し方ないと思う。シロジロの言葉は若干酷いが、

それでも間違ったことは一つも言っていない。これで無能に不利がついた。もし形勢逆転の手がなければ、完全に詰みだ。最初から詰んでいる気もしなくはないが、それを気にしてはいられない。

騒然とする会場とは裏腹にトーリと正純の間で契約が結ばれる。

契約の神オクニヌシ系の、

ミサトの契約書である。慣れた手つきでトーリがそれに捺印し、正純がそれに続く。

そして捺印をしながらも正純がふと疑問に思ったのか質問する。

「先生、……罰則とは？」

「うん、天罰喰らうのは怖いっしょ？だからね？先生がね？——武器で殴るの？」

その言葉に笑顔のトーリは表情の変化を見せず、

「死ぬぞ」

「ダ、ダイレクトに言うな馬鹿。もうちよつとボカセ」

「大丈夫よ、先生、武器が長剣だから斬ったら即死つしょ？だから鞘で殴るのに変更したから。
少しは先生の氣遣いを汲みなさいよ？」

何処からどう見ても即死に変わりはなかった。

笑顔を絶やさぬトーリと、そしてそれに相對する正純。オリオトライによる立会い、

そして神への契約が完了した今二人が何時までも始めない理由はない。一拍の間をおいて、

トーリが艦首側、階段の下にいるこちらへと向けて前に出た。

「じゃ、始めるか」

「ちゃんと討論しなさいよー？先生手応え無いの殴るのは避けたいんだから」

手応えがあればいいのかよ、って言葉を飲み込んで成り行きを見つめる。

「じゃ、皆、元総長兼生徒会長、葵・トーリが、今回の件について提案するぜ。要は一つだ。

権限の奪還も何も、ホライゾンをストックってコクするという壮大な計画の足がかりでしかねえ。

だから、ハッキリさせとこうぜ。——ホライゾンを救いにいくことで、何が得で、何が損なのか。
それをこれから、俺がこの……、セージョンと討論する」

だから、

「まあ、まずは、こっちの立場を明確にしておこうか。それは――」

●

見上げた。陸橋の上でこちらを見るようにして話しかける元総長兼生徒会長の姿を。真っ直ぐ見る。

頭を軽く掻き、だが迷いない表情で言うそれを確かに聞く。

「――やっぱホライゾン救いに行くの、やめね？」

瞬間世界が停止したような感覚を得た。

●

「なんだと!」

陶器が地面へと落ちて割れるような音がした。何かと思いその方向を見ると二代の視界の中には、

表示枠の前で湯飲みを落とす、そしてそれが床に落ちて割れた音だ。表示枠の前で口を大きく開けて呆ける武蔵王の姿があった。

自分は走狗がないので、好意で表示枠を一つ出してもらいそれを通して状況を見ていたが……。

「武蔵王殿、大丈夫で御座るか？」

「じゃ、T e s・麻呂は大丈夫であるぞ」

「驚いたのはいいですけど気をつけてくださいね？」

家の奥、厨房の方から湯飲みを落として割った男の妻、武蔵王・ヨシナオの妻がとがめるようにでてる。

すまないと謝るヨシナオを赦すと割れた湯飲みとそこからこぼれた茶の掃除をし始める。

その様子を見て特に問題がないことを確認すると再び視線を表示枠へと落とす。今そこに映っているのは元総長兼生徒会長だ。

だがその一つ前の相対、武蔵の騎士との相対で二代は見た。警護隊、そして彼の姿を。

それを見て思った。そちら側が極東のためになると判断したか、と。

二代には武蔵王の警護と言う任務があり、そして同時にまだ”あちら”側へと行く、

それだけに納得できる理由が見つからない。総長は”それ”を示すと言っていたがまさかこんな事をするとは。

しかし、同時にあの総長が撃てる最善の手だとも思ってたぶん今世界中が武蔵層・ヨシナオのようなリアクションを取ったのだろう。

表示枠の中では総長連合の人間がネタを進めたりとわりかしい空気吸ってるがどうなのだろうか。

いや、そういうことなのだろう。

正純では到底あの契約を覆せるようには見えない。ならば死ななためにも本気で相対するしかない。

そしてそれは、確実に本気でホライゾン姫を救い出す方法を模索し、そして導き出すということだ。

意図してないところではば全員が敵になってしまった。

正純は総長の計略に引っかかりホライゾン姫救出派に仕立て上げられ、総長は暫定会議側に。総長も本気で質問し、そして実際に答えるのが難しい質問を出してくるだろう。だが正純は止まらない、そのことを自分は知っている。

総長も本気で相対はするが完全にホライゾン姫救出派だろう。だとしたら、

……拙者は、今、学生の大部分を……。

敵に回したのだろう。

『さあ、そんなわけではじまりました臨時生徒総会のラストを飾るメインイベント！

”不可能男”である生徒会長と有能と名高い副会長！そんな二人の戦いとなるわけですが、解説のステルス点蔵さん。

同級生としてどう見えますか？』

『んー、そうで御座るなあ。開始直後から突発的な言動始めたりいつもの外道ゾーンに入ったトリー殿が優勢のように見えるようで御座るが、

やはりあの男、マジに何も考えてないで御座るからなあ。常人の思考を期待しちゃ駄目で御座るよ？』

『はあ、まさに何が起きるか解らない、悪い意味での人間爆弾ですね！ともあれ二人ともいい総会をして欲しいものです』

出している表示枠から放送委員の声と元生徒会長の同級生と思わ

しき人間の声が聞こえてくる。だがそこからあまり情報ははいってこない。

書類やスピーチ関係を全部任せていた自分がアレかもしれないが、誰かアナウンサーを変えた方がいいのではないか。

表示枠の中で正純と相対する武蔵元生徒会長が映っている。このまま二人の勝負を見たいところではあるが、

その誘惑を断ち切って表示枠を消す。手の中にある神格武装・蜻蛉切を握りなおして背筋を伸ばし、

今の自分が唯一できる事……つまり武蔵王の護衛に集中する。結局のところ道を決めたほかの皆とは違い、

こうやって職務を全うすること以外は何も出来ない。

「んふ。警護隊長殿。少しよろしいであるか」

その時だった。

「何用で御座ろうか。拙者の警護に何か不備でも……？」

武蔵王に呼び止められた。武蔵王とその妻が居るのは居間だ。そこへと繋がる入り口は複数あるが、そこから進入しようが即座に対応でき、そして知覚できる位置に自分は存在している。

特に気配の察知や”知覚”に関しては人一倍の鋭さを持っていると自負している。得物を持ちしっかりと警護していたはずだが……。

「いや、麻呂は別にそういう意味で呼んだわけではない。こっちへ来るのである」

「いえ、自分は職務の最中で……」

「麻呂は武蔵王だ。麻呂を護衛しているのであれば少しぐらい融通を利かせるものであるよ」

「……それでは」

武蔵王に言われ今の中央、武蔵王の傍に置かれている座布団の上に座る。座つても得物を離さない辺り、

自分は根っから武人として鍛えられているのだろっとなあ、と思いつつ意識を屋敷の警備に向けようとすると、

再び目の前に表示枠が現れる。それは先ほど二代は自分で消した物と同じものだった。

「いいであるか、警護隊長」

そう言つて武蔵王が見る。

「——貴殿は、学生である。三河警護隊の隊長としての役目を麻呂は理解しているつもりではある。

だが、その中心で貴殿が世界と相對する権利を持つ学生であることを忘れてはならない」

そう言つて表示枠を指す。

「いいであるか？職務を全うすることは大事であるが、それでも学生とはこの先の時代を動かす人間であるぞ？」

一呼吸を置き、

「では麻呂と共に臨時生徒總會の様子を見るがいい。——それが、

貴殿の道を探す手がかりになるだろう」

「……すまぬ、に御座る」

「王として民に道を指し示すのは麻呂の義務であるぞ」

変な髪形をしながらもかつこつけようとするこの中年の男は、姿と言動からあまり人気がない事は知っていた。

警護に付いたときも本当に襲われるかどうかすら怪しく、放置してても大丈夫なんじゃないかとさえ思ったが、

それは正しく間違っていたと認識する。見た目と言動で大いに勘違いしやすいが、

この武蔵王はちゃんと人の生活の事を考えているのだろう。

「気にすることはない。それよりも見るがいい」

表示枠を除くとしばし目を離している間にその中で話が進んでいた。

話は武蔵の主権についてを語っていた。

●

元生徒会長が出した問、戦争が始まったらどうするのか、ホライゾンを救いに行くことで、

それが武蔵に対して一体どんな利益となるかを問った所を、正純は答えた。

それは、武蔵の主権が確保できるということだ。

ホライゾンのいない武蔵は、ただの航空都市だ。ホライゾンが三河の君主の代理に仕立て上げられている現在、彼女が処刑されることによって武蔵はその主権を失い、ただの飛ぶ領地となる。それには何かを成すことが出来る権利が存在せず、そしてそれに抗うことに対する権利すら与えられないために一方的な蹂躪しか得られないのだ。

ホライゾンを救出せぬば、主権を得ることは出来ず、国家間の闘争で主権のない国は決して”国”とは認められず、そしてそれに属する人間も決して”人”として見られることはないのだ。そこはただの獣の集まりとして処理される。

「簡単に言つて、国の主権を主張するとして必要な能力は三つであるな。

独立を提示する能力、統治を貫徹する能力と、そして二つを支えたまま意思を決定する能力であるな。

本田君の話は上手い。今の極東がその三つを全て侵害されているつて事を聞いている人間に聞かさせているのであるな」

よくよく考えると面倒な話。国の主権を主張する上での必要な要素を聖連はずっと前から潰しにかかっているのだ。

長い年月をかけて極東の人間を各国の居留地に住まわせることで人民の集中を阻止して力をつけないようにして、

その上で総長や生徒会長選挙のときはなるべく無能な人間を上に行かせるように、

干渉を行いゲタ履かせをする。汚い。明らかに汚い下種な方法だ。

「ふむ、確か本多君は小等部で臨時の教師をアルバイトとしてやっていたな？」

そこでスピーチの能力などを上げているのだろう。感心であるな。何より総長に話に通じてるのはすばらしいであるな」

表示枠の中での正純による解説は続く。

今現在武蔵に極東を支配できる正統な後取りはホライゾンしか存在しない。そして今までの三河の君主聖連の干渉を受けて、決して武蔵に乗ることはなかった。ホライゾンを救い出せばそれは武蔵に極東の正当なる支配者が来るわけだが、ホライゾンは学生ではない。聖連の言葉で”学生ではないやつは人間ではない”と言う言葉があるように、学生ではないホライゾンでは武蔵に帰ってきてても決して世界を動かすような主張をすることは出来ない。

そこで、正純は入学させればいいといった。

『三河は消失したから君主が武蔵に避難するのは問題ないし、ホライゾンが学生じゃないというのなら、教導院に入学させればいいじゃないか』

『おいおい、裏口入学は東だけにしとけよ』

妻から貰った二杯目の湯飲みが再び武蔵王の手から落ちた。

「おっと、危ないで御座る」

キヤツチ。

「いいであるか？東様は決して裏口入学ではないのであるぞ！？教導院には通常の入学方法のほかに、
もう一つ入学する方法があるのだ。決して裏口入学ではないのである！麻呂の言っていることは解るのであるな！？」

「Jud・理解したので少し落ち着くで御座る」

「す、すまぬであるな」

表示枠から聞こえてきた裏口入学の言葉を大きく武蔵王が焦りながら否定した。役職上そういう言葉は物凄い心労をかけるのだろう。自分にはどうしようもないことだが、今、もう一つの入学方法といったはずだ。空中で掴んだ湯飲みを返す。

「それで、もう一つの入学方法とは？」

「Jud・一芸試験での合格入学である」

「一芸試験？」

「そうである。もし警護隊長殿が教導院への入学を希望したさいに一芸試験での入学を求めれば、

本多・忠勝の息女であり三河警護隊の隊長と言ったことを考慮された入学が認められるはずである。

東様はその立場と言う他人には真似できぬ物があるからして、それで入学であるな。

他にも特殊な武装保持、絶滅危惧な種族等も一芸試験での入学は可能であるぞ。武蔵ではあまり見ないことではあるが」

それはつまり、

「本多君はホライゾン姫を奪還して大罪武装と言う一芸を持って、一芸試験で入学させたら、

彼女を主に極東の主権を主張すべきだと言っておるのだろう。これで武蔵にも抵抗する権利が出来る。

一回で必要なことを説明せず噛み砕いて話が通じるように離すのは政治家として有用な技能であるな」

だが、しかし、

「これは良くないであるな」

「と言うと？」

二代から見れば今の流れは確実に正純に流れているように感じられる。商人と九刻の会議は聞いていた。

その内容からして正純の力であれば聖連を言い負かすことは出来ると信じている様子だった。

それが本当であるのなら、今ホライゾン救出派に加担させられてしまった正純の存在は武蔵王と暫定議会としては厄介なのだろう。

「このまま進めば確実に聖連が……教皇総長が介入してくるであるな」

真剣な表情で武蔵王がそれを呟く。

「本多君は優秀だ……葛藤はあれど、このまま続ければ大義名分を見つけるだろう。」

だから、この流れはいかぬであるな。このままでは武蔵を……」

そこで武蔵王が立ち上がる。それに付き従うように二代も立ち上がり、厨房で働いていた武蔵王の妻が出てくる。

「あなた？」

どうしたの、と聞いてくる妻に対して武蔵王が答えた。

「今から向かえば臨時生徒総会が完全に終わる到着できるだろう」
——行くぞ、警護隊長殿」

「J u d
」.

第十七話 臨時生徒総会？（後書き）

そんなわけで約2週間ぶりに更新。

中身は結構時間かけて書いてるから所負どころバラバラじゃなければいいなあ、

とか思いつつも、

やる夫スレに時間を奪われてました。

皆が赦してくれるくれないとかは無視して、とりあえずシャイニン
グ土下座！

遅れてゴメンネ！SAOがまさかあそこまで書き続けられるとは思
わなかったのよ！

その代わり臨時生徒総会の会話パートは次回で終わらせるから！
次回にはvs二代まで書くからそれで赦して！

つとまあ、何時も通り絶好調な感じで今ホームパイ食べてます。
地味に誤字がありそうでこわいなあ、とか呟きながら本日はこれま
で。

二代視点メインだからこれなら色々キンクリしながら独自路線じゃ
ね！？

と、それでは感想をくださると執筆の励みとなりますそれでは――
――以上。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5831r/>

境界線上の写本保持者

2011年11月13日23時06分発行